
日本近世煎茶書の研究：
漢籍受容と文人趣味の展開を中心に

[一橋大学審査博士学位論文]



2021年7月

一橋大学大学院言語社会研究科

博士課程

LD171012

梁 旭璋

目次

目次	i
序章	1
第一節. 研究対象と研究目標	1
第二節. 本研究の位置づけと先行研究	2
第三節. 研究方法と各章の構成	12
第四節. 研究価値と研究意義	14
第一章. 日本における煎茶書研究の現状	16
はじめに	16
第一節. 日本における「煎茶」の語義について	16
第二節. 煎茶の誕生までの日本茶道史	19
第三節. 檜林忠男の煎茶道史研究について	21
第四節. 煎茶書史料不足の問題と研究現状について	24
第五節. 本研究で考察対象とする煎茶書	28
第二章. 江戸時代における煎茶書の全体像	37
はじめに	37
第一節. 刊行時期について	37
第二節. 編著者の出身地・身分・職業について	43
第三節. 文体・刊写・書型について	49
第四節. 図版について	55
第五節. 刊記・版元について	61
第六節. 広告・未刊書目について	70
第三章. 煎茶書の源流をたどる：明代の茶書と喫茶文化について	73
はじめに	73
第一節. 明代の茶書刊行	74
第二節. 明代の製茶法	78
第三節. 明代の喫茶法	82
第四節. 明代の文人茶	91
第四章. 煎茶書にみる中国茶書と喫茶文化の受容	105
はじめに	105
第一節. 中国茶書の日本受容の形式	105
第二節. 中国茶書の日本受容の背景	110
第三節. 煎茶書にみる中国の製茶法の受容	124
第四節. 煎茶書にみる中国の喫茶法の受容	135
第五節. 煎茶書にみる中国の文人茶の受容	144

第五章.	大枝流芳の煎茶書に関する研究：『青湾茶話』と文人雅遊	157
	はじめに	157
	第一節. 『青湾茶話』について	158
	第二節. 大枝流芳の人物について	165
	第三節. 『雅遊漫録』と『青湾茶話』の関係	169
	おわりに	173
第六章.	大典禅師の煎茶書に関する研究：『茶経詳説』と『煎茶訣』を中心に	175
	はじめに	175
	第一節. 大典禅師の煎茶書	176
	第二節. 大典禅師の茶書刊行の背景	180
	第三節. 大典禅師と『茶経詳説』	182
	第四節. 大典禅師と『煎茶訣』	185
	第五節. 大典禅師の周辺	189
	第六節. 大典禅師の茶書への評価	194
	おわりに	196
第七章.	上田秋成の煎茶書に関する研究：『清風瑣言』と『茶痕醉言』にみる文人茶癖	198
	はじめに	198
	第一節. 上田秋成と煎茶	200
	第二節. 明代文人の茶癖	214
	第三節. 上田秋成の茶癖	220
	おわりに	226
第八章.	陳元輔の煎茶書に関する研究：『枕山楼茶略』の日本伝来	228
	はじめに	228
	第一節. 『枕山楼茶略』について	229
	第二節. 陳元輔について	237
	第三節. 陳元輔と程順則	248
	おわりに	254
第九章.	大典禅師の漢詩集に関する研究：詠茶詩にみる喫茶交遊	256
	はじめに	256
	第一節. 大典禅師の漢詩集	256
	第二節. 大典禅師の詠茶詩	261
	第三節. 大典禅師の喫茶交遊	267
	おわりに	279
	附録	280
資料編.	葉雋の煎茶書に関する研究：『煎茶訣』の翻刻と訳注	292
	第一節. 解題	292
	第二節. 『煎茶訣』訳注	294

おわりに.....	327
終章.....	329
参考文献.....	334
初出一覧.....	345
謝辞.....	346

序章

第一節. 研究対象と研究目標

本論文は、近世における煎茶文化が、如何に中国の喫茶文化と繋がり、如何に中国茶書の影響を受けたのかという問題を、煎茶書を通して解明しようとするものである。

喫茶は悠久の歴史を持っており、アジア地域で暮らしている人々にとっては日常生活に不可欠な飲食風習の一部分である。茶葉は単なる経済的農作物ではなく、政治・貿易・民俗・健康など国民生活の多方面に深く関わっており、そして文学・美術・建築・哲学などにも緊密に繋がっている。喫茶はすでに日本人の慣れ親しんだ日常生活の一環となっている。日本人の精神面も知らず知らずのうちに喫茶からの影響を受けている。

日本の茶道を広義に解釈すると、世間によく知られている抹茶道と、あまり馴染みのない煎茶道がある。日本の抹茶道は、財力と権力を握る武士集団を中心に生まれた伝統的な茶文化であるため、作法と礼法の伝承を非常に重視している。それに較べて、煎茶道は漢文の素養をもつ禅僧と儒学者を中心に生まれた茶文化であるため、中国の文人の喫茶法を模倣し、固定の技法に拘らず、茶人¹の内面性と精神性を重んじている。中国の喫茶法の発展史を簡単にまとめると、三つの重要な変化がある。それは唐代の煎茶法、宋代の点茶法と明代・清代の泡茶法である。そして日本の場合、抹茶道は宋代の点茶法を基にしてさらに独自の発展を遂げた喫茶文化であり、それに対して煎茶道は明代と清代の泡茶法を原型として発展してきた喫茶文化だといえる。

日本の煎茶は江戸時代に発祥し、江戸時代の中後期に発展した伝統文化である。煎茶文化は、日本茶文化の長年の変遷から分かれた重要な支流であり、世間

¹ 「茶人」とは、茶道に携わっている人の総称である。『新版 茶道大辞典』、淡交社、2010、p. 753。従来は、茶の湯に通じた人を指したが、本研究では、日本の茶文化全般に関わった人物を「茶人」と表記し、煎茶文化に関わった人物も「茶人」に含める。また、煎茶を中心に携わった人物を特に「煎茶人」や「煎茶家」と強調することもある。

によく知られている茶の湯とは異色な存在である。煎茶文化は従来の茶の湯の世界と違う発展方向を選び、当時の中国の喫茶法を参考とした上で独自の道を開拓した。江戸時代の煎茶愛好者たちは、和漢両土の喫茶文明を融合させ、煎茶を媒介として、文人のあこがれの精神世界を築き上げた。したがって、煎茶文化は日本ないし東アジアの様々な喫茶文明の中で、無視できない重要な役割を担っている。

本研究は文献研究を主として、日本近世の煎茶書を研究対象とする。従来の煎茶文化の研究を振り返ってみると、茶人・茶器・茶室などの視点で行う研究が主流であり、充実した研究成果を残した点は評価すべきだが、煎茶書を中心とした研究は少なく、まだ検討すべき余地があると考えられる。本研究は文献研究を中心に論述を展開し、全国各地から収集した煎茶書を総合的に検討し、日本の煎茶書と中国茶書との受容関係を考察することを目的とする。

また、中国の研究成果を取り入れることで、日本の煎茶書研究に有益な成果をもたらすことができると考えている。中国茶書をはじめとする膨大な伝来漢籍が、日本の茶人にいかなる影響を与えたのか、さらに煎茶書の作成にいかなる役割を果たしたのかを解明する。煎茶書物という過去の研究に欠けている視点から出発し、日本近世の煎茶文化史に新しい知見をもたらす。煎茶書研究によって、日中がそれぞれの茶文化の歴史にふれあうことができ、両国の国民にとって、異文化を尊重した上で相互に理解を深めることも期待できる。本研究によって達成したい研究目標は、煎茶書を通して日本の煎茶文化の一側面を解明することである。

第二節.本研究の位置づけと先行研究

煎茶文化について、日本では研究の発足が早く、すでに多くの研究成果が出されている。近年、煎茶文化への関心が高まるとともに、新しい研究成果が続々と出されている。日本の研究者は、民俗学・社会学・考古学・美術学など様々な領域から研究を展開している。とくに、煎茶人物史においては多くの研究成果がある。また、近年では、建築史的研究も迅速に進んでいる。実際、人物史的研究も

建築史的研究も、煎茶の文化史的研究の一部として認識されている。

一方、煎茶関連文献への関心は低く、煎茶書に関する専門研究が不足している。いままで検討されていない煎茶関連文献がまだ多く残っているのは現状である。したがって、本論は煎茶書を主な視点にして研究を展開し、煎茶文化史的研究の一側面である文献研究として位置づけたい。本研究を通して、煎茶文化の成立と展開への理解を深め、日中の茶文化交流史に関する新しい知見を得ることを期待している。また、中国の研究者に新たな視点を提示し、中国においても煎茶書研究が少ないという現状を打破し、その一方、日本における中国茶文化研究に厚みを持たせることができると考える。

続いて、煎茶関連文献の研究の現状と先行研究について説明する。煎茶書の存在は昔から煎茶研究者に重視され、それぞれの研究に貴重な資料として使用されていた。また、20世紀以降、煎茶書の翻刻も盛んに行われていた。しかし、この時期の煎茶書はほとんど参考資料として使われ、独立の研究対象ではなかった。以下、煎茶書の先行研究を年代順で提示する²。

1936年、最初に煎茶書の調査を始めたのは佐伯太である。佐伯は論文「煎茶小史」³を發表し、はじめて煎茶関係の和漢の書目の調査結果を載せた。論文の末尾に「文献」の節を設けて「支那書の部」と「邦書の部」を提示している。「支那書の部」は、大枝流芳『青湾茶話』を参考としたもので、中国の茶書38点を並べている。また「邦書の部」に22点を示している。簡潔な目録表で、茶書の解説がついておらず、書名の提示のみになっている。この論文は長谷川瀟々居の『煎茶志』に影響を与えたようである。

² 本節は煎茶書の先行研究の年代順に着目している。また、煎茶書の先行研究についての検討は、本論の第一章第四節の「煎茶書史料不足の問題と研究現状について」にも行われているでも行っているが、そちらでは、七人の代表的な研究者、長谷川瀟々居・檜林忠男・森本信光・筒井紘一・佃一祐・麓和善・守屋雅史の研究を取り上げて重点的に検討している。内容的には本節と共通している部分が多いため、照らし合わせながらそちらも参照されたしご確認ください。

³ 佐伯太、『茶道・特集研究編』全集巻の十三、創元社、1936。

1965年、長谷川瀟々居の作品『煎茶志』⁴が刊行され、煎茶書の調査結果が「茶書目録」の形で掲載される。「茶書目録」は「中国書の部」・「未見書目」・「邦書の部」の三部分で構成されている⁵。この分類のやり方は、佐伯太の「煎茶小史」の影響を受けていると考えられる。その中で、「中国書の部」では中国茶書53点、「未見書目」では中国茶書32点を取り上げられている。その次に、「邦書の部」では煎茶書38点を取り上げられている。この38点の中には、「陸羽茶経」・「茶董」・「煎茶訣」・「劉長源茶史」のような中国茶書の和刻本も対象として記入されている。また、邦書の取捨選択の基準について、長谷川瀟々居は「邦書の部では茶圃に於ける栽培、製茶のことや経営に関するもの、抹茶書は採らず、また、原則として明治刊行までのものに限った。」⁶と述べ、抹茶（点茶）関係書、農作関係書が除外された。また、調査対象となっている茶書は明治時代までの刊行物に設定していた。この調査は、日本で最初の解題付きの煎茶書の書目リストとなり、その茶書のリストの作成基準は後の研究にも影響を与え続けた。

1972年、榎林忠男を筆名とし、後に煎茶道小川流第六代家元となった茶人小川後楽は、『日本の茶書2』⁷の編纂に参加した。『日本の茶書2』は『日本の茶書1』⁸の続編で、『梅山種茶譜略』・『青湾茶話』⁹・『清風瑣言』・『煎茶早指南』¹⁰・『煎茶訣』¹¹坤・『喫茶辨』が収録され、最初の煎茶書の翻刻資料および解説書としてよく知られている。本書は煎茶書研究の必読書でもある。榎林忠男の研究は、当時の日本の茶文化研究に多大な刺激を与え、煎茶研究の重要性と意義を茶の湯の研究者にも伝えた。とくに、『日本の茶書2』が刊行される二年前、榎林は

⁴ 長谷川瀟々居、『煎茶志』、平凡社、1965。

⁵ 前掲書、p. 284～320。

⁶ 前掲書、p. 284。

⁷ 林屋辰三郎・横井清・榎林忠男編注、『日本の茶書2』、平凡社、1972。

⁸ 林屋辰三郎・横井清・榎林忠男編注、『日本の茶書1』、平凡社、1971。

⁹ 別名『煎茶仕用集』。

¹⁰ 別名『自辨茶略』。

¹¹ 別名『木石居煎茶訣』。

論文「近世煎茶道の成立について」¹²と著書『煎茶の世界』¹³を通して、「茶の湯批判としての煎茶」¹⁴という見方を述べたが、この見方は茶の湯研究に大きな影響を与えた。煎茶書は、点茶書の比較対象としてよく知られていた。そのため、『日本の茶書1』は茶の湯の経典を中心に編纂されたが、それと比べて『日本の茶書2』は茶の湯の批判書を中心に編集され、その中には煎茶書の書名が批判書として頻繁に現れる。現在に至っても、『清風瑣言』を始めとした煎茶書は常に点茶書の批判書として見られているが、特に茶の湯の研究においてこの見方がある程度定着してしまったのも、檜林の研究成果の影響の大きさを物語っている。この点については、第一章の第三節「檜林忠男の煎茶道史研究について」に述べたい。

1976年、檜林忠男は再度煎茶書の翻刻に参加した。『日本庶民文化史料集成』第十巻数寄¹⁵では、「青湾茶会図録」・「烹茶樵書」・「煎茶式」・「煎茶小述」の四作が収録されている。煎茶書の基礎研究が勢いよく進んだ時期である。

同年、全日本煎茶道連盟の協力で、『続煎茶全書』¹⁶が主婦の友社によって出版された。本書は『煎茶全書』¹⁷の続篇として出された。『煎茶全書』では煎茶席の紹介が主な内容であったが、続篇では煎茶書についても言及されている。煎茶評論家森本信光は64点の煎茶書をリストとして取り上げ、その中の23点に対して解説を施した。

1978年、裏千家今日庵文庫長筒井紘一は日本茶書に関する重要な研究書『茶書の系譜』¹⁸を出版した。本書は、檜林忠男の煎茶書の点茶批判論から明らかに影響を受けている。『茶書の系譜』第四章「茶道論の展開」では「煎茶道の書」

¹² 檜林忠男、「近世煎茶道の成立について」、藝能史研究、31号、藝能史研究会、pp. 1～32、1970。

¹³ 檜林忠男、『煎茶の世界』、徳間書店、1971。

¹⁴ 前掲書、p. 74～78。

¹⁵ 藝能史研究会編、『日本庶民文化史料集成』第十巻数寄、三一書房、1976。

¹⁶ 主婦の友社編、『続煎茶全書』、主婦の友社、1976。

¹⁷ 主婦の友社編、『煎茶全書』、主婦の友社、1973。

¹⁸ 筒井紘一、『茶書の系譜』、文一総合出版、1978。

¹⁹という節を立て、煎茶の流行と抹茶批判をめぐって論じた。これは煎茶書の研究成果が茶の湯研究の最前線の研究者に認められた証拠であり、従来の点茶主位の研究状況を前に一步推し進めたものとして評価できる。

1980年、熊倉功夫は『近代茶道史の研究』²⁰で、近世後期の茶道批判をめぐって煎茶からの批判を論じた²¹。論文の中に、特に『清風瑣言』を取り上げて論じた。

1981年、『煎茶全書』と『続煎茶全書』の続作として、全日本20流派の力を合わせて内容を拡充した煎茶の百科事典『現代煎茶道事典』²²が刊行された。本書における「おもな煎茶の書物」²³の部分の執筆は、当時の煎茶流派である一茶菴の家元佃一祐が担当した。佃一祐の調査によって多くの新資料が取り上げられている。異名で重複したものを省いて、煎茶書数は71点に達し、それぞれに解説が施された。佃一祐の基準によれば、「明治大正期のもので、後年に影響を及ぼしたものはとり上げた」とあり、明治時代と昭和時代の作品が新しく取り上げられたことがわかった。さらに一部の大正時代の影響力のある煎茶書も作品のリストに入った。

1997年、大型特別展「文人のあこがれ、清風のころろ 煎茶・美とそのかたち」²⁴が大阪市立美術館で開催された。この展覧会では、煎茶書と区別して「茗讌図録」という新たな概念が、当時の大阪市立美術館学芸員守屋雅史によってはじめて提起された²⁵。「茗讌図録」とは、煎茶書の類に属し、とくに明治時代以降に盛んになった図書形態の一つを指す。茶会記と似ており、煎茶会の日時・場所・

¹⁹ 前掲書、pp. 283～290。

²⁰ 熊倉功夫、『近代茶道史の研究』、日本放送出版協会、1978。

²¹ 前掲書、pp. 61～70。

²² 主婦の友社編、『現代煎茶道事典』、主婦の友社、1981。

²³ 前掲書、pp. 479～496。

²⁴ 大阪市立美術館編、『煎茶・美とそのかたち：文人のあこがれ、清風のころろ：特別展』、大阪市立美術館、1997。

²⁵ 前掲書、pp. 14～16。

参加者などを記録した書物である。とくに、茶席の風景・茶室の空間を細かく描くところが「茗讌図録」の特徴である。この展覧会によって、「茗讌図録」は煎茶書から独立したものと認識された。煎茶書の研究においても、江戸期以前の作品に対しては煎茶書研究と呼ばれる一方、明治期以降の作品に対しては、徐々に「茗讌図録研究」と呼ばれるように変わっていった。

2000年、淡交社によって『茶道学大系』シリーズ全11巻が出版された。多領域・多分野の研究者の研究成果を収録した作品であり、長年の日本茶文化研究の集大成と呼ぶべき大作である。その中の第6巻『茶室・露地』²⁶では、名古屋工業大学の建築史研究者麓和善が論文「煎茶空間：その文献史的特質」²⁷を発表している。この論文は、煎茶書の成立年間・記載内容・著者・版元と出版地域について論述を展開し、煎茶書と「茗讌図録」に見える煎茶空間を論じたものである。茶室関連の研究論文ではあるが、はじめて煎茶書を主な研究対象とした論文でもある。そのため、煎茶書研究の発展における重要な論文である。しかし、この論文の中心論点は建築史に置かれ、煎茶室以外の茶書内容についてまだ検討されていない部分が多い。

2003年、当時の京都茶道資料館副館長を務めた筒井紘一は1978年に出版された『茶書の系譜』の続作として、『茶書の研究：風流の成立と展開』²⁸を出版した。日本の茶書研究の最新の成果を示したものであると思われる。本書は、『茶書の系譜』の内容を踏まえ、さらに日本の茶書への検討を充実させたものである。しかし、煎茶書についての部分の論述は、基本的に20年前の論文をそのまま使用している。つまり、日本最先端の茶書研究者にとっては、煎茶書に対して新しい見解がとくになく、煎茶書は抹茶批判のための作品である、という認識はいまだに学界の主流の観点であったといえる。

2008年、守屋雅史は大阪市立美術館で常設展「新収蔵品谷村為海氏煎茶関連

²⁶ 中村利則編、『茶室・露地』茶道学大系六、淡交社、2000。

²⁷ 前掲書、麓和善、「煎茶空間：その文献史的特質」、pp. 205～254。

²⁸ 筒井紘一、『茶書の研究：風流の成立と展開』、淡交社、2003。

資料」²⁹を開催し、亡くなった煎茶研究者谷村為海の蔵書を展示した。その守屋は2009年、神戸大学の煎茶研究者舩阪富美子と合同論文「煎茶関係参考文献目録」³⁰を発表した。この論文は2008年10月までの煎茶関係書物および論文を網羅し、煎茶に関わる内容を「①全書・事典・辞典、②煎茶書・煎茶道書、③煎茶会記・茗謙図録、④煎茶人・煎茶史・煎茶文化、⑤煎茶具・書画、⑥文房具・文房清玩、⑦文人意識・文人趣味、⑧文人花、⑨七弦琴、⑩煎茶建築、⑪中国喫茶文化、⑫喫茶文化全般」の十二種類に分類した³¹。その中の、「②煎茶書・煎茶道書」では資料141点を取り上げ、「③煎茶会記・茗謙図録」では123点を取り上げている。この論文は現在においても最も詳細な文献目録資料であり、その便利性と実用性を評価すべきである。

2015年、同じく守屋雅史は論文「大阪市立美術館所蔵『谷村為海煎茶関連資料』の煎茶書について」³²を公開した。これは谷村為海の収集した研究資料についての紹介論文で、その中に掲載された資料は「谷村為海煎茶研究資料」と呼ばれている。この論文は、大変貴重な煎茶書の研究資料で、今までで最も詳細な書誌情報が載せられている。煎茶の文献的研究に大いに貢献したものと評価すべきである。また、この論文は江戸期から明治期までの24点の重要な煎茶書について解説を行い、さらに文末には「谷村為海煎茶関連資料リスト」と「谷村為海煎茶研究資料リスト」が添付されており、計454点の資料が掲載されている。この論文は2009年の「煎茶関係参考文献目録」の煎茶書の分類基準をさらに細かく設定した。調査の結果、煎茶書105点、茗謙図録68点が収録されている。この調査結果は同名の茶書の異本を重複して計上したものである、ということに

²⁹ 大阪市立美術館常設展「新収蔵品 谷村為海氏 煎茶関連資料」、開催時間：2008年1月11日～2月11日。

³⁰ 守屋雅史・舩阪富美子、「煎茶関係参考文献目録」、『野村美術館研究紀要』18号、野村美術館学芸部編、pp.99～145、2009。

³¹ 前掲書、p.99。

³² 守屋雅史、資料紹介「大阪市立美術館所蔵『谷村為海煎茶関連資料』の煎茶書について」、『大阪市立美術館紀要』、大阪市立美術館編、pp.3～42、2015。

注意しなければならない。この資料の長所は、違う煎茶書の版本の書誌情報が一目瞭然であることで、煎茶書の版本比較を行う際に不可欠な資料である。

2018年、麓和善は共作『庭と建築の煎茶文化：近代数奇空間をよみとく』³³で論文「煎茶席の歴史的・地域的特質」³⁴を掲載した。この論文は2000年の論文「煎茶空間：その文献史的特質」の加筆である。

2019年、麓和善・櫃本聡子・濱田晋一は連名で論文「煎茶会図録の書誌的考察－煎茶会図録による煎茶席の空間特性に関する研究 その1－」³⁵と「煎茶会図録にみる煎茶会の会場－煎茶会図録による煎茶席の空間特性に関する研究 その2－」³⁶を発表した。この二本の論文は茗謙図録の専門研究で、煎茶書研究にとっては最新の成果であり、非常に重要な進展である。特に「煎茶会図録の書誌的考察：煎茶会図録による煎茶席の空間特性に関する研究 その1」では、51点の茗謙図録の解説を行い、参考価値が高い。

それ以外に、現在『茶書古典集成』という新しい茶書資料集が編纂中である。この資料集は1956年に出版された全12巻の『茶道古典全集』³⁷の新版であり、完全新作である。全17巻のシリーズ中、第14巻は「江戸後期の茶書と煎茶書」という書題が付けられている。煎茶書部分の編纂担当者は東京学芸大学の名誉教授高橋忠彦と煎茶研究者の舩阪富美子である。収録された煎茶書は『青湾茶話』・『清風瑣言』・『木石居煎茶訣』・『梅山種茶譜略』・『泡茶新書三種』・『茶痕醉言』である。これは刊行予定の新資料であるが、最新の煎茶書の翻刻と解説書となる。

³³ 尼崎博正・麓和善・矢ヶ崎善太郎編著、『庭と建築の煎茶文化：近代数奇空間をよみとく』、思文閣、2018。

³⁴ 前掲書、麓和善、「煎茶席の歴史的・地域的特質」、pp. 215～237。

³⁵ 麓和善・櫃本聡子・濱田晋一、「煎茶会図録の書誌的考察－煎茶会図録による煎茶席の空間特性に関する研究 その1－」、『日本建築学会計画系論文集』、84巻755号、日本建築学会編、pp. 209～219、2019。

³⁶ 櫃本聡子・濱田晋一・麓和善、「煎茶会図録にみる煎茶会の会場－煎茶会図録による煎茶席の空間特性に関する研究 その2－」、『日本建築学会計画系論文集』、84巻763号、日本建築学会編、pp. 1987～1992、2019。

³⁷ 千宗室等編、『茶道古典全集』、淡交社、1956。

以上、日本の主な煎茶書の研究成果を提示した。以下では、中国の茶文化研究の成果について言及する。中国は長いお茶の歴史を持っているが、中国茶文化に関する研究が本格的に始まったのは1980年代以降であり、日本の研究と比べて学術史としては短いものだといえる。

1982年、台湾が真っ先に中華茶芸協会を立ち上げたことをきっかけとして、大陸・台湾の研究者は一斉に中国の茶文化に関心を寄せて茶文化研究のブームを巻き起こした。このブームから直接に影響を受け、中国大陸の茶文化研究は短い間に迅速な発展を遂げた。

また、1980年代から今までの間の短い間に茶文化に関する専門性の高い研究所と学会が開設された。それだけではなく、研究誌と論著も多く刊行された。その結果、茶文化研究者の育成に好適な環境を提供することを実現した。この短い40年を顧みると、中国では茶文化研究が盛んに行われており、たくさんの成果が挙げられている。

中国茶文化に関わる諸研究の中でも最も大きな成果はおそらく茶書研究であろう。茶書研究は茶文化研究が発足した時点からすでに存在し、いままでも最も関心が多い研究課題である。また、茶書研究は茶史研究の基盤としている。古代茶書は茶史研究を行う上での大切な資料であり、証拠でもある。

実際、1990年代以前に中国古代茶書の整理と研究に一番力を注いだのは日本の研究者である。代表的な例として『中華茶書』（青木正児、1962）³⁸、『中国の茶書』（布目潮瀨・中村喬、1967）³⁹、『中国茶書全集』（布目潮瀨、1987）⁴⁰などがある。

もちろん、中国大陸のも重要な研究成果を出した。例えば、『中国茶葉歴史資料編選』（陳祖槻・朱自振、1981）⁴¹、『中国古代茶葉全書』（阮浩耕・沈冬梅・于

³⁸ 青木正児、『中華茶書』、春秋社、1962。

³⁹ 布目潮瀨・中村喬、『中国の茶書』、平凡社、1976。

⁴⁰ 布目潮瀨、『中国茶書全集』、汲古書院、1987。

⁴¹ 陳祖槻・朱自振、『中国茶葉歴史資料編選』、農業出版社、1981。

良子、1999)、『中国茶文化経典』(陳彬藩・余悦、1999)⁴²などがある。しかし、中国は日本と比べて研究者の力が不足しているという現状があることを認めなくてはならない。実際、両国が編集した古代茶書資料を読み比べれば、校訂と注釈には大きな差があることが明らかである。

21世紀に入ると、中国における茶書研究が大きな進歩を果たしたとともに、その差が縮まっているように見える。『中国古代茶書集成』(朱自振・沈冬梅・増勤、2010)⁴³、『中国散佚茶書輯考』(王河・虞文霞、2015)⁴⁴、『中国茶書全集校証』(方健、2015)⁴⁵をはじめとして学術的価値を有する成果が短い間に一気に出された。また、『中国古代茶道秘本五十種』(2003)⁴⁶、『中国茶文献集成』(許嘉璐、2016)⁴⁷のような古代茶書の影印本を編集・整理した一次資料も完成された。要するに、中国大陸は新たな成果が次々と出されており、茶書研究が順調に進展している。

また、中国では1978年の改革開放により、1980年代以降国際化が進んでいる。特に、中国の研究者は1966年からの10年間における文化大革命の失敗を反省し、ますます伝統文化に対する保護・復興・伝承の重要性を意識するようになった。そこでは、先進国である日本の経験を積極的に吸収する必要があると考えられている。近年、中国では、北京外国語大学滕軍教授による『日本茶道文化概論』⁴⁸と『中日茶文化交流史』⁴⁹によって、茶の湯文化を中心に日本の茶文化に関する研究が積極的に行われている。また、2016年6月、中国人民大学の李萍教授は茶道哲学研究所を立ち上げた。

しかし、日本の煎茶文化においては、中国における研究はまだ始まったばかり

⁴² 陳彬藩・余悦、『中国茶文化経典』、光明日報出版社、1999。

⁴³ 朱自振・沈冬梅・増勤、『中国古代茶書集成』、上海文化出版社、2010。

⁴⁴ 王河・虞文霞、『中国散佚茶書輯考』、世界図書有限公司、2015。

⁴⁵ 方健、『中国茶書全集校証』、中州古籍出版社、2015。

⁴⁶ 『中国古代茶道秘本五十種』、全国図書館文献縮微複製中心、2013。

⁴⁷ 許嘉璐、『中国茶文献集成』、文物出版社、2016。

⁴⁸ 滕軍、『日本茶道文化概論』、東方出版社、1992。

⁴⁹ 滕軍、『中日茶文化交流史』、文学出版社、2004。

の段階で、研究の蓄積が少ない。そして、日本の研究と比べても、中国における煎茶研究の歴史はまだ浅い。特に、研究対象が分散的であり、総合的な研究成果に欠けている現状がある。中国では、ここ十数年で日本の煎茶文化に興味を示されたが、全体的にみれば成果は少ない。

したがって、先行研究の蓄積が不足しているのが中国の研究者にとって最も大きな問題である。この問題は、現在改善されつつある。近年活躍中の中国の研究者として、上海師範大学の曹建南がおり、発表した論文は「《煎茶訣》在日本煎茶文化史上的地位」⁵⁰、「青湾茶会：江戸末期煎茶文化博览会」⁵¹などがある。それに、広島大学大学院の院生李文郁は「江戸時代の煎茶書における中国明清茶書の受容」⁵²を発表した。ほかには、下関市立大学の講師馬叢慧は、売茶翁の研究を行っている⁵³。若い世代の中国研究者が煎茶書の研究を進めている。中国の煎茶書研究を全体的に見れば、総合的・継続的研究が少なく、個別に行われた単独研究がほとんどである。

第三節.研究方法と各章の構成

本研究では、文献学と中国古典文学の研究方法を総合的に利用し、煎茶書における漢籍受容および江戸文人の煎茶趣味の展開について検討する。江戸時代は煎茶活動が盛んに行われた時代であり、また煎茶趣味を持った読者の急増した時代であり、さらに煎茶関係の出版物が大量に刊行された時代である。煎茶書は本研究の土台であり、根本である。

各章の構成について、本研究は本論と資料編の二つの部分に分けられる。本論は第一章～第九章で構成され、資料編は『煎茶訣』の翻刻と訳注である。

まず、煎茶書に対して文献調査を行う。現存の煎茶書の数目と所蔵地などの情

⁵⁰ 曹建南、「《煎茶訣》在日本煎茶文化史上的地位」、『中国茶葉』2018年12期、pp. 62～65、2018。

⁵¹ 曹建南、「青湾茶会：江戸末期煎茶文化博览会」、『農業考古』2018年第2期、pp. 241～246、2018。

⁵² 李文郁、「江戸時代の煎茶書における中国明清茶書の受容」、『比較日本文化学研究』11、2018、pp. 141～157。

⁵³ 馬叢慧、『売茶翁の逍遙遊』、駿河台出版社、2020。

報を正確に把握することが重要である。前節の先行研究を踏まえ、いままでの研究成果を把握する。それから煎茶書の定義を確認しながら、本論の検討対象となる煎茶書を整理し、その目次を作成する。これは本論の第一章の内容とする。

次に、煎茶書の情報の収集と整理を行う。文献調査の段階で手に入れた煎茶書の書誌情報を整理する。また、新しい資料を提示する。その次は、煎茶書の書誌情報について分類と分析を行う。文献調査で集めた情報を分類して分析を行うことによって、煎茶書の全体像を把握する。分析の対象は煎茶書の刊行年、編著者の出身地、身分、職業、文体、書型などさまざまなデータを含める。煎茶書の全体像と変遷の過程を明らかにすることを目的とする。これは本論の第二章の内容とする。

それから、中国茶文化の研究成果を提示する。煎茶文化の誕生の時代に最も近い中国明代の茶書刊行状況、そして製茶法、喫茶法、文人茶関係の文献を集めて翻訳と解説を行い、明代の代表的な喫茶文化の特徴を提示する。日本の煎茶書は中国の古代茶書と深く関わるが、今まで煎茶書研究の視野は日本国内の資料に限っており、中国の茶文化研究の成果を導入すれば、新知見を得ることができる。これは本論の第三章の内容とする。

さらに、中国の研究成果を踏まえて煎茶書の分析を行う。中国古代の喫茶文化の特徴を把握した上で、文献調査で集めた煎茶書と対比し、その共通点を提示する。ここでは、煎茶書の内容に対する解説と分析が必要である。煎茶書の刊行状況と、江戸時代の製茶法、喫茶法、文人茶に関わる文献を主な資料として、第三章の内容と対応しながら、煎茶書の受容状況を解明することを目的とする。これは本論の第四章の内容とする。

第一章から第四章の内容は、煎茶書全般を総合的・全体的に検討する予定だが、個別の代表的な煎茶書に対する研究も必要である。煎茶書は中国茶書に多大な影響を受けたとはいえ、常に中国茶書の形式のみに止まっていたわけではなく、煎茶書の日本化が進んでいる、という特徴がある。そのような特徴をより解明するため、煎茶家の個別性、作品の独自性に注意を払わなければならない。代表的な煎茶書の特徴を整理した上で、それぞれの作者に対する分析と、個別の作品の

特徴を把握するべきである。したがって、第五章から第九章の内容は、代表的な煎茶書の作者と作品を取り上げて具体的な考察を行う。

第五章は大枝流芳、第六章は大典禅師、第七章は上田秋成の作品を中心にそれぞれ検討する。また、第八章は清人陳元輔の作品に注目し、煎茶書の日本への伝来について検討する。さらに、第九章は大典禅師の漢詩集を論じる。そして、煎茶書の補足資料として詠茶詩の資料価値を提示する。

最後に、資料編では、『煎茶訣』の二つの版本に対して翻刻した上で訳注を行う。

第四節.研究価値と研究意義

筆者は本論を通して煎茶書研究の価値と意義を明らかにする。まず、本研究によって煎茶書研究を通して煎茶文化の歴史的価値を発見し、日本の茶書研究について新しい見解を得ることが期待できる。煎茶書は江戸時代における高度に発達した社会文明の産物であり、日本の伝統文化を構成する重要な一部分である。現在、煎茶書の研究はまだ不十分で、これらの作品の価値はまだ見出されていない。煎茶書の発展過程を把握することによって、江戸時代の煎茶の姿を明らかにすることが可能である。

そして、中国の茶書研究の成果を有効に煎茶書研究に導入して利用することで、両国の茶書に潜んだ受容関係を解明することができる。漢籍の伝来は近世日本の文化交流の一つの重要な手段である。また、中国の茶書は煎茶書が成立した要因のひとつである。中国の研究成果を積極的に参照して導入することによって、日本の研究者に新しい視点と刺激を与えることができる。

さらに、煎茶書を通して江戸時代の文人関係の実態を窺うことができる。煎茶書の出版は江戸文人の活躍に深く関わっており、特定の時代の社会環境・教育環境などによって生み出された作者独自の精神面の具現化である。とくに、江戸後期における煎茶書の大量刊行は、盛んな文人交遊活動・文人結社活動に繋がる。本研究を通して、江戸時代の文人生活の一側面である喫茶生活を考察すること

ができる。

最後に、本研究の完成によって、日本の研究者にとって、日中両国の茶文化が日本近世に入ってから緊密に繋がっている、という認識を深化させることを期待する。さらに、中国の研究者にとって、日本の伝統的茶文化への理解を深めることができれば幸いである。

第一章. 日本における煎茶書研究の現状

はじめに

日本ではかつて膨大な数の茶書が著された。茶書とは、茶のことが書かれた書物の総称であり、茶人の論著や喫茶関係の文集、図録、茶会記などを指している。日本においては独自の喫茶文化がある。日本の喫茶文化は、主に抹茶と煎茶の二つの流れに分かれる。中でも、抹茶の喫茶法を用いる茶の湯が日本の喫茶文化の主流である。それゆえ、現在日本では「茶書」といえば、一般的に茶の湯関係の書物を指しており、抹茶書または点茶書という意味である。一方、茶の湯に対して煎茶を用いる喫茶文化が江戸時代に成立したが、その煎茶関係の書物は煎茶書と呼ばれている。つまり、煎茶書は当然日本の茶書の一部であるが、現在は一般的に、茶の湯関係書に対立する概念として考えられている。それでは、茶の湯関係書と煎茶書の対立関係はどのように生まれ、また実際にどのように考えられているのか。

本章の内容について、まず、本章は煎茶の語義を確認した上で、日本の茶道史における煎茶に関する考え方を考察し、先行研究を把握した上で煎茶書研究における史料不足という問題を取り上げて検討したい。

第一節.日本における「煎茶」の語義について

煎茶書を検討する前に、まず「煎茶書」の定義を確認したい。「煎茶書」の定義を確認するために、先に「煎茶」とは何かを回答しなければならない。

日本における「煎茶」とは、一体なにを指しているか、その語義についてあらためて確かめる必要がある。

従来の説によれば、「煎茶」とは「抹茶」の対義語として成立している。『新版茶道大辞典』で「煎茶」の語義を調べると、次のようにある。

煎茶【せんちゃ】: 茶葉に湯を注いだり、熱湯で茶葉を煎じて飲む場合

を一般に煎茶と呼ぶ。正しくは前者は淹茶（えんちゃ）であり、後者を煎茶というが、抹茶以外の茶を総称して煎茶と呼ぶことが多い。煎茶がいつごろから飲みはじめられたのかは不明であるが、その起原は煎葉の起原とともに古いと思われ、また中国から渡来したものである。¹

『新版 茶道大辞典』の解説では不明確な部分があるが、「煎茶」の三つの要素を提示している。つまり、茶葉を使用すること、抹茶以外の喫茶法の総称であること、中国起源であること、この三つである。これは「煎茶」の基本的な特徴だと言えよう。

このような「煎茶」の語義については、ほかにも高橋忠彦と大槻幹郎の研究において詳しく検討されている。

高橋忠彦は中国文化史の視点から「煎茶」の語義とその形成について論じ、白居易や陸游など唐宋の茶詩から大量の用例を集め、それらを分析して「煮」、「煎」、「烹」、「瀹」の語義を区別した²。その結論として、「煎茶」という言葉は、中国の喫茶文化史において、重要な意味をもって使用され続ける。宋代には、一方では「点茶」（分茶とも呼ばれる）と対比して、「煎茶」が使用される。その場合は、原則として、唐代以来の伝統的な喫茶法ということである。また、一方では、「煎茶」が広く「喫茶」の意味で用いられることもある³と説明している。

つまり、中国語の定義からみれば、「煎茶」は「点茶」と対比的な言葉として使われ、唐代の喫茶法を指し、宋代の喫茶法とは区別されている。また、広義でいえば中国の喫茶そのものでもある。さらに、明代、文人茶の文化が盛んになる時期において、葉茶を使用した喫茶法（泡茶法）のことを詩文上では「煎茶」と呼んだ用例も多くあった。要するに、中国語における「煎茶」の語義は、広義では中国古代の喫茶そのものを指している。また、「煎茶」という一語は、同時に「煮茶・烹茶・泡茶・瀹茶」の総称になったともいえる。これは、中国の歴代の

¹ 『新版 茶道大辞典』、淡交社、2010、p. 648。

² 高橋忠彦、「中国茶文化における「煎茶」の語と伝統の形成」、『東京学芸大学紀要 人文社会科学系 I』第65集、2008、pp. 67～81。

³ 同上、p. 78。

喫茶法の変革が起こるたびに、「煎茶」という語義が受け継がれていったことを指している。したがって、「煎茶」は喫茶法の総称で、とくに唐代に流行した煎茶法と、明代に流行した茶葉を用いた泡茶法との両方の意味が同時に含まれている。しかし、宋代に流行した点茶法とはやや違いがある。

一方、大槻幹郎は日本からの視点で、中国から日本に受け入れられた「煎茶」の語義について検討を行った。特に、日本における「煎茶書」の中の「煎茶」の語義について、大槻は大枝流芳の『煎茶仕用集』を代表的な例として解説を行っている⁴。

『煎茶仕用集』という書名は、煎茶という茶に関わる仕様・仕方・用法の意と考えられるが、中国の辞書にはこの「煎茶」も「仕様」の語はない。全く日本独自の漢字の用法であり、日本の茶書としてふさわしい命名というべきである。したがって日本に成立した煎茶書としての独自性を示すものといえよう。……この書以後「煎茶」を冠する茶書が続々と現れる。

大槻幹郎は、日本の場合、「煎茶」は主に四つの意味があると説明している。それぞれの意味として、

- ① 茶を煎るという茶を飲むための行為を表す語で、いわば動詞的な用法。
- ② 茶を煎る行為を含め飲む行為そのものを示すもので、いわば名詞的用法。
- ③ 飲用の素材の葉茶の名称。
- ④ 陸羽・盧仝の文人茶の系譜に連なる茶で、葉茶を用いる喫茶のあり

⁴ 大槻幹郎、「煎茶」の語義について、『研究紀要』第16号、野村美術館、2007、p.32。

方としての用法。

以上の四つである⁵。この四つの解釈を通して「煎茶」の語義の変化と言葉の受容と変容が窺える。中国から伝来した「煎茶」の語義は、本義に基づいて日本人に受容され、異なる時期・異なる解釈によって次第に新しい意味が生み出され、徐々に日本化されたことが大槻の研究によって確認できたと言えよう。

以上より、「煎茶」の語義の先行研究に基づいて本研究において検討する煎茶書の対象範囲を示したい。まず、煎茶書は中国から伝来した喫茶法と関係があり、とくに中国茶書の影響を受けて成立した書物である。日本で翻刻された中国茶書の和刻本や中国喫茶に関係する詩文集を含める。また、煎茶書は葉茶の用法を中心とした、喫茶法としての煎茶にもとづいて成立した書物である。茶法としての煎茶に関係する詩文集を含める。最後、煎茶書は点茶法以外の喫茶法を中心に論じた書物である。

第二節.煎茶の誕生までの日本茶道史

12世紀の頃、中国の影響を受けて喫茶の習慣が本格的に日本で浸透しはじめた。僧侶をはじめとした中国との活発な仏教関係の交流によって、当時、宋王朝の中国で最も盛んになっていた喫茶法、抹茶法（末茶法）が日本にもたらされ、次第に新しい喫茶法として、それが禅宗の寺院、後に公家、武家といった上流階級の間で広まっていた。そして、その新しい喫茶法は日本において独自の発展を成し遂げたが、それは茶の湯と一般的に呼ばれている。

室町時代中期、日本の代表的な茶人村田珠光が現れ、亭主と客人の精神交流の重要性を唱えた。珠光は茶会の精神性を重視した、わび茶の創始者として知られている。安土桃山時代に入ると、珠光の後継者として堺の茶人武野紹鷗が現れ、わび茶をさらに発展させ、さらに紹鷗の弟子千利休によってわび茶が完成された。利休の茶は迅速に武士階層の間に広まり、後に、古田織部、小堀遠州、片桐

⁵ 大槻幹郎、「煎茶文化研究のために：「煎茶」の語の諸問題」、『煎茶文化考 文人茶の系譜』、思文閣出版、2004、pp.19～21。

石州など茶の湯を好む大名が次々と現れた。彼らは大名茶人と呼ばれている。安土桃山時代から江戸前期にかけて、豊臣秀吉など戦国武将に積極的に推し進められた兵農分離政策により、武士階層と他の階層が明確に区別され、固定化された。支配階級と被支配階級の身分差が一層強調されたため、各階層間の対立も深刻になってきた。その対立は茶の湯の世界にも反映されている。

元禄時代（1688～1703）を迎えるに及んで、町人階層が商売によって莫大な富を蓄積し、経済の勃興とともに町人文化を大いに発展させた。茶の湯の一般化が迅速に進む一方、町人階層は茶文化の新たな担い手となり、大名茶の対立軸として町人の茶が成立し、発展した。町人を主体とした茶の湯の人口が飛躍的に増加し、やがて家元制度が確立された。また、大勢の門人の伝授に対応するため、新しい稽古の法式七事式が考案された。茶の湯は大衆向けの芸事として日本全国に広く普及し、門人の数も前代未聞の速度で急増した。しかし、急速な発展に伴って、大勢の人に器物面の伝授が可能になっても、精神面の伝授は難しかった。その結果、茶の湯は庶民化が勢いよく発展する一方、庶民の間で「わび茶」に対する理解は次第に変質してしまうという状況が現れた。本来、茶人としては、茶の湯の作法より、その裏面で強調された精神性を重視すべきだったが、茶の湯の大衆化とともに当時の茶人たちは専ら高価な茶器に夢中し、陳腐な審美眼に囚われ、既成の作法を墨守するようになってしまう。結果として、茶の湯は一種の遊びとして町人の間に広まり、遊芸化が顕在化し、その中にある精神性が次第になくなってしまった⁶。

遊芸化しつつある茶の湯に対して、厳しい批判の声が日々高まっており、茶人たちは自発的にその現状を批判しつつ、茶の湯の本来のあるべき姿を真剣に考え直しはじめた。茶の湯自体の内部からの改革的な反省と批判の声がある一方、煎茶を新しい核とする一群の茶人もこの時期に集中的に現れ、彼らは家元制度のもとで整備された手前や体系化された茶会様式を拒絶し、より気軽に楽しみ

⁶ 本段落は以下の資料を参照。西山松之助、『茶の文化史図説茶道大系2』、「町人の茶」、角川書店、1974、pp. 203～204。桑田忠親、『茶道の歴史』、「家元制度の成立」、講談社、1969、pp. 200～201。熊倉功夫、『近代茶道史の研究』、「近世後期の茶道批判」、日本放送出版協会、1978、pp. 53～54。

る、自由自在な喫茶を追求していた。ここに至って、煎茶のブームが引き起されたと考えられている。

第三節. 檜林忠男の煎茶道史研究について

茶の湯批判としての煎茶について、一番代表的な研究者は檜林忠男である。檜林は初めて煎茶史論の視点から、茶の湯批判としての煎茶についてまとめた。

檜林は煎茶書の研究を踏まえて独自の理論を展開している。代表作として、論文「近世煎茶道の成立について」⁷、「反「茶の湯」の旗手たち」⁸、著書『煎茶の世界』などがある。檜林は江戸時代の煎茶家には強い個性があり、高踏的・反骨的な性格を備え、自由を求める一群の文人であったと指摘している。そして、江戸時代の煎茶家を前期文人と後期文人に分けている。前期文人は売茶翁・大枝流芳を代表とするが、彼らは市隠的な性格が強く、主に個人的な姿勢として現れる「批判的な精神の持ち主」⁹であった。一方、後期文人は田能村竹田、頼山陽などを代表とし、反俗反権威主義を標榜する「反「茶の湯」で立ち上がった戦士」¹⁰であった。前期文人は個人主義者が多く、市隠的な行動が多いのに対して、後期文人は社会的な現象として捉えられているのである。

また、檜林の研究は煎茶書の史料価値を重視している。檜林は『梅山種茶譜略』、『青湾茶話』、『清風瑣言』、『煎茶早指南』、『煎茶訣』¹¹、『喫茶辨』、『青湾茶会図録』、『烹茶樵書』、『煎茶式』、『煎茶小述』など、数多くの煎茶書を翻刻して、注釈を付けるなど、昭和以降の煎茶書の研究に大きな貢献を果たした。

檜林の研究においては、とくに上田秋成の煎茶書『清風瑣言』を重視している。檜林の煎茶史論の中では、本書の存在感が特に強烈である。「近世煎茶道の成立

⁷ 檜林忠男、「近世煎茶道の成立について」、藝能史研究、31号、藝能史研究会、1970。

⁸ 檜林忠男、「反「茶の湯」の旗手たち」、『茶道聚錦5 茶の湯の展開』、1985、pp. 248～256。

⁹ 檜林忠男、「近世煎茶道の成立について」、p. 14。

¹⁰ 檜林忠男、「反「茶の湯」の旗手たち」、p. 248。

¹¹ 深田精一の『木石居煎茶訣』の略称。

について」において次のように述べている¹²。

これら前期文人群と後期文人群の中間にあって、それまでの煎茶の集大成をはかり、またそれ以降の爆発的な煎茶流行のきっかけを作った人物が、国学者の上田秋成である。かれはまた、文人としての精神的、思想的影響力においてもおおきなものがあり、かつ煎茶書『清風瑣言』の登場は、最終的に文人と煎茶というものを強力に結びつける結果になったといえる。その意味で、この『清風瑣言』は煎茶史上貴重なものであろう。

実際、『清風瑣言』は、檜林の「煎茶＝茶の湯批判論」を支えた最も重要な作品である。檜林はまた「茶の湯」の世界に対する批判は、江戸時代の後期ごろから、かなりストレートな形で現れてようになってきている¹³と述べている。ここで指摘された「ストレートな形」とは、江戸後期¹⁴における一連の煎茶家の活躍および盛んな煎茶書刊行の現象を指している。『清風瑣言』以降、『茶痕酔言』、『煎茶早指南』、『木石居煎茶訣』など煎茶書が続出し、小川可進の『喫茶辨』に至るまで、煎茶書の刊行は江戸後期の煎茶ブーム、あるいは幕末期の煎茶道の成立に緊密に繋がっている、と檜林は指摘している¹⁵。

以上の檜林の理論は日本茶文化史の研究に大きな影響を与えた。特に近世の茶の湯の研究者を大いに刺激した。従来の茶道研究者は檜林の研究によって、再び煎茶書をはじめとする煎茶文化に高い関心を示し始めた。例えば、熊倉功夫は『近代茶道史の研究』の「近世後期の茶道批判」の節において檜林忠男の説を踏まえ、「煎茶の書は、常に茶道にたいする非難を旗印に掲げたのである。上田秋成の『清風瑣言』もまたしかりである。……茶人秋成の名をたからしめたこの

¹² 檜林忠男、「近世煎茶道の成立について」、藝能史研究、31号、藝能史研究会、1970、p. 15。

¹³ 檜林忠男、『煎茶の世界』、「茶之湯批判としての煎茶」、徳間書店、1971、p. 75。

¹⁴ 「江戸後期」は特に化政期から幕末までの時期を指す。檜林は江戸時代の文人群を前期文人と後期文人のように二分している。前期文人の時代は、享保から安永天明まで高遊外と大枝流芳などが活躍した時期を指す。後期文人の時代は、化政期から幕末にかけて田能村竹田や頼山陽などが活躍した時期を指す。檜林忠男、「近世煎茶道の成立について」、藝能史研究、31号、藝能史研究会、1970、p. 19。

¹⁵ 檜林忠男、「近世煎茶道の成立について」、藝能史研究、31号、藝能史研究会、1970、p. 15～28。

著もまた、茶道批判の立場に立つものであった」¹⁶と述べ、近世の後期に現れた煎茶書が常に茶道批判のために作り出されたと認識している。また、筒井絃一は『茶書の系譜』の「茶道批判の書」において「江戸中期以降、特に盛んになってきた町人を中心にした茶道界の状況を批判する方向が続いていた。その一つは新しく興った煎茶を楽しむ文人による抹茶批判であり……『清風瑣言』は煎茶の普及をはかるために、道具趣味に陥っている抹茶道をするどく批判し、水品などによる煎茶の地位を正当に述べることによって、『梅山種茶譜略』や『青湾茶話』以来唱えつづけてきた煎茶の地位を決定的なものにしたのであった」¹⁷と解説し、『清風瑣言』をはじめとする煎茶書は、茶道批判の書物であったと認識している。

檜林の見解は現在に至っても日本の茶文化史の研究に大きな影響を与え続けている。しかし、檜林の理論によって、「煎茶」、「煎茶家」、「煎茶道」、「煎茶書」は常に「茶の湯」、「茶人」、「茶道」、「茶書」の対義語として使用されるようになってしまった。つまり、さきに茶の湯がなければ、煎茶の成立はなく、煎茶は茶の湯を批判するために存在するものだ、という誤解を招きやすくしてしまったのである。

では、なぜそれが問題であるかという点、煎茶書の史料が偏り、全体像がまだはっきりしていなかったところにあるのではないかと考えている。確かに、上田秋成の『清風瑣言』のような著名な煎茶書は、深く検討すべき作品で、茶道批判の書物の代表例ではあったが、すべての煎茶書の性格を正しく反映した作品とは言えず、個別の代表作だけで、煎茶書の全体像を見抜くのは難しい。檜林の研究は、煎茶書を踏まえた煎茶史の構築を検討していたのだが、常に上田秋成の『清風瑣言』を中心としていた。そのため、おのずと「煎茶書＝茶道批判書」という結論が導きだされたのである。

それによって、従来の煎茶書の研究において、常に上田秋成一人に視点が集中しすぎるといった問題点が生じ、それが当時の研究潮流となった。管見の限り、「茶

¹⁶ 熊倉功夫、『近代茶道史の研究』、日本放送出版協会、1978、P. 62。

¹⁷ 筒井絃一、『茶書の系譜』、文一総合出版、1978、p. 279。

人秋成」¹⁸、「上田秋成と煎茶」¹⁹、「秋成と煎茶」²⁰、「秋成の茶匣」²¹、「茶人としての秋成」²²、「煎茶家秋成」²³、「秋成の晩年と煎茶」²⁴など、数多くの秋成の煎茶研究が出された一方、他の煎茶書への関心は薄かったように見える。このような現象が現れた理由は、煎茶書史料不足の問題に繋がっている。

第四節.煎茶書史料不足の問題と研究現状について

檜林忠男の先行研究に対して、矢部誠一郎が論文「煎茶道史研究」を著した。矢部は当該論文において、煎茶書の基礎的研究の不足という問題を取り上げ、次のように批判している²⁵。

煎茶道の研究の遅れはどこにその原因があるのだろうか。

その第一に挙げ得るのが史料の不足であろう。現在までに発表された煎茶関係の研究を見ると、一様に同一の史料によって書かれているのである。そして、それらの史料の多くが刊本、あるいは木版本になっており、我々が容易に触目し得るものである。すなわち「上田秋成全集」、「田能村竹田全集」は共に集大成され国書刊行会から発行されているし、高遊外関係の数少ない文献もすでに発掘されたものは福丸堯庵編纂の「売茶翁」に収められており、我々に便宜を与えてくれる。……

こうした極めて限られた史料をもとにして成った研究が、いずれもそ

¹⁸ 大森痴雪、「茶人秋成」、『郷土研究 上方』上田秋成号、1931、pp. 729～731

¹⁹ 藤井乙男、「上田秋成と煎茶」、『史話俳談』、晃文社、1943、pp. 53～65。

²⁰ 小川後楽、「秋成と煎茶」、『京都市歴史資料博物館紀要 開館10周年記念論集』10号、1992、pp. 459～478。

²¹ 森繁夫、「秋成の茶匣」、原田伴彦編、『浪花のにぎわい』町人文化百科論集第五巻、柏書房、1981、pp. 158～161。

²² 森山重雄、「茶人としての秋成」、『日本文学』64号、日本文学協会、1993、pp. 49～64。

²³ 浅野三平、「煎茶家秋成」、『近世文学続攷』、株式会社おうふう、2005、pp. 91～94。

²⁴ 浅野三平、「上田秋成の晩年と煎茶」、『近世文学続攷』、株式会社おうふう、2005、pp. 95～121。

²⁵ 矢部誠一郎、「煎茶道史研究」、『日本茶の湯文化史の新研究』、雄山閣、2005、pp. 22～23。

の内容が大同小異となっているのは否めない。そこに、旧来の史料が新しい見解が導きされているならば、幾分かはその意義もあろうが、現段階においては、研究者が一刻も早く論文を発表することに急であって、その論理的展開の浅さを覆うべくもない。

そこで、新資料の検索と史料検討が我々の目前の急務であろう。

矢部誠一郎の指摘にあるように、煎茶書の研究は、煎茶史の研究においてどうしても避けられない重要な部分である。いままで煎茶史の研究は、既存の史料と解説を繰り返し利用し、新鮮さが足りなかった。煎茶関係史料が限られているため、研究者の視野を狭め、新知見の誕生を妨げていたのである。煎茶史を総体として認識するためには、より多くの煎茶書を集め、その全体像を把握することが重要である。それによって、新史料の発見と既存史料の再認識によって煎茶書研究を深めることができる。その研究は煎茶史の研究にとって有意義であり、日本茶文化史の研究にも繋がる広い視野を持ったものといえる。

続いて、日本における煎茶書研究の現状について、各研究者によって行われた研究の特色を紹介する。いままでの研究傾向、またその整理がどこまで進んでいたのかを年代順に整理して説明したい。序論の第二節では、すでに煎茶書の先行研究調査について論じ、かつその関連資料を提示したが、この節では、もう一度その中にある代表的な研究者を取り上げ、彼らの研究成果を検討し、その成果および不足点をまとめる。

最初に煎茶書を正式的な研究対象として整理を始めた研究者は長谷川瀟々居である。彼は著書『煎茶志』(1965)²⁶で煎茶書の目録を作成し、それぞれの作品に解説を付けた。彼が整理した煎茶書目録は、中国の茶書の目録の後ろに付されている。また、長谷川は中国茶書の和刻本を重視し、煎茶書と中国茶書の緊密な関連性を強調している。しかし、長谷川の解説は作者の紹介と内容の概説に止まり、各書に対する解説はやや簡潔であるため、煎茶書の実態を知るのは困難で

²⁶ 長谷川瀟々居、『煎茶志』、平凡社、1965。

ある。

最初に多数の煎茶書の翻刻に着手した研究者は檜林忠男である。檜林は著書『日本の茶書 2』(1972)²⁷と『日本庶民文化資料集成』第十巻(1976)²⁸において、代表的な煎茶書 10 点を精選し、それぞれの茶書に解題を付けて翻刻を行った。『日本の茶書 2』に翻刻された『梅山種茶譜略』、『青湾茶話』、『清風瑣言』、『煎茶早指南』、『(木石居)煎茶訣』、『喫茶弁』にそれぞれ注釈がついており、煎茶の全貌を知るにはとても便利な参考資料となっている。檜林の翻刻は煎茶書の研究を強力に推進したが、残念ながらそれ以降、煎茶書の翻刻と研究を継続しなかった。そのため、煎茶書にとって最も基礎的な研究がなかなか進まず、限られた史料をもとに研究が行われ、さきに述べた問題点が生じた。そのため、既存史料の翻刻の再開と新史料の発掘が喫緊の課題となった。

森本信光は『続煎茶全書』(1976)²⁹において 23 冊の煎茶書について解説を行っている。煎茶書への解説は長谷川瀟々居の解説と大同小異であり、作者の紹介や内容の概説が中心となり、かなり簡潔な解説であるため、煎茶書の全貌を正確に把握するには困難である。また、目録を作成する際に、中国茶書の和刻本を除外して日本の著作に限定するという傾向が見える。

筒井紘一の著書『茶書の系譜』(1978)³⁰に「煎茶道の書」という論文が収録されている。本文中にある「煎茶一覧表」は、末尾に載せた「茶書総覧」の一部となり、茶の湯関係書と煎茶書を同時に調べることができるため、煎茶書を含めて日本の茶書刊行の全体像を知るために参考価値の高い研究である。さらに、筒井の研究では、それぞれの茶書の所蔵館を提示している。これは、以前の煎茶書研究にない情報である。実際、煎茶書の中には孤本や現存数の少ない版本が多いため、所蔵館の情報提示をすることは研究の一助になる。しかし、筒井の研究は、煎茶書の題名しか提示されていないため、煎茶書の中身については触れていな

²⁷ 林屋辰三郎・横井清・檜林忠男編注、『日本の茶書 2』、平凡社、1972。

²⁸ 藝能史研究会編、『日本庶民文化史料集成』第十巻数寄、三一書房、1976。

²⁹ 主婦の友社編、『続煎茶全書』、主婦の友社、1976。

³⁰ 筒井紘一、『茶書の系譜』、文一総合出版、1978。

いという欠点もある。さらに、『茶書の系譜』の続作として『茶書の研究』(2003)³¹が刊行されたが、煎茶書研究についていうならば、新しい見解と発見はとくになかった。

佃一祐は『現代煎茶道事典』(1981)³²において論文「煎茶の書物」を発表した。その中に「おもな煎茶の書物」の章があり、江戸時代から大正時代にかけての代表的な煎茶書を取り上げている。今までの煎茶書目録の中でも最も多い資料名を提示しており、参考価値の高い研究である。しかし、『現代煎茶道事典』は『続煎茶全書』と同じく、煎茶全般の基礎知識を紹介する目的で編成された一般人向けの作品で、従来の問題は依然として残っている。つまり、煎茶書への解説があまりにも簡潔すぎて、煎茶書の特徴と性格を調べるには十分ではなかった。

麓和善は最初に茶室研究の視点から煎茶の書物に着目した人物である。麓は論文「煎茶空間—その文献史的特質」(2000)³³において、江戸後期の煎茶の文献史料は一般論として煎茶全般を扱った「茶書」として、一方、明治期以降のそれは煎茶会の様子を挿絵で示した「茶会記」として、二つに分類して定義している。後者はまた「煎茶会図録」あるいは「茗讌図録」とも呼ばれている。この研究の中で提示された「煎茶史料成立年表」と「主要煎茶書編年模試図」³⁴は、江戸後期から大正・昭和期までの煎茶書の系譜関係を提示しており、煎茶書の研究にとって大きな進歩と評価すべきである。麓の研究の中心は建築学であるため、彼の関心と注目点は明治以降の煎茶会図録に描かれた茶室と茶席にある。したがって、煎茶会図録の研究において大きな進展を遂げたといえる。

さらに、近年の「煎茶会図録の書誌的考察—煎茶会図録による煎茶席の空間特性に関する研究 その1—」(2019)³⁵と「煎茶会図録にみる煎茶会の会場—煎

³¹ 筒井絃一、『茶書の研究：風流の成立と展開』、淡交社、2003。

³² 佃一祐、「煎茶の書物」、主婦の友社編、『煎茶全書』、主婦の友社、1973、pp. 479～496。

³³ 麓和善、「煎茶空間—その文献史的特質」、『茶室・露地』茶道学大系六、淡交社、2000、pp. 206～254。

³⁴ 同前、「煎茶史料成立年表」、pp. 208～209。「主要煎茶書編年模試図」、pp. 222～223。

³⁵ 麓和善・櫃本聡子・濱田晋一、「煎茶会図録の書誌的考察—煎茶会図録による煎茶席の空間特性に関

茶会図録による煎茶席の空間特性に関する研究 その 2-」(2019)³⁶など多くの成果が取り上げられる。しかし、麓の煎茶書の研究においては、史料への検討が足りていないようである。例えば、本研究で検討された煎茶書『梅山種茶譜略』、『清風瑣言』などについては、従来の研究と大同小異である。ほかの江戸後期の煎茶書への見解も長谷川の『煎茶志』の内容を参考としたもので、従来の研究を深めたとはいえない。

守屋雅史の研究によって長時間進展がなかった煎茶書の基礎的研究に新しい情報が提示された。守屋の論文「大阪市立美術館所蔵『谷村為海煎茶関連資料』の煎茶書について」(2015)³⁷では、既存の煎茶書史料に基づき、具体的な書誌調査を行い、詳細な書誌情報を整理している。この研究によって、いままで曖昧であった煎茶書史料の姿がようやく見えるようになり、特に一部入手困難な貴重書の様子が窺えるのは重要である。これはそれ以前の煎茶書研究に不足していた部分である。守屋の研究は新しい研究方法を提示しており、足踏み状態にあった煎茶書研究に突破口をみせた。しかし、おそらく論文の文量の制限のため、守屋の研究は日本で翻刻された中国茶書などについての紹介は十分ではない。中国茶書の和刻本への検討が見えない。江戸時代に煎茶家の中に浸透した煎茶は、いうまでもなく中国茶を継承したものであったことは、すでに長谷川の研究において明らかである。したがって、日本の煎茶書研究の端緒は中国の茶書の研究を除外してはならない。中国茶書の和刻本の研究を取り入れることは、江戸時代の煎茶書の全貌を知るために必要である。

第五節.本研究で考察対象とする煎茶書

する研究 その 1-」、『日本建築学会計画系論文集』、84 巻 755 号、日本建築学会編、pp. 209～219、2019。

³⁶ 櫃本聡子・濱田晋一・麓和善、「煎茶会図録にみる煎茶会の会場—煎茶会図録による煎茶席の空間特性に関する研究 その 2-」、『日本建築学会計画系論文集』、84 巻 763 号、日本建築学会編、pp. 1987～1992、2019。

³⁷ 守屋雅史、資料紹介「大阪市立美術館所蔵『谷村為海煎茶関連資料』の煎茶書について」、『大阪市立美術館紀要』、大阪市立美術館編、2015、pp. 3～42。

第四節では、煎茶書の基礎的研究の不足という問題を取り上げた。また、代表的な研究者の先行研究の特色と不足点について説明をした。本節では、先行研究を踏まえて筆者が現時点で考察した合計 51 点の煎茶書資料を整理し、末尾に煎茶書一覧表としてまとめて提示する。本研究はこの煎茶書一覧表の中で取り上げた 51 点の煎茶書を考察対象とする。以下、この煎茶書一覧表の編集方針を示す。

煎茶書一覧表を作成するにあたって下記のような手順を踏んだ。

- ① 先行研究が取り上げた煎茶書の把握。
- ② ①で把握した煎茶書の所蔵元の調査。
- ③ ②に基づいて調査した煎茶書の情報収集。
- ④ ③で収集した情報をもとに煎茶書に該当するかどうかの判断。
- ⑤ 該当書物をリスト化。

①については特に、佃一祐の「煎茶の書物」³⁸が、先行研究の中で最も多くの煎茶書の書名を提示しているため、拠るところが多い。現存の煎茶書版本の情報を調べるにあたっては、守屋雅史の「谷村為海煎茶関連資料リスト」³⁹を多く利用している。また、日本における中国茶書の翻刻状況については、長谷川瀟々居の「茶書目録」⁴⁰を利用した。煎茶書と茶道書の両方が掲載されている年表については、筒井紘一の「茶書総覧」⁴¹を利用している。ほかには、煎茶書と煎茶会図録の両方が掲載されている年表を調べるにあたっては、麓和善の「煎茶資料成立年表」⁴²を利用した。

³⁸ 佃一祐、「煎茶の書物」、主婦の友社編、『煎茶全書』、主婦の友社、1973、pp. 479～496。

³⁹ 守屋雅史、資料紹介「大阪市立美術館所蔵『谷村為海煎茶関連資料』の煎茶書について」、『大阪市立美術館紀要』、大阪市立美術館編、2015、pp. 3～42。

⁴⁰ 長谷川瀟々居の「茶書目録」、長谷川瀟々居、『煎茶志』、平凡社、1965、pp. 284～320。

⁴¹ 筒井紘一の「茶書総覧」、『茶書の研究：風流の成立と展開』、淡交社、2003、pp. 453～517

⁴² 麓和善の「煎茶資料成立年表」、「煎茶空間—その文献史的特質」、『茶室・露地』茶道学大系六、淡交社、2000、pp. 208～209。

本研究の煎茶書一覧表の採録基準⁴³は下記の通りである。また、本研究は近世煎茶書の考察が主であるため、原則として江戸時代の書物に限って考察を行い、幕末までの書物を採録する。

- ① 煎茶の歴史・製法・貯蔵・煎法・用水・茶具など、喫茶全般を扱った作品（例、『青湾茶話』、『清風瑣言』）。
- ② 日本で翻刻された中国茶書（例、『茶経』、『茶董』）。
- ③ 中国茶書の日本語の注釈書（例、『茶録・新刻茶具図賛』、『茶経詳説』、『茶器図解』）。
- ④ 煎茶を中心に扱った文芸作品（偈集、詩集など）（例、『売茶翁偈語』、『詠茶詩録』）。
- ⑤ 煎茶器や煎茶会を中心に扱った図録（例、『売茶翁茶器図』、『青湾茶会図録』）。

一方、一部の書物は従来の研究の中で煎茶書として取り上げられていたが、本研究では取り入れていない場合もある。原則として以下の内容の書物は採録しない。

- ① 茶の湯を主に扱った書物。
- ② 茶業栽培を主に扱った書物。
- ③ 煎茶を中心に扱っていない図録（例、福原揺船の『酔醒雅玩初編』⁴⁴）。
- ④ 茶に関する記述があっても、日用類書や料理書は採録しない。（例、中村惕斎の『訓蒙図彙』⁴⁵）。

さらに、先行研究の煎茶書一覧表に載っていても、論者が必ずその内容を確認した上で、判断を行う。（例えば、佃一祐の先行研究で取り上げられた曾漸の『茶経煮茶法解』と田中鶴翁の『清風流烹茶諸式詳解』⁴⁶は確認できていないため一覧表に取り入れていない。）それ以外に、一部の作品は先行研究で茶道書として

⁴³ 採録基準作成にあたっては、佃一祐の「煎茶の書物」の凡例を参考にしたところが多い。佃一祐の凡例は煎茶書の取捨基準を14項目に分けて明確にした。先行研究の中に最も詳細である。「煎茶の書物」、主婦の友社編、『煎茶全書』、主婦の友社、1973、pp. 488。

⁴⁴ 『酔醒雅玩初編』は、筒井絃一の「煎茶書一覧」に煎茶書として取り上げられている。『茶書の研究：風流の成立と展開』、淡交社、2003、p. 363。

⁴⁵ 中村惕斎の『訓蒙図彙』は、「戯作から読む江戸後期の喫茶文化大疑問「急須はいつからあったのか？」という一般人向けの資料に煎茶書として取り上げられている。<https://www.global-center.jp/media/20191223-093017-194.pdf>。

⁴⁶ 『茶経煮茶法解』と『清風流烹茶諸式詳解』は、佃一祐の「煎茶の書物」に煎茶書として取り上げられている。主婦の友社編、『煎茶全書』、主婦の友社、1973、p. 490、p. 494。

認識されているが、煎茶書として分類することも可能かもしれないので、筆者がさらに検討を要するものは、今回の一覧表に取り入れていない。(例えば、大関増業の『喫茗新語』⁴⁷と岡部春平の『茶記贅言』と一雨庵の『茶功適』⁴⁸はそれである。)

一方、今回の調査で先行研究では煎茶として取り上げられてこなかった書物6点については煎茶書と判断した。そのうち江戸時代の書物は5点あり、『煎茶斧』、『啓沃堂随筆』、『仙境逸楽』、『魁々園茶集』、『続茶経』である。残り1点の『松窓茶録』は明治期に刊行されたものであるが、『煎茶斧』と『啓沃堂随筆』と深く関わっているため、あえて取り上げる。ただし、『松窓茶録』は明治期の書物であるため、一覧表には入れていない。次に6点についてそれぞれの煎茶書の内容について示す。

資料番号 19 『煎茶斧』（西尾市岩瀬文庫蔵、請求番号 67-82）

1冊 文化三年（1806） 菜窠老人

菜窠老人の煎茶書である。総論、茶燕式・茶品・蔵茶・水論・論炭などについて論じた作品である。富田景周の叙、海保青陵の序と菜窠老人の自序がある。著者菜窠老人は津田養のこと⁴⁹。ほかに『啓沃堂随筆』・『松窓茶録』の著などがある。菜窠老人の自序によれば、子供の頃浪華で遊んだ時、お茶の奇書を手に入れたため、それに基づき、かつ浪華の隠士の玉堂老人から学んだ煎茶法を取り入れて本書を作った。題名の『煎茶斧』は、螻蛄が斧を持って隆車（立派な車）に向かうという意味に由来し、本書を螻蛄の斧と喩え、数寄者を隆車とする比喩を用

⁴⁷ 大関増業の『喫茗新語』は、筒井絃一の「煎茶書一覧」に煎茶書として取り上げられた。『茶書の研究：風流の成立と展開』、淡交社、2003、p. 363。

⁴⁸ 岡部春平の『茶記贅言』と一雨庵の『茶功適』は、「戯作から読む江戸後期の喫茶文化大疑問「急須はいつからあったのか？」」という一般人向けの資料に煎茶書として取り上げられている。
<https://www.global-center.jp/media/20191223-093017-194.pdf>。

⁴⁹ 西尾市岩瀬文庫が提供した書誌情報による。「著者名は富田景周序に豹茶隠、海保青陵序に豹阿弥先生ともあり、金沢の医者で俳人の津田養（文化10年没、72歳）」とある。

いている⁵⁰。

資料番号 22 『啓沃堂随筆』（国立国会図書館蔵 請求番号 834-5）

1冊 文化5年（1808） 菜窠老人
菜窠老人津田養の煎茶書である。煎茶大意・茶合・茶乖・茶燕・茶品などについて論じている。友人の息齋散人阮蓑と姪の貝乙道人田局が校正し、また友人の乾泉主人寺弘が附録の茶器図を寄せた。本編は喫茶法と茶器の紹介が中心で、『煎茶斧』の多くの内容と共通している。また、本書は明治22年（1889）に、侗齋田直の刪正、夢梅碕精の増補によって『松窓茶録』と改題された。本書の最後の附録に描かれた茶器図は、宋代の画家劉松年の『茶燕図』にある茶器、兼葭堂所蔵の茶器、または私蔵の茶器に基づいて作成されたものである。ほかには、売茶翁の茶器を多く模写している。

資料番号 40 『仙境逸楽』（西尾市岩瀬文庫蔵 請求番号 120-120）

1冊 嘉永6年（1853） 蓬仙仙史

蓬仙仙史の煎茶会記である。本書は「煎茶清規」・「仙境逸楽」・「蓬仙愛玩珍器」の三部で構成されている。男秦運の序、橘陰居士幕末の煎茶会の会席の様子を窺える資料である。著者蓬仙仙史は、川勝広運のこと。彼は江戸幕末の権臣で、若年寄で、丹波守であった⁵¹。蓬仙窩主人と号し、煎茶をよくした人物である。ほかに『蓬仙茶話 茶器編』の著書がある。本書の「仙境逸楽」によれば、蓬仙仙史は売茶東牛と合同で煎茶会を開催していたことがある。

資料番号 41 『魁々園茶集』（西尾市岩瀬文庫蔵 請求番号 75-109）

7冊 嘉永6年（1853） 売茶東牛

⁵⁰ 『煎茶斧』菜窠老人の自序に「題に煎茶斧と命く。是螻螂の斧もて数寄者の隆車りゅうしやに向ふの微意なり」とある。

⁵¹ 「蓬仙茶話 茶器編」の注による。主婦の友社編、『茶の湯案内シリーズ13 煎茶の用語集』、主婦の友社、1988年、p. 225。

売茶東牛の自筆稿本である。著者売茶東牛は江戸後末期の煎茶家で、僧名は三亥坊来観、梅樹軒、魁々園と号す⁵²。著書に『煎茶綺言』、『煎茶要格』などがある。1冊目～3冊目は中国茶書の抄録である。1冊目の題箋には「煎茶綺言六 魁々園茶集卷之二」とある。品茶要録（黄儒）・本朝茶法（沈括）・煎茶水記（張又新）・大明水記（欧陽修、題名のみ）・浮槎山水記（欧陽修）・十六湯品（蘇廙）・煮茶小品（葉清臣）・採茶録（温庭筠）・闘茶記（唐子西）の抄録である。2冊目の題箋には「煎茶綺言七 魁々園茶集卷之三」とある。水品（徐猷忠）・煮泉小品（田芸蘅）・茶譜・煎茶四要・点茶三要（顧元慶、題名のみ）・茶録（馮時可）・茶箋（聞龍）・茶解（羅廩）の抄録である。3冊目の題箋には「煎茶綺言八 魁々園茶集卷之四」とある。内容は茶疏（許次紆）・羅芥茶記（熊明遇）・芥茶箋（馮可賓）・茶寮記（陸樹声）・煎茶七類（徐渭）・焚香七要（臞仙）の抄録である。4冊目～7冊目は、茶論書の抄録や漢詩集や和歌集などの抄録である。全体的に見ると、本書は売茶東牛の茶事関係の雑纂である。

資料番号 42 『続茶経』（西尾市岩瀬文庫蔵 請求番号 99-77）

3冊 嘉永7年 売茶東牛

売茶東牛の自筆稿本である。本書は中国清代の茶書『続茶経』の写本である。1冊目の題箋には「続茶経 上」とあり、内題には「魁々園茶集卷之一」とある。内容は続茶経凡例・原本茶経序・一之源・二之具・三之造の抄録である。2冊目の題箋には「続茶経 中」とあり、内題には「魁々園茶集卷之二」とある。内容は四之器・五之煮・六之飲の抄録である。3冊目の題箋には「続茶経 下」とあり、内題には「魁々園茶集卷之三」とある。内容は七之事・八之出の抄録である。

（補足）『松窓茶録』（国立国会図書館蔵 請求番号 829-14）

1冊 明治22年（1889）菜窩田養 貝乙田局同著

侗齋田直~~刪~~正 夢梅碯精増補

⁵² 谷村為海の研究「東牛売茶翁」による。「東牛売茶翁」、『現代煎茶道事典』、主婦の友社、1981、pp. 824。

菜窠老人津田養の煎茶書である。呉休代の叙と夢霖精の跋がある。茶之源流、煎茶大意・茶適・茶乖などについて論じた。『啓沃堂隨筆』の一部を添削して抄録したものである。

以上、6点の新発見資料の内容を紹介した。今回は主に菜窠老人と売茶東牛を手がかりとして、二人の作品の調査を通して西尾市岩瀬文庫にたどり着き、新しい煎茶書を見つけることができた。また、西尾市岩瀬文庫には多くの煎茶書資料が所蔵されており、今後注目すべきだと考えている。

以下、今回の研究で考察した主な煎茶書資料の情報について、次の「本研究の考察対象となる煎茶書の一覧表」で示す。

本研究の考察対象となる煎茶書の一覧表

資料番号 ⁵³	書名	調査の方法	主として調査対象とした資料と所蔵元（古典籍データベースを含む）	請求番号	備考	主として調査対象とした資料の他に参考にした本
1	『茶経』	影印資料閲覧	国立公文書館内閣文庫	306-0620	布目潮瀧『中国茶書全集下』を参照 ⁵⁴ 。	早稲田大学図書館蔵本一（請求番号：マ 09 03874） 早稲田大学図書館蔵本二（請求番号：マ 09 04033） 論者架蔵本
2	『茶録・新刻茶具図贊』	WEB 公開画像閲覧	国立国会図書館 デジタルコレクション	858-21	『茶録・新刻茶具図贊』は『古今茶湯諸抄大成』の附録として刊行された。	国文学研究資料館蔵本（『古今茶湯諸抄大成』、請求番号：49-87-1-12）
3	『和漢茶誌』	WEB 公開画像閲覧	早稲田大学図書館 古典籍総合データベース	マ 09 03862		
4	『青湾茶話』 （『煎茶仕用集』）	WEB 公開画像閲覧	国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベース	225-201-5	コレクション「カリフォルニア大学バークレー校東亜図書館 マイクロ収集 4-25-187」。	内閣文庫蔵本一（国立公文書館公開資料、請求番号：199-0334） 内閣文庫蔵本二（国立公文書館公開資料、請求番号：199-0335） 論者架蔵本
5	『茶董』	WEB 公開画像閲覧	国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベース	204-239-5 R446	コレクション「静岡県立中央図書館 葵文庫 K992-15」。	国立国会図書館蔵本（請求番号：特 1-680、写本）
6	『売茶翁偈語』	WEB 公開画像閲覧	国立公文書館内閣文庫 デジタルアーカイブ	193-0492		国立国会図書館蔵本（請求番号：16-266） 論者架蔵本
7	『煎茶訣』	複写資料閲覧	関西大学図書館	L23**C*6838		国立国会図書館蔵本（請求番号：65-228）
8	『茶経詳説』	WEB 公開画像閲覧	国立公文書館内閣文庫 デジタルアーカイブ	199-0306		論者架蔵本
9	『茶器図解』	WEB 公開画像閲覧	国立国会図書館 デジタルコレクション	830-90		
10	『考茶録』	複写資料閲覧	九州大学附属図書館	010112015746988		
11	『清風瑣言』	WEB 公開画像閲覧	国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベース	ヤ 8-315	国文学研究資料館で原本確認済。	早稲田大学図書館蔵本（請求番号：マ 09 04053）
12	『煎茶略説』	WEB 公開画像閲覧	国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベース	DIG-TOKY-166	コレクション「東京大学総合図書館 一般 隣 YB20:86」。	新日本古典籍総合データベース（請求番号：DIG-TOKY-1048）
13	『自辨茶略』 （『煎茶早指南』）	WEB 公開画像閲覧	早稲田大学図書館 古典籍総合データベース	マ 09 00439		論者架蔵本
14	『茶史』 （『介翁茶史』劉源長）	WEB 公開画像閲覧	早稲田大学図書館 古典籍総合データベース	マ 09 03696		
15	『烹茶樵書』	WEB 公開画像閲覧	国立国会図書館 デジタルコレクション	特 1-2601		
16	『茶集』	WEB 公開画像閲覧	早稲田大学図書館 古典籍総合データベース	マ 09 03697		早稲田大学図書館蔵本二（請求番号：マ 09 00801）
17	『煎茶式』	複写資料閲覧	東京都立中央図書館加賀文庫	加 6318		
18	『枕山楼茶略』	複写資料閲覧	静嘉堂文庫 西尾市岩瀬文庫 古典籍書誌データベース	46 函 57 架	静嘉堂文庫で原本確認済。 早稲田大学図書館で原本確認済。	早稲田大学図書館蔵本（請求番号：ナ 03 00523） 北京師範大学李小龍教授御架蔵本
19	『煎茶芥』	複写資料閲覧	天理大学附属天理図書館	67-82		
20	『茶癡醉言』	影印資料閲覧	天理大学附属天理図書館	913・65-イ 27-19	『天理図書館善本叢書 秋成自筆本集』を参照。請求番号は『天理ギャラリー 第 35 回「秋成」展 天理図書館蔵 上田秋成関係資料目録』による ⁵⁵ 。	
21	『茶史』（真間人）	WEB 公開画像閲覧	国立国会図書館 デジタルコレクション	特 1-2759		国立国会図書館蔵本二（請求番号：839-200） 国立国会図書館蔵本三（請求番号：特 1-2784）
22	『啓沃堂隨筆』	WEB 公開画像閲覧	国立国会図書館 デジタルコレクション	834-5		

⁵³ 資料番号は、第二章の第一節から第六節までの節末に附した一覧表の資料番号と共通している。

⁵⁴ 布目潮瀧、『中国茶書全集』上巻、汲古書院、1986年、p. 68。

⁵⁵ 天理図書館善本叢書『秋成自筆本集』、八木書店、1965。天理図書館編、『天理ギャラリー 第 35 回「秋成」展 天理図書館蔵 上田秋成関係資料目録』、天理ギャラリー、1963。

23	『四詠唱和』	WEB 公開画像閲覧	国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベース	87-136	国文学研究資料館で原本 確認済。	新日本古典籍総合データベース (請求番号: DIG-TKGL-11372)
24	『淹茶式』	影印資料閲覧	—	—	守屋雅史教授の撮影データによる。	
25	『壳茶翁茶器図』	WEB 公開画像閲覧	早稲田大学図書館 古典籍総合データベース	ヲ 09 03769		論者架蔵本
26	『良山堂茶話』二 巻	複写資料閲覧	九州大学附属図書館	雅俗文庫/52 随 筆 b/リヨ-1 雅俗文庫/52 随 筆 b/リヨ-2		論者架蔵本
27	『石山齋茶具図 譜』	複写資料閲覧	筑波大学中央図書館	ス 420-6		
28	『竹田荘茶説』	複写資料閲覧	筑波大学中央図書館	ス 420-17		
29	『竹田荘泡茶訣』	複写資料閲覧	筑波大学中央図書館	ス 420-21		
30	『泡茶新書三種』	複写資料閲覧	国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベース	325-23-1-C R640	コレクション「石川県立図 書館。李花亭文庫 731-23 ~25」。	
31	『煎茶小述』	WEB 公開画像閲覧	国立国会図書館 デジタルコレクション	特 1-2747	山本嘉孝准教授御架蔵本 原本確認済。	山本嘉孝准教授御架蔵本 論者架蔵本
32	『梅山種茶譜略』	WEB 公開画像閲覧	国立国会図書館 デジタルコレクション	特 1-329		
33	『煎茶小集』	複写資料閲覧	国文学研究資料館	〒 8:229	国文学研究資料館で原本 確認済。	新日本古典籍総合データベース (請求番号: DIG-TKGL-11010)
34	『詠茶詩録』	WEB 公開画像閲覧	国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベース	ナ 8-272-1~4	国文学研究資料館で原本 確認済。	
35	『酒茶問答』	WEB 公開画像閲覧	国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベース	DIG-AJNM-50	コレクション「味の素食の 文化センター 一般」。	
36	『新撰煎茶一覽』	WEB 公開画像閲覧	国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベース	DIG-AJNM-228	コレクション「味の素食の 文化センター 一般」。	早稲田大学図書館蔵本(請求番号: 文庫 31 0607)
37	『煎茶手引之種』	WEB 公開画像閲覧	早稲田大学図書館 古典籍総合データベース	イ 04 03159 C102		早稲田大学図書館蔵本(請求番号: ヲ 09 00050)
38	『木石居煎茶訣』 (『煎茶訣』)	WEB 公開画像閲覧	愛知県文化会館 貴重和本デジタルライブラリー 立命館大学 ARC 古典籍ポータルデータベー ス	W ラ/791/フ 2		国立国会図書館(請求番号: 特 1- 1887) 国立公文書館内閣文庫(請求番号: 199-0329)
39	『清風煎茶要覽』	WEB 公開画像閲覧	西尾市岩瀬文庫古典籍書誌デー タベース	arcBK03-0095		
40	『仙境逸楽』	複写資料閲覧	西尾市岩瀬文庫 古典籍書誌データベース	120-120		
41	『魁々園茶集』	複写資料閲覧	西尾市岩瀬文庫 古典籍書誌データベース	75-109		
42	『続茶経』	複写資料閲覧	西尾市岩瀬文庫 古典籍書誌データベース	99-77		
43	『煎茶綺言』	WEB 公開画像閲覧	国立国会図書館 デジタルコレクション	特 1-2353		
44	『喫茶辨』 (『後楽堂喫茶 辨』)	複写資料閲覧	東北大学附属図書館 狩野文庫	17477-1		国立国会図書館蔵本(請求番号: 8-122)
45	『煎茶要格』	WEB 公開画像閲覧	早稲田大学図書館 古典籍総合データベース	イ 04 03159 C079		
46	『南宗茶具名牋』	複写資料閲覧	国立国会図書館	855-24	国立国会図書館で原本確 認済。	論者架蔵本
47	『青湾茶会図録』	WEB 公開画像閲覧	国立国会図書館 デジタルコレクション	839-138		論者架蔵本
48	『煎茶図式』	WEB 公開画像閲覧	国立国会図書館 デジタルコレクション	842-51		新日本古典籍総合データベース (請求番号: DIG-TOKY-1055)
49	『蓬仙茶話 茶 器編』	WEB 公開画像閲覧	国立国会図書館 デジタルコレクション	特 1-2927		
50	『淹茶小録』	複写資料閲覧	東京都立中央図書館加賀文庫 立命館大学 ARC 古典籍ポータルデータベー ス	加 6288		
51	『鈍荘茶譜』	WEB 公開画像閲覧	国立国会図書館 デジタルコレクション	arcBK05-0018		

第二章. 江戸時代における煎茶書の全体像

はじめに

本章は主に第一章第五節の節末の一覧表に提示した 51 点の煎茶書への考察を踏まえて、江戸時代の煎茶書の全体像を解明したい。それぞれの煎茶書の刊行時期、作者の出身地・職業・身分、刊写、書型、文体、挿絵、刊記、広告などの情報を一覧表に整理した上で比較を行い、多角的な観点から検討を行い、煎茶書の全体的な特徴を把握し、またその変遷の過程を検討したい。

第一節.刊行時期について

本節は節末の附録の一覧表①に基づいて煎茶書の刊行時期について検討したい¹。まず、江戸時代の区分について、筆者は書誌学研究における通常 of 歴史区分に従う²。江戸時代を初期、前期、中期、後期、末期に区分する。具体的には、慶長年間～寛永年間（1596～1643 まで）を初期、正保年間～元禄年間（1644～1703）を江戸前期、宝永年間～天明年間（1704～1788）を江戸中期、寛政年間から天保年間（1789～1843）を江戸後期、弘化年間から慶応を江戸末期（1844～1867）とする。

江戸時代の各時期における煎茶書の刊行時期について、以下のような特徴が見える。まず、江戸前期において、陸羽の代表的な作品、『茶経』の和刻本の初版が刊行され、煎茶書刊行の端緒が開かれた。和刻本『茶経』の出現は、日本における茶人が中国茶書への関心を高めた象徴的現象であり、煎茶書の出現の胎動期を示している。当然、この時期の煎茶書の数はいくつか少なく、まだ中国茶書が普及していこうとする時期であった。

¹ 本章で検討した煎茶書は、原則として第一章第五節の節末の一覧表に提示した資料に基づいて考察を行った。参考とした煎茶書の所蔵元の情報などについては、第一章第五節の節末の一覧表で提示しているので、各節の節末の一覧表の資料番号を参照のこと。

² 堀川貴司、『書誌学入門 古典籍を見る・知る・読む』、勉誠出版、2019、p. 9。

続いて、江戸中期に入ると、初期的な煎茶書が集中的に成されたのが特徴である。筆者の調査によれば、この時期に9点の煎茶書が現れ、『和漢茶誌』、『青湾茶話』、『茶経詳説』など有名な作品が著された。煎茶書の成立期といえる。最初は『茶録・新刻茶具図譜』が附録として『古今茶湯諸抄大成』に収録され、また茶人三谷良朴によって『和漢茶誌』が刊行された。『古今茶湯諸抄大成』と『和漢茶誌』はともに、中国の茶書を積極的に翻刻して、その内容を茶の湯関係の書物の取り入れるという傾向が見える。特に、『茶経』と『茶録』の内容を重視している。茶の湯関係者が中国茶書の価値を認識して積極的に茶書を受け入れる動きが出てきたことは明らかである。また、大枝流芳の『青湾茶話』の刊行によって、形式としてまとまった煎茶書が完成された。宝暦～安永の約20年間、『青湾茶話』を発端として7点の煎茶書が次々と登場し、初期的な煎茶書の集中刊行期を迎えた。この中には、『茶董』や『煎茶訣』のような中国茶書の和刻本や『茶経詳説』や『茶器図考』のような中国茶書の解説書があり、中国茶書に依りながら成立したことが特徴的であった。

その後、江戸後期になると、煎茶書の刊行は繁栄期を迎えた。この時期には、江戸中期の煎茶書の知恵を受け継ぎ、25点の煎茶書が次々と現れ、煎茶書の創作ブームを迎えた。具体的には、寛政年間に2点、享和年間に4点、文化年間に7点、文政年間に6点、天保年間に6点がある。とくに、文化年間から天保年間までの約40年間は、煎茶書が大量に創作された時期である。このような江戸後期の煎茶書の創作ブームを引き起こしたきっかけは、寛政6年(1794)の上田秋成『清風瑣言』二巻の刊行である。本書は煎茶書として最も代表的な作品と評価されている。また、『清風瑣言』の刊行から文化7年(1810)までの約15年間に、『煎茶略説』、『自辨茶略』など13点の煎茶書が現れ、ほぼ1～2年の間に新しい煎茶書が続々と刊行された。江戸中期の刊行状況と比べて明らかに頻度が上がっている。そして、文政12年(1829)、さらに代表的な煎茶書が登場した。それは田能村竹田の煎茶書三部作、『石山齋茶具図』、『竹田荘茶説』、『竹田荘泡茶訣』である。一方、江戸後期の煎茶書の刊行状況は江戸中期と比べ、中国茶書は依然として重視されている。劉源長『茶史』、喩政『茶集』、陳元輔『枕山樓茶

略』など作品が翻刻されたのと同時に、曾占春『烹茶樵書』、真間人『茶史』、山本徳潤『煎茶小述』など中国茶書の章題と構造を模倣して著された煎茶書も多い。そして、中国茶書から様々な長所を学習した煎茶書がある一方、中国茶書のような硬い形式に拘泥せず、趣味性を重視する作品も増えてきた。つまり、煎茶書の題材がより豊かになったのである。例えば、茶器図録として刊行された『売茶翁茶器図』、文人随筆として刊行された『良山堂茶話』、茶詩集として刊行された『詠茶詩録』、戯作として刊行された『酒茶問答』がある。この時期の煎茶書は中国茶書の長所を吸収すると同時に、読者の需要を満足させられる作品を工夫して創作し、より多くの日本人が気軽に読める煎茶書のあり方を模索していた。とくに、従来は漢文で書かれた煎茶書の難読さを解消するため、茶書の内容を簡易化・趣味化したり、茶器・茶席を図録化したりする傾向がうかがえる。

江戸末期に入ると、煎茶書刊行は依然として盛んであった。弘化年間から慶応年間までの約 20 年間で、合計 16 点の煎茶書が現れ、弘化年間に 1 点、嘉永年間に 6 点、安政年間に 2 点、万延年間に 1 点、文久年間に 2 点、慶応年間に 4 点である。煎茶書の刊行ブームの余熱はまだ残っているが、江戸後期の煎茶書と比べて、この時期の煎茶書は高踏的な喫茶論・精神論よりも実用性を重視していた。煎茶書の実用性重視は具体的に二つの面にあらわれる。

一つの面は煎茶手引書として刊行されたものが増えたことである。例えば、『新撰煎茶一覽』、『煎茶手引之種』、『清風煎茶要覽』などの作品群がこの時期の代表的な作品である。特に『新撰煎茶一覽』の刊記によれば、約 20 軒の書肆によって江戸・京都・大坂・尾張の四つの大都市で売られた。江戸時代の煎茶書の中で、最も多くの書肆が刊行と販売に参加していた作品である。庶民向けの作品が増えたことは、煎茶文化の普及の証拠であり、煎茶人口の拡大に繋がっている。

江戸末期の煎茶書の実用性重視のもう一つの面は、煎茶席の様子を記録した茶席図録の増加である。江戸末期の煎茶書の中には茶式や茶席の様子が描かれたものが多い。煎茶席の作法や道具の配置など、実際に煎茶席に参加する際に必要な情報が挿絵として描かれた。また、稽古のために刊行された煎茶書が次々と現れ、茶道からも影響を受けたことが窺える。中国人は自由自在な喫茶を重視し、

固定した喫茶法に執着しなかったため、喫茶法に関する手引書の作成に興味が薄かった。一方、日本人は茶席の作法と礼法を重んじたため、茶器の用意と置き場所を積極的に図版化し、手引書を熱心に作成した。『煎茶要格』、『南宗茶具名牋』、『青湾茶会図録』、『煎茶図式』などの煎茶書の登場は、過去に高い自由度を誇った煎茶が、次第に技法化・格式化されたことを示している。特に、『青湾茶会図録』のような大型煎茶席を再現するために描かれた作品は象徴的であり、田能村直入の芸術性に富んだ作品として高く評価され、明治時代以降の煎茶会図録の大量出現に繋がった。中国喫茶の内在精神を重視しながら、茶の湯の世界から得た知恵を積極的に煎茶の実践に取り入れる試みは、江戸末期の煎茶書を通して見えてきた特徴である。

煎茶の刊行時期について、最後に一つ注目すべきなのは、同時期の清王朝統治下中国からの影響である。表①「煎茶書の刊行時期の一覧表」の煎茶書刊行の和暦と清の暦とを照らし合わせてみると、江戸前期の煎茶書の出現はおよそ清王朝の康熙年間からということがわかる。また、乾隆年間、江戸中期のちょうど煎茶書刊行の発展期を迎えた頃にあたる。康熙年間と乾隆年間は、清王朝の中で最も繁栄した時期であり、茶文化も盛んに発展していた。例えば、上田秋成や頼山陽など、多くの煎茶人に愛読された陸延燦の『続茶経』は康熙年間に著された作品で、清代の代表的な茶書であった。

一方、日本でも享保の改革と寛政の改革を経て、経済と文化が盛んに発展していた時期である。この時期、長崎の貿易港を日中貿易の拠点として、中国から大量の商品が運ばれ、販売された。したがって、当時の日本人は唐人貿易を通して、中国の茶書や茶器に接触できたといえる。日中両国は同時期において、安定な国内環境を維持することと友好的な外交関係を保つことができたため、両国間の貿易にも穏やかな環境を提供した。それに基づいて文化交流や書籍販売も長崎を中心に盛んに行われ、清王朝の最新文化の伝来が容易になって、煎茶書の刊行ブームに有利な条件を提供したのである。

以上より、煎茶書の刊行は江戸前期から開始され、中期に入ると増加し、後期になって繁栄期を迎え、末期以降刊行のブームが続き、多くの作品が現れた

ことを明らかにした。

表① 煎茶書の刊行時期の一覧表

資料番号 ³	書名	成立年	和暦	清暦
			江戸前期	
1	『茶経』	1680 以前 (推定)	延宝八年	康熙年間
			江戸中期	
2	『茶録・新刻茶具図 賛』 (『古今茶湯諸抄大 成』 附録)	1713	正徳三年	康熙五十二年
3	『和漢茶誌』	1728	享保十三年	雍正六年
4	『青湾茶話』	1756	宝暦六年	乾隆二十一年
5	『茶董』	1758	宝暦八年	乾隆二十三年
6	『売茶翁偈語』	1763	宝暦十三年	乾隆二十八年
7	『煎茶訣』	1764	安永元年	乾隆二十九年
8	『茶経詳説』	1774	安永三年	乾隆三十九年
9	『茶器図解』	1774 以降 (推定)	安永三年	乾隆三十九年
10	『考茶録』	1779	安永八年	乾隆四十四年
			江戸後期	
11	『清風瑣言』	1794	寛政六年	乾隆五十九年
12	『煎茶略説』	1798	寛政十年	嘉慶三年
13	『自辨茶略』	1802	享和二年	嘉慶七年
14	『茶史』 (劉源長)	1803	享和三年	嘉慶八年
15	『烹茶樵書』	1803	享和三年	嘉慶八年
16	『茶集』	1803	享和三年	嘉慶八年
17	『煎茶式』	1804	文化元年	嘉慶九年
18	『枕山楼茶略』	1805	文化二年	嘉慶十年
19	『煎茶斧』	1806	文化三年	嘉慶十一年
20	『茶痕醉言』	1807 以降 (推定)	文化四年	嘉慶十二年
21	『茶史』 (真間人)	1808	文化五年	嘉慶十三年
22	『啓沃堂随筆』	1808	文化五年	嘉慶十三年
23	『四詠唱和』	1810	文化七年	嘉慶十五年
24	『淹茶式』	1819	文政二年	嘉慶二十四年
25	『売茶翁茶器図』	1823	文政六年	道光三年
26	『良山堂茶話』	1824	文政七年	道光四年
27	『石山齋茶具図譜』	1829	文政十二年	道光九年
28	『竹田荘茶説』	1829	文政十二年	道光九年
29	『竹田荘泡茶訣』	1829	文政十二年	道光九年
30	『泡茶新書三種』	1831	天保二年	道光十一年
31	『煎茶小述』	1835	天保六年	道光十五年

³ 本表は主に第一章第五節の節末の一覧表に提示された資料に基づいて作成したため、資料番号が共通している。

32	『梅山種茶譜略』 ⁴	1838	天保九年	道光十八年
33	『煎茶小集』	1838	天保九年	道光十八年
34	『詠茶詩録』	1839	天保十年	道光十九年
35	『酒茶問答』	1841	天保十二年	道光二十一年
江戸末期				
36	『新撰煎茶一覽』	1847	弘化四年	道光二十七年
37	『煎茶手引之種』	1848	嘉永元年	道光二十八年
38	『木石居煎茶訣』	1849	嘉永二年	道光二十九年
39	『清風煎茶要覽』	1851	嘉永四年	咸豊元年
40	『仙境逸楽』	1853	嘉永六年	咸豊三年
41	『魁々園茶集』	1853	嘉永六年	咸豊三年
42	『続茶経』	1854	嘉永七年	咸豊四年
43	『煎茶綺言』	1857以降(推定)	安政四年	咸豊七年
44	『喫茶辨』	1857	安政四年	咸豊七年
45	『煎茶要格』	1860	万延元年	咸豊十年
46	『南宗茶具名牋』	1861	文久元年	咸豊十一年
47	『青湾茶会図録』	1863	文久三年	同治二年
48	『煎茶図式』	1865	慶応元年	同治四年
49	『蓬仙茶話 茶器編』	1865	慶応元年	同治四年
50	『淹茶小録』	1867	慶応三年	同治六年
51	『鍊荘茶譜』	1867	慶応三年	同治六年

江戸時代の各時期における煎茶書の刊行数

時期	江戸前期	数量	江戸中期	数量
年号	延宝以前(～1680)	1	正徳(1711～1715)	1
	—		享保(1716～1735)	1
	—		宝暦(1751～1763)	4
	—		安永(1772～1778)	3
合計		1		9
時期	江戸後期	数量	江戸末期	数量
年号	寛政(1789～1800)	2	弘化(1844～1847)	1
	享和(1801～1803)	4	嘉永(1848～1853)	6
	文化(1804～1817)	7	安政(1854～1859)	2
	文政(1818～1829)	6	万延(1860)	1
	天保(1830～1843)	6	文久(1861～1863)	2
	—		慶応(1865～1867)	4
合計		25		16

⁴ 『国書総目録』によれば、宝暦五年版の『梅山種茶譜略』がある。筆者未見。確認中。国書研究室編、『国書総目録』補訂版第1刷、第六巻、岩波書店、1989～1991、p. 559

第二節.編著者の出身地・身分・職業について

本節は節末の表②に基づいて編著者の出身地、身分、職業を中心に検討する⁵。統計によれば、重複を除いて合計 38 人の煎茶書の作者（中国茶書の和刻本の翻刻者）の名前が確認できた。

まず、作者の出身地について検討する。江戸出身は 9 人、京都は 5 人、大坂は 6 人、尾張は 5 人となっている。そのほかの地方出身者については、播磨は 1 人、金沢 2 人、豊後 2 人、伊勢 1 人、近江 1 人、肥前 1 人、越後 1 人がいる。ただし、『煎茶式』の作者自適窩主人、『酒茶問答』の作者三五園主人、『新撰煎茶一覽』の作者清談楼主人、『淹茶小録』の作者太田乗の 4 人の出身地は不明である。

このように、四大都市出身者は半分以上を占め、地方出身者は少数派であることがわかった。さらに、地方出身者の中でも、実際は四大都市に移り、定住した人もいる。例えば、肥前出身の売茶翁は 61 才で還俗して京都で茶店を開いた。近江出身の大典禅師は 8 才で上京して京都の相国寺で長年生活していた。越後出身の館柳湾は晩年に江戸の目白台で暮らしていた。したがって、煎茶書は明らかに四大都市を中心とする作者によるものとの傾向があることがわかった。

次に、作者の身分について検討する。江戸時代に士農工商という身分制度が強化され、特に「士」であった武士階級が「農工商」の三民より上位に置かれた。また、町人との間には上下の関係がなかった。「武士」の身分に対して、「農工商」の三民は「平民」として括られたが、その武士と平民とははっきり分離され、その身分が固定化されるようになった。

煎茶書の作者の身分構成から見れば、平民出身の人が圧倒的に多く、38 人中 35 人を占めている。このように、武士の世界で大流行した茶の湯と違い、煎茶は平民向けの喫茶文化であったことが一目瞭然である。したがって、煎茶

⁵ 本節に検討された煎茶書は、原則して第一章第五節の表①に提示された所蔵元の資料に基づいて考察を行った。本節末の一覧表②の資料番号を利用して確認できる。

書は平民のために書かれた読物で、平民の世界に流布された作品群だといえる。

一方、武士の身分を持つ煎茶書の作者はわずか3人しかおらず、少数派だといえる。しかし、圧倒的に少ないとはいえ、彼らも煎茶に強い興味を示していた。

例えば、『煎茶式』の作者増山雪齋は伊勢長島藩第5代の藩主で、山水画や花鳥画に優れた文人として尊敬を集めた人物である。また、蓬仙仙史つまり旗本川勝広運は、若い頃から煎茶を好み、売茶東牛などの煎茶家と頻りに交遊して煎茶会を開き、『仙境逸楽』と『蓬仙茶話 茶器編』を著したが、彼もまた中国風の喫茶を嗜む好事者として江戸煎茶界に多大な影響を与えた人物である。さらに、培公と号した酒井忠恒は上野伊勢崎藩の第7代藩主で、同様に煎茶を嗜む人物であったが、彼は数種の煎茶席の式法を考案して、後にその茶式が今村了庵によって記録され、『煎茶図式』と命名して上梓された。

増山雪齋と川勝広運と酒井忠恒のような武士階級の煎茶家は、三人とも文学の世界に投身し、琴棋書画に長じた雅人であるという一つの共通点がある。三人の中に、最も有名なのは増山雪齋である。彼は文人大名として、後世によく知られている。彼らは平民出身の南画家や漢詩人など高い漢文素養を持つ友人に囲まれ、周囲に影響を受けたが、そこで煎茶に興味をもったのも自然であった。以上を鑑みるに、煎茶は一般的には平民世界の趣味の一つだが、権力者側の武士階級にも影響を及ぼしたことが無視できない。

さらに、『日本漢文学大事典』⁶と『日本人名大辞典』⁷を利用し、煎茶書の作者の職業を確認した。その結果、職種は多岐に渡っていたことが明らかである。

統計によれば、その中で最も多い職業は画家であり、増山雪齋、木村孔陽、田能村竹田、椿椿山、田能村直入、富岡鉄斎の6人がいる。いずれも南画あるいは文人画の代表的な名家である。画家の次は儒者が多い。松永昌易、三谷友佐、真間人、深田精一の4人がいる。ほかに香道家、禅僧、漢詩人、具足師、国学者、歌人、商人、本草家、医師、俳人、篆刻家などを職業とした人もいる。

⁶ 近藤春雄、『日本漢文学大事典』、明治書院、1975。

⁷ 上田正昭・西澤潤一・平山郁夫、三浦朱門編、『日本人名大辞典』、講談社、2001。

誰もが気軽に煎茶を楽しめたため、様々な職業の人々によって多くの煎茶書が作られたといえる。

それに加え、煎茶書作者の職業は様々であるが、実際はある共通点が存在している。それは、彼らが基本的に漢文を読み慣れており、漢学の素養を身に付けているという点である。例えば、大典禅師は禅僧でありながら、当時随一の漢詩人でもあったし、春田永年は具足師でありながら、清水浜臣に古典を学び、豊かな学識を持っていた。また、曾占春は本草家でありながら、もともと医学書など多くの漢籍に親しんでいたし、阿部縑洲は篆刻家でありながら、自然に漢文の素養を持っていた。江戸時代は儒学を重視した時代であるため、一般平民でも漢文教育を受けることが可能となっていた。このように、全国民の漢文素養の向上は煎茶書刊行のブームに繋がっていた。

時期的にみれば、江戸前期において最初に煎茶の書物の刊行を始めたのは儒者である。江戸中期になると、煎茶書の刊行は売茶翁を代表とした禅僧を中心に行われた。売茶翁の活発な売茶活動と交遊活動によって、香道家大枝流芳をはじめとする多くの職業の人が煎茶に興味を持ち、後に茶書の創作に参加しはじめた。江戸後期と江戸末期になると、煎茶ブームとともに、煎茶書の影響力がさらに拡大し、次第に様々な人が煎茶書の創作に参加した。

特に、画家がこの時期に積極的に煎茶活動に参加していたことが目立つ。田能村竹田を代表とする南画家は、書物の刊行だけではなく、熱心に煎茶を絵画と漢詩の世界に取り入れたのである。したがって、江戸時代において、煎茶を嗜好した南画家は明らかに増え、南画家かつ煎茶家が非常に多かった。

もう一つ注目しなければならないのは、江戸文人の交遊活動が煎茶書の刊行に与えた効果である。煎茶書の作者の間には様々な人間関係がうかがえる。例えば、『泡茶新書三種』の作者田能村竹田と『青湾茶会図録』の作者田能村直入は養父子関係である。『煎茶綺言』の作者売茶東牛と『蓬仙茶話 茶器編』の作者蓬仙仙史（川勝広運）は親密な茶友関係を結んでいる。このような人間関係は煎茶の伝承に繋がり、煎茶書の刊行を促進していた。

とりわけ、数多くの煎茶書の刊行に多大な影響を与えた人物は木村兼葭堂で

あろう。木村兼葭堂は大坂の有名な煎茶家の一人として多くの煎茶書の刊行に関わっていた。例えば、彼は大典禅師に『煎茶訣』の補説を依頼して本書を上梓した。また、友人の沢田実成によって『煎茶略説』が刊行された。さらに、劉源長『茶史』は兼葭堂の依頼で内田蘭渚によって翻刻された。ほかにも、増山雪齋は兼葭堂から売茶翁の茶器をもらったため煎茶に興味が生じ、それをきっかけとして『煎茶式』を創作した。さらに、兼葭堂が蔵品として集めた売茶翁の煎茶器は、まずは乾泉主人に模写されて津田養の『啓沃堂隨筆』に収録されたが、後に木村孔陽に模写されて『売茶翁茶器図』として刊行された。交遊活動の活発化は煎茶書の刊行ブームの一因となったのである。

表② 煎茶書の編著者の出身地・身分・職業の一覧表

資料番号 ⁸	書名	主な編著者	編著者の出身地	主な職業 ⁹	武士	平民
1	『茶経』	松永昌易翻刻	京都	儒者		○
2	『茶録・新刻茶具図 賛』	三谷友佐編	江戸	儒者		○
3	『和漢茶誌』	三谷良朴著	播磨	茶人		○
4	『青湾茶話』	大枝流芳著	大坂	香道家		○
5	『茶董』	能登屋次助翻刻	金沢	書肆		○
6	『売茶翁偈語』	売茶翁著	肥前	禅僧		○
7	『煎茶訣』	大典禅師補	近江	禅僧、漢詩人		○
8	『茶経詳説』	大典禅師著	— (既出のため省 略、下同)	—		
9	『茶器図解』	春田永年著	尾張	具足師		○
10	『考茶録』	歌口著	江戸	不詳		
11	『清風瑣言』	上田秋成著	大坂	国学者、歌人		○
12	『煎茶略説』	沢田実成著	大坂	不詳		
13	『自辨茶略』	嵐翠子著	尾張	不詳		
14	『茶史』（劉源長）	内田蘭渚翻刻	尾張	商人		
15	『烹茶樵書』	曾占春著	江戸	本草家、医師		○
16	『茶集』	源靖重訂	大坂	不詳		
17	『煎茶式』	増山雪齋著	江戸	大名、画家	○	
18	『枕山楼茶略』	大館高門翻刻	尾張	国学者		○
19	『煎茶斧』	菜窠老人著	金沢	俳人		○
20	『茶痕醉言』	上田秋成著	—	—		
21	『茶史』（真間人）	真間人著	江戸	儒者		○
22	『啓沃堂随筆』	菜窠老人著	—	—		
23	『四詠唱和』	館柳湾著	越後	漢詩人		○
24	『淹茶式』	自適窩主人著	不詳	不詳		○
25	『売茶翁茶器図』	木村孔陽著	大坂	画家		○
26	『良山堂茶話』	阿部縑洲著	大坂	篆刻家		○
27	『石山齋茶具図譜』	田能村竹田編	豊後	画家		○
28	『竹田荘茶説』	田能村竹田著	—	—		
29	『竹田荘泡茶訣』	田能村竹田著	—	—		

⁸ 本表は主に第一章第五節の節末の一覧表に提示した資料に基づいて作成したため、資料番号が共通している。

⁹ 編著者の出身地と主な職業の確認は、主に『日本漢文学大事典』と『日本人名大辞典』を参照。また、辞書に載せていない人名は書中の記述によって確認するした場合こともある。例えば、『茶集』の源靖、『煎茶斧』の津田養、『煎茶小述』の山本徳潤、『清風煎茶要覧』の東園、『南宗茶具名牋』の島孟克の出身地は書中の序跋などの記述によって確認した。近藤春雄、『日本漢文学大事典』、明治書院、1975。上田正昭・西澤潤一・平山郁夫、三浦朱門編、『日本人名大辞典』、講談社、2001年。

30	『泡茶新書三種』	田能村竹田著	—	—		
31	『煎茶小述』	山本徳潤著	江戸	商人		○
32	『梅山種茶譜略』	壳茶翁著	—	—		
33	『煎茶小集』	椿椿山著	江戸	画家		○
34	『詠茶詩録』	館柳湾著	—	—		
35	『酒茶問答』	三五園主人著	不詳	不詳		○
36	『新撰煎茶一覽』	清談楼主人著	不詳	不詳		○
37	『煎茶手引之種』	山本徳潤著	—	—		
38	『木石居煎茶訣』	深田精一著	尾張	儒者		○
39	『清風煎茶要覽』	東園著	京都	不詳		
40	『仙境逸楽』	蓬仙仙史著	江戸	旗本	○	
41	『魁々園茶集』	壳茶東牛写	京都	茶人		○
42	『続茶経』	壳茶東牛写	—	—		
43	『煎茶綺言』	壳茶東牛著	—	—		
44	『喫茶辨』	小川可進著	京都	医師		○
45	『煎茶要格』	壳茶東牛著	—	—		
46	『南宗茶具名牋』	島孟克著	江戸	不詳		○
47	『青湾茶会図録』	田能村直入著	豊後	画家		○
48	『煎茶図式』	酒井忠恒著	伊勢	大名	○	
49	『蓬仙茶話 茶器編』	蓬仙仙史著	—	—		
50	『淹茶小録』	太田秉著	不詳	不詳		○
51	『鍊荘茶譜』	富岡鉄斎著	京都	画家		○

第三節.文体・刊写・書型について

本節は節末の表③に基づいて文体、刊写、書型の統計を分析し、その結果を通して江戸時代の煎茶書の全体像の特徴を見出す。

まず、煎茶書の文体について検討する。江戸時代において、知識人は様々な知識を漢籍など漢文で書かれた書物を通して得たため、漢文の読解能力を身に付けることが必要であった。書物の性格、編著者の階層や素養は、どのような文体を用いているかということによってうかがえる。

江戸時代の煎茶書は主に漢文、漢文訓読文と和漢混淆文の三つの文体を使用しており、表③の統計を見ると、漢文を用いた煎茶書が最も多い。これは『茶経』、『茶董』、『煎茶訣』、『茶史』(劉源長)、『茶集』、『枕山楼茶略』など中国茶書の和刻本が多く刊行されたためである。そのほか、『和漢茶誌』、『茶史』(真間人)、『石山齋茶具図譜』、『竹田荘泡茶訣』、『青湾茶会図録』など日本人によって書かれた漢文作品もあるが、これは江戸時代の日本人の高い漢文の素養を示している。

そして、江戸中期に入ると、カタカナを交えて日本語に近づけた漢文訓読文を用いた煎茶書が次々に現れた。『茶経詳説』、『茶器図考』、『煎茶式』、『良山堂茶話』、『梅山種茶譜略』などはこの文体を採用している。

さらに、漢文と和文を融合して和漢混淆文で書かれた煎茶書も非常に多い。この文体で書かれた作品は、『青湾茶話』、『考茶録』、『清風瑣言』、『煎茶略説』、『自辨茶略』などがある。漢文訓読文と和漢混淆文の二つの文体は江戸時代中期から江戸後期にわたってどの時期においても多く見られ、本来漢文で書かれた中国茶書の知識が次第に日本の煎茶家に吸収され、日本独自の文字表記で再現された。これも江戸時代における中国茶文化受容の一つの特徴だといえる。

そのほか、もう一つ注意しなければならないことがある。茶の湯関係書の場合においては和文で書かれたものが多いが、そのように純粋な和文で書かれた煎茶書は一つもないということである。つまり、江戸時代の煎茶書は漢文に基

づいて生まれたもので、漢文を離れては成立できなかったといえる。

次に、煎茶書の刊写状況について検討する。表③の統計によれば、刊本 46 点、写本『茶痕醉言』、『煎茶斧』、『啓沃堂随筆』、『魁々園茶集』、『続茶経』の 5 点となるので、刊本として作られた煎茶書が圧倒的に多いことがわかる。そして、『茶痕醉言』を除き、ほかの 4 点は本研究によってはじめて取り上げた新史料であるため、先行研究において検討された煎茶書は基本的に版本であったこともわかった。写本とはいえ、『煎茶斧』と『啓沃堂随筆』はともに津田養の作品であり、本文をみれば、版本をその体裁を真似て臨写したことは明らかである。つまり、両書とも版本から写した転写本である可能性がある。

一方、写本の『魁々園茶集』と『続茶経』はともに売茶東牛の作品である。『魁々園茶集』は唐代から明代までの約 19 点の中国茶書の転写本で、『続茶経』は清代の陸延燦の茶書の転写本である。両書はともに浄書済みの状態で、『煎茶綺言』の続篇として刊行するために書かれたものであろう。

写本として見つかった煎茶書であっても、版本によって書かれたもの、あるいは版本を製作するために書かれたものである可能性がある。つまり、煎茶書は基本的に刊本として作成されたという特徴がある。また、その特徴は茶の湯関係書とは大きな違いがある。

その理由は、茶の湯関係書は基本的に写本の形で流布されている。筒井紘一氏は「茶書総覧」¹⁰において煎茶書を含めて平安時代から明治期までの約 1700 冊の茶書を取り上げている。その中の茶の湯関係書の版写状況を確認すれば、写本の類が圧倒的に多いことが明らかである。一方、茶の湯関係書においては版本が非常に少ないという状況が確認できる。このように、煎茶書の版写状況とは真逆だったといえる。煎茶書は版本が多かったという理由について、ひとつは中国茶書からの影響が強かったために版本として刊行された、というのは共通の認識であろう。またもうひとつ、煎茶書の刊行ブームは江戸時代における出版業隆盛という背景にも緊密に繋がっている。

¹⁰ 筒井紘一、『茶書の系譜』、文一総合出版、1978、pp. 455～517。

次に、煎茶書の書型について検討する。書型は版本の書誌情報の基本の一つであり、表③の統計によれば、大本 13 点、半紙本 10 点、中本 9 点、小本 2 点、特小本 8 点、横本（三つ切り本）4 点、横本（二つ切り本）1 点、折本 3 点、畳物 1 点がある。多様な書型の煎茶書の刊行が確認できた¹¹。

多くの煎茶書の書型の中で、よく使われたのは大本である。大本は江戸時代初期の標準の大きさの書型である。寸法は縦約 27cm、横約 19cm である。漢籍・和歌・物語・神道書・医書など学問の対象になるような書物に用いられる書型である。近世初期、書物がまだ身分の高い著名人の専属所有物であった時代には主にこの書型のものが多いが、時代が下ってもよく見られる書型であった。煎茶書の中で、『茶経』、『茶董』、『茶集』、『枕山楼茶略』のような中国茶書の和刻本と、『和漢茶誌』、『茶経詳説』、『煎茶略説』、『自辨茶略』のような中国茶書を真似て作られたものが主にこの書型で刊行された。

半紙本は江戸中期以降多く見られる書型で、版本の中でも最も普通の書型である。寸法は縦約 24cm、横約 17cm である。大本と比べてやや一般向けのものであり、俳諧・浄瑠璃・狂歌・読本・唐本風のもの・子供や女性向けの絵本などが、この大きさに作られたものが多い。煎茶書の中では、『青湾茶話』、『茶器図考』、『清風瑣言』、『煎茶式』などがこの書型で作られた。半紙本の煎茶書は江戸中期と江戸後期において多く出された。

中本は煎茶書の刊行において、よく採用された書型である。寸法は縦約 19cm、横約 13cm である。中本は、薬物、食べ物や旅行案内などに関する実用書、または人情本・滑稽本など娯楽読物を中心に刊行された。『烹茶樵書』、『淹茶式』、『良山堂茶話』、『煎茶小述』などはこの書型である。江戸後期と江戸末期に、この書型の煎茶書が多く現れた。

小本は洒落本・年表・人名録など、実用書によく使用される書型である。寸

¹¹ 以下のそれぞれの書型の寸法と特徴については、中野三敏『書誌学談義 江戸の板本』、岩波書店、2015、pp. 56～65。と堀川貴司『書誌学入門 古典籍を見る・知る・読む』第一部「古典籍を見る」、勉誠出版、2019、p. 27。を参照した。

法は縦約 17cm、横約 12cm である。煎茶書の中では、この書型の作品が少なく、『煎茶訣』と『淹茶小録』の 2 点のみである。小本は実用性と趣味性を兼ね備える特徴がある。例えば、『煎茶訣』は実用性を重視する書物である。一方、『淹茶小録』は趣味性を重視する書物である。

特小本は、小本より小さい書物の総称であり、実用的な書物より趣味的に作られたものが多い。煎茶書の中では、館柳湾の『四詠唱和』、『詠茶詩録』と田能村竹田の『石山齋茶具図譜』、『竹田荘茶説』、『竹田荘泡茶訣』、また富岡鉄斎の『鍊荘茶譜』はこの書型を採用している。これらは、正統的な煎茶の学問を検討する書物というより、趣味本位で作られた作品だといえる。特小本は江戸前期と中期においては珍しい書型だが、後期と末期に集中的に現れた。

横本の書型で作られた煎茶書もある。江戸中期には『考茶録』のような二つ切り本がある。二つ切り本の寸法は縦 14 約 cm、横約 20cm である。江戸中期に時折見かける珍しい書型である。一方、三つ切り本は二つ切り本よりさらに実用性を重視する書型である。寸法は縦約 9cm、横約 19cm である。三つ切り本の煎茶書は数が少ないが、特徴があるので注目すべきである。例えば、『新撰煎茶一覽』、『煎茶手引之種』、『清風煎茶要覧』の 3 点がともに実用的な手引書として、ほぼ同時期に刊行された。

縦本と横本のほか、折本と畳物で作られた珍しい書型の作品もある。折本はよく作詩・作歌・書堂の手本や手引書などに使用された書型である。折本として刊行されたのは『売茶翁茶器図』、『煎茶小集』、『煎茶図式』である。『売茶翁茶器図』は売茶翁の茶器を中心とした図録である。『煎茶小集』は大型煎茶会の絵巻である。『煎茶図式』は煎茶器の配置図や和歌・漢詩などを載せた画帖である。また、畳物は地図、年表、様々な図表などによく使われた書型である。『南宗茶具名牋』は畳物として刊行され、記載した茶具の諸品は 110 点を超えている。すべての茶具の名称を羅列するために、この書型を採用したのだろう。

以上、江戸時代の書型を通観すると、江戸前期と中期において書物が希少品であったため、煎茶書は漢籍や漢籍関係書の形で一部の知識人に所蔵され、書

型が大きく、学問書として刊行されたものが多く、実用性より学問書としての収蔵価値が重視される特徴がある。江戸後期に入ると、書物が大量生産できるようになって、より多くの書型が普及した。煎茶書は書型が次第に小さくなる一方、収蔵価値より書物の実用性が重視された。さらに、時代が下ると、煎茶書は書型がさらに小さくなり、懐中に入るような小型本が次第に刊行された。煎茶の趣味性を重んじる傾向もうかがえた。

以上より、煎茶書の中に漢文の使用率が高いことを明らかにした。それは、江戸時代の茶人の高い漢文素養を示している。また、刊本として作られた煎茶書の数が非常に多くて江戸時代の印刷技術の発達を証明している。さらに、時代が下ると、煎茶書の書型は小型化する傾向があり、作品の実用性と趣味性がますます読者に重視されたことが明らかであり、煎茶の庶民化と一般化を示している。

表③煎茶書の刊写・文体・書型の一覧表

資料番号 ¹²	書名	刊写	文体	書型 ¹³
1	『茶経』	刊	漢文	大本
2	『茶録・新刻茶具図贊』	刊	漢文／和漢混淆文（平仮名交じり文）	半紙本
3	『和漢茶誌』	刊	漢文	大本
4	『青湾茶話』	刊	和漢混淆文（平仮名交じり文）	半紙本
5	『茶董』	刊	漢文	大本
6	『売茶翁偈語』	刊	漢文	大本
7	『煎茶訣』	刊	漢文	小本
8	『茶経詳説』	刊	漢文訓読文（カタカナ交じり文）	大本
9	『茶器図解』	刊	漢文訓読文（カタカナ交じり文）	半紙本
10	『考茶録』	刊	和漢混淆文（平仮名交じり文）	横本（二つ切り）
11	『清風瑣言』	刊	和漢混淆文（平仮名交じり文）	半紙本
12	『煎茶略説』	刊	和漢混淆文（平仮名交じり文）	大本
13	『自辨茶略』	刊	和漢混淆文（平仮名交じり文）	大本
14	『茶史』（劉源長）	刊	漢文	半紙本
15	『烹茶樵書』	刊	和漢混淆文（平仮名交じり文）	中本
16	『茶集』	刊	漢文	大本

¹² 本表は主に第一章第五節の節末の一覧表に提示した資料に基づいて作成したため、資料番号が共通している。

¹³ 書型は所蔵元に公開された寸法によって推定。書型の寸法と基準は、主に中野三敏の『書誌学談義 江戸の板本』第三章「書型」を参照。中野三敏、『書誌学談義 江戸の板本』、岩波書店、2015、pp. 56～65。

17	『煎茶式』	刊	漢文訓読文 (カタカナ交じり文)	半紙本
18	『枕山楼茶略』	刊	漢文	大本
19	『煎茶斧』	写	和漢混淆文 (平仮名交じり文)	半紙本
20	『茶癡醉言』	写	和漢混淆文 (平仮名交じり文)	半紙本
21	『茶史』 (真間人)	刊	漢文	中本
22	『啓沃堂随筆』	写	和漢混淆文 (平仮名交じり文)	大本
23	『四詠唱和』	刊	漢文	特小本
24	『淹茶式』	刊	和漢混淆文 (平仮名交じり文)	中本
25	『売茶翁茶器図』	刊	漢文	折本
26	『良山堂茶話』	刊	漢文訓読文 (カタカナ交じり文)	大本
27	『石山齋茶具図譜』	刊	漢文	特小本
28	『竹田荘茶説』	刊	和漢混淆文 (平仮名交じり文)	特小本
29	『竹田荘泡茶訣』	刊	漢文	特小本
30	『泡茶新書三種』	刊	漢文／和漢混淆文 (平仮名交じり文)	特小本
31	『煎茶小述』	刊	和漢混淆文 (平仮名交じり文)	中本
32	『梅山種茶譜略』	刊	漢文訓読文 (カタカナ交じり文)	大本
33	『煎茶小集』	刊	漢文	折本
34	『詠茶詩録』	刊	漢文	特小本
35	『酒茶問答』	刊	和漢混淆文 (平仮名交じり文)	中本
36	『新撰煎茶一覽』	刊	和漢混淆文 (平仮名交じり文)	横本 (三つ切り)
37	『煎茶手引之種』	刊	和漢混淆文 (平仮名交じり文)	横本 (三つ切り)
38	『木石居煎茶訣』	刊	和漢混淆文 (平仮名交じり文)	中本
39	『清風煎茶要覽』	刊	和漢混淆文 (平仮名交じり文)	横本 (三つ切り)
40	『仙境逸楽』	刊	漢文	特小本
41	『魁々園茶集』	写	漢文	大本
42	『続茶経』	写	漢文	大本
43	『煎茶綺言』	刊	漢文訓読文 (カタカナ交じり文)	半紙本
44	『喫茶辨』	刊	和漢混淆文 (平仮名交じり文)	半紙本
45	『煎茶要格』	刊	漢文	横本 (三つ切り)
46	『南宗茶具名牋』	刊	漢文	疊物
47	『青湾茶会図録』	刊	漢文	中本
48	『煎茶図式』	刊	漢文／和漢混淆文 (平仮名交じり文)	折本
49	『蓬仙茶話 茶器編』	刊	漢文訓読文 (カタカナ交じり文)	中本
50	『淹茶小録』	刊	漢文訓読文 (カタカナ交じり文)	小本
51	『鍊荘茶譜』	刊	和漢混淆文 (平仮名交じり文)	特小本

第四節. 図版について

本節は節末の表④に基づいて煎茶書の中に載せられた図版について検討する。

まず、中国茶書に載せられた図版は基本的に茶器を中心としている。例えば、審安老人の『茶具図贊』と顧元慶『茶譜』が茶器図のある代表的な茶書である。また、『宣和北苑貢茶録』には団茶の模様を描いた図版がある。しかし、全体的にみれば、中国茶書は基本的に漢文を中心にして作られたため、文字さえあれば作品が成立したため、図版を載せた茶書は少数である。

一方、中国茶書に比べて、江戸時代の煎茶書は図版と挿絵を重視しており、多くの煎茶書には図版が載せられており、それぞれ大きな役割を果たしている。また、日本の煎茶書の中に載せられた図版は茶道具のみならず、茶席の様子や著名な茶人の肖像を載せた作品も多く見られる。

統計によれば、51点の煎茶書の中で、31点には図版がある。仮に煎茶書の中から中国茶書の翻刻書、つまり『茶経』、『茶録・新刻茶具図譜』、『茶董』、『煎茶訣』、『茶史』（劉源長）、『茶集』、『魁々園茶集』、『続茶経』の8点を算入せずに日本の作品のみを考えれば、43点の煎茶書の中で29点には図版や挿絵があり、したがって、大半の煎茶書の中には図版が載せられていたことがわかる。

これらの煎茶書に見える図版は主に茶器、茶式、茶人肖像の三つの題材に分類できる。その中で、茶器図は最も多く描かれた題材であり、26点の煎茶書の中に見つかった。また、特に江戸前期から江戸後期にかけて煎茶器の図版が続々と登場したという状況が窺える。さらに、茶器図をさらに細かく分類すると、以下の二つの流れがある。

一つ目は、江戸前期と江戸中期の茶器図が一般的に『茶経』や『茶具図譜』の原文に基づいているということである。その原因は、おそらく和刻本の『茶経』は明代の鄭燧の校刻本を底本としたからである。この江戸前期にすでに翻刻されていた明刻本の中には審安老人の『茶具図譜』を収録しているため、日

本の読者にもよく知られたのだろう。例えば、『茶録・新刻茶具図譜』、『和漢茶誌』、『茶器図考』、そして『烹茶樵書』の中にある大窪詩仏の附録「茶寮図贊」の茶器図はこの一類に属す。また、『石山齋茶具図譜』の図版は清人傅士然の伝来した茶書によって描かれた。そのほか、『石山齋茶具図譜』の図版は『新撰煎茶一覽』に多く引用された。さらに、江戸末期における富岡鉄斎の『鍊莊茶譜』の「瓷壺之部」は、明代の周高起の『陽羨茗壺系』をもとにして砂壺の挿絵を載せている。以上の煎茶書に見える茶器図は、中国茶書の内容に基づいて描かれたものであった。

もう一つは日本煎茶人の茶器の伝承の一脈である。最も代表的なのは、売茶翁の煎茶器である。売茶翁が亡くなったあと、彼の遺品の煎茶器の大半は木村兼葭堂の手に渡った。木村兼葭堂の膨大な人脈とネットワークの影響力によって売茶翁の愛用した煎茶器の様式が描かれ、京坂を中心に拡散して、周辺の煎茶家に広く知られた。『青湾茶話』、『売茶翁偈語』、『煎茶式』、『啓沃堂随筆』、『売茶翁茶器図』、『清風煎茶要覧』に描かれた煎茶器は明らかに売茶翁の遺品の影響を受けている。ほかに、上田秋成の『清風瑣言』も強い影響力を持っており、中に描かれた茶器図が『新撰煎茶一覽』、『煎茶手引之種』に多く引用された。

図版数で茶器図に次いで多かったものは茶式図である。茶式図とは、煎茶会の様式や茶席の配置図を指す。茶器図と違って茶道具の特写より茶席の全貌を描くことを中心にする。煎茶書の中の茶式図は、江戸中期からすでに考案されていたが、主流の法式にならなかった。例えば、『青湾茶話』の中には闘茶式、通仙式、玉川式があり、『考茶録』の中には迎客式・試茶式・考茶式などが見えるが、広く流布することはなかった。その理由は、江戸中期の煎茶器は基本的に長崎の唐人貿易によって中国から伝来したもので、あるいはそれを原型として模作されたものだったからであろう。これは日本の茶人には馴染みのない新式のものであり、それぞれの茶器の役割分担もまだはっきり区別されなかったため、この時期の煎茶書には茶器の普及が中心となり、したがって、茶器図が茶式図より多く見られたのであろう。

江戸後期以降、増山雪齋の『煎茶式』や自適窩主人の『淹茶式』など煎茶式の設立への工夫が続けられた。文政年間、田能村竹田の『石山齋茶具図譜』と『竹田荘茶説』によって清王朝で流行していた茶式が紹介されて広く知られた。より多くの日本人が田能村竹田の煎茶書を通して煎茶の茶式に接触した。また、椿椿山の『煎茶小集』によって大人数の煎茶会が開かれ、ここにおいて、煎茶の茶式が整ったことがうかがえる。

江戸末期には、茶式図の数が急増したが、これは煎茶席の法式が成立して広く普及したことを示している。作品は『煎茶手引之種』、『木石居煎茶訣』、『煎茶要格』、『青湾茶会図録』、『煎茶図式』、『蓬仙茶話 茶器編』、『淹茶小録』などがある。中でも、明治以降の煎茶書に最も大きな影響力を与えたのは『青湾茶会図録』である。『青湾茶会図録』は文久2年（1862）の青湾茶会の記録で、有名な南画家田能村直入によって描かれた作品である。大型煎茶会の様子だけではなく、茶器まで精緻に描かれた。本書は明治期から昭和期にかけて行われた多くの大規模の煎茶会の図録の重要な参考書となり、煎茶会を記録する定式を示した。「茗謙図録」と呼ばれた煎茶会図録は煎茶書から独立して新しいジャンルの茶書史料となっている。

茶器図と茶式図を除き、煎茶書の中に最も多く載せられていたのは茶人の肖像である。もとより、中国茶書には茶人の肖像を載せる習慣がないため、これは日本の煎茶書にしか見えない独特な現象であるといえる。煎茶書に載せられた茶人の肖像は基本的に日中両国の歴代の有名な茶人である。例えば、陸羽、廬仝、栄西、上田秋成はよく見られる人物である。

その中で最も多く描かれた人物は売茶翁であろう。例えば、『売茶翁偈語』には伊藤若冲の描いた売茶翁像があり、『自辨茶略』、『清風煎茶要覧』、『煎茶綺言』にも売茶翁の肖像を載せている。これは売茶翁の貢献が江戸時代の煎茶家に広く認められた証拠である。売茶翁が後世に煎茶の祖と呼ばれたのも、これらの煎茶書に載せられた肖像図の宣伝と関係がある。茶の湯には千利休のような有名な茶人が存在するため、煎茶家たちはそれを意識して売茶翁を煎茶の始祖として推挙したのである。売茶翁の身分を確定することによって煎茶の地

位を強化できるという、江戸時代の独特な茶人崇拜の現象が窺える。

最後に、煎茶書の図版の色刷りについて述べたい。江戸時代の煎茶書に見える図版は基本的に墨刷りであるが、『売茶翁茶器図』、『煎茶小述』、『煎茶小集』、『煎茶式図』のように多色刷りの作品も現れた。多色刷りの作品の刊行は中国茶書にはなく、日本独特な現象である。この現象は、江戸後期から煎茶書の刊行に熱心に参与した南画家の活躍と、日本書肆の高く発展した印刷技術に関係がある。

以上より、煎茶書の中に図版は重要な構成であることを明らかにした。煎茶書に見える図版は主に茶器図、茶式図、茶人肖像図である。茶器図は、茶道具の紹介、解説、模作に大きな役割を果たした。そして、新式茶器の普及によって煎茶の茶式が整って茶式図の数が次第に増えた。一方、中国茶書ではあまり見えない茶人肖像図は、日本の煎茶書の中によく載せられた。優れた茶人を宣伝し煎茶を広げる意図がうかがえる。

表④ 煎茶書の図版の一覧表

資料番号 ¹⁴	書名	図版	茶器	茶式	茶人肖像	色刷り
1	『茶経』	あり	○			墨刷り
2	『茶録・新刻茶具図贊』	あり	○			墨刷り
3	『和漢茶誌』					
4	『青湾茶話』	あり	○	○		墨刷り
5	『茶董』					
6	『売茶翁偈語』				○	
7	『煎茶訣』					
8	『茶経詳説』					
9	『茶器図解』	あり	○			墨刷り
10	『考茶録』	あり		○		墨刷り
11	『清風瑣言』	あり	○			墨刷り
12	『煎茶略説』					
13	『自辨茶略』	あり	○		○	墨刷り
14	『茶史』（劉源長）					
15	『烹茶樵書』	あり			○	墨刷り
16	『茶集』					
17	『煎茶式』	あり	○			墨刷り
18	『枕山楼茶略』					
19	『煎茶斧』					
20	『茶癡醉言』					
21	『茶史』（真間人）					
22	『啓沃堂随筆』	あり	○			墨刷り
23	『四詠唱和』					
24	『淹茶式』	あり	○	○		墨刷り
25	『売茶翁茶器図』	あり	○			多色刷り
26	『良山堂茶話』					
27	『石山齋茶具図譜』	あり	○	○		墨刷り
28	『竹田荘茶説』	あり	○	○		墨刷り
29	『竹田荘泡茶訣』	あり	○			墨刷り
30	『泡茶新書三種』	あり	○	○		墨刷り
31	『煎茶小述』	あり			○	多色刷り
32	『梅山種茶譜略』					
33	『煎茶小集』	あり		○	○	多色刷り
34	『詠茶詩録』					
35	『酒茶問答』	あり			○	墨刷り
36	『新撰煎茶一覽』	あり	○			墨刷り
37	『煎茶手引之種』	あり	○	○		墨刷り
38	『木石居煎茶訣』	あり	○	○		墨刷り
39	『清風煎茶要覽』	あり	○	○	○	墨刷り

¹⁴ 本表は主に第一章第五節の節末の一覧表に提示した資料に基づいて作成したため、資料番号が共通している。

40	『仙境逸楽』					
41	『魁々園茶集』					
42	『続茶経』					
43	『煎茶綺言』	あり			○	墨刷り
44	『喫茶辨』					
45	『煎茶要格』	あり		○		墨刷り
46	『南宗茶具名牋』					
47	『青湾茶会図録』	あり	○	○		墨刷り
48	『煎茶図式』	あり		○		多色刷り
49	『蓬仙茶話 茶器編』	あり		○		墨刷り
50	『淹茶小録』	あり		○		墨刷り
51	『鋏荘茶譜』	あり	○		○	墨刷り

第五節.刊記・版元について

本節は節末の表⑤に基づいて煎茶書の刊記に載る版元について検討する。書籍の刊行は出版業の盛衰と緊密に繋がっている。特に、商業出版の拡大によって情報伝達が容易になり、社会文化の発展のあり方にも大きな影響を与える。例えば、かつて中国明代の後期と末期には多くの茶書が著され、茶文化の繁栄期を迎えた。その要因は、中国の明末に江南地方における出版業の隆昌にあった。そして、近世の日本においても同じ現象が現れた。近世の商業出版の発達は煎茶書の刊行ブーム発生の要因だと考えられる。このような中での江戸時代における煎茶書の刊行には、以下の通りいくつかの特徴がある。

まず、江戸前期と中期における煎茶書の刊行は、主に京都の版元によって行われた。江戸前期、専門的な出版社が続々と登場し、最も早く商業出版の時代に入ったのは京都である。当時、出版技術を持つ職人集団が京都で自立し、注文に応じて利益を求めめるための本を作り始めた。世の中に流布していた書籍が多く翻刻され、出版物が多様化した。特に、新しく伝来してきた明代の漢籍の翻刻が盛んに行われるようになった¹⁵。明刻本『茶経』の翻刻は春秋堂によって翻刻され、山形屋七兵衛によって発兌されたものなどが、その代表例である。

江戸中期に入ると、版元が組織化され、商業出版がさらに発達していく。江戸中期における煎茶書の刊行は依然として京都の版元が出版を主導していたが、本屋は仲間という組織に入って本屋仲間を結成した¹⁶。それによって、版元が連名で刊記に登場する相合版の煎茶書が増えた。例えば、『茶経詳説』は浅井荘右衛門、佐々木惣四郎、小川久兵衛、小川源兵衛によって刊行された。

¹⁵ 江戸前期の出版の特徴については、堀川貴司の「近世初期・前期の出版」の説を踏まえて論じた。堀川は「この時期の商業出版はそれらを覆刻し、また新規に作品を求め、更に多種多様な出版を展開しました。……漢籍や医書も、内容が多様化し、新しく入ってきた明代のものや和刻も盛んに行われるようになります」と指摘している。堀川貴司、『書誌学入門 古典籍を見る・知る・読む』、勉誠出版、2019、p. 158。

¹⁶ 堀川貴司の「近世中期の出版」の「本屋仲間の結成」と「本屋仲間の活動」の説を参照。堀川貴司、『書誌学入門 古典籍を見る・知る・読む』、勉誠出版、2019、pp. 163～164。

小川源兵衛は主版元として、佐々木惣四郎と合作して版木を彫り、浅井莊右衛門と小川久兵衛は版株を所有していたために自由に販売することができた。そして、大坂の版元も煎茶書の刊行に参入した。例えば、大坂の版元渋川清右衛門と大賀惣兵衛が大枝流芳の著書『雅遊漫録』を刊行する前に、先に『青湾茶話』の部分を『雅遊漫録』から抽出し、独立の作品として販売を行った。一方、本屋仲間に所属する版元ではなく、個人が自費で製作出版する煎茶書もあり、いわゆる私家版の煎茶書が現れた。木村兼葭堂の『煎茶訣』はその代表例である。

江戸後期になると、江戸と尾張の版元が積極的に煎茶書の刊行に参加したため、京都は煎茶書の刊行の中心的地位を独占できなくなった。煎茶書の商業出版は京都・大坂・江戸・尾張の四大都市に現れ、それぞれに特色を持ちながら発展していった¹⁷。例えば、江戸では、茶舗主人の主導で、実用的な煎茶手引書の刊行が増えた。例えば、大鳳軒主人豊田甚が真間人に依頼して刊行した『茶史』は私家版の煎茶書である。また、都龍軒主人山本徳潤著の『煎茶小述』もこの類に属す。さらに、江戸では、中国の文人趣味を重視した煎茶書の刊行も特徴であった。例えば、館柳湾、飯山義方、椿椿山など煎茶を嗜んだ江戸後期の文人集団の活躍とともに、『四詠唱和』、『詠茶詩録』のような漢詩集と、『煎茶小集』のような画帖が現れた。一方、尾張では、中国茶書の和刻本の刊行が目立った。内田蘭渚、大館高門など地元の商人と知識人によって、『茶史』（劉源長）と『枕山楼茶略』のような中国茶書の和刻本が刊行された。

さらに、四大都市の版元が連名で刊行した煎茶書も増えた。最も代表的なのは、『煎茶早指南』の刊行である。早稲田大学図書館の蔵本を調べると、『煎茶早指南』の刊記に14軒の版元の店名が載せられている。主版元は尾張の大手の版元永楽屋東四郎である。発兌に参加した版元は、須原屋茂兵衛をはじめとする江戸の書肆7軒と、河内屋吉兵衛をはじめとする大坂の書肆4軒と、京都の書肆秋田屋太右衛門と俵屋清兵衛の2軒である。その中に、須原屋一門の中

¹⁷ 堀川貴司の「近世後期。幕末明治期の出版」の「地方出版の隆興一名古屋その他」の説を参照。堀川貴司、『書誌学入門 古典籍を見る・知る・読む』、勉誠出版、2019、pp.173~174。

心で、江戸最大の版元須原屋茂兵衛や江戸中期以降大坂で勢力を誇った河内屋一門の総本家河内屋喜兵衛など、いわゆる京都と江戸の大手出版社も煎茶書の発兌に参加していることがわかった。煎茶書は四大都市においてそれぞれ独自で販売されたのではなく、四大都市が緊密に繋がって共同販売が行われたことがわかった。

江戸末期に入ると、四大都市の版元の共同販売が一般化し、庶民向けの煎茶手引書の刊行が盛んに行われた。代表的なものは、『新撰煎茶一覽』と『煎茶手引之種』である。両書の刊記にはともに四大都市の版元の名前が載っている。特に『新撰煎茶一覽』の刊記には合計 19 軒の版元名が記されており、相合版の煎茶書の中で最多である。

一方、江戸末期においては私家版と無刊記本の増加も目立つ。例えば、売茶東牛の『煎茶綺言』、川勝広運の『仙境逸楽』、『蓬仙茶話 茶器編』、小川可進の『喫茶弁』、太田乗の『淹茶小録』がそれである。周りの友人や弟子など狭い範囲で配布することを目的とした作品であるため、刊行量が少なく、書店には流通していなかった。もちろん、販売を目的とした私家版もあった。例えば、田能村竹田の『青湾茶会図録』の版木は須原屋茂兵衛、大文字屋正助、俵屋清兵衛、北村四郎兵衛、藤屋禹三郎、河内屋吉兵衛の 6 軒の書店に支配されていたが、私家版を販売する書店にとっては、版木代などの初期費用がかからずに、南画家田能村竹田の名声を借りて販売の利益を手にする事ができた。一方、私家版発行者である田能村竹田にとっても、自分の本を全国に売ることができて、自分主催の煎茶会の宣伝にもなるため、いわゆるウィンウィンの関係であった。

表⑥は、表⑤の統計に基づき、地域区分によって煎茶書の刊行や発兌に合計 2 回以上参加した版元の名前を整理したものである。表⑦の統計によれば、京都、大坂、江戸、尾張において、それぞれ煎茶書の積極的に刊行した版元が存在したことがわかる。例えば、京都の場合、佐々木惣四郎が関わった煎茶書は 5 点である。小川源兵衛が関わった煎茶書は 4 点である。そのほか、合計 2 回以上の煎茶書の刊行に関与した版元は、小川久兵衛、林喜兵衛、中川藤四郎、

浅井庄右衛門、秋田屋太右衛門、俵屋清兵衛、出雲寺文治郎の7店がある。大坂の場合、河内屋吉兵衛は5点の煎茶書刊行に参加した。英大助は4点に関わった。ほかには、渋川清右衛門、河内屋喜兵衛、河内屋茂兵衛の3店も複数の煎茶書の刊行に関与していた。江戸の場合、須原屋茂兵衛は7点の煎茶書刊行に関与しており、すべての版元の中で最多数である。須原屋新兵衛に関わった煎茶書は5点である。山城屋佐兵衛は4点に関わった。それ以外には、須原屋伊八、岡田屋嘉七、和泉屋金右衛門の3店も複数の煎茶書の刊行に参加したことがわかった。尾張の場合、三都と比べて煎茶書に関わった版元の数はいくつか少ないが、2点以上の煎茶書の刊行や発兌に参加した書肆は、永楽屋東四郎と梶田勘助の2店があった。ただし、尾張の版元は、相合版の多い三都の版元と違い、独自版が多く見られた。例えば、梶田勘助は『茶史』（劉源長）と『木石居煎茶訣』の二作の版木を独占して刊行を行ったが、ここから、尾張における学問の発達と書物購買力の高まりがうかがえる。

さらに、複数の煎茶書の刊記には、同じ本屋仲間の組み合わせがあることが確認できた。それは、煎茶書を刊行する際、本屋間で特定の仲間と協力関係を結んでいたためである。版元同士の流通ネットワークがある程度固定されていたことがうかがえる。このような協力関係は江戸中期からすでに現れ、最初は京都を中心に出現した。例えば、小川源兵衛と佐々木惣四郎はともに京都の版元であり、『茶経』、『茶経詳説』、『清風瑣言』、『茶集』の刊行の際に四度相版した。時代が下ると、地域を越えたある程度固定的な協力関係も現れた。例えば、『煎茶早指南』、『新撰煎茶一覽』、『煎茶手引之種』を刊行するとき、大坂の版元河内屋吉兵衛、河内屋喜兵衛、河内屋茂兵衛と、江戸の版元須原屋茂兵衛、須原屋新兵衛が三度合同販売に参加した。

以上より、京都・大坂・江戸・尾張の版元が積極的に近世の煎茶書の刊行に参加した。また、版元同士の連名刊行や共同販売などの現象もよく見える。江戸時代の煎茶書の刊行の盛況は、商業出版の発達と緊密に関係していたことを反映している。

表⑤ 煎茶書の版元の一覧表

資料番号 ¹⁸	書名	版元の屋号 私家版の蔵版者名	版元の堂号 私家版の蔵版者 の堂号	書肆所 在	備考(版元、蔵 版、発兌、参考 蔵本、同一版元 の姓と名乗りの 異なる組み合わせ など)
1	『茶経』初印	松永昌易	春秋館	京都	蔵版、内閣文庫 蔵本(延宝8年 前刊)。
		山形屋七兵衛	不詳	京都	発兌
	『茶経』再印	佐佐木平八	不詳	京都	宝暦8年本(布 目潮瀨『中国茶 書全集』解題に よる)。銭屋平 八
		小川久兵衛	雲松軒	京都	発兌
		小川源兵衛	友松堂	京都	同上、主版元
	『茶経』三印	佐々木惣四郎	竹苞楼	京都	補刻、天保15年 本(布目潮瀨 『中国茶書全 集』解題によ る)。銭屋惣四 郎
		辻本仁兵衛	不詳	京都	補刻
2	『茶録・新刻茶具図贊』	永田長兵衛	文昌堂	京都	永田長兵衛
3	『和漢茶誌』	中川藤四郎	文林堂	京都	版元
		中川茂兵衛	不詳	京都	版元
4	『青湾茶話』	渋川清右衛門	稱觥堂	大坂	版元、柏原屋清 右衛門
		大賀惣兵衛	揚芳堂	大坂	版元、菊屋惣兵 衛
5	『茶董』	日野屋源七	潤古堂	京都	版元、合刻
		能登屋次助	拾翠堂	加賀	主版元、合刻、 能登屋治助
6	『売茶翁偈語』	不詳	誦書堂	京都	主版元
7	『煎茶訣』	木村孔恭	兼葭堂	大坂	蔵版
8	『茶経詳説』	浅井庄右衛門	有斐堂	京都	発兌、浅井庄右 衛門
		佐々木惣四郎	竹苞楼	京都	版元、銭屋惣四 郎
		小川久兵衛	雲松軒	京都	発兌
		小川源兵衛	友松堂	京都	主版元
		不詳	不詳	不詳	無刊記本
9	『茶器図解』	不詳	不詳	不詳	無刊記本
10	『考茶録』	不詳	不詳	不詳	無刊記本
11	『清風瑣言』	中川藤四郎	文林堂	京都	版元、全梓
		鷓鴣惣四郎	竹苞楼	京都	版元、全梓。 佐々木惣四郎、 銭屋惣四郎

¹⁸ 本表は主に第一章第五節の節末の一覧表に提示した資料に基づいて作成したため、資料番号が共通している。

		小川源兵衛	友松堂	京都	版元、全梓
		浅井莊右衛門	有斐堂	京都	版元、全梓、浅井庄右衛門
		渋川清右衛門	不詳	大坂	主版元か。柏原屋清右衛門
12	『煎茶略説』	須原屋茂兵衛	千鐘堂、月花軒	江戸	版元
		河内屋記一兵衛	不詳	京都	主版元か。
13	『煎茶早指南』	須原屋茂兵衛	千鐘堂、月花軒	江戸	発兌。早稲田大学図書館蔵本。
		須原屋新兵衛	嵩山房	江戸	発兌、小林新兵衛
		須原屋伊八	慶元堂、青黎堂、文淵堂	江戸	発兌
		山城屋佐兵衛	玉山堂	江戸	発兌
		岡田屋嘉七	尚古堂	江戸	発兌
		和泉屋金右衛門	玉巖堂	江戸	発兌
		和泉屋吉兵衛	泉栄堂	江戸	発兌
		河内屋吉兵衛	龍章堂	大坂	発兌
		河内屋喜兵衛	積玉圃	大坂	発兌
		河内屋和助	万蘊堂	大坂	発兌
		河内屋茂兵衛	群鳳堂、群玉堂	大坂	発兌
		秋田屋太右衛門	宋栄堂	京都	発兌
		俵屋清兵衛	耕価堂	京都	発兌
		永楽屋東四郎	東璧堂	尾張	主版元
14	『茶史』（劉源長）	木村孔恭	兼葭堂	大坂	蔵版
		不詳	香祖軒	尾張	翻刻
		梶田勘助	文光堂	尾張	発兌
15	『烹茶樵書』	不詳	不詳	不詳	無刊記本。
16	『茶集』刊本一	不詳	考槃亭	京都	蔵版
		林伊兵衛	文錦堂	京都	発兌、早稲田大学図書館蔵本一（請求番号：ヲ09 03697）
		木村吉右衛門	温古堂	京都	発兌
		銭屋宗四郎	竹苞楼	京都	佐々木惣四郎
		小川源兵衛	友松堂	京都	発兌
	『茶集』刊本二	藤屋宗助	不詳	尾張	藤屋惣助。早稲田大学図書館蔵本二（請求番号：ヲ09 00801）
17	『煎茶式』	不詳	尚古齋	不詳	蔵版。私家版か。
18	『枕山楼茶略』刊本一	林喜兵衛	文暁堂	京都	静嘉堂文庫蔵本（請求番号：46 函 57 架）
	『枕山楼茶略』刊本二	大館高門	清廬	尾張	清廬（大館高門）の私家版か。早稲田大学図書館蔵本（請求番号：ナ03 00523）。
19	『煎茶斧』	津田養	啓沃堂	大坂	写本

20	『茶癡醉言』	上田秋成	三余齋	大坂	写本
21	『茶史』（真間人）	豊田甚	大鳳軒	江戸	私家版
22	『啓沃堂随筆』	津田養	啓沃堂	大坂	写本
23	『四詠唱和』	和泉屋金右衛門	玉巖堂	江戸	
24	『淹茶式』	不詳	自適窩	不詳	私家版か。
25	『壳茶翁茶器図』	木村孔陽	兼葭堂	大坂	蔵版
26	『良山堂茶話』	不詳	金龍閣	不詳	蔵版
27	『石山齋茶具図譜』	不詳	不詳	不詳	無刊記本、筑波大学図書館蔵本
28	『竹田荘茶説』	河内屋吉兵衛	龍章堂	大坂	筑波大学図書館蔵本
29	『竹田荘泡茶訣』	不詳	不詳	不詳	無刊記本、筑波大学図書館蔵本
30	『泡茶新書三種』	河内屋吉兵衛	龍章堂	大坂	『竹田荘茶説』の刊記と同じ。石川県立図書館李花亭文庫蔵本
31	『煎茶小述』刊本一		都龍軒	江戸	蔵版。国立国会図書館蔵本一（請求番号：特1-2747）
		河内屋吉兵衛	龍章堂	大坂	発兌
		秋田屋太右衛門	宋榮堂	大坂	発兌
		英大助	万笈堂	大坂	発兌、英屋大助
		須原屋茂兵衛	千鐘堂、月花軒	大坂	発兌
		小林新兵衛	嵩山房	江戸	主版元。須原屋新兵衛
	『煎茶小述』刊本二	小林新兵衛	嵩山房	江戸	須原屋新兵衛。国立国会図書館蔵本二（請求番号：856-8）。
32	『梅山種茶譜略』	不詳	不詳	京都	梅尾山高山寺蔵版、寺院版
33	『煎茶小集』	飯山義方	草魁園	江戸	私家版
34	『詠茶詩録』	飯山義方	草魁園	江戸	蔵版
		岡田屋嘉七	尚古堂	江戸	発兌
		西宮弥兵衛	北林堂	江戸	発兌
		小林新兵衛	嵩山房	江戸	発兌。須原屋新兵衛
		山城屋佐兵衛	玉山堂	江戸	発兌
		須原屋茂兵衛	千鐘堂、月花軒	江戸	発兌
		須原屋佐助	金花堂	江戸	発兌
		須原屋伊八	慶元堂、青黎堂、文淵堂	江戸	発兌
		英大助	万笈堂	江戸	発兌。英屋大助
		英文蔵	青雲堂	江戸	発兌。英屋文蔵
35	『酒茶問答』	不詳	松榮堂	京都	主版元
36	『新撰煎茶一覽』	不詳	竹月齋	不詳	蔵版
		不詳	万莊堂	京都	発兌
		須原屋茂兵衛	千鐘堂、月花軒	江戸	発兌
		山城屋佐兵衛	玉山堂	江戸	発兌
		西宮弥兵衛	北林堂	江戸	発兌
		丁子屋平兵衛	文溪堂	江戸	発兌、丁字屋平兵衛

		英大助	万笈堂	江戸	発兌、英屋大助
		小林新兵衛	嵩山房	江戸	発兌、須原屋新兵衛
		須原屋伊八	慶元堂、青黎堂、文淵堂	江戸	発兌
		岡田屋嘉七	尚古堂	江戸	発兌
		永楽屋東四郎	東璧堂	尾張	発兌
		松屋善兵衛	昭華堂	尾張	発兌
		秋田屋太右衛門	宋榮堂	大坂	発兌
		河内屋茂兵衛	群鳳堂、群玉堂	大坂	発兌
		秋田屋市兵衛	宝文堂	大坂	発兌
		河内屋喜兵衛	積玉圃	大坂	発兌
		菱屋正次郎	不詳	京都	発兌
		出雲寺文次郎	松栢堂	京都	発兌、出雲寺文治郎
		近江屋佐太郎	弘文堂	京都	発兌
		亀屋善兵衛	耕書園	京都	発兌
		丁子屋源次郎	正宝堂	京都	発兌、丁字屋源次郎
37	『煎茶手引之種』	河内屋喜兵衛	積玉圃	大坂	発兌
		河内屋茂兵衛	群鳳堂、群玉堂	大坂	発兌
		出雲寺文治郎	松栢堂	京都	発兌、出雲寺文次郎
		英大助	万笈堂	江戸	発兌、英屋大助
		須原屋茂兵衛	千鐘堂、月花軒	江戸	発兌
		須原屋新兵衛	嵩山房	江戸	主版元か。小林新兵衛
38	『木石居煎茶訣』	梶田勘助	文光堂	尾張	主版元
39	『清風煎茶要覧』	山城屋佐兵衛	玉山堂	京都	主版元
40	『仙境逸楽』	川勝広運	蓬仙窩	江戸	無刊記本。私家版か。
41	『魁々園茶集』	売茶東牛	魁々園	京都	写本
42	『続茶経』	売茶東牛	魁々園	京都	写本
43	『煎茶綺言』	売茶東牛	魁々園	京都	蔵版
44	『喫茶辨』	小川可進	後楽堂	京都	蔵版
45	『煎茶要格』	不詳	禿池庵	不詳	蔵版
46	『南宗茶具名牋』	島孟克	全真茶寮	江戸	蔵版
47	『青湾茶会図録』	田能村直入	清湾茶寮	大坂	蔵版
		須原屋茂兵衛	千鐘堂、月花軒	江戸	発兌
		大文字屋正助	不詳	京都	発兌
		俵屋清兵衛	耕佃堂	大坂	発兌
		北村四郎兵衛	京之軒、杏林軒	大坂	発兌
		藤屋禹三郎	墨香居	大坂	発兌
		河内屋吉兵衛	龍章堂	大坂	主版元か。
48	『煎茶図式』	不詳	不詳	不詳	無刊記本。
49	『蓬仙茶話 茶器編』	川勝広運	蓬仙窩	江戸	無刊記本。私家版か。
50	『淹茶小録』	太田乗	氷清茶寮	不詳	蔵版、私家版か。
51	『鍊荘茶譜』	佐々木惣四郎	竹苞楼	京都	蔵版、銭屋惣四郎

表⑥ 各地の版元の刊行・発兌に参加した煎茶書の書目の一覧表

版元	書肆所在	刊行・発兌に参加した煎茶書の書目	資料番号 ¹⁹	合計
小川久兵衛	京都	『茶経』、『茶経詳説』	1,8	2
小川源兵衛	京都	『茶経』、『茶経詳説』、『清風瑣言』、『茶集』	1,8,11,16	4
佐々木惣四郎	京都	『茶経』、『茶経詳説』、『清風瑣言』、『茶集』、『鍔荘茶譜』	1,8,11,16,51	5
林喜兵衛	京都	『茶経』、『茶経詳説』	1,18	2
中川藤四郎	京都	『和漢茶誌』、『清風瑣言』	3,11	2
浅井庄右衛門	京都	『茶経詳説』、『清風瑣言』	8,11	2
秋田屋太右衛門	京都	『煎茶早指南』、『煎茶小述』、『新撰煎茶一覽』	13,31,36	3
俵屋清兵衛	京都	『煎茶早指南』、『青湾茶会図録』	13,47	2
出雲寺文治郎	京都	『新撰煎茶一覽』、『煎茶手引之種』	36,37	2
渋川清右衛門	大坂	『青湾茶話』、『清風瑣言』	4,11	2
河内屋吉兵衛	大坂	『煎茶早指南』、『煎茶小述』、『竹田荘茶説』、『泡茶新書三種』、『青湾茶会図録』	13,28,30,31,47	5
河内屋喜兵衛	大坂	『煎茶早指南』、『新撰煎茶一覽』、『煎茶手引之種』	13,36,37	3
河内屋茂兵衛	大坂	『煎茶早指南』、『新撰煎茶一覽』、『煎茶手引之種』	13,36,37	3
英大助	大坂	『煎茶小述』、『新撰煎茶一覽』、『詠茶詩録』、『煎茶手引之種』	31,34,36,37	4
須原屋茂兵衛	江戸	『煎茶略説』、『煎茶早指南』、『煎茶小述』、『詠茶詩録』、『新撰煎茶一覽』、『煎茶手引之種』、『青湾茶会図録』	12,13,31,34,36,37,47	7
須原屋新兵衛	江戸	『煎茶早指南』、『煎茶小述』、『詠茶詩録』、『新撰煎茶一覽』、『煎茶手引之種』	13,31,34,36,37	5
須原屋伊八	江戸	『煎茶早指南』、『詠茶詩録』	13,34	2
山城屋佐兵衛	江戸	『煎茶早指南』、『詠茶詩録』、『新撰煎茶一覽』、『清風煎茶要覧』	13,34,36,39	4
岡田屋嘉七	江戸	『煎茶早指南』、『詠茶詩録』、『新撰煎茶一覽』	13,34,36	3
和泉屋金右衛門	江戸	『煎茶早指南』、『四詠唱和』	13,23	2
永楽屋東四郎	尾張	『煎茶早指南』、『新撰煎茶一覽』	13,36	2
梶田勘助	尾張	『茶史』（劉源長）、『木石居煎茶訣』	14,38	2

¹⁹ 本表は主に第一章第五節の表①に提示された資料に基づいて作成したため、資料番号が共通している。

第六節. 広告・未刊書目について

煎茶書の最後には常に広告の情報が載せられていた。これは読者が引き続き購買意欲を高めるために置かれたもので、販売者の工夫がうかがえる。また、多くの書籍情報が附載され、宣伝効果も発揮されている。

広告は奥付の中の一部として煎茶書の末尾に載せられており、主に既刊広告と近刊予告の二種類に区分できる。そして、内容によって著者主体と版元主体、という二つの宣伝方向がうかがえる。

著者主体の広告は、その著者の既刊書や近刊書を宣伝するものが多い。例えば、『青湾茶話』の広告には著者大枝流芳の既刊書『貝尽浦の錦』の宣伝と『雅遊漫録』の近刊予告が載っている。漢籍の和刻本にも同じ現象が見える。明代文人の夏樹芳の『茶董』の和刻本の最後に、同じ著者の『酒顛』と『琴苑』の近刊予告が載せられている。他には、『良山堂茶話』、『新撰煎茶一覽』、『南宗茶具名牋』も著者主体の宣伝である。

一方、版元主体の広告は、版元の新刊予告と蔵版目録を宣伝するものが多い。例えば、『煎茶早指南』の最後に「尾張名古屋書肆東壁堂製本略目録記」があり、これは十丁を越すものである。また、版元主体の広告は、近い題材の書籍を載せている。例えば、『四詠唱和』の広告には同著者館柳湾の『晚唐十家絶句』、大窪詩仏の『聯珠詩格』、清代文人趙翼『甌北詩選』と『甌北詩話』など、漢詩集を中心に宣伝している。『竹田荘茶説』の広告には大枝流芳の『煎茶仕用集』（『青湾茶話』の改題書）の宣伝がある。『木石居煎茶訣』の広告には、劉源長の『茶史』の宣伝がある。

また、煎茶書の広告の中でも、未刊茶書の情報は見落としやすい。ここでは、未刊煎茶書の書目と出所を表⑦にまとめる。煎茶書の広告には、「嗣刻」、「嗣出」等の文字を付して作者名と書名が記される宣伝予告が多い。しかし、予告はされたものの、結局未刊に終わったものも多い。例えば、『清風瑣言』の広告に、「続茶経 嗣出」がある。売茶東牛の写本『続茶経』よりもっと早い段階で、すでに清人陸延燦の茶書『続茶経』を刊行しようとする版元が現れたことが窺える。ま

た、『山陽先生題跋』には「題続茶経後（続茶経の後に題す）」という跋文が収録されているが、和刻本の『続茶経』が実際に刊行されたということなのかもしれない。また、『新撰煎茶一覽』の広告には、「清談楼主人著書目」とあり、『煎茶一覽 後編』一冊、『皇朝茶譜』二冊、『煎茶全書』三冊、『金銀水』一冊の宣伝があるが、いずれも未見であり、散逸した可能性が大きい。

さらに、必ずしも原稿があってから近刊予告を出していたわけではなく、最初から原稿もないまま、それらしいものの書名を出すという状況もあった。例えば、『良山堂茶話』二編の広告には「三編 嗣刻」の宣伝があるが、未刊のままに終わった可能性が高い。また、『南宗茶具名牋』の広告には「近刻書目」とあり、『淹煎茶具図賛』二卷、『烹茶集説』四卷、『茶寮閑話 附茶具器銘』二卷、『闘茶小品』一巻を予告していたようだが、いずれも未見である。

未刊茶書を調査するためには、広告を調べるほかに、江戸時代の漢文集の中にも新しい発見がある。例えば、江戸後期の儒者斎藤拙堂の『拙堂文集』の中に、「煎茶集説序」という文章が収録されている。文章によれば、大島子復の『煎茶集説』のために書かれた序文がある²⁰。

（子復）一日持所著煎茶集説来請余序。為卷若干、多纂和漢茶籍、参以己説。従湯候煎則之秘、至選器辨水之訣、悉備焉。

一日著する所の煎茶集説を持つて来て余に序を請ふ。卷若干を為し、和漢の茶を纂するころ多く、己の説を以て参ず。湯候、煎則の秘より、選器、辨水の訣に至るは、悉く備ふ。

とあるように、巻数および主な内容について述べているため、『煎茶集説』の原稿が確かに存在したといえるが、残念ながら本書はすでに散逸した。

以上より、煎茶書の末尾に載せられた広告の主な役割は、同一著者の作品の宣伝あるいは近い題材の書籍の宣伝のためである。そして、煎茶書の広告を通して未刊行の煎茶書の書名と概要を確認することができた。

²⁰ 斎藤拙堂、『拙堂文集』卷三、国立国会図書館蔵本、1881。

表⑦ 未刊・未見煎茶書の一覧表

	未刊・未見茶書の書目	作者	巻数	出所	備考
1	『続茶経』	(清) 陸延燦	不明	『清風瑣言』の広告	中国茶書の和刻本
2	『良山堂茶話』三編	阿部縑洲	1	『良山堂茶話』二編の広告	『良山堂茶話』の続篇、随筆集
3	『煎茶一覽』後編	清談楼主人	1	『新撰煎茶一覽』の広告	『新撰煎茶一覽』の続篇
4	『皇朝茶譜』	清談楼主人	2	『新撰煎茶一覽』の広告	日本の喫茶史関係書
5	『煎茶全書』	清談楼主人	3	『新撰煎茶一覽』の広告	煎茶全般の手引書。
6	『金銀水』	清談楼主人	1	『新撰煎茶一覽』の広告	喫茶関係の詩歌、連句、俳句、狂文
7	『淹煎茶具図賛』	島孟克	2	『南宗茶具名牋』の広告	煎茶器の図録
8	『烹茶集説』	島孟克	4	『南宗茶具名牋』の広告	煎茶全般の手引書
9	『茶寮閑話 附茶具器銘』	島孟克	2	『南宗茶具名牋』の広告	煎茶器関係書
10	『闘茶小品』	島孟克	1	『南宗茶具名牋』の広告	闘茶関係書
11	『煎茶集説』	大島子復	不明	『拙堂文集』巻三	煎茶全般の手引書

第三章. 煎茶書の源流をたどる：明代の茶書と喫茶文化について

はじめに

江戸時代の煎茶書に関する研究を行う前に、その源流である中国茶書を知る必要がある。煎茶史研究にとって、中国茶文化の研究の重要性について、矢部誠一郎は論文「煎茶史研究の展望」で次のように述べている¹。

江戸時代に文人の中に浸透した煎茶は、いうまでもなく中国茶を継承したものであった。その技術、すなわち煎法も礼法もこれを受け入れたことになる。就中、文人精神は我が国の文人に受け入れられ、唐様崇拜の精神が横溢した。したがって我国の煎茶研究の端緒は中国文人精神の研究に見出されなければならぬまい。中国文人の精神が具像化されたものの一つが煎茶であるから、我が国の文人がこれを受け入れた素地としての中国文人の思想・精神の研究が不可欠となってこよう。中国茶の研究によって文人精神を探求するのが我々にとって便宜的でもあり、また、煎茶の中にどのような文人精神が包含されているかを知ることが可能であろう。したがって、中国茶の研究から我が国の煎茶の研究の原型を知る必要がある。

矢部誠一郎は中国茶の研究の重要性を説き、特にその中で文人精神を強調している。中国茶書は、煎茶書研究の立場からも不可欠のはずである。特に、江戸時代の煎茶の形態と精神面に共通点が最も多い明代茶書の研究が重要である。しかし、現段階においてはそのような研究が未だに見えていない。江戸時代の煎茶書は中国茶書を原型としながらも、日本化の程度が著しいところに原因があると思われる。ただ、江戸時代の煎茶書研究を深めるためには、明代茶書の研究

¹ 矢部誠一郎、「煎茶道史研究」、『日本茶の湯文化史の新研究』、雄山閣、2005、pp. 20～21。

を軽視することはできず、明代の喫茶文化の特徴も把握しなければならない。

本章は明代の茶書、製茶法、喫茶法を中心に考察し、明代の文人茶についても検討したい。それによって煎茶の発祥地である中国明代の喫茶文化の様子を解明したい。また、本章の研究は次の第四章と緊密に繋がっているため、第四章の先行研究ともいえる。第四章は本章を踏まえて日本の煎茶書にみる中国茶書と中国茶文化、とくに文人茶への受容について検討したい。

第一節.明代の茶書刊行

中国は長い喫茶の歴史を持っており、茶文化は中国の重要な伝統文化である。歴代の製茶法と喫茶法は常に変化しており、唐、宋、明代の茶文化の流行地に大きな地域差が存在している。それは、茶文化の中心が常に政治の中心及び経済の中心に従って移動したからである。

また、茶書は茶文化の発展史を記録する重要な史料である。製茶法と喫茶法の発展とともに、茶文化に関する茶書が必ず現れる。唐の陸羽は世界最初の茶書『茶経』を完成させたことによって、茶が飲み物から学問になったことを示した。歴代の茶書に基づき、高橋忠彦は中国の茶文化は主に以下の三つの段階に分けられる、と述べている²。第一階段は陸羽の『茶経』を以て、唐代の煎茶法の完成を示すものであり、茶文化の中心は江南地域の湖州である。第二階段は蔡襄の『茶録』および宋徽宗の『大観茶論』を以て、宋代の点茶法の完成を示すものであり、茶文化の中心は建安である。第三階段は許次紆の『茶疏』を以て、明代の茶壺（ティーポット）を使用する泡茶法の完成を示すものであり、茶文化の中心は江南地区の杭州と蘇州である。

宋代では、団茶を使用する点茶法が流行したが、元朝モンゴル人の百年以上の統治により、漢民族の生活習慣が大きく変化し、それに従って茶文化も激しく変化した。明朝は中国封建社会最後の漢民族統治の王朝であるが、その明代になると、点茶法が徐々に消滅し、泡茶法が普及した。特に江南地方の茶文化は前代の

² 高橋忠彦、「中国喫茶文化と茶書の系譜」、『東京学芸大学紀要』、人文科学、2016、pp. 209～221。

茶文化をはるかに超えるほど繁栄し、多くの優れた茶人が現れ、優秀な茶書が出版された。そのため、明代茶学は中国古代の茶文化の最高峰に達したといえる。

明代茶文化の繁栄は、茶書の刊行ブームに大きく関係している。茶書は茶葉、製茶法、喫茶法、茶文学に関するすべての著作であり、中国古代茶文化を研究するための重要な資料である。唐代と宋代に刊行された茶書と比べて、明代の茶書の数は明らかに増えたが、多くの茶書の内容は短い。長い時間を経て、多くの明代茶書が散失し、明代に出版された茶書で現存するものはわずかであるが、そこから明代の茶書出版の風気の盛んな様子を覗くことができる。以下に、蔡定益の明代茶書研究を踏まえた明代茶書の一覧表を作成した³。

明代茶書一覧表

	書名	刊行時期	作者	籍貫	身分	主な内容
宣徳、正統年間						
1	茶譜	1430～ 1448	朱権	南直隸応天	明宗室	喫茶全般
弘治年間						
2	茶苑	1489	黄履道	南直隸毘陵	文人	喫茶全般
嘉靖年間						
3	茶馬志	1524	陳講	四川遂寧	役人	喫茶法
4	茶譜	1539 前	朱祐楨	北直隸順天	明宗室	喫茶全般
5	茶譜	1541	顧元慶	南直隸長洲	文人	喫茶全般
6	水辨	1542	僧真清	南直隸歙県	僧人	水論
7	茶経外集	1542	僧真清	南直隸歙県	僧人	喫茶文学
8	煮泉小品	1554	田芸蘅	浙江錢塘	文人	水論
9	水品	1554	徐猷忠	浙江山陰	役人	水論
隆慶年間						
10	茶寮記	1570 前後	陸樹声	南直隸華亭	役人	茶芸
万暦年間						
11	茶経外集	1588	孫大綬	新都（南直隸徽州或いは 浙江嚴州）	文人	喫茶文学
12	茶譜外集	1588	孫大綬	新都（南直隸徽州或いは 浙江嚴州）	文人	喫茶文学
13	茶箋	1590 前後	屠隆	浙江鄞県	役人	喫茶全般
14	茶録	1592	程用賓	新都（南直隸徽州或いは 浙江嚴州）	不明	喫茶全般
15	煎茶七類	1593	徐渭	浙江山陰	文人	茶芸
16	茶考	1593	陳師	浙江錢塘	役人	喫茶全般
17	歴朝茶馬奏議	1593	徐彦登	浙江仁和	役人	喫茶法
18	茶集	1595	胡文煥	浙江錢塘	文人	喫茶文学
19	茶録	1592 前	張源	南直隸呉県	文人	喫茶全般

³蔡定益、「明代茶書の版本、種類和作者」、『明代茶書研究』、中国社会科学出版社、2017、pp. 15～68。

20	茶話	1595～ 1613	陳繼儒	南直隶華亭	文人	喫茶全般
21	茶經	1596	張丑	南直隶昆山（長洲、吳県 の説もある）	文人	喫茶全般
22	茶疏	1597	許次紓	浙江錢塘	文人	喫茶全般
23	茶乘	1602	高元濬	福建竜溪	文人	喫茶全般
24	茶乘拾遺	1602	高元濬	福建竜溪	文人	喫茶全般
25	羅芥茶記	1605～ 1615	熊明遇	江西進賢	役人	喫茶全般
26	茶録	1609 前後	馮時可	南直隶華亭	役人	喫茶全般
27	茶解	1609	羅廩	浙江慈溪	文人	喫茶全般
28	蔡端明別紀・茶癖	1613	徐渤	福建閩県	文人	喫茶文学
29	茶箋	1610	聞竜	浙江鄞県	文人	喫茶全般
30	茗笈	1610	屠本峻	浙江鄞県	役人	喫茶全般
31	茗笈品藻	1610	王嗣爽等	浙江鄞県	役人	喫茶文学
32	茶董	1610	夏樹芳	南直隶江陰	役人	喫茶文学
33	茶董補	1612	陳繼儒	南直隶華亭	文人	喫茶文学
34	蒙史	1611	竜膺	湖広武陵	役人	喫茶全般/ 水論
35	茶集	1613	喻政	江西南昌	役人	喫茶文学
36	烹茶図集	1613	喻政	江西南昌	役人	喫茶文学
37	茶書	1613	喻政	江西南昌	役人	喫茶全般
38	茗譚	1613	徐渤	福建閩県	文人	喫茶全般
39	茶説	1615	黄竜徳	南直隶上元	文人	喫茶全般
40	品茶要録補	1615	程百二	南直隶徽州	文人	喫茶文学
41	茶經	1616 前	湯頭祖	江西臨川	役人	喫茶全般
42	運泉約	1620 前	李日華	浙江嘉慶	役人	水論
泰昌、天啓年間						
43	茗史	1621	万邦寧	浙江鄞県	役人	喫茶文学
44	品茶八要	1621～ 1627	華淑	南直隶无錫	文人	茶芸
45	芥茶箋	1623	馮可賓	山東益州	役人	喫茶全般
崇禎年間						
46	陽羨茗壺系	1640 以後	周高起	南直隶江陰	文人	茶具
47	洞山芥茶系	1640 以後	周高起	南直隶江陰	文人	茶葉
48	茶酒争奇	1643 以後	鄧志謨	江西安仁	文人	喫茶文学
不明						
49	茶書	1643 前	佚名	不明	不明	喫茶全般
50	茶書	不明	醉茶消客	不明	不明	喫茶文学

明代茶書の完成時期については、前期茶書・中期茶書（嘉靖隆慶年間）・後期茶書（万曆以後）のように、大きく三つの段階にわけることができる。明代前期は茶書の醸成期である。前期茶書は朱権の『茶譜』、黄道履の『茶苑』の2点のみである。元から明代初期にかけては、約百年間、新しい茶書が著されなかった。その後、宣徳、正統の間、朱権の『茶譜』が著されたが、これは前期茶書の代表的なものとされており、宋元の茶文化を継承しながら、隠士特有の文人趣味も見られ、中期茶書と後期茶書に大きな影響を与えた独創性のある書物である。

明代中期に入ると、8点の茶書が現れた。嘉靖年間の陳講の『茶馬志』、朱祐楨の『茶譜』、顧元慶の『茶譜』、真清の『水辨』と『茶経外集』、田芸蘅の『煮泉小品』、徐猷忠の『水品』と隆慶年間の陸樹声の『茶寮記』である。この時期は明代茶書の発展期であり、茶書の数が徐々に増加し始めた。さらに、茶書の内容から見れば、明代中期から特徴的な茶文化が形成され始め、なかでも主に以下の三つの特徴が窺える。一つ目は、茶の真香を強調することである。茶の純粋な味を求めるために、中に茶葉と香料を入れることに反対する傾向が強くなる。二つ目は、水を重視することである。田芸蘅の『煮泉小品』と徐猷忠の『水品』のような水をテーマとする作品が出現した。これは唐代の張又新の『煎茶水記』以降、再び現れた水論作品である。明代の茶人がますます茶の水を重視し、良い水を見つけるために名山泉を尋ねて、いろいろと工夫したことが見受けられる。三つ目は、喫茶の精神性を強調することである。中期茶書は文人生活を含めて論じている。茶人は隠逸の気風溢れる脱俗的空間を作ることを工夫し、茶寮や茶亭などを構築した。茶書では、茶人の品格など精神面に関することについても強調している。

明代後期に入り、茶書の数量が一気に増加し、その大量の茶書は万暦年間に集中的に出版された。万暦以降、約40点の茶書が出現し、これらは明代茶書の八割を占めている。したがって、明代の茶書はほぼ嘉靖から万暦までの百年間に完成されたといえる。明代後期の茶書の中には、独創性があり、時代の特徴を反映した優秀な茶書が少なくない。明代茶人は個人の実践や経験を踏まえ、唐宋の茶文化を継承し、明人独自の茶文化を創造した。例えば、張源の『茶録』、許次紓の『茶疏』、羅廩の『茶解』がそれである。さらに、製茶技術の発展に伴って、江南地方の茶生産についての作品も増えたが、代表的なものは芥茶について論じた書物である。芥茶は浙江省宜興と長興の付近の蒸青緑茶であり、また明代の有名な献上品でもある。芥茶を論じた茶書は熊明遇の『羅芥茶記』、馮可賓の『芥茶箋』、周高起の『洞山芥茶系』などがあり、当時の宜興と長興の芥茶生産状況を記録している。芥茶茶書を通して、明代の江南地方における茶生産の興隆が見受けられる。

さらに、この時期には、明代の茶書だけではなく、中国歴代の有名な茶書も多く再版された。しがって、同一の茶書であっても、数多くの版本が存在するのも珍しくない。例えば、最も代表的なのは陸羽の『茶経』である。沈冬梅の調査によれば、二十四種の『茶経』の版本が存在していることがわかった⁴。そのなかでも、『茶経』の多くは万暦年間に出版されていた。古い茶書を再出版することは明代茶文化の形成に直接的な影響を与えたわけではないが、唐宋の茶文化資料の保存と伝承に重大な意義を有していた。

しかし、明代後期の茶書の中には、前代の茶書の内容を勝手に剽窃したりする現象もよくある。このような作品には誤記、誤伝が多いため、その質は低下した。これは明代後期の印刷業の急速な発展と深い関係がある。書肆の経営者たちは、利益をもたらすことができれば、名人の名を仮託することはもちろん、偽作、盗作など不正行為も時々行う。

第二節. 明代の製茶法

宋代の団茶は有名であり、中国だけではなく、日本もその大きな影響を受けている。現代の茶の湯は、団茶の点茶法に由来したものである。しかし、明代に入ると団茶の生産はすでに停止し、点茶法の姿も次第に消えた。代わりに葉茶の生産が盛んになり、泡茶法が代表的な喫茶法として登場した。

もちろん、中国における団茶から葉茶への移行は、急速な変化ではなく、段階的に変化した結果である。高橋忠彦によれば、煎茶法から泡茶法への移行には、過渡的形態がさまざまに存在していることが指摘されている⁵。宋代においても、団茶の点茶法だけではなく、葉茶を使用する煎茶法も残存している。これは後に泡茶法への移行につながっている。また、葉茶を碾いて煎茶で飲む型式から、茶壺を用いた泡茶への移行は、いくつかの中間型式を経ている。高橋忠彦はその特

⁴ 「茶経的版本及其分類」、沈冬梅校注、『茶書校注』、中国農業出版社、2006、pp. 19～28。

⁵ 第四章「宋代の草茶と煎茶」と第五章「泡茶の完成に至るまでの変遷について」による。高橋忠彦、「唐宋を中心にした煎茶法の変遷について」、『東洋文化研究所紀要』109、1989、pp. 260～267。

徴を次のようにまとめて指摘している。第一は、葉茶を粗く砕いてから煎じる方法、第二は葉茶を湯にひたして柔らかくしてから煎じる方法、第三は、葉茶を器に入れて湯にひたして、そのまま飲む方法であり、その次に、茶壺を用いた方法が位置する⁶。明代に入ると、朱元璋は団茶を廃止して葉茶を献上茶とする詔勅を下したが、これは葉茶の隆盛を世間に示す象徴的な事例であった。明洪武 24 年 (1391)、貧民出身の明太祖朱元璋は竜団茶の製造を停止させ、改めて散茶 (団茶に加工される前の茶葉) の献上を命じた。朱元璋の団茶献上の廃止によって、建安団茶の献上茶における至上の地位が揺らぎ始めた。『明史』に次のように記されている⁷。

其上供茶、天下貢額四千有奇、福建建寧所貢最為上品、有探春、先春、次春、紫笋及薦新等号。旧皆採而碾之、压以銀板、為大小竜団。太祖以其勞民、罷造、惟令採茶芽以進。

其れ上供茶、天下の貢額四千に奇有り、福建の建寧の貢する所最も上品なり、探春、先春、次春、紫笋及薦新等の号有り。旧に皆採してこれを碾き、銀板を以て圧し、大小竜団を為す。太祖は其れ民を労わるを以て造るを罷め、惟だ令をして茶芽を採らしめて以て進むのみ。

朱元璋は民の力を大切にするために竜団茶の生産を停止させ、茶芽を献上品と改めて命じた。茶芽とは散茶のことである。

太祖高皇帝極喜顧渚茶、定額貢三十二斤、歳以為常。

太祖高皇帝極めて顧渚茶を喜ぶ。額を貢ぐこと三十二斤に定め、歳に以て常なることと為す。

⁶ 第六章「まとめ」による。高橋忠彦、「唐宋を中心にした煎茶法の変遷について」、『東洋文化研究所紀要』109、1989、p. 269。

⁷ (清) 張廷玉、『明史』、卷八十・志五六、中華書局、1980、p. 1955。

とあるように、朱元璋が顧渚茶という散茶を好んだために龍団茶の製造を止めた、という説もある⁸。

朱元璋のこの改革は、明清の茶文化に対して非常に大きな影響を与えた。『五雜俎』に、

古人造茶，多舂令細末而蒸之……至宋始用碾。揉而焙之，則自本朝始也。

古人の茶を造るには、多く舂^{うすず}きて細末にせしめて之を蒸す……宋に至りて始めて碾^{あぶ}を用う。揉みて之を焙るは、則ち本朝より始まるなり。

とあるように、皇帝の好みに迎合し、茶の生産は団茶から散茶に移行し、それに応じて新たな喫茶法も生まれ始めた⁹。

また、沈徳符は『万曆野獲編』で以下のように述べており、朱元璋の功績を高く賞賛している¹⁰。

今人惟取初萌之精者汲泉置鼎、一瀹便啜、遂開千古茗飲之宗。乃不知我太祖實首辟此法、真所謂聖人先得我心也。陸鴻漸有靈、必俯首服、蔡君謨在地下、亦咋舌退矣。

今の人は惟だ初萌の精なる者を取り、泉を汲みて鼎を置き、一瀹すれば便ち啜る。遂に千古茗飲の宗を開く。乃ち我が太祖實に首めて此法^{ひら}を辟き、真に所謂聖人^{きま}先に我が心を得るなり。陸鴻漸靈有らば、必ず俯首して服せん。蔡君謨地下に在らば、亦た咋舌して退かんや。

沈徳符の朱元璋の「開千古茗飲之宗（千古茗飲の宗を開く）」などの説はもちろん過言である。この功勞をすべて明太祖一人に帰するのは妥当ではなかろう。

⁸ (明) 陳繼儒、『茶話』、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014、p. 279。

⁹ (明) 謝肇淛、『五雜俎』、上海書店出版社、2001、p. 212。

¹⁰ (明) 沈徳符、『野獲編補遺』卷一供御茶。

朱元璋の政令の頒布よりずっと前に、散茶を飲用する風習はすでに民間に存在していた。たとえば、南宋の料理を記録している林洪の『山家清供』には、次のように記されている¹¹。

茶、即薬也。煎服、則去滞而化食。以湯点之、則反滞膈而損脾胃。盖世之嗜利者、多採葉雜以為末、人多怠於煎煮、宜有害也。今法、採芽、或用擘碎、以活水火煎之、飯後必少頃乃服。……此煎法也。

茶、即ち薬なり。煎服すれば、則ち滞を去りて食を化す。湯を以て之を点ずれば、則ち滞膈を反して脾胃を損なう。蓋し世の利を嗜む者は、多く葉を採りて雜を以て末と為し、人多く煎煮に怠ければ、宜しく害有るべし。今の法、芽を採り、或いは用いて擘碎し、活水火を以て之を煎じ、飯の後に必ず少頃にして乃ち服す。……此れ煎法なり。

民間の団茶の質が悪いため、活水、活火を用いて茶芽を煎服する方が点服より体に良いという。団茶を造るために莫大な人力と財力を消耗したが産量は少ない。散茶を作ればコストを下げ、一般人も手頃な価格で飲むことができる。以上のような理由により、散茶の生産が興起し、元朝に散茶を飲む風習がすでに民間に普及していた。このように見てみると、朱元璋の政策は新たな喫茶法を創造したのではなく、ただ民間の潮流に従ったのみであることが窺える。

もちろん、皇帝の政策は確実に生産促進に影響を与えた。散茶の製造は全国で盛んに発展し、名品が次々と現れた。宋朝の散茶の名品は少なく、日鑄、顧渚などに限られるが、明代になると、虎丘、天池、羅芥、陽羨、六安、竜井など名茶が多数出現した。嘉靖年間、蘇州茶人銭椿年の『茶譜』には、

茶之産於天下多矣。

茶の産天下に多からんや。

¹¹ (宋) 林洪、『山家清供』卷下茶供。

との感嘆があり¹²、その次に劍南の蒙頂石花、湖州の顧渚紫筍、峽州の碧澗明月、渠江薄片、巴東真香、福州の柏巖、洪州の白露などの名品を取り上げている。

製茶法の進歩は散茶の種類が増加した最大の原因である。特に明代中後期は、炒青緑茶の生産の繁栄がその代表である。明以前には、散茶の生産は蒸青緑茶を中心に行われていた。蒸青とは蒸気を利用して茶の葉を熱処理し、発酵を防ぐ（殺青という）方法である。炒青とは、茶の葉を鉄の釜で炒り繰り返し、水分がなくなるまで手で揉んで茶の葉の乾燥を加速させる方法である。

この炒青緑茶の発明は中国の製茶法にとって大きな進歩であった。万暦年間、浙江鄞県（寧波）の茶人屠隆は『茶箋』に虎丘、天池、陽羨、六安、竜井、天目等の炒製緑茶を取り上げた。浙江銭塘（杭州）の茶人、許次紆は『茶疏』に六安、陽羨、長興羅芥、顧渚水口、歙の松蘿、呉の虎丘、銭塘の竜井などを名茶として取り上げた。江南地方を中心として、質の優れた炒青緑茶が次々と作り出された。製茶法の進歩は新しい喫茶法——泡茶法の発展を導いた。

第三節.明代の喫茶法

一. 明代の喫茶法の改革

明代の代表的な喫茶法は泡茶法である。泡茶法とは、茶葉から味を抽出することで、茶の純粹な味を求める喫茶法である。中国では「泡茶法」を「瀹飲法」と呼んでいる学者もいる。さらに、明代の泡茶法の発展は、茶杯を使う「杯泡法」と茶壺（急須、ティーポット）を使う「壺泡法」の二つの方向に分けられる。

明代以前、中国で流行した喫茶法は唐代の「煎茶法」と宋代の「点茶法」がある。煎茶法は素朴な茶餅を粉末にして、鍋で煮ることで味を引き出す。点茶法は精緻な団茶を粉末にして、粉末をそのまま味わう。宋代の点茶法は日本に大きな影響を与えた。日本の抹茶道は宋の点茶法を基礎として発展してきた。

明代に入ると、茶の葉を煎ることから湯をかけることに変化してきた。明代前

¹² (明) 顧元慶、『茶譜』茶品、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014、p. 179。

期、朱元璋が龍団茶の献上を廃止したことより、散茶の生産が盛んになった。同時に、点茶法が徐々に消滅し、泡茶法が興起した。明の丘濬は『大学衍義補』に次のように述べている¹³。

元世祖至元十七年、置榷茶都轉運司於江州、總江淮、荊南、福広之稅、其茶有末茶、有葉茶。臣按：茶之名始見於王褒僮約而盛於陸羽茶經、唐宋以來遂為人家日用一日不可無之物。然唐宋用茶皆為細末製為餅片、臨用而輟之。……元誌猶有末茶之說、今世惟閩広間用末茶而葉茶之用遍於中国、而外夷亦然、世不復知有末茶矣。

元世祖至元十七年、榷茶都轉運司江州に置き、江淮、荊南、福広の稅を總べ、其の茶に末茶有り、葉茶も有り。臣按ずるに：茶の名、始めて王褒の『僮約』に見ゆ。而して陸羽の『茶經』より盛んにし、唐宋以來、遂に人家日用に一日無くすべからざる物と為る。然して唐宋茶を用いるに、皆細末を為して製して餅片を為す。用いるに臨めば之を輟く。……元誌に猶お末茶の說あり。今世は惟だ閩、広のみ末茶を用い、葉茶の用は中国に遍し。外夷も亦た然り。世は復た末茶のあることを知らず。

このように、元朝の時、末茶と葉茶は同時に存在していたが、明に入ると、葉茶を飲む風習がすでに全国に普及したことがわかった。この時点では、抹茶のことを知るのは福建と広東の人のみであったという。

この明代前期、およそ百年の茶書の空白期を経て、ようやく新しい茶書が著された。明の最初に著された茶書は朱権の『茶譜』である。朱権は朱元璋第十七子である。彼の『茶譜』は昔の茶書の内容を吸収したうえで、特に宋の蔡襄の『茶録』の影響を受けて著された。

予故取烹茶之法、末茶之具。崇新改易、自成一家。

¹³ (明) 丘濬著、福井軌 校、『大学衍義補』卷 29、早稲田大学図書館蔵本、1792。

予故に烹茶の法、末茶の具を取り、崇新改易して自ら一家を成す。

とある¹⁴ように、朱権は点茶法に基づいて、末茶の道具を使って独自の喫茶法を考案した。朱権の『茶譜』にはまだ泡茶法についての具体的な記録が書かれていないが、明代の茶文化を開始したという重要な意義がある。

二. 明代茶人の杯泡法

明代以前、民間の人は茶のなかに調味料を入れて、加香茶を飲む習慣があった。一方、明代中期に入ると、杯泡法を記録する茶書が登場した。この時期の杯泡法の最大の特徴は、茶の湯の純粹な味を求め、香料、茶菓を入れることを反対することである。杯泡法が茶の純粹な味を強調するのは、宋代の蔡襄の『茶譜』のいった「茶有真香（茶に真香あり）」の思想の継承だと考えられる。

茶の真香について、顧元慶は『茶譜』の中で、

茶有真香、有佳味、有正色。烹点之際、不宜以珍果香草雜之。

茶に真香あり、佳味あり、正色あり。烹点の際、宜しく珍果香草を以てこれに雜すべからず。

と述べている¹⁵。茶菓は茶自身の香、味、色を奪う恐れがあると説明している。顧元慶の『茶譜』は蔡襄の『茶譜』の内容をより充実させたものといえる。

そして、嘉靖年間、陸樹声は『茶寮記』で、喫茶法の手順についてさらに詳しく論じている。中に記載された「煎茶七類」で次のように述べている¹⁶。

三烹点、煎用活火。候湯眼鱗鱗起、沫餗鼓泛、投茗器中。初入湯少許、俟湯茗相投、即滿注。雲脚漸開、乳花浮面、則味全。盖古茶用团餅碾屑、

¹⁴ (宋) 蔡襄、『茶譜』、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館 2014、p. 77。

¹⁵ (明) 顧元慶、『茶譜』、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館 2014、p. 178。

¹⁶ (明) 陸樹声、『茶寮記』、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014、p. 222。

味易出。茶は驟則乏味、過熟則味昏底滯。四嘗茶、茶入口先灌漱、須徐啜。
俟甘津潮舌、則得真味。雜他果則香味俱奪。

三烹点。煎るに活火を用う。湯眼鱗鱗として起き、沫銜の鼓泛するを候
い、茗を器中に投ず。初めは湯少許を入り、湯茗相投ずるを俟ち、即ち満
注す。雲脚漸く開き、乳花面に浮べば、則ち味全し。蓋し古茶は団餅を用
いて屑に碾き、味出づること易し。茶葉驟にわかなれば則ち味乏しく、過熟な
れば則ち味昏にして底にとどこお滯る。四嘗茶、茶を口に入らば先ず灌漱し、須く
おもむろ徐ろに啜るべし。甘津舌を潮すを俟てば、則ち真味を得るべし。他果を
雜ぜれば則ち香と味俱に奪わる。

煎茶七類の作者については諸説あるが、徐渭の作品ともいわれている。しかし、
煎茶七類は明らかに明代以降にできた作品である。それは「三烹点」や「古茶用
団餅」という明代の人々に特徴的な言葉が用いられているからである。「四嘗茶」
には、茶を飲む時、茶の真の味を奪わないために、ほかの茶葉を入れることに反
対している。明代の喫茶法はますます茶葉の純粹な味を求める方向に発展して
いったが、その傾向が見える。

嘉靖年間、田芸蘅は『煮泉小品』に茶葉に対する自分の意見を述べた¹⁷。

今人薦茶、類下茶果、此尤近俗。縦是佳者、能損真味、亦宜去之。

今の人茶を薦むには、類して茶果を下し、此れ尤も俗に近し。縦い是れ
佳き者なれども、能く真味を損い、亦た宜しく之を去るべし。

とあるように、茶の真の味を求めるには、たとえ非常に良い茶葉があっても入れ
てはならない、とする。

また、彼は団茶の製法が茶の真味を損なうと批判し、芽茶の飲用を勧める¹⁸。

¹⁷ (明) 田芸蘅、『煮泉小品』宜茶、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014、p. 198。

¹⁸ 同上、『煮泉小品』宜茶、p. 198。

茶之团者片者、皆出於碾鎧之末、既損真味、復加油垢、即非佳品、總不若今之芽茶也。

茶の团なる者、片なる者、皆碾鎧の末より出で、既に真味を損ない、復た油垢を加え、即ち佳品に非ず。総て今の芽茶にしかず。

とある。田芸衡は自然状態で乾燥させた芽茶を茶甌の中に入れて飲用する方法を推奨している。また、

芽茶以火作者為次、生晒者為上、亦更近自然、且断煙火氣耳。……生晒茶、淪之甌中、則旗槍舒暢、清翠鮮明、猶為可愛。

芽茶火を以て作るは次と為し、生晒なるは上と為すも、亦た更に自然に近く、且つ煙火氣を断つ。……生晒茶、これを甌中に淪せば、則ち旗槍舒暢し、清翠鮮明、猶お愛すべし¹⁹。

とあり、杯泡法の様子が記録されている。

三. 明代茶人の壺泡法

しかしながら、明代の茶人たちは杯泡法に満足せず、より純粋な茶の味を求めるためにさらに工夫し、ついに壺泡法を完成させた。明代後期の万暦年間、多くの茶書が著された。それらの茶書の中には、壺泡法の記録が多く見られる。例えば、田芸衡と同じく嘉靖年間錢塘出身の進士陳師は『茶考』に

杭俗烹茶、用細茗置茶甌、以沸湯点之、名為撮泡。北客多哂之、予亦不満。

杭の俗、茶を煮るは、細茗を用いて茶甌を置き、沸湯を以て之を点じ、

¹⁹ 同上、『煮泉小品』宜茶、p198。

名づけて撮泡と為す。北客多く之を哂^{わら}い、予も亦た不満なり。

と述べる²⁰。「撮泡」とは三本の指で茶葉を茶甌に取り入れることである。杯泡法である「撮泡」が、杭州を中心に普及して習俗となったことを述べている。

陳師は杭州の「撮泡」に不満を抱いていた。その理由は、杭州には、茶の葉を一回いれるとすぐに捨てる人が多くて茶葉を無駄にしがちだからであった。もう一つの理由は、杭州の人は常に茶の中に茶葉を入れて茶の真味を損なうからであった。陳師は杭州の人は茶の真味を理解していないと批判し、陳師は「烹茶之法、唯蘇吳得之（烹茶の法、唯だ蘇吳のみ之を得）」²¹と述べるように、蘇吳の人こそよく喫茶のことを理解していると自慢している。彼は山中の僧人に吳中の烹茶法を以て招待されたことを記している。

予每至山寺、有解事僧烹茶如吳中、置磁壺二小甌於案、全不用菓奉客、随意啜之。可謂知味而雅致者矣。

予毎に山寺に至り、解事僧有りて烹茶吳中のごとく、磁壺と二つの小甌を案に置き、全く客を奉^{たてまつ}るに菓を用いず、意を随いてこれを啜る。味を知りて雅致なる者と謂うべし。

とある²²。ここでの「磁壺」は磁製のティーポットのことで、小甌は小さい茶杯のことを指し、壺泡法を使った。陳師はこの喫茶法が「雅致」とであると高く評価している。

さらに、蘇州の壺泡法の作法について、蘇州の隱者張源は次のように述べている²³。

探湯純熟、便取起。先注少許壺中、祛蕩冷氣傾出、然後投茶。茶多寡宜

²⁰ (明) 陳師、『茶考』、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014、p. 249。

²¹ 同上、『茶考』、p. 249。

²² 同上、『茶考』、p. 249。

²³ (明) 張源、『茶録』泡法、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014、p. 253。

酌、不可過中失正、茶重則味苦香沈、水勝則色清氣寡。兩壺後、又用冷水蕩滌、使壺涼潔。不則減茶香矣。罐熟則茶神不健、壺清則水性常靈。

湯の純熟せるを探り、便ち取り起く。先ず少許壺中に注ぎ、冷氣を祛蕩傾出し、然る後に茶を投ず。茶の多寡は宜しく酌すべし。中を過ぎて正を失うべからず。茶重ければ則ち味は苦くして香は沈み、水勝れば則ち色は清くし氣は寡し。兩壺の後、又た冷水を用いて蕩滌し、壺を涼潔ならしむ。しからずんば則ち茶香を減る。罐熟ならば則ち茶神は健ならず、壺清ければ則ち水性は常に靈し。

また、許次紆の『茶疏』は壺泡法の完成を示している。許次紆は浙江錢塘の人で、足が不自由で士途と無縁の人生を過ごしたが、彼の『茶疏』は明代の数多くの茶書の中で、特に優れたものと評価されている。明代後期は、前人の内容を多く引用して新しい茶書として出版する現象が普遍的であった。しかし、許次紆は自分の経験を活かして『茶疏』を完成させ、この時代の江南地方特有の茶文化をうまくまとめた。それにより、この『茶疏』は出版された後、すぐに茶を嗜む人に注目された。『茶疏』は壺泡法について次のように述べ、湯を注ぐタイミングについて詳細に描写している²⁴。

未曾汲水、先備茶具。必潔必燥、開口以待。盖或仰入、或置瓷盃、勿竟覆之案上、漆氣食氣、皆能敗茶。先握茶手中、俟湯既入壺、隨手投茶湯。以盖覆定。三呼吸時、次滿傾盃内、重投壺内、用以動蕩香韻、兼色不沈滯。更三呼吸頃、以定其浮薄。然後瀉以供客。

未だ曾て水を汲まざるには、先ず茶具を備う。必ず潔くして必ず燥くす、口を開きて以て待つ。盖或いは仰入し、或いは瓷盃に置き、これを案の上に竟覆することなかれ、漆氣食氣、皆能く茶を敗る。先ず茶を手の中に握り、湯既に壺に入るを俟つ。手に随いて茶を湯に投じ、盖を以て覆定す。

²⁴ (明) 許次紆、『茶疏』烹点、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014、p.272。

三呼吸の時、次盃内に満傾し、重ねて壺内に投じ、用いて以て香韻を動蕩し、兼ねて色沈滞せず。更に三呼吸の頃、以て其の浮薄を定め、然る後に瀉ぎて以て客に供す。

さらに、『茶疏』の「飲啜」で、許次紆は茶注が小さい方がよいと考え、一壺の茶を三回までに入れるべきだと論じている。一回目の味は新鮮で美しく、二回目の味は甘くて醇厚で、三回目になると、すでに極限である。また、彼は童女、少女、成年の女性で茶の葉の状態を喩えている²⁵。

一壺之茶、只堪再巡。初巡鮮美、再則甘醇、三巡意欲尽矣。……以初巡為停停嫋嫋十三余、再巡為碧玉破瓜年、三巡以來、綠葉成陰矣。……所以茶注欲小、小則再巡已終。

一壺の茶は、只だ再巡に堪う。初巡は鮮美、再びすれば則ち甘醇、三巡意尽きんと欲す。……初巡にして停停嫋嫋十三余と為し、再巡にして碧玉破瓜年と為し、三巡以來、綠葉陰になるを以てす。……茶注の小さきを欲する所以なり、小さければ則ち再巡にして已に終る。

一方、この『茶疏』における茶杯と茶壺（急須）に関する討論も、茶道具の発展に大きな影響を与えた。茶杯が徐々に小さくなり、色が黒から白へ変化していく。茶壺も小さくなり、明末には紫砂茶壺が現れ、茶道具の発展に非常に重要な意義を与えた。

茶甌古取建窯兔毛花者、亦聞碾茶用之宜耳。其在今日、純白為佳、兼貴於小。

茶甌、古は建窯の兔毛花なる者を取る。亦た碾茶を聞かせば、これを用いて宜しきのみ。其の今日に在りては、純白を佳となし、兼ねて小さきを貴

²⁵ 同上、『茶疏』飲啜、p.273。

ぶ。

とされる²⁶が、甌は茶杯を指し、古人は兔毛模様の黒い茶碗を好んだが、今の人は小さくて純白色の茶杯が一番いいとしていると指摘している。これは茶の湯の色の変化に関係している。宋代の団茶の湯の色は白いため、黒い茶碗を使ったほうが湯の色を鑑賞しやすい。しかし、明代の散茶の湯の色は緑色で透明であるため、白い茶碗のほうが湯の色を見やすかった。

また、『茶疏』には茶注について次のように述べている。

茶注以不受他氣者為良。

茶注は他氣を受けざる者を良と為す。

とある²⁷。注は茶注、茶壺のことを指している。茶壺は異味を吸収しない材質でできたものが一番いいと指摘している。これも、茶の純粋な味を求めるためである。茶葉の味道に妨げない茶壺を使うのがいいという基準は、現在の中国人が茶壺を選ぶ時にも用いられている。

茶壺の材質について、許次紆の意見は「首銀次錫（銀を首として錫を次とす）」²⁸であり、砂器を重視しなかった。許次紆は龔春和時大彬の作った砂壺を称賛しているが、この二人以外の方が作った砂壺の質は悪いので使ってはいけないという。砂器の質が壊れやすく、また泥土の匂いがしやすいため、銀と錫の茶壺には劣り、彼の認識では、砂壺は実用性が乏しく、賞玩するためのものに過ぎなかった。おそらく許次紆の時代には、砂壺の製作技術は未成熟だったのであろう。

『茶疏』の完成から十年を過ぎると、砂器の質がますます認められ、錫器より優れると考える茶人が増えた。その理由として、砂器の製作技術が大いに高まったことが挙げられるだろう。周高起の『陽羨茗壺録』では、

²⁶ 同上、『茶疏』甌注、p.272。

²⁷ 同上、『茶疏』甌注、p.272。

²⁸ 同上、『茶疏』甌注、p.272。

故茶至明代、不復碾屑、和香葉、製団餅、此已遠過古人。近百年中、壺黠銀錫及閩豫瓷、而尚宜興陶、又近人遠過前人處也。

故に茶は明代に至り、復た屑を碾きて香葉をあ和えて団餅を製することをせず。此れ已に遠かに古人を過ぐ。近百年中、壺は黠銀錫及び閩豫の瓷をしりぞ黠け、宜興陶をたつと尚び、又た近人の遠かに前人を過ぐる處なり。

と説明している²⁹。明末に入ると、砂壺の製作技術が大きく発展し、やがて成熟し、銀器、錫器、瓷器を超えたことがわかる。

第四節.明代の文人茶

一. 明代の文人茶の繁栄

明中後期から、江南地方に数多くの茶書が現れ、明代茶文化は迅速に発展した。泡茶法の発展に随い、名茶を品飲したり、茶寮を構築したり、茶芸を交流したりすることは文人生活の一部になった。特に江南地方の文人は自発的に友人を誘って茶人集団を結成し、茶会を開いていた。このような茶人集団の出現は明代茶文化の発展に大きな影響を与えた。

明代茶書の作者の出身地からみると、南直隸と浙江とはじめとする江南地方出身の人が最も多い。ほかに福建、江西出身の人も数人いる。一方、北方出身の人は少ない。南直隸（現在江蘇省、安徽省、上海市付近）出身の作者は朱権、黄履道、顧元慶、僧真清、陸樹声、孫大綬、程用賓、張源、張丑、馮時可、夏樹芳、陳繼儒、黄竜徳、程百二、華淑、周高起の十六人がいる。浙江省出身の作者は田芸蘅、徐猷忠、屠隆、徐渭、陳師、徐彦登、胡文煥、許次紓、羅廩、聞竜、屠本峻、王嗣爽、李日華、万邦寧の十四人がいる。浙江省出身者の中には、特に鄞県（寧波）と錢塘（杭州）出身が多い。鄞県出身には屠隆、聞竜、屠本峻、王嗣爽、

²⁹ (明) 周高起、『陽羨茗壺録』、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014、p. 512。

万邦寧がいる。銭塘出身には田芸蘅、許次紆、陳師、胡文煥がいる。茶書作者の中に、出身は南直隸、浙江でなくても、仕事の関係で南直隸、浙江で任職した作者もいる。例えば、熊明遇の『羅芥茶記』は長興県県令に任じられた時に完成した作品である。『芥茶箋』は、作者馮可賓が湖州に任職した時に著された。竜膺の『蒙史』は南京太常寺卿に任じられた時に書かれた。つまり、明代茶書の作者は、江南地方出身の人が圧倒的に多いことがわかった。

明代茶書の作者の身分からみれば、文人が明代茶文化の主な創造者であった。明代茶書の作者には文人が一番多い。黄道履、顧元慶、田芸蘅、孫大綬、徐渭、胡文煥、張源、張丑、許次紆、高元濬、羅廩、徐勗、聞竜、陳繼儒、黄竜徳、程百二、華淑、鄧志謨、周高起の十九人がいる。その次に多いのは役人である。陳講、徐猷忠、陸樹声、屠隆、陳師、徐彦登、熊明遇、馮時可、屠本峻、王嗣爽、夏樹芳、竜膺、喻政、湯頭祖、李日華、万邦寧、馮可賓の十七人がいる。中国は科挙試験を利用して役人の選抜を行っていたため、役人も文人の性格を持った一群であった。したがって、明代の茶書の作者の中でも、文人たちは茶書刊行の最も重要な勢力であり、明代の茶文化を発展させた最も重要な存在である。

二. 文人茶の発端：陸羽と廬仝への憧れ

明代後期に入り、政治の腐敗が文人の出仕の意欲を減退させ、多くの文人が隠逸生活を選んだ。彼らは大都市で隠居し、日常生活を芸術化することに努めた。晩明の文人は飲茶生活を脱俗の高雅な事と認識していた。そのような背景のもと、喫茶生活は明代文人に好まれ、隠逸的態度を表す手段の一つとして使用されていた。隠逸とは、朝廷への仕官を辞め、大都市から身を引き、山林に隠れることである。隠者は大昔から存在し、隠逸生活は中国文人の理想の生活形態である。才能のある賢人はみな激動の社会において隠居生活を選ぶ。中国は昔から「修身、齐家、治国、平天下」の思想がある。不安定な社会環境で、出世の時機を待つ有能者たちは、隠居生活をし、「修身」に集中して正しい行いに努める。「時を待つと動く」という隠世観念は、昔からずっと中国の文人に大きな影響を与え続けて

きた。

唐代以来、隠逸生活と文人の茶は繋がりができたが、明代に入ると、文人の隠逸観に大きな変化が現れた。明初の山野の隠居から、明中後期には都市における隠居が中心になった。特に明末には、商品経済の発達と政治の腐敗によって、文人の隠逸的態度が社会に蔓延し、隠逸生活は文人の間に流行した。

喫茶という行為を文人の隠逸生活と結び付けたのは唐代以来であろう。茶は唐代文人の生活の中で重要な位置を占め、詩文創作の斬新な題材となった。その中でも特に、陸羽と盧仝を取り上げることができる。この二人は、最初に茶を文人の隠逸生活と結びつけた人物であり、また文人茶の源流だといえる。

陸羽、字は鴻漸、唐朝復州竟陵（今湖北天門市）の人。号は竟陵子、桑苧翁、東岡子、茶山御史である。陸羽は中国最初の『茶書』において「茶神」と呼ばれている。陸羽は茶人として有名であるが、隠士の身分も無視できない。『陸文学自伝』は、陸羽の上半生の経歴について次のように述べている³⁰。

上元初、結廬於苕溪之湄、閉関対書、不雜非類、名僧高士、談宴永日。常扁舟往山寺、隨身惟紗巾、藤鞋、短褐、犢鼻。往往独行野中、誦仏經、吟古詩、杖撃林木、手弄流水、夷猶徘徊、自曙達暮、至日黒興尽、号泣而歸。故楚人相謂、陸羽盖今之接輿也。

上元初、廬を苕溪の湄に結び、関を閉じて書に対し、類に非ざるものと雜じらず。名僧高士、永日に談宴す。常に扁舟にして山寺に往き、身に随うものは惟だ紗巾、藤鞋、短褐、犢鼻のみ。往往にして野中に独行し、仏經を誦して古詩を吟し、林木を杖撃し、流水を手にして弄び、夷猶徘徊す。曙より暮に達し、日黒興尽に至り、号泣して歸る。故に楚人相い謂く、陸羽は盖し今の接輿ならんと。

陸羽は楚地で隠居生活を過ごし、当時の人にこの時代の接輿と呼ばれた。接輿は春秋時代楚国の隠士である。さらに、陸羽は金山玉器に関心を抱かなかつたし、

³⁰ 沈冬梅、『茶経校注』、「陸羽伝記」、「陸文学自伝」、中国農業出版社、2006、p. 104。

役人生活も好まなかったため、山林での隠居生活を楽しんでいた。陸羽は僧皎然、顔真卿と親交があった。陸羽を詠じている酬贈詩からも陸羽を茶人というより、一人の隠者として認めていることがわかる。たとえば、僧皎然の「寒食日同陸処士行報徳寺宿解公房」、「九日與陸処士羽飲茶」、「春夜集陸処士居玩月」、「往丹陽尋陸処士不遇」、顔真卿の「謝陸処士杼山折青桂花見寄之什」、張喬の「送陸処士」、皇甫曾の「哭陸処士」などの詩には、陸羽を「処士」と尊称するところが多い。つまり、陸羽の隠者の身分は周りの文人に認められていたのである。そして、宋以降、陸羽は徐々に隠者の身分から茶人の代表へと移行し、多くの詩文に典故として用いられた。陸羽は茶神とされ、彼の物語が後世の人に詠じられた時から、茶はすでに文人の隠逸的な生活とつながっていたのである。

もう一人の注目すべき唐代文人は盧仝である。盧仝は河南濟源の人、玉川子と号し、唐朝中期の詩人であり隠者でもあり、かつて洛陽に隠居していた。彼は貧乏な生活をし、粗末な家屋に住んでいた。また、盧仝の性格は孤独かつ傲慢で、経史を博覧し、詩文を得意としているが出仕の意欲はなかったため、隠者の印象が強い。

この盧仝は茶を嗜み、「茶仙」と呼ばれている。彼の代表作は、最も有名な茶詩「走筆謝孟諫議寄新茶（筆を走らせて孟諫講より新茶を寄せらるるに謝す）」という長詩であり、これは古今の絶唱と称えられ、後世の茶人に非常に重大な影響を与えた。この詩もまた「七椀茶詩」あるいは「茶歌」と呼ばれている。高橋忠彦の研究によれば、本詩は盧仝が諫議大夫より常州刺史に遷っていた孟簡の知遇の恩を得て、陽羨の新茶を贈られたため、感謝して作った即興の詩である。本詩の代表的な後半部を節録した³¹。

一椀喉吻潤

一椀にして喉吻潤い

兩椀破孤悶

兩椀にして孤悶を破る

³¹本詩の解題と訓読は、高橋忠彦の研究を参考とした。高橋忠彦・神津朝夫編、『茶書古典集成 1 初期の和漢茶書』走筆謝孟諫議寄新茶（茶歌）、淡交社、2019、pp. 159～165。

三椀搜枯腸	三椀にして枯腸を搜れば
唯有文字五千卷	唯だ文字五千卷有るのみ
四椀発軽汗	四椀にして軽汗を発し
平生不平事尽向毛孔散	平生の不平の事尽く毛孔 ^よ 向 ^よ り散ず
五椀肌骨清	五椀にして肌骨清らかに
六椀通仙靈	六椀にして仙靈に通ず
七椀喫不得也	七椀は喫し得ず
唯覚両腋習習清風生	唯だ覚ゆ両腋に習習として清風生ずるを
蓬莱山 在何処	蓬莱山 ^{いづく} 何処にか在る
玉川子乗此清風欲歸去	玉川子は此の清風に乗りて帰り去らんと欲す
山上群仙司下土	山上の群仙は下土を司るも
地位清高隔風雨	地位清高にして風雨を隔つ
安得知百万億蒼生命	^{いづくん} 安ぞ知り得ん百万億蒼生の命
墮在顛崖受辛苦	墮ちて顛崖に在りて辛苦を受くるを
便為諫議問蒼生	便ち諫議 ^{むか} に為いて蒼生に問う
到頭還得蘇息否	到頭 還た蘇息するを得るや否やと ³²

この詩の後半は、献上茶の製造に携わる百姓などの苦しみを訴え、王公貴族を

³² 高橋忠彦・神津朝夫編、『茶書古典集成 1 初期の和漢茶書』、淡交社、2019年、pp. 161～162。

暗に批判する諷刺詩であることがわかる。七碗の茶の効能を巧みに歌い上げていた部分は、後世に大きな影響力があつて広く知られている。そのため、盧仝は陸羽と並ぶ唐代の茶人と讃えられている。盧仝以降の多くの有名詩人の詩の中に「盧仝」や「玉川」の文字が見ることができる。たとえば、蘇軾の「送南屏謙師（南屏謙師に送る）」に「天台乳花世不見、玉川風腋今安有（天台の乳花世に見えず、玉川の風腋今安くにか有らん）」³³とある。范仲淹の「和章岷從事鬪茶歌（章岷従事の鬪茶歌に和す）」に「盧仝敢不歌、陸羽須作經（盧仝敢えて歌わず、陸羽須く經を作すべし）」³⁴とある。梅堯臣の「嘗茶和公儀（茶を嘗めて公儀に和す）」に「莫誇李白仙人掌、且作盧仝走筆章（李白の仙人掌を誇る莫れ、且く盧仝の走筆の章を作す）」³⁵とある。陸游の「昼臥聞碾茶（昼臥して茶を碾くを聞く）」に「玉川七碗何須爾、銅碾声中睡已無（玉川の七碗は何ぞ爾るを須い、銅碾の声中に睡り已に無し）」³⁶とある。

明代に入ると、江南の文人たちは唐代言人の喫茶文化を継承するうえで、唐代の文人茶に基づいてより豊かな手段を取り入れ、陸羽と盧仝の喫茶精神をさらに発展させ、文人茶の集大成を迎えた。

三. 文人茶と茶人集団

明代の茶人の多くは文人と役人である。中には政途の失意者や、名利に淡泊な者もいる。彼らは茶を通して隠棲自在の生活を求める共通点を持っている。明中期の文人茶の最大の特徴は、蘇州の文人によって結成された茶人集団の出現である。明代中期に入ると、社会環境は安定し、商品経済が盛んに発展するとともに、物質と財富も大きく増加し、文化と教育が全面的に展開し、市民階級が急速に台頭した。古代、隠士というと、山林で隠居する山人のイメージがすぐに頭に

³³ (宋) 蘇軾、『東坡詩集注』卷十三、四部叢刊。

³⁴ (宋) 范仲淹、『范文正公文集』範文正公集卷第二、四部叢刊。

³⁵ (宋) 梅堯臣 『宛陵集』宛陵先生集卷第五十一、四部叢刊。

³⁶ (宋) 陸游 『劍南詩稿』、卷十一、清文淵閣四庫全書。

浮かぶ。しかし、明中期の山人は徐々に減少し、文人たちは都市へ集まるようになり、市民階級の一員になった。市民文人の増加とともに、官職に就かないで市井に隠れ住む「市隠」の思想が蔓延し始めた。

明代の中後期に入り、隠逸的生活を選択することがますます文人に広く認められるようになった。明代茶人は山水に遊んだり、泉水を尋ねたり、茶寮を構築したり、書齋で茶器を鑑賞したり、名茶を味わったりして、政治から離れる隠居生活を楽しんでいた。明末には社会全体に隠逸的態度が瀰漫していた。

この隠逸的態度について、嘉興の文人程本立は『臨清道隱詩後序』で、

人之於道、猶魚之在水也。魚潜在淵、或在於渚、深則淵而潛焉、浅則渚而游焉、而魚之樂一也。道之著、粲然於吾前、而莫之避也焉、往而不樂哉。故士或処乎山林、或処乎朝市、其樂亦一。

人の道に於けるや、猶お魚の水に在るがごとし。魚は淵に潜り、或いは渚に在る。深ければ則ち淵に潜り、浅ければ則ち渚に遊ぶ。而して魚の樂は一つにす。道の著、粲然として吾の前に於いて、之を避くること莫く、往きても樂まざるかな。故に士或いは山林に処し、或いは朝市に処す。其の樂も亦た一つにす。

と述べている³⁷。程本立は魚が水さえあれば、どこでも自由に生きられるという。深い淵でも浅い渚でもよく、それは文人にとっても同じであり、山林でも朝市でも、求めたい道があれば、どこで隠居しても構わない、と指摘している。

市隠の正統性が大きく鼓吹されたため、役職のない文人だけではなく、官職を務める役人も市隠生活に憧れを抱くようになった。それと同時に、文人茶も明末社会に広く流行した。市隠思想が徐々に喫茶に融合し、喫茶精神を大いに興隆させた。喫茶は、明中期の文人及び役人に共通する嗜好であった。彼らのほとんどは、詩文書画に深厚な芸術造詣を持ち、彼らの隠逸観が文人茶の発展に大きな影響を与えた。

³⁷ (明) 程本立、『巽隱集』卷三。

明代中期の市隠現象には、それが江南地方に集中していたという顕著な特徴がある。繁栄した都市の中で隠居する気風は、蘇州を中心とする江南地方から始まった。市隠思想の源流は志を得ない蘇州あたりの文人である。蘇州の文人文震亨の『長物志』の跋に次のように題されている³⁸。

明中葉、天下承平、士大夫以儒雅相尚、若評書品画、瀹茗焚香、彈琴選石等事、無一不精。

明中葉、天下は承平たり。士大夫は儒雅を以て相い尚ぶ。評書品画、瀹茗焚香、彈琴選石等の事の如く、一に精ならざることも無し。

蘇州文人はみな幅広い趣味を持っていて、書画を品判したり、詩作を鑑賞したり、茗茶を瀹飲したり、香を焚いたり、琴瑟を弾いたり、奇石を搜収したりして、毎日自由自在の遊樂生活を送り、文人集団を結成したという。

文人たちは常に地元の名士を誘い、茶会を開いて喫茶集団を結成し、メンバー間で茶芸の腕前を切磋琢磨する。蘇州に茶人が次々と現れ、陳繼儒『小窓幽記』に、

焚香啜茗、自是吳中習氣。

焚香と啜茗は、自から是れ吳中の習気なり。

とある³⁹ように、蘇州は茶人の一番多い地域であったようだ。また陳師は『茶考』に、

烹茶之法、唯蘇吳得之。

烹茶の法、唯だ蘇吳のみ之を得。

³⁸ (明) 文震亨著、陳植校注、『長物志校注』、江蘇科学技術出版社、1984、p. 423

³⁹ (明) 陳繼儒、『小窓幽記』卷七集韻。

と述べている⁴⁰が、銭椿年、顧元慶、沈周、王涑、呉寛、朱存理、文徵明、唐寅など有名な蘇州文人が頻繁に交遊し、喫茶の趣味を広げた。

当時蘇州の文人のなかに王涑という人がいた。王涑は長洲の有名な隠者で、字は浚之、号は茗醉である。蘇州の郷紳名士はみな彼と交遊している。彼は文人茶を蘇州文人に紹介した重要な人物である。文徵明の「王隱君墓誌」に、

宅隣於湖中、畜図書万卷、竹炉茶竈、日與白石翁、祝京兆諸名流詠吟其中。

宅は湖中に隣^{とな}る。図書万卷、竹炉茶竈を畜え、日に白石翁（沈周）、祝京兆（祝允明）の諸名流と其の中に詠吟す。

とある⁴¹。王涑は喫茶を嗜み、当時の蘇州文人集団の中心人物である沈周、朱存理、祝允明、文徵明などと親密に交遊し、よく自慢の茶芸で彼らをふるまった。沈周はかつて王涑のために『会茶篇』という文章を書いたが、残念なことに『会茶篇』の原文はすでに散失し、朱存理の文集『楼居雜著』に「書会茶篇」が残るのみである。ここでは、王涑と沈周、朱存理、祝允明とともに茶を飲む様子が見える⁴²。

会茶篇一卷、白石翁為王浚之所作。浚之性嗜茶、煎法特妙。嘗載佳茗過竹巢煎以飲翁。其好事如此。翁連啜尽七碗、形容其妙。他日、枝指生繼自來訪、浚之復為著論。

会茶篇一卷あり、白石翁は王浚之に作ると為る。浚之の性は茶を嗜む。煎法は特に妙なり。嘗て佳茗を載って竹巢を過ぎて煎じて以て翁に飲ます。其の事を好むは此れのごとし、翁は尽く七碗を連啜し、其れは妙と形

⁴⁰ (明) 陳師、『茶考』、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014、p. 249。

⁴¹ (明) 文徵明著、周道振校、「王隱君墓誌」、『文徵明集下』補輯卷二十九、上海古籍出版社、1987、pp. 1503~1504。

⁴² (明) 朱存理、『楼居雜著』、『四庫全書』集部六別集類五。

容す。他日、枝指生（祝允明）継ぎて自から来訪し、浚之復た為に論を著す。

王涑は自分の隠逸精神に溢れた茶芸をもって周りの文人に影響を与えた。沈周、祝允明、文徵明、いずれも江蘇で名望の高い文人である。王涑の茶は彼らの広い人脈を通して広まり、蘇州の文人集団に知られ、迅速に蘇州に普及した。

さらに、蘇州以外にも、南直隸、浙江、福建では、文人によって結成された茶人集団が次々と現れた。呉智和は茶人集団の集会形式について、四種類に分類している⁴³。一つ目は、沈周、朱存理、王涑、呉寛、呉奕などの蘇州文人を代表とした庭園茶会である。二つ目は、馮夢禎、陳繼儒などの杭州澹社の文人を代表とした社集茶会である。三つ目は文徵明などの恵山茶会の文人の代表とした山水茶会である。四つ目は、許次紓、徐渤、陸樹声などを代表とした茶寮茶会である。

さらに、蔡定益の『明代茶書研究』では茶人集団数を二十六に整理している⁴⁴。もちろん、茶会を開くことが目的ではなく、茶会を通して文人の間の交流を促進して人脈を増やすことこそ、明中期に茶人集団が多く結成された要因である。茶人集団間は密切な関係を保ち、他の茶人集団の文人たちと互いに交遊し、茶のことについて交流すると同時に、大きな情報交換の関係網が作り上げられた。

以上より、明代中期以降、茶人集団が増えていた。茶人集団の出現は、文人茶の流行と繁栄の特徴といえる。

四. 文人茶と文房趣味

明代中期以来、宦官専権の局面が現れ、明政府の政治腐敗がますます悪化した。一方、土地兼併の現象も悪化した。皇室、功臣、貴族、役人及び地主は相次いで農民の土地を占有した。農民と政府の矛盾が日増しに激化し、農民一揆が次々と起こった。嘉靖年間、明政府の財政収入には、すでに大きな問題が現れていた。

⁴³呉智和、「明代茶人集団的社會組織—以茶會類型為例、『明史研究』、1993、pp. 110～122。

⁴⁴蔡定益、「明代茶書与明代社會」、『明代茶書研究』、中国社会科学出版社、2016、pp. 298～299。

頻発する農民起義と長年の倭寇の乱によって、明政府の国庫収入がひどく消耗されたのである。万暦年間、太子の継承権の問題（国本の争）で、明神宗朱翊鈞は万暦十七年から万暦47年まで（1589～1619）の30年の間、一度も朝廷に親臨したことがなかった。この事件は、「万暦の怠政」と呼ばれている。これによって明朝はさらに衰え、滅亡に向かっていった。また、執政権力をめぐって東林党と閹党の党争が激化し、政治の腐敗がさらに悪化していき、農民起義も頻繁に起こった。他にも、内憂のみならず外患もあった。遂に1616年、ヌルハチが女真を統一して東北に後金を建国し、さらに、それを継いだ満洲人がたびたび南侵し、明の国土を蚕食し始めた。

問題だらけの明政府は、多くの有志の士を失望させた。そのため、文人の出仕意欲は低下していった。社会に不安な空気がはびこり、隠居傾向を持っていた文人の数が空前の規模となった。朝廷の腐敗を見ながら、自分の無力感を感じた文人は隠逸への志向を強めた。彼らは器物を鑑賞し、書齋生活に引きこもった。心の慰めを求めるために、書齋生活を芸術化することに努めた。日常生活において安らかで静かな精神生活を自分の書齋に構築し現実生活への不満を緩め、心の憂鬱を発散した。明末の文人はこのように平凡な日常生活を芸術化することによって、「世俗」のうちに「清雅」が求められると信じていた。そのため、明代後期には文房趣味もますます盛んになった。文房趣味とは、書齋を中心に発展した中国文人の趣味であり、筆墨硯紙、琴棋書画を中心に展開した。文房清供あるいは文房清玩ともいわれている。こうして明末の書齋文化は全盛期に入った。文人の好んだ文房用具がより精緻に生産され、書画古籍の出版も非常に歓迎された。筆墨硯紙のほか、明末の文人は古董、奇石、香茗、禽魚など様々な趣向に夢中になった。青木正児は『中華文人の生活』に文房趣味は昔からすでに存在し、明代中後期に隆盛になったと指摘している⁴⁵。

近世支那では、「文房清供」などという言葉で文房の趣味を表現している。それは文雅の士の清玩に供せらるる一切の施設であって、その閑適生

⁴⁵ 青木正児、「中華文人の生活・文房趣味」、『青木正児全集』第七巻、春秋社、1971、pp. 211～217。

活に於ける遊戯三昧の対象である。……六朝及び唐代の文人は、概ね現実世界の甘美を享樂せんと欲する傾向が強く、従って其の趣味は華麗にして典雅を主眼とした。宋代に至って素朴を貴び、清楚を旨とするの風が漸く開け、茲に美を否定して天真の保全を欲する道家的高蹈趣味が台頭してきた。……元代には一時下火になったが、明代の中葉より末期にかけて再び隆盛を致し、之に関する著書も甚だ多く、清代に其の余波を及ぼした。

喫茶は書齋生活にとって欠けてはならないものとなり、また日常生活の芸術化の重要な根拠ともなった。喫茶は明末文人の目から見て高雅な行為である。明末、特に万暦年間、陸樹声、許次紓、徐渤、徐渭、陳繼儒、屠隆、羅廩のような優れた茶人が次々と現れた。明代の書物の中には、文房生活を論ずる作品が非常に多い。その中で以下に代表的な三つの作品を紹介する。

一つは、高濂の『遵生八箋』であり、19巻がある。高濂の『遵生八箋』の大部分は道教の養成について説いており、中の「起居安樂箋」、「燕閑清賞箋」と「飲饌服食箋」の一部のみが文房生活を論じている。もう一つは、屠隆の『考槃餘事』であり、4巻がある。屠隆の『考槃餘事』は文房趣味を「書箋、帖箋、画箋、紙箋、墨箋、筆箋、硯箋、琴箋、香箋、茶箋、盆玩箋、魚鶴箋、山齋箋、起居器服箋、遊具箋」の16箋に分類して記している。実は、『考槃餘事』の大部分の内容は明らかに高濂の『遵生八箋』を剽窃して再編したものであり、書賈が屠隆の名に託したのであろう。さらにもう一つは、文震亨の『長物志』であり、12巻がある。文震亨は文徵明の曾孫で名門の後代である。彼の『長物志』は明代士大夫の書齋生活を論じた最も優れたものとされ、文房生活の百科全書といわれているが、文房趣味を「室廬、花木、水石、禽魚、書画、几榻、器具、衣飾、舟車、位置、蔬果、香茗」の十二種類の項目に分け、『考槃餘事』よりも厳密に整頓している。

上記の三作は、いずれも茶葉、茶道具及び喫茶法のことについて詳細に記している。これらから、茶は文人生活にとって欠けてはならないものであることがわかった。

それに、明末の文人は文房趣味を賞翫する際、一番肝心なものを「清」としていた。清は「清雅」の意味で道家思想の「清浄」がその源だろう。「清賞」、「清玩」、「清供」などの言葉がよく明末文人に使われていた。喫茶の場合は「清飲」という。明末の茶人は「清」の概念を喫茶生活に導入し、香を焚き茗を飲むことは、文房の生活を楽しみ、隠棲自在を求める上で欠かせないようになった。さらに、「清飲」のために三つの工夫が施された。

一つ目は、茶葉の真偽を見分ける能力を高めること。明中期以後、散葉の製産技術が高まり、全国各地の精品茶も次々と現れた。しかし、精品茶の産量は少なく、高価で質の悪い偽茶を精品茶として販売する狡猾な茶商がいた。葉の真偽を正しく見分けられるように、明末の茶人は能力を高める努力をした。

二つ目は、茶席は少人数で行うということである。明末の茶人は少人数の茶席を推奨した。人数が多ければ騒がしくなるので、少人数のほうが喫茶の恬静の趣を楽しめる。例えば、張源は『茶録』で、

飲茶以客少為貴、客衆則喧、喧則雅趣乏矣。独啜曰神、二客曰勝、三四曰趣、五六月曰泛、七八曰施。

茶を飲むは客の少きを以て貴と為す。客衆ければ則ち喧し。喧ければ則ち雅趣乏し。独り啜れば神と曰ひ、客二あれば勝と曰ひ、三四あれば趣と曰ひ、五六あれば泛と曰ひ、七八あれば施と曰ふ。

と述べている⁴⁶。

三つ目は、喫茶の場所と環境を重視することである。明末の茶人は愈々喫茶の環境と雰囲気重視する。心が落ち着く、安らかで静かな場所が最もよいとされる。陸樹声は『茶寮記』の「茶宜」では涼台、静室、明窓、曲几、僧寮、道院、松風、竹月、晏坐、行吟、清談、把巻の十二種類の環境を取り上げている⁴⁷。さらに、許次紆の『茶疏』の「茶時」には、

⁴⁶ (明) 張源、『茶録』飲茶、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014、p. 253。

⁴⁷ (明) 陸樹声、『茶寮記』、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014、p. 223。

心手閑適、披詠疲倦、意緒紛乱、聴歌拍曲、歌罷曲終、杜門避事、鼓琴
看画、夜深共語、明窓浄几、佳客小姬、訪友初歸、風日晴和、輕陰微雨、
小橋画舫、茂林修竹、荷亭避暑、小院焚香、酒闌人散、兎輩齋館、清幽寺
觀、名泉怪石。

とあり⁴⁸、喫茶にふさわしい、様々な場所とタイミングを列挙している。

以上より、明末の喫茶文化は日常生活から生まれ、また日常生活に浸透していった。文房趣味の発展とともに喫茶生活も十分に芸術化されたといえる。明末文人は喫茶が風流の士のやるべき行為であり、俗人のやるべきことではないと考えていた。しかし、明代後期になると、江南の文人茶文化は商品経済の発展とともに発達してきた。経済は常に物欲、金銭欲、所有欲、支配欲と関わっているので、清雅の文人茶もすぐ俗化した。権力者と豪商が大部分の社会財富を手に握り、貧富の社会格差が拡大した。明末の権貴、達人、富豪、地主は無理やり風流名士を模倣し、文房趣味に熱中し、金銭を湯水のように使うことがしばしばみられるようになる。「清飲」を強調する文人茶はますます市隠文人の求める「清雅」から逸れて世俗化され、一般化されていった。物質的享樂に耽れば、必ず世俗に同化され、俗となった。文人茶も同じである。無学の豪商郷紳などが、自分をいかにも教養のあるように見せかけるために、意図的に著名な知識人と交際したり、文人喫茶を不用意に真似したりした。虚栄心を満足させるために風雅な文人を模倣して喫茶を始める人が増えた。その結果、明代の高雅な文人茶は、多くの凡人に真似され、次第に世俗化されたのである。

⁴⁸ (明) 許次紆、『茶疏』飲時、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014、p. 274。

第四章. 煎茶書にみる中国茶書と喫茶文化の受容

はじめに

本章は第三章の内容を踏まえ、煎茶書を通じ、煎茶書を通じ、日本における中国茶書とその喫茶文化の受容の具体的な状況を考察したい。まずは中国茶書の日本における受容形式と受容背景について検討したい。そして、煎茶書の考察を通して中国の製茶法、喫茶法とその文人茶の受容状況を明らかにしたい。

第一節. 中国茶書の日本受容の形式

江戸時代に入り、大量の煎茶書が刊行された。その中の多くが中国の茶書に大きな影響を受けた。日本の煎茶書の源流が中国茶書であることは、従来の煎茶史研究においてすでに明らかにされている。江戸時代の煎茶書における中国茶書の受容の形式は、内容によって主に七つの段階に分けられる。それぞれ、伝来・翻刻・翻訳・再編・模作・独自創作である。

現在、中国の茶書は日本の漢籍として全国各地に点在している。それは、全国漢籍データベースなどを利用して確認できるが、多くの中国茶書が昔から日本に伝来してきていたことがわかる。日本に伝来した中国茶書は、煎茶書刊行の際の重要な土台となったが、それらがいつどうやって伝来してきたのかについては、異なる時代によってさまざまな伝来の手段があり、伝来の主導者も異なるので、正確に把握するのは容易ではない。明らかになっている重要なルートは長崎の唐人貿易である。江戸時代に入ると、長崎の唐人貿易は一つの代表的な伝来ルートとなっていたといえよう。平成8年（1996）11月、東京坂橋区立郷土資料館では特別展『長崎唐人貿易と煎茶道 中国風煎茶の導入とその派生』を開催して展示図録を刊行した⁴⁹。この特別展によ

⁴⁹ 『長崎唐人貿易と煎茶道 中国風煎茶の導入とその派生』、板橋区立郷土資料館、1996。

って煎茶は中国の明末清初の時期、長崎の唐人貿易によって導入されたことが明らかにされた。大槻幹郎は「当時鎖国政策によって、海外渡航は禁じられ、長崎のみで中国とオランダ船の来航による海外貿易が行われていた。長崎は唯一の海外に開かれた窓口であり、狭くはあったが世界を見渡し、外国と直接にふれ、海外諸文化のとり入れ口であった。煎茶はまず長崎の唐寺、唐人によって嗜まれていたと思われる。」⁵⁰と述べ、煎茶の発展にとって長崎貿易がいかに重要な役割を果たしたのかを説明した。また、中国商船によって長崎に輸入された中国茶書がある。例えば、大庭脩の唐船持渡書研究を通していくつかの茶書の舶来記録が確認できる⁵¹。さらに、田能村竹田は、福州人傅士然が中国から商船に乗って長崎へ行き、『石山齋茶具図譜』の原本を持ってきて日本の友人に贈ったという記述を残した⁵²。これは中国人が長崎貿易の商船を利用して個人的贈呈用の茶書を持ってきたという事例である。これらを鑑みるに、江戸時代において、中国茶書の伝来は長崎貿易と関係が深いものであったといえる。中国茶書が輸入された同時、中国茶書の翻刻も行われた。その理由として、商業出版の発達と潜在読者の誕生、といったことが考えられる。まず、江戸時代における印刷技術の向上は商業出版の隆盛をもたらした。堀川貴司の説によれば、出版者は営利販売のために、新規作品や売れる本を積極的に求め、多種多様な出版を展開し、出版物の内容が多様化した。その中で、新しく入ってきた明代以降の書物の和刻も盛んに行

⁵⁰ 大槻幹郎、「黄檗山の開創と煎茶」、『長崎唐人貿易と煎茶道 中国風煎茶の導入とその派生』、板橋区立郷土資料館、1996、p. 104。

⁵¹ 大庭脩、『江戸時代における唐船持渡書の研究』、関西大学東西学術研究所、1967。延享4年（1747）、『続茶経』の舶来記録がある（p. 689）。宝暦元年（1751）、『茶史』の舶来記録がある（p. 714）。宝暦13年（1763）、『茶経』の舶来記録がある（p. 714）。ほかには、中国茶書を多く収録した『説郛』もいくつかの舶来記録が残っている（p. 242、p. 248、p. 276）。

⁵² 「傅士然、福州人。老而無子、孑然孤立、来寓蘇州、数従商舶、往来崎山。好茶、与僊胤善、乃伝是書矣。……斯書原本五冊、士然抽其二冊、分贈仙胤。胤再以一冊、転贈于予。斯冊即是。」とある。田能村竹田、『石山齋茶具図譜』、筑波大学中央図書館、請求番号ス 420-6、1829。

われた、という⁵³。一方、桑田忠親の説によれば、茶道界が盛んに発展し、各流派が続々と生まれ、家元制度も次第に成立したが、次第に茶会の礼法や点茶の技術などが煩雑化し、規範化する傾向も現れたため、その変化に応じて、もっと自由な方法で喫茶の趣味を楽しみたいという要望が一部の日本人の間に起こってきた、という⁵⁴。中国の茶書はこれらの人々の要望をある程度満足させることができたのであろう。中国茶書を求める潜在的な読者がいたからこそ、日本の出版者もこの商機をつかもうと中国茶書の翻刻を始めたのであろう。そして、日本で翻刻された中国茶書は、明刻本や清刻本を底本としたものが多かったようである。例えば、鄭燧校訂の明刻本『茶経』、孫大綬編集の明刻本『茶経外集』と『茶譜外集』、胡文煥校訂の明刻本『茶録』と『茶具図贊』、夏樹芳著の明刻本『茶董』、劉源長著の清刻本『茶史』、陳元輔著の清刻本『枕山楼茶略』は日本で翻刻されて流布された中国茶書である。その原因は、明代以降中国の印刷の技術の発展にあるであろう。特に明代の万暦年間以降、中国は印刷の技術が発達して広く普及し、江南地方を中心に商業出版が最高潮に達した。そのため、明代以降の中国茶書が多く刊行され⁵⁵、日本にも影響を及ぼした。

中国茶書の受容はさらに進み、中国茶書の翻訳書が現れた。例えば、『古今茶湯諸抄大成』の附録である『茶録・新刻茶具図贊』では、三谷友佐が原文の次に和訳を加え付けた。また、大典禅師の『茶経詳説』は陸羽の『茶経』を忠実に翻訳したもので、そして春田永年の『茶器図考』は『茶経』と『茶経詳説』の茶器の解説書と位置づけられる。他には、沢田実成の『煎茶略

⁵³ 堀川貴司「近世初期・前期の出版」の「出版物の多様化」による。堀川貴司、『書誌学入門 古典籍を見る・知る・読む』、2019、p. 158。

⁵⁴ 桑田忠親「文人趣味と煎茶」による。芳賀幸四郎・西山松之助、『茶の文化史図説茶道大系 2』、角川書店、1974、p. 223。

⁵⁵ 蔡定益の研究によれば、明刻本と清刻本の茶書が多く存在している。『香茗流芳 明代茶書研究』の表「明代茶書版本信息①～⑧」による。蔡定益、『香茗流芳 明代茶書研究』、中国社会科学出版社、2017、pp. 19～27。

説』は葉雋の『煎茶訣』の和訳書である。

さらに、江戸時代において読書文化が盛んに開花した。そもそも、書物の普及は江戸期の社会的・文化的な現象であった。印刷技術の向上によって、日本人は出版物と接触する機会が増え、大量印刷された書物が昔と比べて容易に手に入るようになった⁵⁶。中国の喫茶に関心を高めた日本人にとって、国内で中国茶書を手に入れることが可能となり、数多くの中国茶書を博覧することも実現可能となったのであろう。そこで、中国茶書から興味のある内容を選択的に摘録したり、再編したり、個人的見解を書き加えたりし、新しい茶書を作ろうとする日本人が現れた。しかし、彼らが中国の茶書の内容を十分に吟味したとはいえず、引用に誤読がなかったとはいえないことにも注意すべきである。

例えば、大枝流芳の『青湾茶話』と上田秋成の『清風瑣言』はその代表的な作品である。二書はともに大量の中国茶書から必要な内容を抽出し、本国の喫茶の行事にふさわしい内容に基づいて改編を行い、個人の考えと意見を付け加えた作品である。また、嵐翠の『自辨茶略』は葉雋の『煎茶訣』と沢田実成の『煎茶略説』に基づいて改編したものである。さらに、源靖の『茶集』は諭政の明刻本の『茶書』から『茶集』⁵⁷を抽出して翻刻したものである。明刻本の『茶集』は、もとより上下二巻で構成され、第一巻は文集、第二巻は詩集であり、唐代、宋代、元代、明代までの漢詩を年代順で編集していた。一方、源靖の再編した版本は三巻で構成されるが、文集は第一巻にまとめられ、これは明刻本の『茶集』と一致している。一方、五言古詩と七語古詩は第二巻に入れられ、五言律詩などの近体詩及び詞は第三巻にまとめられた。この第二巻と第三巻は、明刻本の『茶集』下巻と違い、年代順を採用せず、詩型順で新たに目次を再編している。そのほか、富岡鉄斎の『鍔荘茶譜』の瓷壺之部は明人周高起の『陽羨茗壺系』に基づいて再編し、和訳したものである。

⁵⁶ 前田勉「書物の普及という条件」による。前田勉、『江戸の読書会 会読の思想史』、pp. 59～60。

⁵⁷ 明刻本の『茶集』、布目潮風、『中国茶書全集』、汲古書院、1987、p. 203～242。

その後、一部の煎茶家は中国茶書の内容に拘らず、文章の構成のみを参考にして日本の喫茶の現状に合う煎茶書を作り始めた。この類の煎茶書は、内容から見れば、ほとんど日本の喫茶について言及し、中国茶書からの影響は次第に薄くなったように見える。一方、章立てや目次の構成から見れば、中国茶書を模倣していることは明らかである。その中で、最も代表的なのは曾占春の『烹茶樵書』である。『烹茶樵書』の中に附録として載せられた大窪詩仏の『茶寮図賛』は、宋代審安老人の『茶具図賛』を真似して、それぞれ茶器に風雅な姓名・字・号を付した。ほかには、真間人の『茶書』、田能村竹田の『竹田荘茶説』と『竹田荘泡茶説』、山本徳潤の『煎茶小述』がある。

長い年月を経て、日本の煎茶書は茶道関係書からも影響を受けて独自の展開を遂げた。日本風の煎茶書が刊行され、中国茶書にはあまり見られない形式の作品が次々と出版された。最も代表的なのは『売茶翁茶器図』、『煎茶要格』、『南宗茶具名牋』、『青湾茶会図録』、『蓬仙茶話 茶器編』のような煎茶器と煎茶式の図録を中心とした作品が多く刊行された。さらに明治期と大正期以降、大量の煎茶会図録が書かれた。また、『新撰煎茶一覽』と『煎茶手引之種』と『清風煎茶要覧』のような煎茶の作法の手引書として刊行された作品が現れた。そのほか、『詠茶詩録』と『煎茶小集』のような、江戸を中心に活躍した文人集団の煎茶趣味書も出された。

したがって、煎茶書における中国茶書の受容は茶書の日本化の過程であり、段階的に進んでいたことを明らかにした。最初の段階では、日本に伝来した中国茶書はまだ少なかったため、民間にとっては手に入れることが困難であった。その時は、中国茶書の翻刻と翻訳が受容の主な形式であった。そして、中国茶書が民間に普及し、中国茶書に触れることが容易になった。その際、中国茶書を踏まえた再編と模倣を行う茶人が現れた。その後、製法と法式が次第に整い、中国風の喫茶に親しむ煎茶に関心のある人が増え、煎茶のブームが地域的に発生した。それによって煎茶書の創作も独自の展開を遂げた。

第二節. 中国茶書の日本受容の背景

江戸時代の煎茶書の序文と跋文のなかには、日本国内の喫茶風景に関する情報が多く記録されているため、作者の著書意図が窺える。本研究では、資料編一「煎茶書の書誌的研究」に取り上げた煎茶書の序跋を翻刻した。煎茶書の序跋は、従来の先行研究ではほとんど検討されていなかった。また、本研究においてはじめて翻刻された新出資料も多い。そこで、本節は煎茶書の序跋を踏まえて江戸時代の煎茶家による茶の湯の様子に注目し、彼らが中国茶書を受け入れた目的と理由について探究する。

茶の湯の繁栄期を迎えた江戸時代においては、点茶法を主流の喫茶法として採用し、日本独自の伝統文化を完成させた。一方、中国は明代に入ってから清代に至るまで、泡茶法がすでに主流の喫茶法となり、日本と異なる喫茶法を採用していた。したがって、両国の茶文化の間には大きな違いが存在している。江戸時代の煎茶書は、明代に編集・刊行された中国茶書から多大な影響を受けたもので、明代以降の中国茶文化に密接に繋がっているものである。なぜ江戸時代に中国の茶書に興味を抱いた茶人が突然増えたのか。また、中国茶書の受容は茶の湯の発展とどのような関係があるのか。その答えは、煎茶書の序跋によって知ることが可能である。

まず、江戸時代における茶の湯の繁栄についての描写は多くの煎茶書の序文に見える。『古今茶湯諸抄大成』は次のように述べている⁵⁸。

夫号茶湯、愛其風雅也。権興於北山鹿園院義満公、連綿於東山慈照院。
義政公爾後、紹鷗利休之徒得称宗匠之名、茶道大行於世、而宗匠各々承継。
又名数奇之道。為好事之最。今也当昇平之時。都鄙頗繁蔓焉。

^か夫の茶の湯と号するは、其の風雅を愛するなり。北山の鹿園院の義満公（足利義満）より権興（起源の意）し、東山の慈照院（足利義政）より連

⁵⁸ 三谷友佐の序。三谷友佐、『古今茶湯諸抄大成』、附録茶録図入乾、国文学研究資料館蔵本、請求番号 49-87-1~12、1713。

綿す。義政公の爾後、紹鷗、利休の徒は宗匠の名と称することを得たり。茶道は大に世に行われ、而して宗匠は各々承継す。又た数奇の道と名づき、好事の最と為る。今もまた昇平の時に当たる。都鄙（都と田舎）に頗る繁蔓（繁栄になって広がる）なり。

三谷友佐の考えでは、茶の湯の風雅を愛することは、足利義満の鹿苑寺に代表される北山文化よりはじまり、その後足利義政の慈照寺に代表される東山文化に受け継がれてさらに発展を遂げた。そして、安土桃山時代の武野紹鷗、千利休の二人の代表的な宗匠茶人によって集大成され、世の中に広く知られた。彼らの茶風は後継の宗匠茶人にそれぞれに継承された。茶の湯は一層盛んに発展し、最も人気のある趣味として多く好事者に好まれ、数奇の道と呼ばれた。江戸時代に入ると、戦乱がなくなって社会が安定し、平和な時期を迎えた。そのおかげで、茶の湯は大都市と田舎に広がって繁栄したという。

一方、江戸時代の京都是文化の中心地であり、茶道を含めた諸芸が盛んに発展した。『和漢茶誌』の序は次のように述べている⁵⁹。

京之中於国也、開創最居先焉。故製作大備、文物至盛、加以風致之高雅、賞鑑之精到、較視四方、莫之與二也。是以百家衆技、非徵諸京、則不得要上游矣。世之掉鞅於文墨之林、游刃乎術芸之場者、皆莫不輻湊星聚、規取定準矣。方今治安百年、庶芸殷興、而於賞茶為尤盛。王候貴人、固使設其職掌之。

京の国に中するや、開創は最も先に居る。故に製作は大に備はり、文物は至盛なり。加うに風致の高雅、賞鑑の精到（精細、用意周到）を以てし、四方を較視するに、之に二すること莫^なし。是れを以て百家の衆技は、京に徵（徵召）するに非ざれば、則ち上游（高い地位）を要することを得ず。世の文墨の林に掉鞅（才能を示す）し、術芸の場に游刃（余裕を持つ）す

⁵⁹ 香川修徳の序。三谷良朴、『和漢茶誌』、早稲田大学図書館蔵本、請求番号ヲ 09 03862、1728。

る者は、皆輻湊星聚（一カ所に集まる）して、規取定準せざることを莫し。
方今治安百年、庶芸は殷（おお）くして興り、而して賞茶に於いて尤も盛
かんとなり。王侯貴人、固より其の職設けて之を掌せしむ。

香川修徳の考えでは、京都は日本の中心都市であり、最も先に開拓された地域
であり、百年を超える長い間、平和な時代が続き、百姓が安定して暮らしていた。
そのため、諸芸が盛んになり、風流な趣を好む才能のある人たちと、腕前に自信
がある芸能者たちが京都を中心に集まって文化を繁栄させ、諸芸の規則と基準
が次第に完備した。諸芸の中で最も盛んだったのは賞茶の芸であり、茶の湯であ
る。王侯貴族は、茶席のために専門の職位を設けた。

茶道の繁栄は民間までに広がり、商人を始めとした庶民階級はみな茶の湯に
夢中になった。和刻本『茶経』の序において齊震伯起は次ぎのように述べている
60。

我邦茶之為用亦尚矣。室町氏豊臣氏以降、於今為盛矣。於是立職以任民。
商賈以起家。遂自祭祀之供、賓客之羞、以至閭巷細民之飲壺是。皆以茶為
先焉。

我が邦に茶の用と為るも亦た尚し。室町氏豊臣氏以降、今に於いて盛ん
と為り。是に於いて職を立てて以て民を任ず。商賈は以て家を起こす。遂
に祭祀の供、賓客の羞より、以て閭巷細民の飲むに至るに壺いつにして是なり。
皆茶を以て先と為る。

彼の考えでは、足利氏、豊臣氏の時代を経て、茶の湯が一層盛んになり、江戸
時代に入り、各階層の人が茶の湯に熱中していた。また、お茶を販売する商人が
増えた。ついに祭祀、宴会から、村里の貧乏な人たちまで広がり、お茶を飲まな
い人がいなかったという。

60 齊震伯起の序。齊震伯起の序。『茶経』天保15年刻本、早稲田大学図書館蔵本、請求番号：ヲ09
03874、1844。

しかし、茶の湯が盛んに発展して一般民衆までに幅広く広がると同時に、色々な問題が現れた。その中で、最も批判されたのは、茶人が暴利を貪り、奢侈を競い、逸楽に耽溺したという問題である。『煎茶斧』の序は次のように述べている⁶¹。

吾邦、自紹利二老唱碾茶式而為之俑。其流弊以己意統紹。十尺斗室、構之多于造厦之費、一片竹匙、蕚之貴於鎡鄒之価。遂導顯賈巨商之驕踞、拓骨董郎手射利之姦回矣、三百年所矣。……。嗚乎、弗茶運之大厄哉。

吾が邦、紹利二老より碾茶の式を唱へて之を俑と為す。其の流弊は己の意を以て紹を統す。十尺の斗室、之を構すれば厦を造る費より多し。一片の竹匙、之を蕚^{もとめ}れば鎡鄒の価より貴し。遂に顯賈巨商の驕踞を導き、骨董郎手の射利の姦回を拓し、三百年ばかりなり。……嗚乎、茶運の大厄ならざらんや。

菜窠老人の考えでは、日本では武野紹鷗と千利休より点茶式が唱えられて本国の茶風を開拓した。しかし、その遺風は後継者に粗末に受け継がれた。狭い茶室が立派な屋敷より高い値段で作られ、薄い柄杓が名剣の莫邪より珍重された。それから三百年を経た当時、茶の湯を借りて暴利を貪る豪商と姦黠な骨董商人が多く現れた。これはまさに茶の湯の悪運である。

茶の湯の繁栄によって膨大な利益が生まれ、高価な珍器を逐う奢侈の気風が拡散した。また、家元制度の完成によって、茶道の作法が次第に硬直化した。香川修徳は次のように述べている⁶²。

至於閑人游民、坐甘冷乏、強標枯寂。紈袴金夫、務事奢靡、競鬪珍奇、浮采濫費、驕抗成風。或誇世伝、銜家秘、範圍印定。契舟守株、而不能臨

⁶¹ 菜窠老人の自序。菜窠老人、『煎茶斧』、国西尾市岩瀬文庫蔵本、請求番号 67-82、1806。

⁶² 香川修徳の序。三谷良朴、『和漢茶誌』、早稲田大学図書館蔵本、請求番号ヲ 09 03862、1728。

時随宜、領略活法要旨。

閑人と游民に至っては、坐ながらにして冷乏を甘じ、強ひて枯寂を標す。紈袴と金夫は、事を務むるに奢靡にして、競て珍奇を闘わす。浮采濫費にして、驕抗（ほしいままにする）にして風を成す。或は世伝に誇り、家秘を銜ひ、範圍印定、舟に契^{きざ}みて株を守り、時に臨みて宜しきに随ひ、活法要旨を領略すること能わず。

無職な閑人と遊民は、わざわざ何もせず空腹感を楽しみ、強引に枯れと寂びを標榜する。貴族やお金持ち、贅沢で派手やかな茶席を開き、珍奇な茶具を競い合う。お金を濫用して、他人のことを考えず、自分の都合だけ考えて行動し、一時の風習となった。一部の茶人は家伝の秘法を誇示し、旧説を固く守り、臨機応変に対応できず、時と場所に依じて自由に作法を変通することができなかった。それに加え、『自辨茶略』の序は次のように述べている⁶³。

茶道は、元來我宗門の礼数よりいでて、今専ら世間におこなわるれども、おふくは道具の物ずきに価の高下を論じ、主客ともに進退の遲速を誹り合、眞の風流を、うしのうことのみおふくして、和敬清寂の四意、一ツも存することなし。

瓦礫舎主人の考えでは、茶人たちはもっぱら茶具の価格競争に腐心し、亭主と客人の細かい行動規範に拘っていた。そのため、茶の湯は眞の風流を失ってしまい、和敬清寂の心得もすっかり忘れられた。

そして、茶具の価格競争に熱中した茶人への不満の聲が大きくなった。『清風瑣言』の序は次のように述べている⁶⁴。

今之所謂茶人者、大率窃吹濫中之徒、而不揀茶之旗槍、不弁水之陰陽、

⁶³ 瓦礫舎主人の序。嵐翠子、『自辨茶略』（『煎茶早指南』）、早稲田大学図書館蔵本、請求番号ヲ 09 00439、1802。

⁶⁴ 村瀬栲亭の序。上田秋成、『清風瑣言』、早稲田大学図書館蔵本、請求番号ヲ 09 04053、1794。

不問湯之老嫩。柴汝官哥建吉之窯、張成楊茂剔紅、方信川螺蚶、種々難得之物、競傾産以供夸具。不亦可咲之甚乎。

今の所謂茶人なる者は、大率は窃吹濫中（似非風流人）の徒なり、茶の旗槍を揀^{えら}ばず、水の陰陽を弁せず、湯の老嫩を問わず。柴、汝、官、哥、建、吉（すべて宋代の名窯）の窯、張成、楊茂（名工の名）の剔紅（堆朱）、方信川（名工の名）の螺蚶、種々得難きの物、競いて産を傾けて以て夸具に供す。亦た咲うべきの甚しきか。

村瀬栲亭の考えでは、現在の所謂茶人たちは、ほとんど茶葉の種類を選ばず、水の水性を見分けず、お湯の煮加減を問わない偽者ばかりで、ひたすら宋代の名窯の茶器、元代の名工の堆朱、明代の名工の螺鈿のような入手困難なものに熱中して相次いで大金を使い込んでいたが、これは本当にばかばかしい行動であったという。

茶の湯の繁栄によってもたらされた問題について、一部の人はその原因を茶の湯関係の書物が足りないことに帰結した。『和漢茶誌』において香川修徳は次のように述べている⁶⁵。

吾邦之称宗工者、珠光紹鷗宗易織部遠州、姑無論已。其他門人指不違屈。而亦皆由無学以文之、遂致隱没無聞。著録不伝、所道固陋、無可述扱。

吾が邦の宗工と称する者は、珠光、紹鷗、宗易、織部、遠州、姑^{しばら}く論ずること無かるのみ。其の他の門人は指を屈するに違^{いとま}あらず。亦た皆学の以て之を文^かざる無きに由^より、遂に隱没して聞すること無きに致す。著録は伝わらず、道ふ所は固陋にして、述扱すべきこと無し。

村田珠光、武野紹鷗、千宗易、古田織部、小堀遠州のような茶道の宗匠は、論

⁶⁵ 香川修徳の序。三谷良朴、『和漢茶誌』、早稲田大学図書館蔵本、請求番号ヲ 09 03862、1728。

著を残したことがなかった。彼らの門人も論を著す余裕がなかった。彼らは自分の学んだことを文章にしていなかったため、その学問はついに消えてしまい、誰も知らなかった。そのせいで、論著は後継者に伝わらず、教授の内容は古いものに固執して根拠や出典のないものばかりであった。

そこで、中国の茶文化に注目しはじめた茶人が現れた。彼らは、日本の茶人が自国の茶文化しか知らなくて、茶の源流は中国にあることも知らない。そのせいで、日本の茶書は質が低いという指摘があった。『和漢茶誌』では質正淳は次のように述べている⁶⁶。

茶道尚矣。自盧陸至蔡丁、歴歴可数也。本邦珠光以来、不乏其人、然通文芸者蓋鮮矣。言後世茶人徒以為茶礼起於本邦、而不知其源發於中華。故其書、如古織伝、草人木之属。鄙猥瑣碎、不足觀也已。

茶道は尚し。盧陸より蔡丁に至り、歴歴数へるべし。本邦は珠光以来、其の人乏しからず、然して文芸を通ずる者は蓋し鮮なし。言に後世の茶人徒に以為へらく、茶礼は本邦より起くると、而して其の源は中華より発することを知らず。故に其の書、古織伝、草人木の属の如くは、鄙猥瑣碎にして、観るに足らず。

茶道の歴史は長い。盧仝、陸羽から蔡襄、丁謂まで、著名な茶人が輩出した。日本は村田珠光以来、茶道の大家も少なくないが、文学に長じた人があまりいない。後世の茶人はひたすら日本が茶道の礼法の発源地だと勘違いし、実際はその源流が中国にあることは知らなかった。そのせいで、古織伝、草人木のような質が低くて下品な茶書が現れたが、こんな茶書は読む価値がない、という内容である。

茶人集団の規模が日々拡大すると同時に、従来の茶の湯関係の書物は質が低いために、急増した茶人を満足させることができなくなった。したがって、一部

⁶⁶ 質正淳の序。三谷良朴、『和漢茶誌』、早稲田大学図書館蔵本、請求番号ヲ 09 03862、1728。

の茶人は中国の喫茶に注目し、中国の茶書から有用な理論を吸収し、中国茶の価値を唱えはじめた。陸羽の『茶経』を始めとした中国の茶書がますます重視されるようになった。それによって、煎茶を嗜む茶人が次々と現れた。『和漢茶誌』は次のように述べている⁶⁷。

茶事所係、涉獵頗多、而後益知華之賞茶、肇於唐陸羽、弘於宋蔡丁數人、幽情玄趣。至於近時高濂李漁之徒而極焉。其風流好尚、神運意匠、皆無非先得我心矣。何可不學以文之乎哉。

茶事の係るところ、涉獵頗る多し。而して後に益々華の賞茶、唐の陸羽より肇まり、宋の蔡丁の數人より弘まり、幽情玄趣を知る。近時の高濂、李漁の徒に至りて極む。其の風流好尚、神運意匠は、皆無非先に我が心を得るに非ざること無し。何ぞ學びて以て之を文とせざるべけんや。

香川修徳の考えでは、茶の行事は様々な領域に関わっており、涉獵したところがおおい。中国の賞茶は、唐代陸羽の『茶経』より始まり、宋代蔡襄の『茶録』と丁謂の『北苑茶録』によって広がった、趣深い雅事であった。そして、当時の明代に入り、高濂の『遵生八箋』と李漁の『閑情偶寄』などの随筆集が喫茶の趣をさらに極めた。そして、日本の茶人も中国の風流な喫茶に心酔しているため、中国の喫茶の学問を学んで文章を書かなければならない、と感嘆している。

しかし、新しく生まれた煎茶には大きな問題がある。それは、煎茶の理論書が足りないことである。『青湾茶話』は次のように述べている⁶⁸。

本朝点茶、数奇の道備らざるなく、世にあるところの茶書少からず。近世好事の君子ありて、煎茶の翫ひしばしば朝はかといへども、未其書あらず。

⁶⁷ 香川修徳の序。三谷良朴、『和漢茶誌』、早稲田大学図書館蔵本、請求番号ヲ 09 03862、1728。

⁶⁸ 『青湾茶話』の見返し。大枝流芳、『青湾茶話』、新日本古典籍総合データベース、請求番号 225-201-5、1756。

日本の茶道は礼法が備わって茶の湯関係の書物も少なくはないが、近頃煎茶を好む風流な君子がいて、しばしば煎茶の遊びを行っているが、煎茶の書物がまだない、とある。

一方、中国では歴代王朝の変遷を経て、喫茶法にすでに大きな変化が発生し、昔の形ではなくなったが、日本には古来の形の喫茶法がよく残っているため、わざわざ中国に求めなくても日本に求めれば十分だと、一部の人は主張している。『和漢茶誌』で藤長胤（伊藤東涯）は次のように述べている⁶⁹。

茶之尚也、自晋唐而下矣、陽羨北焙之産、竜団鳳餅之製、著於方冊者可徵也。元氏而後稍失其制、而凡所云茶者、皆葉而淪之、非復古之茶。而本邦尚襲法、故而不渝、則礼之失、何必求諸野耶。

茶の尚也、晋唐より下る。陽羨、北焙の産、竜団、鳳餅の製、方冊に著する者徴すべし。元氏にして後に稍や其の制を失い、而して凡そ茶と云う所は、皆葉にして之を淪し、復た古の茶に非ず。而して本邦は襲法を尚^{たつと}び、故くして淪^{ふる}わらず、則ち礼の失^かふは、何ぞ必ずしもこれを野に求めんや。

喫茶の風習は、晋唐の時代から始まる。陽羨、北焙、竜団、鳳餅など中国古代の喫茶の有名な産茶は、茶書の中に記されており、調べるとわかる。元代になると、上述の名茶の製法が失われた。現在中国では茶というのは、葉茶を利用して淪飲することを指しており、昔の喫茶法ではなくなった。一方、日本人は古代の作法を踏襲することを重視しているため、古い作法をよく継承している。だとすれば、たとえ今は茶礼（喫茶の礼儀作法）を失ったとしても、わざわざ日本以外の国土にそれを求める必要がなく、日本国内に求めれば十分ではなかろうか、と主張する。中国の新しい喫茶法を学ぶことについて反対しているのである。一部

⁶⁹ 藤長胤の序。三谷良朴、『和漢茶誌』、早稲田大学図書館蔵本、請求番号ヲ 09 03862、1728。

の茶人は茶の湯と煎茶の両道を同時に行っている。彼らは茶道の礼法に詳しいため、煎茶家が茶の湯の法式を学ぶべきと主張している。『煎茶式』は次のように述べている⁷⁰。

近日、雖多玩煎茶者、然其次第階級任己意杜撰以為佳、而欲撓今古所行抹茶之風俗矣。余意今古抹茶者流之風流最可賞也、翁之煎茶風流亦可賞識也。然而無其次第階級、則唯一時之流行而已、遂可廢也。

近日、煎茶を玩する者は多しと雖も、然るに其の次第、階級は己の意に任せて杜撰して以て佳として今古の抹茶の風俗を行う所を撓せんと欲す。余はおもえ意らく、今古の抹茶者流の風流は最も賞すべし。翁（売茶翁）の煎茶の風流も亦た賞識すべし。然るに其の次第階級無ければ、則ち唯だ一時の流行のみ、遂に廢すべし。

増山雪齋の考えでは、近頃、煎茶を遊ぶ人が多く増えた。しかし、煎茶家が茶事の順序や階級を恣意的に行い、古来の抹茶の風習を乱そうとした。古今の抹茶家の風流の茶は最も賞賛すべきものである。売茶翁が起こした煎茶の風流も賞賛すべきだが、行事の順序と階級がなければ、一時的な流行に過ぎないため、次第に消え去る。

しかし、茶の湯の法式や行事の仕方を真似することに反対の意見を持つ人もいる。『蓬仙茶話 茶器編』は次のように述べている⁷¹。

吾邦点茶、設法繁復。末流之弊、争趨奢侈。一器論価、或至数十百金、不亦奇乎。清人煎茶、異於是。蓋本陸羽茶經、勉以簡樸為要矣。吾邦近日亦貴煎茶而乏其書、故所法于点茶、竟不免類俗也。

吾が邦の点茶、設法は繁復たり。末流の弊は、争ひて奢侈におもむ趨く。一

⁷⁰ 雪齋の序。増山雪齋、『煎茶式』、東京都立中央図書館加賀文庫蔵本、請求番号加 6318、1804。

⁷¹ 大沼枕山の序。蓬仙仙史、『蓬仙茶話 茶器編』、国立国会図書館蔵本、請求番号特 1-2927、1865。

器価を論ぜば、或いは数十百金に至り、亦た奇ならざらんや。清人の煎茶は、是に異なる。蓋し陸羽の茶経に本づき、勉^{もと}びて以て簡樸を要とす。吾が邦は近日に亦た煎茶を貴にして其の書乏し、故に点茶に法する所は、竟に俗に類することに免れず。

大沼枕山の考えでは、日本の茶の湯は作法が複雑であり、末茶の点茶法を行う茶人たちは、奢侈を競い合い、一つの茶器が非常に高い価格に設定されたのは不思議であった。一方、清代の茶人の煎茶の作法は日本と違う。大沼は陸羽の『茶経』に基いて、それを学んで簡単素朴な喫茶を重んじた。日本は当時、煎茶がますます重視されてきたが、煎茶を紹介する書物は足りないため、点茶の作法を真似する人も現れた。そうすれば、煎茶が俗に墮ちるのは避けられないだろう、という。

しかし、もう一つ、中国の茶書の解説は難しいという問題があった。中国の茶書の中には、日本の茶人にわかりにくい内容が多かった。例えば、陸羽の『茶経』は多くの人が認めるように難解な書物であった。『茶経詳説』は次のように述べている⁷²。

竟陵氏茶経三卷。世皆苦其難読。

竟陵氏の茶経は三卷あり。世は皆其の読み難きに苦しむ。

高辻家長の考えでは、陸羽の『茶経』は三卷あるが、世間の人はこの作品がわかりにくいと思って困っている、とのことである。

また、『茶器図解』の茶器図解例言において春田永年は次のように述べている⁷³。

陸子ノ茶経古今能ク解シ得ル者ナシ。世ノ文ヲ学ブ者ハ置テ読マズ。茶

⁷² 香海の序。大典顕常、『茶経詳説』、国立公文書館内閣文庫蔵本、請求番号 199-0306、1774。

⁷³ 『茶器図解』例言。春田永年、『茶器図解』、国立国会図書館蔵本、請求番号 830-90。

ヲ嗜ム者ハ力足ラズ。

陸羽の『茶経』をよく理解して解読できる日本人は昔からおらず、世の中の学問を修めた人々もこの作品を放置して読まなかった通り、茶を嗜む人は本書を解読する力がなかった、ということである。

また、『古今茶湯諸抄大成』の序は次のように述べている⁷⁴。

予嘗思中華亦愛茶也尚矣。如陸羽茶経、盧仝茶歌、然膾炙人口、炮治弄翫之方、則未見全備之書。

予嘗て思えらく、中華亦た茶を愛することも尚しと。陸羽の茶経、盧仝の茶歌の如くは、然るに人口に膾炙して炮治弄翫の方は、則ち未だ全備の書見えず。

三谷友佐の考えでは、中国の喫茶の歴史は長く、陸羽の『茶経』、盧仝の「七椀茶歌」は、世間の人によく知られている中国作品ではあるが、それ以外に、中国の喫茶の作法を系統的に紹介した茶書がまだ出ていない、という。

中国の茶書に記載された内容は、必ずしも日本の状況に適合するとは限らないため、すべての内容をそのまま受け入れてはいけない。『煎茶訣』は次のように述べている⁷⁵。

点茶之法、世有其式。至於煎茶、香味之間、不可不精細用心、非復点茶比、而世率不然。葉氏之訣、實得其要、猶有遺漏。

点茶の法は、世に其の式有り。煎茶に至りては、香味の間、精細用心せざるべからず。復た点茶の比に非ず、而るに世は率ね然らず。葉氏の訣は、

⁷⁴ 三谷友佐の序。三谷友佐の序。三谷友佐、『古今茶湯諸抄大成』、附録茶録図入乾、国文学研究資料館蔵本、請求番号 49-87-1~12、1713。

⁷⁵ 蕉中老衲の序。(清)葉雋著・大典禪師補、『煎茶訣』、関西大学図書館蔵本、請求番号 L23**C*6838、1764。

実に其の要を得るも、猶ほ遺漏有り。

大典禪師の考えでは、点茶の法式は、世の中にすでに定式があるが、煎茶の場合、香と味に細かく気をつけなければならないところが多い、という。また、葉雋の『煎茶訣』は、煎茶の要点を得たが、まだ不十分なところがある、という。

一部の茶人は新しい茶書の作成に注力した。彼らは中国の茶書をもとにして本国の国情に合う内容を取り入れることを試みた。『和漢茶誌』の自序では次のように述べられている⁷⁶。

（余）嘗探討唐宋茶譜茶録及必備寓寄等諸書。到茶事、品題、器制、備用、彼国記此、莫不詳盡精覈。本国嗜士或為未之見者多矣。故日夜講之、揀択取舍、以頗記所合於本国茶道者。

（余）嘗て唐宋の茶譜、茶録及の必備寓寄等の諸書を探討す。茶事、品題、器制、備用に到り、彼の国は此記して、詳盡精覈ならざること莫し。本国の嗜士、或は未だ之を見る者多し。故に日夜にして之を講じて、揀択取舍して、以て頗る本国の茶道に合う所の者を記す。

三谷宗鎮の考えでは、彼は過去に唐宋の茶書毛文錫の『茶譜』と蔡襄『茶録』、また明清の日用類書『居家必備』と『閑情寓寄』の諸書を研究したことがあるようである。また、茶の行事、品目の題目、道具の規則、予備の用品など、さまざまな面のことが中国の書物に詳細に記されている、といい、日本の茶人にとって、いままで知らなかったことが多かったという。そのため、彼は昼夜教授に励み、茶書の内容を選別して取捨を行い、日本の茶道に適切な部分を抄録した、という。

中国の歴代の茶書はさらに広がり、多くの日本の茶人に読まれた。彼らは、陸羽の『茶経』を発端として、中国の歴代の製茶法の発展と変化が続いたが、喫茶の風流な精神が途切れずに続いていたことに気づいた。『茶経詳説』の附言は次

⁷⁶ 三谷宗鎮の序。三谷良朴、『和漢茶誌』、早稲田大学図書館蔵本、請求番号ヲ 09 03862、1728。

のように述べている⁷⁷。

桑苧翁（陸羽）コノ書ヲ撰スルヨリ、品目ヲ立テ、其法ヲソナフ、此茶道ノ鼻祖トイフベシ。当時茶ヲ売モノ翁ノ像ヲ陶ニシテ茶神トナシテ祀ルトゾ。其後宋、元、明世ヲ歴テ、茶ノ製法ハカハレドモ、風流ノ賞タエズ。斐汶ガ茶述、蔡君謨ガ茶録、顧元慶ガ茶譜、許次紆ガ茶疏、聞竜ガ茶箋等ノ書、ミナ翁ノ茶経ニ本ヅヒテ著スモノナリ。

大典禅師の考えでは、陸羽は茶道の鼻祖というべき人物で、唐代斐汶の『茶述』、宋代蔡襄の『茶録』、明代顧元慶の『茶譜』、許次紆の『茶疏』と聞竜の『茶箋』はすべて陸羽の『茶経』に基づいて書かれたものである、という。

日本の茶人は唐代から明代までの中国茶書に多大な影響を受けた。中国茶書の風雅な趣を受け継いだ日本人の煎茶書も大きな人気を博した。真間人は『茶史』において次のように述べている⁷⁸。

自陸羽著茶経後、言茶之書不一而足。如斐汶茶述、蔡君謨茶録、丁謂茶録、許次紆茶疏、顧元慶茶譜、屠幽叟茗苳、山子菥煮茶小品、聞竜茶箋、子安試茶録、欧陽公張又新煎茶水二記、周伯高陽羨茗壺洞山芥茶二系、陳鑑茶経注補。以至於国人蕉中師茶経詳説、木世肅煎茶略説。求而読之、可謂真篤於茶者也已。

陸羽茶経を著す後、茶を言ふの書は一にして足らず。斐汶の茶述、蔡君謨の茶録、丁謂の茶録、許次紆の茶疏、顧元慶の茶譜、屠幽叟の茗苳、山子菥の煮茶小品、聞竜の茶箋、子安の試茶録、欧陽公と張又新の煎茶水二記、周伯高の陽羨茗壺と洞山芥茶二系、陳鑑の茶経注補の如し。以て国人の蕉中師の茶経詳説、木世肅の煎茶略説に至る。求めてこれを読めば、真に茶に篤き者と謂ふべし。

⁷⁷ 『茶経詳説』附言。大典顕常、『茶経詳説』、国立公文書館内閣文庫蔵本、請求番号 199-0306、1774。

⁷⁸ 『茶史』掌故、真間人、国立国会図書館蔵本、請求番号特 1-2759、1808。

陸羽が『茶書』を著した後、唐代斐汶の『茶述』、張又新の『煎茶水記』宋代蔡襄の『茶録』、丁謂の『北苑茶録』、宋子安の『東溪試茶録』、歐陽修の『大明水記』、明代許次紆の『茶疏』、顧元慶の『茶譜』、屠本峻の『茗苴』、田芸蘅の『煮泉小品』、聞竜の『茶箋』など喫茶の論じた著書が次々と現れた。そして、大典禅師の『茶経詳説』と木村兼葭堂の『煎茶略説』も中国茶書の影響を受けた作品であった。これらの作品を読めば、喫茶の本当の趣をよく理解できる、と主張する。

以上より、中国茶書の日本での受容の背景がさらに明らかになった。江戸時代に入り、日本は茶の湯の繁栄期を迎え、喫茶に熱中した人が社会の各階層から現れた。しかし、茶道人口の急増によって予想外の問題が多く生じた。特に奢侈遊興の風が起こり、喫茶の庶民化と低俗化の傾向が目立つようになった。そこで、一部の日本の茶人は失われた喫茶の風雅を取り戻すため、喫茶の発祥地である中国に注目し始めた。彼らは中国の茶書から高雅な精神を求めようとした。こうして、中国茶書への関心が高まり、煎茶のブームが興起し、中国の茶書から強く影響を受けた煎茶書も次々と刊行されたのであった。

第三節.煎茶書にみる中国の製茶法の受容

一. 中国の製茶法への認識

葉茶の使用は中国明代以降の喫茶法の代表的な特徴である。明代以降の茶書では、葉茶の製茶法に関わる記述が多く、とくに葉茶の栽培、採取、製作、貯蔵の方法が詳細に記録されている。一方、江戸時代以降、日本の煎茶書の中にも葉茶の製茶法の影響を受けた様子がうかがえる。つまり、日本の煎茶書の中に葉茶の生産に関する記録が多く増えたのである。

まず、江戸時代になると、日本の茶人は中国の歴代の製茶法の変遷に対する理解がますます深くなった。清代茶書『煎茶訣』の「製茶」は次のように述べてい

る⁷⁹。

西夏製茶之法、世変者凡四。古者蒸茶、出而搗爛之、為团乾置、投湯煮之、如茶經所載是也。其後磨茶為末、匙而実碗沃湯、筥攪勻之以供。其後蒸茶而布散乾之焙之、是所謂煎茶也。後又不用蒸、直炒之數過、撚之使縮。及用、実瓶如碗、湯沃之、謂之泡茶冲茶。

西夏に茶を製するの法、世に変はる者凡て四あり。古者は茶を蒸し、出でてこれを擣き爛し、团と為して乾置し、湯に投じてこれを煮る。茶經に載する所の如きは是れなり。其の後茶を磨きて末と為す。匙ひて碗に実れて湯を沃ぎ、筥にしてこれを攪勻して以て供す。其の後は、茶を蒸して布散し、これを乾してこれを焙る。是れ所謂煎茶なり。後には又た蒸すを用いず。直ちにこれを煎める數過、これを撚りて縮ましめ、用に及ぶときは瓶もしくは碗が如きに実れ、湯をもつてこれに沃ぐ。これを泡茶、冲茶と謂ふ。

そして、『煎茶訣』の和訳書として『煎茶略説』があるが、『煎茶略説』の「製茶」ではこの部分を次のように翻訳している⁸⁰。

もろこし(唐土)にて茶を製する法世々に変るものすべて四なり。いにしへは茶を蒸して出して擣爛し、或は擣て後に蒸もありといふ。為团乾置し湯に投れてこれを煮る。茶經に載る所のごとし。其後茶を磨て末となし、匙にて碗にいれ、湯を沃ぎ茶筥にて攪勻て供む。又其後茶を蒸て布散乾是所謂煎茶なり。後又蒸すことを用ひず、直に炒之こと數過してこれを撚使縮て用るに及て瓶または碗にに入れて湯を沃ぐ。これを泡茶と

⁷⁹ 『煎茶訣』製茶、(清)葉雋著・大典禪師補、関西大学図書館蔵本、請求番号L23**C*6838、1764。

⁸⁰ 『煎茶略説』製茶、沢田実成、新日本古典籍総合データベース、請求番号DIG-TOKY-166、1798。

も沖茶ともいふ。

『煎茶略説』はそのまま『煎茶訣』の「製茶」の章を訳したことが明らかである。また、『煎茶訣』の中に、大典禪師が後に追加した補説があり、中国の喫茶に対する江戸中期の日本の茶人の考え方が窺える。ここで引用された「製茶」の章が代表的な部分である。歴代の製茶の技法は複雑で、手順が多いが、大典禪師はその代表的な特徴に注目し、中国の製茶法には四つの変化があると指摘している。一つ目は、茶葉を搗き潰して蒸して団茶に作成する方法である。これは唐代の代表的な蒸青团茶の製茶法であり、陸羽の『茶経』に記録された製茶法でもある。二つ目は、茶葉を粉末にする方法である。これは宋代の代表的な末茶の製茶法であり、蒸青团茶の製法をさらに向上させた方法である。宋代の献上茶である龍鳳団茶が有名である。三つ目は、茶葉をそのまま蒸してから乾燥させる方法である。明代以降の蒸青葉茶という製茶法である。四つ目は、茶を炒めて茶葉を縮ませる方法である。炒青葉茶という製茶法である。蒸青葉茶と炒青葉茶は、中国明代と清代の主な製茶法となった葉茶の製法である。中でも、三つ目と四つ目の製茶法は、葉茶の製茶法として江戸時代以降日本に伝来し、日本の製茶法に多大な影響を与えた。

葉茶は最初に舶来品として日本に輸入され、日本の茶人に珍重された。『青湾茶話』は、珠蘭茶、松蘿茶、武夷茶を代表的な渡来茶として取り上げて注解を付けている⁸¹。『梅山種茶譜略』にも、売茶翁が小さい頃に、長崎で中国の僧人に武夷茶で招待されたことを記録している⁸²。しかし、中国の渡来茶は値段が高くて数が少ないという欠点があるだけでなく、その質も保証できない。例えば、『清風瑣言』に「唐茶とて、商舶の将来れる者は近年佳品なし。武彝、松蘿、龍井、蘭茶等の名あれども、真物にあらざるべし」とあり⁸³、そして『茶痕醉言』には「西土の品種、……上品ありといへども、たまたま来たるは、名のみにて粗製

⁸¹ 『青湾茶話』茶品彙、大枝流芳、新日本古典籍総合データベース、請求番号 225-201-5、1756。

⁸² 『梅山種茶譜略』、売茶翁、国立国会図書館蔵本、請求番号特 1-329、1838。

⁸³ 『清風瑣言』品解、上田秋成、早稲田大学図書館蔵本、請求番号ヲ 09 04053、1794。

也」とある⁸⁴。中国の貿易船によって輸入された名茶は、実は偽物や粗製品であったことを指摘している。

また、『煎茶訣』の「製茶」には、

唐茶舶来上者、亦為精細、但経時之久、失其鮮芳。肥筑間亦有称唐制者、然氣味頗薄、地産固然。

唐茶、舶来上者も亦た精細なり。但だ時を経ること久しく、其の鮮芳を失ふ。肥筑の間にも亦た唐製と称する者有り、然れども氣味頗る薄し。地産固より然り。

とある⁸⁵。また、『青湾茶話』は唐茶について「常に多く舶来のもの也。於肥州製之」と述べている⁸⁶。日本に舶来された唐茶つまり中国茶は長い時間を経ており、その鮮芳は失なわれてしまう。また、肥州と筑州では、唐茶の類似品も生産されている。

一方、中国の舶来茶は炒製茶の多く、炒製茶の特徴は香りが芳烈なことである。『煎茶小述』には、

西国産唐製の茶は、氣烈しきに過。尤洗ひてよし。

とあり⁸⁷、また

唐茶並に西国産唐製の茶は煎ずるによろしからず。

とある⁸⁸。江戸時代の日本人は中国茶もより味の薄いものを好んでいた。そこで、日本の茶人は自国における製茶に挑戦し始めた。彼らは、中国の舶来茶に触れる

⁸⁴ 「茶痕醉言(異文)」[五]、中村幸彦編、『上田秋成全集』第9巻随筆篇、中央公論社、1992、p. 355。

⁸⁵ 『煎茶訣』製茶、(清)葉雋著・大典禅師補、関西大学図書館蔵本、請求番号L23**C*6838、1764。

⁸⁶ 『青湾茶話』茶品彙、大枝流芳、新日本古典籍総合データベース、請求番号225-201-5、1756。

⁸⁷ 『煎茶小述』煎法、山本徳潤、国立国会図書館蔵本、請求番号特1-2747、1835。

⁸⁸ 『煎茶小述』淹法、山本徳潤、国立国会図書館蔵本、請求番号特1-2747、1835。

機会が増えたとともに、次第に中国の製茶法を学んで日本の茶品の数を増やした。『烹茶樵書』は葉茶の製造について次のように述べている⁸⁹。

其製造の概略は、清明穀雨の間に、茶の新芽四五葉を発し津液萌芽に升るを察し。熙々煦々のあしたをまちて、頂の三葉をつみとり、清水にあらひ、湯蒸焙乾す。その時を得れば、おのづから精茶をいたす。

曾占春は、茶葉の採取に最適な時期は清明と穀雨の間であり、つまり毎年4月と5月であると説明している。この時期に採った茶葉は、上質な精茶の製造に使える。これは明代の茶書の中に多く見られた考え方である。例えば、顧元慶『茶譜』の「採茶」には「穀雨前後収者為佳（穀雨の前後に収むる者は佳し）」とあり⁹⁰、そして屠隆『茶説』の「採茶」には「須在穀雨前後、覓成梗帶葉、微綠色而団且厚者為上（須く穀雨の前後に、梗を成して葉を帯ぶるものを覓むるべし。微綠色にして^{まる}団くして且つ厚き者を上とす）」とあり⁹¹、また張謙徳『茶経』の「採茶」に「凡茶須在穀雨採者為佳（凡そ茶は須く穀雨に採る者を佳とすべし）」とある⁹²。穀雨の前後は採茶の最も良い時期だと明代の茶人は考えていたが、日本の茶人もその考え方を受け継いだのである。

二. 蒸青茶と炒青茶への評価

蒸青と炒青の二種の製茶法も次第に日本に伝来した。日本において、最も代表的な蒸青茶は山城の宇治茶である。そして、最も代表的な炒青茶は近江の信楽の茶である。『竹田荘茶説』の「採茶」は次のように述べている⁹³。

⁸⁹ 『烹茶樵書』性味、曾占春、国立国会図書館蔵本、請求番号特 1-2601、1803。

⁹⁰ (明) 顧元慶『茶譜』採茶、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p. 180。

⁹¹ (明) 屠隆『茶説』採茶、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p. 237。

⁹² (明) 張謙徳『茶経』採茶、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p. 263。

⁹³ 『竹田荘茶説』採茶、田能村竹田、筑波大学中央図書館蔵本、請求番号ス 420-17、1829。

凡そ芽茶は、城州宇治を以て天下第一とす。宇治の内にてても、白折・折鷹を以て極品とす。宇治は唐土の羅峯茶と同製にて、むして焙しあくる也。諸国の茶は、炒りて製する者多し。

宇治茶は日本茶の中で最もすぐれているものである。また、山城以外の諸国は炒製茶が多い。それに、田能村竹田は、宇治茶の製法は中国の羅峯茶と同じ製法だと述べている。羅峯茶は明代の代表的な蒸青茶であり、現代中国の江蘇省の宜興市と浙江省の長興市が当時の主な産地である。羅峯茶の製法については、羅廩の『茶解』、許次紆の『茶疏』、聞竜の『茶箋』などの明代茶書の中にも詳細に紹介されている。

『竹田荘泡茶訣』の「製茶」は芽茶（葉茶）の製法について次のように述べている⁹⁴。

凡芽茶製有二法。一蒸一炒。城州宇治所造、蒸而焙之、故氣厚味温。如諸州、炒者為多。故味烈氣芳。然以宇治為海内第一。宇治亦有数十品。白折、折鷹為其最也。

凡そ芽茶の製は二法有り。一蒸一炒。城州宇治造る所、蒸して之を焙る。故に氣は厚くして味は温なり。諸州の如きは、炒る者多し。故に味は烈にして氣は芳なり。然るに宇治を以て海内の第一とす。宇治も亦た数十品有り。白折、折鷹は其の最もなり。

田能村竹田の言葉によれば、日本では、葉茶に対して蒸製と炒製の二種の製法が存在しており、蒸製の葉茶は味が温厚という特徴がある一方、炒製の葉茶は味が芳烈である、という特徴があるようだ。

宇治の茶は天下第一の茶だと好評を博したが、それと同時に信楽の茶もますます有名になり、煎茶家に珍重されるようになった。『清風瑣言』の「品目」には

⁹⁴ 『竹田荘泡茶訣』製茶、田能村竹田、筑波大学中央図書館蔵本、請求番号ス 420-17、1829。

近江の信楽、茶品殊に多し。山中の村民、園畝を開きて、蒸焙を事とす。

煎種の絶品此地天下第一なり。

とあり、信楽の煎種（煎茶の茶品）を高く評価している⁹⁵。また、『青湾茶話』の「茶品彙」は、一ツ山、雁音など信楽の産茶十六種を取り上げ、「江州信楽より産す。日東煎茶、此産第一とす。末茶は、以宇治第一とす」と述べ、信楽の産茶は煎茶の中で最も良いと評価している⁹⁶。

さらに、真間人は『茶史』の「扱茶舗」に

江都売茶之舗何啻数百家。均免道。均信楽也。

江都に茶を売の舗は何ぞ啻だ数百家のみならんや。均しく免道なり。

均しく信楽なり。

と述べている⁹⁷。江戸の茶店は数百軒を超え、ほとんどが宇治茶と信楽茶を販売していた。このように、江戸時代において宇治茶と信楽茶はそれぞれ蒸青葉茶と炒青葉茶の中で、最も有名で代表的な茶品となったことがわかった。

炒製法の普及によって各地には多くの茶品が生産された。しかし、質が低かったため、山城の宇治茶と近江の信楽茶ほど高く評価されておらず、また、知名度も高くなかった。『茶痕酔言』に

品第、宇治、信楽を最一とすべし。其余諸国の産あれと、大かた鑪茶製にて、焙炉の法ありとも、佳品ならず。

とある⁹⁸。諸国の産茶は鑪茶製で、つまり釜煎り茶であり、炒製茶である。しかし、製法を導入しても、もともとその土地の茶質が良くないため、高質な茶葉が

⁹⁵ 『清風瑣言』品目、上田秋成、早稲田大学図書館蔵本、請求番号ヲ 09 04053、1794。

⁹⁶ 『青湾茶話』茶品彙、大枝流芳、新日本古典籍総合データベース、請求番号 225-201-5、1756。

⁹⁷ 『茶史』扱茶舗、真間人、国立国会図書館蔵本、請求番号特 1-2759、1808。

⁹⁸ 「茶痕酔言」〔七〕、中村幸彦編、『上田秋成全集』第9巻随筆篇、中央公論社、1992、p. 322

生産できない、ということである。

また、『煎茶小述』の「茶之産」は次のように述べている⁹⁹。

諸国の産ずる所、各一方に名ありといへども、古来より城州宇治を絶品とす。江州信楽越溪の上品は、宇治に譲らず。肥前嬉野、相良、肥後玖摩、女良、播州仙霊、勢州菰野、尾州内津、濃州虎溪、駿州阿部、芦久保等。そのほかの諸州、産ずる所、山川の向背、土地の寒暖によりて、香味おのおのおなじからず、其名品を得ば、たまたま用いて清賞に供すべし。

ここからは、肥前、肥後、播磨、伊勢、尾張、美濃、駿河の諸産地の茶品が窺えるが、これらは名品ではなかったため、たまたま茶人に選用された程度の茶品であった。

三. 花香茶への賛否

一方、煎茶書の中には花香茶の製法に関する記述も目立つ。花香茶は、明代以降、中国の好事者によって発明された製茶法である。その製法は二つある。一つは、味の薄いお茶を花の中に封入して花の香りを十分に吸収させる方法であり、つまりは着香茶のことである。もう一つは花を摘んでそのまま乾燥させ、茶葉として使用するものだが、これは花茶とも呼ばれている。明代は、顧元慶の『茶譜』によって花香茶の製法が広く普及した。『茶譜』の「製茶諸法」は橙茶と蓮花茶の二種類の着香茶の製法を詳細に記録している。また、木樨、茉莉、玫瑰、薔薇、蕙蘭、蓮桔、梔子、梅花など多種の花茶の製法も載せている¹⁰⁰。そのほか、朱権『茶譜』の「薫香茶法」¹⁰¹や屠隆『茶箋』の「諸花茶」¹⁰²にも花香茶の製法について記述がある。その中で、日本の煎茶に最も大きな影響を与えたのは蓮花茶の製法である。

⁹⁹ 『煎茶小述』茶之産、山本徳潤、国立国会図書館蔵本、請求番号特 1-2747、1835。

¹⁰⁰ (明) 顧元慶『茶譜』採茶、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p. 180。

¹⁰¹ (明) 朱権『茶譜』薫香茶法、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p. 175。

¹⁰² (明) 屠隆『茶箋』諸花茶、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p. 238。

蓮花茶の製法を最初に日本に紹介したのは『煎茶訣』であろう。『煎茶訣』の「花香茶」は次のように述べている¹⁰³。

有蓮花茶者、就花半開者、実茶其内、絲匝擁之一宿、乘曉含露摘出、直投熱湯、香味俱発。

蓮花茶なる者有り、花半ば開く者に就きて、茶を其の内に実れ、絲をもつてこれを匝擁すること一宿、曉に露を含むに乗じて摘み出し、直ちに熱湯に投ずれば、香味俱に発す。

『煎茶訣』の内容を踏まえ、『煎茶略説』は「花香茶」¹⁰⁴の章を設け、また『自辨茶略』は「花香茶の事」¹⁰⁵を設けて花香茶のことを紹介している。

また、『清風瑣言』には花香茶について次のように述べている¹⁰⁶。

茶に、諸花の美香有ものを間ふる製有。蓮花茶は、日未出時に、半含の華を抜きて、茶を蕊中に充しめ、麻皮を以て固繋り、一夜宿せしめ、次早花を採て茶葉を傾出し、建紙包に収め、焙炉に燥すべし。木犀、梅花、梔子、薔薇、蘭、蕙、木香の類は、半開半放の、香美全き者を採り、茶の多少を量りて和する也。花多きは茶韻なし。花少なきは美香なし。

上田秋成の考えは、顧元慶の『茶譜』に由来し、その中の「製茶諸法」¹⁰⁷の章をそのまま和訳して『清風瑣言』の「入雑」の章に取り入れた。上田秋成は花香茶の内容を摘録し、「入雑」といった製茶法に少し興味を示したようだが、その次に「総て是等の種は一時の興のみ」と意見を述べているように、花香茶はあくまで好事者の一時的な遊びに過ぎないと認識していたのであろう。上田秋成の

¹⁰³ 『煎茶訣』花香茶、(清)葉雋著・大典禪師補、関西大学図書館蔵本、請求番号 L23**C*6838、1764。

¹⁰⁴ 『煎茶略説』花香茶、沢田実成、新日本古典籍総合データベース、請求番号 DIG-TOKY-166、1798。

¹⁰⁵ 『自辨茶略』花香茶の事、嵐翠子、早稲田大学図書館蔵本、ヲ 09 00439、1802。

¹⁰⁶ 『清風瑣言』入雑、上田秋成、早稲田大学図書館蔵本、請求番号ヲ 09 04053、1794。

¹⁰⁷ (明)顧元慶『茶譜』製茶諸法、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p.180。

喫茶の親友である村瀬栲亭も

茶有真香、有純香、有浮香、有間香。

茶に真香有り、純香有り、浮香有り、間香あり。

と述べている。また、

水中着塩、茶中着香料、皆喪其真。

水の中に塩を着け、茶の中に香料を着けることは、皆其の真を喪^{うしな}ふ。

と述べている¹⁰⁸。村瀬栲亭の意見は、おそらく蔡襄の『茶録』など先行茶書の影響を受け、『茶録』の内容を踏まえて改編したのであろう。蔡襄は「茶有真香、而入貢者微以龍腦和膏、欲助其香。建安民間、試茶皆不入香、恐奪其真。(茶には真香有り。而して入貢する者は微かに龍腦を以て膏に和し、その香りを助けんと欲す。建安の民間は、茶を試むるに皆香りを入れず、その真を奪うを恐る。)」と述べている。つまり、村瀬栲亭の考えでは、茶に花などを着香させることは、茶の本当の味を損なうため、花香茶の製法は推奨されていない。

また、真間人は『茶史』の「茶魔」の章において花香茶の製法に対して強く批判している。茶魔とは、茶の邪魔になるものを指しており、真間人は次のように述べている¹⁰⁹。

古人煎茶、有不博真趣、徒事奇僻、兼摘諸花之有香氣者以和茶。名曰助茶韻、以顧元慶屠赤水之好事猶且侵之。以余觀之、謂之辱茶可也。

古人の煎茶、真趣を博せず、徒だ奇僻を事とすること有り、兼ねて諸花の香氣有る者を摘みて以て茶に和す。名けて茶韻に助くと曰ふ。顧元慶、屠赤水の好事を以て猶ほ且つこれを侵す。余を以て之を觀るに、之を辱茶

¹⁰⁸ 『清風瑣言』村瀬栲亭の序、上田秋成、早稲田大学図書館蔵本、請求番号ヲ09 04053、1794。

¹⁰⁹ 『茶史』茶魔、真間人、国立国会図書館蔵本、請求番号特1-2759、1808。

と謂ふ可し。

ここでは、古代中国の煎茶を好んだ茶人の中には、茶の本当の趣を知らない人がおり、彼らが花香茶を推奨するのも、ただ変わった事を好んだだけであったことが述べられ、顧元慶と屠隆がその代表的な茶人であった。真間人の考えでは、花香茶の製作は、茶を辱める行為だったといえる。

また、曾占春は花香茶の製作は場合に依るべきだと主張する。『煎茶小述』の「百香茶」は次のように述べている¹¹⁰。

上好の茶は、花香を忌。諸花を配すれば茶の真味を奪ふ。平等の茶あるひは上茶の久しく貯ひて、茶氣脱たるを用ゆべし。これ茶家真賞にはあらずといへども、幽人の一韻事なり。

彼の考えでは、高級の茶品に花香を付着させるのはよくないので避けるべきであったが、その一方、一般の茶品や味が散失した高級茶は、茶の本来の香りが減っているため、花香を付けてもよい。しかし、このような行為は、茶の本当の美味を味わいたい人がすべきことではなかった。あくまでも好事者の風流な遊びにすぎないのであった。

以上より、中国の製茶法の日本での受容をさらに明らかにした。江戸時代になると、日本の茶人は中国の製茶法の変遷に対する認識が深まった。茶葉は商品として清代の貿易船を經由して日本に伝来した。ただし、輸入された商品茶のみならず、中国の茶葉の製法が次第に日本に伝来したことがより重要である。日本の煎茶文化の誕生は、日本国内の茶葉の製法が変化した結果であり、その変化は、中国からの製茶法の伝播に関係している。新たな製茶法の伝来が日本の茶文化の発展に有益な刺激を与えたといえよう。蒸製葉茶と炒製葉茶の製法が次第に日本に普及し、宇治の茶と信楽の茶はますます有名となった。一方、蓮花茶など趣味的な花香茶の製法も日本に伝来し、日本の茶人の興味を引き起こした。

¹¹⁰ 『煎茶小述』百花茶、山本徳潤、国立国会図書館蔵本、請求番号特 1-2747、1835。

第四節.煎茶書にみる中国の喫茶法の受容

一. 泡茶法の伝来

明代以降、葉茶の使用が普及するとともに、泡茶法も代表的な喫茶法として広く流行した。そして、清代に入り、泡茶法が中国の商人や僧侶によって長崎を経由して日本に伝わってきた。江戸時代以降、日本の煎茶家は中国明代の泡茶法を積極的に受け入れて使用し始めた。日本の煎茶書の中に、泡茶法に関する記述が多く見られるようになった。

江戸中期、日本の茶人は、中国の喫茶法の変遷に対する認識がますます深くなった。例えば、『梅山種茶譜略』は次のように述べている¹¹¹。

中華モ上古ハ抹茶ヲ用キ、其後団茶、煎茶各用ユ。近代ニ至リテハ、専ラ沖茶ヲ用ユ。茶経所謂淹ナリ。或ハ泡茶ヲ用ユ。泡ハ盃ニ茶ヲイレ、熟湯ヲ瀉テ喫ス。沖茶、泡茶ハ、茶ノ製煎茶ト異ナリ。

売茶翁の認識では、古代の中国は抹茶、団茶、煎茶の喫茶法を用いたが、明代と清代に入ってからもっぱら沖茶と泡茶の喫茶法を使用するようになった。売茶翁のいわゆる沖茶は、急須を使用する壺泡法である。そして、泡茶は茶碗を使用する杯泡法である。沖茶と泡茶は葉茶を使用するため、唐代の煎茶法で使用した団茶と製法が異なる。

また、『茶経詳説』の附言は次のように述べている¹¹²。

明世ヨリ煎茶ノ法ヤミテ葉茶ヲ瓶又ハ鍾ニイレテ湯ヲソソギテノム、此ヲ泡茶又沖茶トイフ、此方ニイフ出茶ナリ。

注：泡ハスベテ湯水ヲ上ヨリソソグコトヲイフ、沖茶トハチョコクニテノダシ茶ナリ。

¹¹¹ 『梅山種茶譜略』、売茶翁、国立国会図書館蔵本、請求番号特 1-329、1838。

¹¹² 『茶経詳説』附言、大典顕常、国立公文書館内閣文庫蔵本、請求番号 199-0306、1774。

大典禪師の考えでは、明代の茶人は唐代の煎茶の喫茶法を止めて葉茶の使用を始めた。泡茶と沖茶は、いわゆる日本のだし茶である。泡茶は茶瓶（急須）を使用して熱湯を茶葉の上から注ぐ喫茶法である。つまり壺泡法のことを指している。沖茶はチョク（茶碗）の中に葉茶を入れて、熱湯を注ぎ込む喫茶法である。つまり杯泡法のことである。

一部の茶人は長崎へ赴いて清人と直接に接触して中国の最新の喫茶法を学んだ。例えば、『石山齋茶具図譜』には次のように述べている。¹¹³

本邦茶飲之行久矣。近日所用葉茶、相伝僧隱元将来。未知果然否。至其用風炉急尾焼、烹点飲啜、自遊外高翁始焉。丁亥年、寓崎山、見清人煮茶、湯瓶茶注、相須為用、如茶疏所論。

本邦、茶飲の行いは久し。近日用ゆる所の葉茶は、相ひ伝ふらく僧の隱元の将来なりと。未だ果然なるか否かを知らず。其の風炉、急尾焼を用ひて、烹点飲啜に至りては、遊外高翁より始まる。丁亥の年、崎山に寓し、清人の茶を煮るを見るに、湯瓶、茶注、相ひ須ちて用を為すこと、茶疏の論ずる所の如し。

田能村竹田の記録によれば、江戸後期になると、葉茶の飲用はすでに流行し、風炉と急須の使用も盛んになった。文政丁亥年（1827）、竹田は長崎に滞在したとき、清人の喫茶法を見学した。これは湯瓶と茶注を使用した喫茶法であるため、明代の壺泡法であった。清人の茶器の使い方は、明代許次紆の『茶疏』に記載された方法と同じであった。また、彼は清人の独特な壺泡法と杯泡法を見学した経験を次のように記録している¹¹⁴。

有清人用小瓶点茶、直就其嘴而飲、不用盞杯。一人自用、不施於他。名曰独茶罐。夜間置之枕頭、臨時適用、或出遊、亦携之取便矣。

¹¹³ 『石山齋茶具図譜』、田能村竹田、筑波大学中央図書館蔵本、請求番号ス 420-6、1829。

¹¹⁴ 『石山齋茶具図譜』、田能村竹田、筑波大学中央図書館蔵本、請求番号ス 420-6、1829。

清人に小瓶を用ひて茶を点じ、直に其の嘴に就きて飲み、盞杯を用ひざるもの有り。一人にて自ら用ひ、他に施さず。名づけて独茶罐と曰ふ。夜間にこれを枕頭に置き、時に臨みて適用し、或ひは出遊するに、亦たこれを携へて便を取る。

又有貴客到、則椀中置茶、上用茶圧、不使其浮動而後注湯、蓋而進客。但如茶圧、有用者、有不用者。各隨其意、非有所限也。

又た貴客の到る有らば、則ち椀中に茶を置き、上に茶圧を用ひて、其をして浮動せしめずして後に湯を注ぎ、蓋して客に進む。但し茶圧の如きは、用ゆる者も有り、用ひざる者も有り。各の其の意に随ひて、限る所有るにあらざるなり。

清人の中に、茶碗を使わず小さい急須の注ぎ口に口を付けて茶を飲む人がいたが、これは壺泡法の一つであり、独茶罐と呼ばれていた。また、貴客がきた時、茶圧を使って杯泡法で客人を招待することもあったという。

二年後、田能村竹田は学んだ泡茶法に基づいて『竹田莊茶説』と『竹田莊泡茶訣』を著した。彼は清人の泡茶法を導入して日本の茶人の口に合う喫茶法を考案した。例えば、『竹田莊泡茶訣』の「冲泡」は次のように述べている¹¹⁵。

湯候方至、則投茶壺内、即急注湯、以蓋覆定、候其湯熟。如宇治茶、稍緩為可。諸州炒者、宜速。然後瀉以供客也。茶量大抵茶一合、如宇治、可重六分、諸州炒者、重五分也。

湯候方（はじ）めて至れば、則ち茶壺の内に投れ、即ち湯を急注し、蓋を以て覆定し、其の湯熟するを候つ。宇治茶の如きは、稍や緩やかにするを可とす。諸州の炒なる者は、速やかに宜し。然る後に瀉ぎて以て客に供す。茶量は、大抵茶一合にして、宇治の如きは、重さ六分にすべし。諸州の

¹¹⁵ 『竹田莊泡茶訣』冲泡、田能村竹田、筑波大学中央図書館蔵本、請求番号ス 420-17、1829。

炒なる者は、重さ五分にすべし。

田能村竹田の考えでは、宇治茶を飲む際は、お湯を緩やかに注いで、用量は重さ六分で、やや多めに入れてよいが、諸州の炒製茶を飲む際は、お湯を速やかに注ぐべきであり、用量は重さ五分で、少なめに投入したほうがよい、とのことである。日本製の葉茶の特徴に合わせ、中国の泡茶法を調整して改良した工夫がうかがえる。

そのほか、明代の泡茶法についての記述は、『青湾茶話』の「淹茶（だしちゃ）」¹¹⁶、『煎茶訣』の「淹茶」¹¹⁷、『煎茶小述』の「淹法」¹¹⁸、『煎茶手引之種』の「淹茶」¹¹⁹など多くの煎茶書に論じられている。ここからも、明代の泡茶法が日本に広く普及したことがわかる。

二. 茶器の選択

明代の泡茶法の積極的な導入とともに、日本の茶人は茶器の選択への関心が高まり、中国の茶人の審美眼を積極的に学んで、中国の茶器を積極的に受け入れた。泡茶法の伝来の初期、日本の茶人は中国から輸入された茶器を重視していた。しかし、それは高価なものがほとんどであった。『淹茶小録』の「撰器」は次のように述べている¹²⁰。

今時ハ漢製ノ珍器種々ニ渡り来。故ニ自然身分ニ不応高価ノ器ヲ得テ却テ苦ヲ求メテ樂ム事ヲ知ラヌ人多シ。身ノ分限ヲ忘ル、事ナカレ。下価ノ器ニテモ用ヒ安キ雅趣ノ物ヲ択ヒ購フベシ。

太田乗の考えでは、江戸時代に入り、中国の舶来の茶器が多く日本に伝来し、

¹¹⁶ 『青湾茶話』淹茶、大枝流芳、新日本古典籍総合データベース、請求番号 225-201-5、1756。

¹¹⁷ 『煎茶訣』淹茶、(清)葉雋著・大典禅師補、関西大学図書館蔵本、請求番号 L23**C*6838、1764。

¹¹⁸ 『煎茶小述』淹茶、山本徳潤、国立国会図書館蔵本、請求番号特 1-2747、1835。

¹¹⁹ 『煎茶手引之種』淹茶早稲田大学図書館蔵本、山本都竜軒、請求番号、イ 04 03159 C102、1848。

¹²⁰ 『淹茶小録』撰器、『淹茶小録』撰器、太田乗、東京都立中央図書館加賀文庫、請求番号加 6288、1867。

そのような高価なものを求めるために苦心する人が多く現れたが、これは自分の身分にふさわしくない愚かな行動である。便利で雅趣のある茶器でさえあれば、安いものであっても購入すべきであるという。

数多くの茶器の中でも、日本の茶人は明人の茗壺（急須）への関心が一番高かった。例えば、『鉄荘茶譜』は次のように述べている¹²¹。

淹茶無精於明季也。庵茶無佳於泥壺也。陽羨茗壺所以独擅於明季者可知矣。因泥壺名手比々輩出、而供春大彬蓋其選也。延以至清、今尚不絶焉。

淹茶は明季（明代の人）より精なるもの無し。庵茶は泥壺より佳なるもの無し。陽羨の茗壺以て独りに明季に擅（ほしいまま）にする所は知る可し。泥壺に因りて名手は比々として輩出し、供春と大彬は蓋し其の選びなり。延びて以て清に至り、今尚ほ絶えず。

富岡鉄斎の考えでは、明代の人は淹茶（泡茶法）が最も得意であるが、茶を淹れるとき、泥壺（急須）は最適な茶器であった。したがって、数多くの明代茶器の中でも、陽羨の茗壺が最も有名であったし、供春や時大彬のような名匠が輩出した。そして、中国茶人の茗壺への関心が清代まで引き続き、現在までも絶えていない、ということである。

日本の茶人の間でも高価な急須への関心が高まった。しかし、一般人にとって中国の急須は容易に入手できるものではなかった。したがって、日本国内の製品も次第に彼らの視野に入った。『石山齋茶具図譜』は次のように述べている¹²²。

唐山湯瓶、茶注属、用錫者居多。其他金銀珠玉、或石或竹、有貴重者、有巧緻者。其所刻詩句蘭竹、無不精妙者。大抵和造貴輕清、唐造貴重厚。不唯罐瓶如此、諸器皆然。

¹²¹ 『鉄荘茶譜』 瓷壺之部、富岡鉄斎、ARC 古典籍ポータルデータベース、請求番号 arcBK05-0018、1867。

¹²² 『石山齋茶具図譜』、田能村竹田、筑波大学中央図書館蔵本、請求番号ス 420-6、1829。

唐山（中国）の湯瓶・茶注の属、錫を用うる者多きに居る。其の他金銀珠玉、或いは石或いは竹、貴重なる者有り、巧緻なる者有り。其の刻する所の詩句蘭竹は、精妙ならざる者無し。大抵和造は輕清を貴び、唐造（中国製）は重厚を貴ぶ。唯に罐瓶の此くの如きのみならず、諸器も皆然り。

田能村竹田の考えでは、中国の湯瓶と茶注は錫で作られたものが一般的であるが、そのほか金、銀、珠、玉、石、竹など多様な素材で作られたものもある。中国から渡来した茶器には貴重なものがあり、巧緻なものもあるし、また、日本製の茶器の特徴は軽くて清らかである一方、中国製の茶器は重みと厚みを重視している、とのことである。

また、『煎茶小述』の「清賞」に

茶具は浄潔を貴ひて華飾を貴ばず。彼珍器を排列し、瓊盃を陳設して、奢を競ふの輩、豈ともに真賞を語るべけんや。

とある¹²³。ここから、茶具は清潔であるものを重んじるべきであり、華やかな茶具ばかりを重視して奢侈な茶席を好んだ俗人は、喫茶の本当の価値を理解していない、という評価が窺える。

上田秋成は『茶痕酔言』で

玩器伝来賞すへし。其余は舜盃といへとも、古廢器也。煎茶家、茶具新調をもはらとす。

と主張している¹²⁴。中国伝来の茶器は鑑賞に値するが、古くさい茶器は捨てるべきであり、煎茶を好む茶人は、もっぱら新調の茶器を使うべきだ、と主張している。さらに、村瀬栲亭と上田秋成は中国の茶器を原型として新しい日本茶器を考案したことで有名である¹²⁵。

¹²³ 『煎茶小述』清賞、山本徳潤、国立国会図書館蔵本、請求番号特 1-2747、1835。

¹²⁴ 「茶痕酔言」〔一七〕、中村幸彦編、『上田秋成全集』第9巻随筆篇、中央公論社、1992、p. 322

¹²⁵ 『石山齋茶具図譜』、田能村竹田、筑波大学中央図書館蔵本、請求番号ス 420-6、1829。

村瀬栲亭翁嗜茶、語予曰、初与無腸老人謀、使清六始造急尾焼及風炉。當時好茶者甚罕、一二十年來、從輦下延至民間田舎、無家不備茶具以待過客也。甚哉、時人趨風趁流乎。蓋清六善陶、所造極佳。爾後名手競興、如木米老人、及道八、久太諸名家、清雅巧緻、名藉一世。異日、当倣陽羨名壺系而著一書、伝芳悠久也。

村瀬栲亭翁は茶を嗜み、予に語りて曰く、初めは無腸老人（上田秋成）と謀り、清六をして始めて急尾焼及び風炉を造らしむ。當時は茶を好む者甚だ罕なり。一二十年來、輦下（京都）より民間田舎に延びて至る。家として茶具を備えて以て過客を待せざるもの無きなり。甚しきかな。時人は風に趨りて流を趁うこと。蓋し清六は陶を善くし、造る所は極めて佳し。爾後に名手は競いて興り、木米老人、及び道八・久太の如き諸名家は、清雅巧緻にして、名は一世に藉く。異日、当に陽羨名壺系に倣いて一書を著し、芳を悠久に伝うるべきなりと。

村瀬栲亭の話によれば、彼は上田秋成と相談して中国の急須と風炉を原型として陶匠の初代清水六兵衛にそれを作らせたという。寛政年間以降、煎茶は京都から地方まで広く流行し、その中で、初代清水六兵衛の後、青木木米、仁阿弥道八、岡田久太など有名な陶匠が輩出したが、彼らの中国茶器の模作が、日本人の茶器への認識を更新させた、ということである。

このように、名工が輩出する時代になっただけではなく、各地の茶器の生産も盛んに起こって大規模化が進んだ。例えば、『煎茶小述』の「扱器」は次のように述べている¹²⁶。

煎茶の用は、器を扱ぶを要とす。砂瓶は薩摩を上とす。京都名工の精製、長崎の亀山、肥前の伊万里、其他国々の製する所枚挙に暇あらず。人々の好みに従ふべし。但其美醜を論ぜず、潔淨にして小なるを佳とす。

¹²⁶ 『煎茶小述』扱器、山本徳潤、国立国会図書館蔵本、請求番号特 1-2747、1835。

急須の製作は、薩摩、京都、長崎、肥前など日本各地で行われた。ここでは、急須の選用は見た目の美醜ではなく、清潔で小ぶりのものが良い、とされている。

このように小ぶりの急須の使用を推奨することは、実は明代の茶人の一般的な考え方を受け継いでいる。例えば、朱権『茶譜』の「茶瓶」に「瓶要小者、易候湯（瓶は小なる者を要す。湯を候つに易し）」とあり¹²⁷、許次紆『茶疏』の「秤量」には「茶注、宜小不宜大（茶注は、小に宜しくて大に宜しからず）」とある¹²⁸。また、屠隆『茶箋』の「扱器」には「凡瓶、要小者、易候湯（凡そ瓶は、小なる者を要す。湯を候つに易し）」とあり¹²⁹、張謙徳『茶経』の「茶壺」に「茶性は狭し。壺過大ならば、則ち香り聚まず」ともあるが¹³⁰、いずれも小型の茶器の使用を薦めている。

日本の茶人の泡茶法受容は、中国の急須から影響を受けただけでなく、茶碗を選ぶことにおいても、明らかに中国の審美眼に影響されている。例えば、『茶史』の「茶盞」は次のように述べている¹³¹。

茶盞用磁、磁不厭白、印花亦不妨、独忌黝黒者。黝黒則末茶之具、非煎茶所宜。平戸三河内窯居首品、唐津萩皆退舎、他所者不足論。

茶盞は磁を用ゆ。磁は白きを厭わず、印花も亦た妨げず。独り黝黒なる者を忌む。黝黒すれば則ち末茶の具なり、煎茶の宜しき所に非ず。平戸、三河、内の窯は首品に居り、唐津、萩は皆退舎す。他所は論に足らず。

このように、真間人は白くて磁製の茶碗の使用を唱え、黒い茶碗の使用に反対している。

また、『煎茶小述』の「扱器」は次のように述べている¹³²。

¹²⁷ (明) 朱権『茶譜』茶瓶、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p.176。

¹²⁸ (明) 許次紆『茶疏』秤量、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p.272。

¹²⁹ (明) 屠隆『茶箋』扱器、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p.239。

¹³⁰ (明) 張謙徳『茶経』茶壺、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p.265。

¹³¹ 『茶史』茶盞、真間人、国立国会図書館蔵本、請求番号特1-2759、1808。

¹³² 『煎茶小述』扱器、山本徳潤、国立国会図書館蔵本、請求番号特1-2747、1835。

茶盃は舶来の上品、亀山、平戸、唐津、伊万里。近来諸州の製造精好潔
浄なるもの少からず。厚手にて内白色なるを択び用ゆべし。

山本徳潤は清潔で色が白くて地の厚い茶碗の使用を推奨している。このよ
うな真間人と山本徳潤の主張は、明らかに明代の茶人の考え方の影響を受けたも
のである。

屠隆『茶箋』の「択器」に「宣廟時尙茶盞、料精式雅、質厚難冷、瑩白如玉。
可試茶色、最為要用（宣廟の時茶盞有り、料は精にして式は雅なり。質は厚くて
冷し難し。瑩白にして玉の如し。茶色を試みるべし。最も要用なり）」とある¹³³。
また、張源『茶録』の「茶盞」に「盞以雪白者為上、藍白者不損茶色、次之（盞
は雪白なる者を以て上とす。藍白なる者は茶色を損せず、之に次ぐ）」とある¹³⁴。
さらに、許次紓『茶疏』の「甌注」には「茶甌古取建窯兔毛花者、亦闘碾茶用之
宜耳。其在今日、純白為佳、兼貴於小（茶甌、古は建窯の兔毛花ある者、亦た闘
碾茶の用の宜きものを取るのみ。それ今日に在らば、純白を佳とし、兼ねて小を
貴とす）」とあり¹³⁵、屠本峻『茗苈』の「第十弁器章」に「甌則但取圓潔白磁而
已、然宜小（甌は則ち但だ圓潔なる白磁を取るのみ、然るに小に宜し）」ともあ
る¹³⁶。このように、明代の茶書は小ぶりで白い茶碗の使用を提唱し、黒い茶碗を
好まなかった。特に景德鎮の白磁の茶碗は有名で、明人に愛用されていた。日本
の茶人も景德鎮の茶碗の様式を模作している。

要するに、白い茶碗が両国の茶人に愛用された理由は、喫茶法の変遷にある。
点茶法を使用した宋代には、抹茶を使用し、茶汤の色が渾濁であったため、黒い
茶碗を使ったほうが、茶の質を判別しやすかった。一方、明代に入り、泡茶法が
点茶法に代わって主流の喫茶法となった以降は、葉茶でできた茶汤の色が透明
になり、白い茶碗を使用したほうが、茶の状態を見分けやすかった。江戸時代の
日本の茶人が白い茶碗を使い始めたのも、中国式の葉茶の泡茶法が広く普及し

¹³³ (明) 屠隆『茶箋』択器、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p. 240。

¹³⁴ (明) 張源『茶録』茶盞、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p. 254。

¹³⁵ (明) 許次紓『茶疏』甌注、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p. 272。

¹³⁶ (明) 屠本峻『茗苈』第十弁器章、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p. 364。

たからである。

以上より、中国の泡茶法の日本での受容を検討した。江戸時代以降、日本の茶人は中国の歴代の喫茶法の変遷に対する認識がますます深くなった。そして、日本の茶人は長崎に到着した清人との交流によって、中国の明代から流行した泡茶法を習得した。新たな喫茶法を学ぶ同時、新しい茶器も次第に導入された。急須などの使用の普及によって、明人に愛用された茶器は、日本の茶人の審美眼に刺激を与え、茶席に新しい選択肢を与えた。

第五節.煎茶書にみる中国の文人茶の受容

一. 文人茶の日本受容

日本の茶人は中国から最新の製茶法と喫茶法を受け容れただけではなく、喫茶における文人的な趣味と精神的な追求も積極的に学んだ。中国明代の文人は茶を好み、喫茶を生活と融合させ、風流と趣味の溢れる文人茶を盛んにした。明代以降の茶書の中には、文人趣味の溢れた内容が多く見られる。例えば、許次紓『茶疏』の「飲時」・「宜輟」・「不宜用」・「不宜近」・「良友」¹³⁷、陸樹声『茶寮記』の「煎茶七類」¹³⁸、陳元輔『枕山楼茶略』の「得趣」¹³⁹などの章節は、日本の煎茶書に多大な影響を与えた。そのため、江戸時代の煎茶家は、喫茶の伴侶や環境を選択する際に、中国の文人と非常に近い考え方を持っていた。

日本の煎茶家の考えでは、喫茶は高雅な趣味であり、茶を嗜む人は必ず高い教養のある人でなければならなかった。品位の低い俗人は奢侈な茶席と高価な珍器の競争ばかりに注目したため、煎茶の本当の風流が理解出来なかったと考えられる。

¹³⁷ (明) 許次紓『茶疏』飲時・宜輟・不宜用・不宜近・良友、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p. 274。

¹³⁸ (明) 陸樹声『茶寮記』煎茶七類、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p. 223

¹³⁹ 『枕山楼茶略』得趣、(清) 陳元輔、静嘉堂文庫蔵本、請求番号 46 函 57 架、1805。

『木石居煎茶訣』の跋で次のような批判が展開されている¹⁴⁰。

茶有煎末之主流、而煎末亦各有二派。一雅茶、是為文人茶。一俗茶、是為野人茶。而近今之煎茶家、多陷於俗、於末茶家亦然。……所謂俗茶、遠罪盧陸、近流高翁。

茶に煎末の主流あり。煎末にも亦た各々二派有り。一つは雅茶にして、是は文人茶なり。一つは俗茶にして、是れは野人茶なり。近今の煎茶家、俗に陥つるもの多し。末茶家にも亦た然り。……いわゆる俗茶、遠かれば盧陸を罪し、近ければ高翁を流す。

河村澄の考えでは、日本の喫茶は煎茶と抹茶の二つの流れに分けられ、煎茶と抹茶はさらに雅茶と俗茶、つまり文人茶と野人茶の二つに分けられる。現在（江戸後期）の煎茶家と末茶家は、俗茶に墮ちる人が多く、俗茶を行う人は、昔の盧仝と陸羽の風流な喫茶を侮り、また近世の売茶翁高遊外の煎茶の名声を汚した、という。

『詠茶詩録』の序には、

茗飲、騷人韻士之事也。

茗飲は騷人韻士の事なり。

とあるが¹⁴¹、亀田綾瀬は茗飲を風流文雅な人の趣味だと考えていた。

『烹茶樵書』には、

夫茶清物也、説茶清事也。千言万語、要之不欲。雖清一字也。

¹⁴⁰ 河村澄の跋。深田精一、『木石居煎茶訣』、国立国会図書館蔵本、請求番号特 1-1887、1849。

¹⁴¹ 綾瀬漁人の序。館柳湾、『詠茶詩録』、新日本古典籍総合データベース、請求番号ナ 8-272-1～4、1839。

夫れ茶は清物なり。茶を説くことは清事なり。千言万語、之を要するも欲せず。雖だ清一字のみなり。

とある¹⁴²。茶は清雅な物であり、茶を解説することは清雅な事であり、茶をよく把握するには多くの言葉は要らず、清の一文字だけで十分である、とのことである。

『茶集』の序には、

茶之奥也、於彼中世乎、我土移之、時不秀疏峰乎、今則為不可缺之清事矣。

茶の奥は、彼の中世においてか、我が土に之を移す。時に疏峰を秀でさせざるか。今は則ち缺くべからざる清事なり。

とある¹⁴³。茶は中世より中国から日本へ移したもので、今は茶人にとって不可欠な清雅な事となっている、とする。

『南宗茶具名牋』には、

茶是韻士清戲、禪林幽娛。固非拘法泥律、修飾自喜者所能知。

茶は韻士の清戲、禪林幽娛なり。固より法に^{とらは}拘れて律に^{なず}泥み、修飾して自ら喜ぶ者の能く知る所に非ず。

とある¹⁴⁴。島孟克の考えでは、茶は風流人の清らかな戯れであり、僧侶のかすかな娯楽であったが、茶の礼法に拘泥する人はその趣をわからない、という。

『青湾茶会図録』の序には、

煎啜之者、最在其人。侈奢淫佚、非其人也。頑固傲慢、非其人也。趨利

¹⁴² 大窪詩仏の跋。曾占春、『烹茶樵書』、国立国会図書館蔵本、請求番号特 1-2601、1803

¹⁴³ 藤原憲の序。(明) 諭政、『茶集』、早稲田大学図書館蔵本、請求番号ヲ 09 03697、1803。

¹⁴⁴ 『南宗茶具名牋』、島孟克、国立国会図書館蔵本、請求番号 855-24、1861。

要名、非其人也。必当潇洒爽朗、風流韻致之人、而不愧彼靈草也。

煎啜の者、最も其の人在る。侈奢淫佚、其の人に非ず。頑固傲慢、其の人に非ず。趨利要名、其の人に非ず。必ず当に潇洒爽朗、風流韻致の人にすべし。而して彼の靈草を恥づかします。

とある¹⁴⁵。煎茶を行う人にとって、茶人としての人格が最も重要であり、奢侈と淫佚に耽る人、頑固で傲慢な人、利益に趨いて名声を重んじる人は茶事にふさわしくないの、俗を離れて洒脱な人、風流と雅韻がわかる人こそ、靈草である茶にふさわしい、という。

『烹茶樵書』の跋には次のように述べている。

待清物、宜用清器。世之簡器者、目中無睛、以野為雅、以粗為韻、甚至不辨汚穢、把清一字拋之洪濛之外。

清物を待するに清器を用ひるに宜し。世の器を簡^{えら}ぶ者は、目の中に睛^{ひとみ}無し。野を以て雅とし、粗を以て韻とす。甚だしきに至るものは汚穢を辨ぜず。清の一字を把^とりて之を洪濛（混沌の宇宙）の外に抛ぐ。

とある¹⁴⁶。茶は清らかな物であり、故に茶を飲むには清らかな器を使うべきである、とする。粗末で汚い茶器を雅韻なものとして使った茶人は、清の重要性を完全に忘れ、喫茶の真趣を損なっている、とも言う。

二. 文人茶の環境

一方、明代の文人は喫茶の環境も重視した。賑やかで華やかな場所は喫茶にふさわしくなく、清潔で素朴で静かな環境を選ばなければならなかった。その考え方は日本の煎茶書にも大きな影響を及ぼした。

¹⁴⁵ 香坡醉客の序。田能村直入、『青湾茶会図録』、国立国会図書館蔵本、請求番号 839-138、1863

¹⁴⁶ 大窪詩仏の跋。曾占春、『烹茶樵書』、国立国会図書館蔵本、請求番号特 1-2601、1803

『茶史』の「賞茶有地有時」には、

茶性儉、不宜広。勿用登山臨水。勿用華筵衆客。其味必澹。花下香席非所宜、其氣必相侵。若其所宜、則涼台靜室、明窓淨几、僧寮道院、雨朝雪夕、緑蔭苔徑、竹月松風、独坐対吟、彈琴圍碁、清談把卷、皆其所宜也。

茶性は儉として広に宜しからず。登山臨水を用ゆる勿れ。華筵衆客を用ゆる勿れ。其の味必ず澹くなり。花下の香席は宜しき所に非ず、其の氣は必ず相い侵す。其の宜き所の如きは、則ち涼台靜室、明窓淨几、僧寮道院、雨朝雪夕、緑蔭苔徑、竹月松風、独坐対吟、彈琴圍碁、清談把卷、皆其の宜き所なり。

とあり¹⁴⁷、茶性は儉朴であり、奢華に合わない、という。この考え方は、陸羽の「茶之為用、味至寒、為飲最宜精行儉徳之人（茶の用ゆるに為るは、味は至りて寒にして、飲むに為るに最も精行儉徳の人に宜し）」に由来する¹⁴⁸。故に、山を登って水に臨む必要はなく、華やかな宴会を開いて大勢の賓客を集める必要もない。強い花香に満ちた宴席も喫茶にふさわしくない場所である。真間人はその次に、涼しい露台や静かな室など複数の喫茶に似合う環境を提示している。こちらで取り上げた内容は、ほとんど明人陸樹声の『茶寮記』の「五茶候」¹⁴⁹を写したものである。

『煎茶小述』の「清賞」には、

酒楼妓館、茶の地にあらず。吹彈歌舞、茶の席にあらず。錦帷繡幕、茶の設にあらず。金盞玉盃、茶の器にあらず。茅舎竹屋、小樓靜室、松塢朝霞、楓林夕照、梅窓雪暁、蕉軒雨夜、同人対話、嘉賓適至、埽炉火活、鉄銚湯沸、砂瓶緑を点じ、磁盃翠を啜る。幽人の清賞、其興味いふべからず。

¹⁴⁷ 『茶史』賞茶有地有時、真間人、国立国会図書館蔵本、請求番号特 1-2759、1808。

¹⁴⁸ (唐) 陸羽、『茶経』一之源。布目潮瀾、『中国茶書全集』、汲古書院、1987、p. 90

¹⁴⁹ (明) 陸樹声『茶寮記』五茶候、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p. 223。

とある¹⁵⁰。酒屋と遊女屋は茶を飲む場所ではないし、笛を吹いたり琴をひいたり歌ったり踊ったりする場所は、茶席を開く場所ではない。また、華やかな装飾は、茶席に飾るものではない、という。さらに、山本徳潤は茅の舎宅や竹の小屋を始めとして、喫茶にふさわしい場所を次々と取り上げている。このような風雅な環境こそ、俗世間を離れた幽客の清賞の趣味と一致していた、という考えである。

『青湾茶会図録』の序には、

茶為靈草、宜択其地而煎之也。江山清絶、林泉幽邃、松窓竹屋、月軒雪亭皆宜焉。

茶は靈草なり。宜しく其の地を択び之を煎ずるべし。江山の清絶、林泉の幽邃、松窓と竹屋、月軒と雪亭は皆宜し。

とある¹⁵¹。香坡酔客の考えでは、茶は仙草であるため、煎茶を行うときに場所をきちんと選ぶべきである、という。清絶な山地、幽邃な林泉、松が映った窓際、竹で作られた小屋、月の下の軒室、雪に飾られた亭園、すべて喫茶にふさわしい環境である、という。

『煎茶式』には次のように述べている。

或ハ山野絶勝ノ境ヲ探リ都籃ヲ携ヘテ松根ニ倚リ、怪石ニ傍ヒ、瀑布ノ下ニ坐シ、修竹林ニ入り又ハ土坡ノ上、又ハ舟ヲ江流ニ浮シテ、或ハ雪月花ノ清賞ニ都籃ヲ携ルモ、亦茶事佳興ノ良媒ト云ベキナリ。

とある¹⁵²。増山雪齋の考えでは、山奥の絶景、怪石、瀑布、竹林、江流など自然に親しい環境こそ、喫茶を楽しむに最適な場所である。

¹⁵⁰ 『煎茶小述』清賞、山本徳潤、国立国会図書館蔵本、請求番号特 1-2747、1835。

¹⁵¹ 香坡酔客の序。田能村直入、『青湾茶会図録』、国立国会図書館蔵本、請求番号 839-138、1863。

¹⁵² 増山雪齋、『煎茶式』、東京都立中央図書館加賀文庫蔵本、請求番号加 6318、1804。

三. 文人茶の同席者

さらに、明代の茶人は、喫茶の環境以外に、茶席の客人も慎重に選ばなければならないと強調していた。したがって、茶席の主人だけではなく、同席の茶客にも高い素養が求められていた。

例えば、陸樹声『茶寮記』の「一人品」に「煎茶非漫浪、要須人品與茶相得。(煎茶は漫浪に非ず、須く人品と茶に相ひ得るべきを要とす)」とあり、茶席の参加者の人格を重視している¹⁵³。また、「六茶侶」に「翰卿墨客、縉流羽士、逸老散人或軒冕之徒、超然世味也。(翰卿墨客、縉流羽士、逸老散人或ひは軒冕の徒、世味を超然す)」とあり、喫茶にふさわしい伴侶の身分を提示している¹⁵⁴。そして、屠隆『茶箋』の「人品」に「茶之為飲、最宜精行儉徳之人(茶の飲みたるは、最も精行儉徳の人に宜し)」とあり¹⁵⁵、茶人の素朴な徳行を唱えている。それに、徐燭『茗譚』に「飲茶、須択清癯韻士為侶、始與茶理相契。(飲茶は須く清癯韻士を択び侶とすべし。始めて茶理と相契す)」とあり¹⁵⁶、茶の理をよく理解できる清癯で風韻のある人は、茶席の伴侶として相性がよいため、選ぶべきである、とする。そのほか、張源『茶録』の「飲茶」に「飲茶以客少為貴、客衆則喧、喧則雅趣乏矣。所以謂之、独啜曰神、二客曰勝、三四曰趣、五六曰汎、七八曰施。(飲茶は客の少きを以て貴とし、客は衆ならば則ち喧なり、喧ならば則ち雅趣乏し。所以之を謂わく、独啜は神と曰ひ、二客は勝と曰ひ、三四は趣と曰ひ、五六は汎と曰ひ、七八は施と曰ひ。）」とあり¹⁵⁷、茶席は少人数で開催すべき、と提唱している。さらに、陳繼儒『茶話』の「品茶」に「一人得神、二人得趣、三人得味、六七人是名施茶。(一人ならば神を得たり。二人ならば趣を得たり。三人ならば味を得たり。六七人ならば是れは施茶と名す)」とあり¹⁵⁸、喫茶は人

¹⁵³ (明) 陸樹声『茶寮記』一人品、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p. 223。

¹⁵⁴ (明) 陸樹声『茶寮記』六茶侶、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p. 223。

¹⁵⁵ (明) 屠隆『茶箋』人品、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p. 240。

¹⁵⁶ (明) 徐燭『茗譚』、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p. 414。

¹⁵⁷ (明) 張源『茶録』飲茶、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p. 253。

¹⁵⁸ (明) 陳繼儒『茶話』品茶、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p. 278。

数が少ないほうがよく、人が多く増えると、喫茶の精神、趣味、風味がなくなり、ただ茶を布施するだけである、と述べている。

そして、明人の喫茶における伴侶の選択基準も、同じく日本の煎茶書に影響を及ぼした。『清風瑣言』の「煎法」は張源の『茶録』と許次紆の『茶疏』の内容をそのまま引用している。その後ろに「客主の清雅多飲にあらず。衆多にあらぬ事」とある¹⁵⁹。茶席において節度なく茶を飲むのは清雅にふさわしくない行為であり、また、大勢の客を集めるのは良くない、ということである。

『竹田荘泡茶訣』の「飲啜」に、

一壺之茶、宜三巡也。客自三人至五人為限。一人所喫、不過三椀。

一壺の茶は、三巡に宜し。客は三人より五人に至りて限とす。一人の喫する所は、三椀に過ぎず。

とある¹⁶⁰。田能村竹田の考えでは、一壺は三巡を限度とすべきであった。これは明らかに許次紆の『茶疏』の影響を受けており、『茶疏』の「飲啜」には「一壺之茶、只堪再巡。初巡鮮美、再則甘醇、三巡意欲尽矣（一壺の茶は、只だ再巡に堪ふのみ。初巡は鮮美にして、再び則ち甘醇なり。三巡ならば意欲は尽く）」とあるが¹⁶¹、これは参加人数を三人から五人までを制限として、一人の飲量は三碗を超えないと定めたものである。

そして、茶席の参加者の人数を絞る上では、俗人を避けて清客を選ぶべきである、という考えもあった。例えば、『煎茶式』には、

客ハ三人ニ限ルベシ。主人童子ト合セテ五人トナル。室中ノ人大凡五人ト定ムベシ。茶客両三輩ニ限ルトハ、閑居風流ノ清玩也。タダ俗客雑話紛々トシテ謾ニ茶を喫スルコト数碗其味ヲ知ラズ。唯喉ヲ湿ス而已ニシ

¹⁵⁹ 『清風瑣言』煎法、上田秋成、早稲田大学図書館蔵本、請求番号ヲ 09 04053、1794。

¹⁶⁰ 『竹田荘泡茶訣』飲啜、田能村竹田、筑波大学中央図書館蔵本、請求番号ス 420-17、1829。

¹⁶¹ (明) 許次紆『茶疏』飲啜、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2014年、p. 273。

テ、雅韻ヲ失スルニ嫌ヒアルカ故ナリ。

とあるが¹⁶²、増山雪齋の考えでは、茶席の参加者は二、三人に限定し、従僕を加えても五人を超えないほうがよく、また、俗客は喫茶の雅韻を損なうため避けるべきである、とのことであつた。また、

室中大都禁忌ナシトイヘドモ、或ハ風言或ハ空言ノ類ハ風雅ノ道ニ非ズ。夕へて談ズベカラズ。花鳥風月ノ話殊ニ佳トス。

とあるが¹⁶³、茶席では花鳥風月のような風雅な話題を盛んに話すべきである、とされた。

『烹茶樵書』の「選器」に、

茶宴の興は、旧釈氏及山林の人の所為なり。今にしても、専清趣淡雅の士の佳玩にして、同志の友を集て、咫尺の応に、千峰の雲を尋、環堵の室に、^{しむ} 万古の春を占。

とある¹⁶⁴。曾占春の考えでは、茶宴は昔から僧侶と山林に隠棲した人が興の極地であつたが、当時はもっぱら清趣のある雅士の玩物となつていたという。また、同好の茶友を集めて、高い山を登って雲を眺め、狭い小屋で万古不易の春色を独占して楽しむことを主張している。

『泡茶新書三種』の頼山陽の序には、

有佳客適至、則神益活。有俗客至、揮而去之。閉門整法、則神益活。活水活火可得而用之、而茶益活矣。

佳客有りて^{たまたま}適々至れば、則ち神は益々活なり。俗客有りて至れば、揮ひ

¹⁶² 増山雪齋、『煎茶式』、東京都立中央図書館加賀文庫蔵本、請求番号加 6318、1804。

¹⁶³ 増山雪齋、『煎茶式』、東京都立中央図書館加賀文庫蔵本、請求番号加 6318、1804。

¹⁶⁴ 『烹茶樵書』選器、曾占春、国立国会図書館蔵本、請求番号特 1-2601、1803。

て之を去る。門を閉じて法を整へば、則ち神は益々活なり。活水と活火得て之を用ゆべし、茶は益々活なり。

とある¹⁶⁵。佳客は茶席にいれば、喫茶の神韻を高めることができるが、俗客は追い払うべきである、とする。門を閉じて作法をきちんと整えば、茶の風味を高めることができるし、さらに、活水と活火をよく運用すれば、喫茶は活気がますます溢れるようになれる、という。

四. 文人茶と茶人グループ

一方、江戸時代の文人茶は盛んに発展した。その代表的特徴は、茶人グループの出現と煎茶結社の結成である。江戸中期以降、茶人たちは集まって煎茶を楽しんでいた。例えば、売茶翁と大典禅師、木村兼葭堂と内田蘭渚、大枝流芳と都賀庭鐘、上田秋成と村瀬栲亭、瓦礫舎主人と嵐翠子、曾占春と大窪詩仏など、友人関係を中心に結成された小さな茶人グループが次々と現れた。煎茶は茶人グループの中で交流促進の役割を果たし、会話などの場所を提供した。

その後、茶人グループの規模が次第に大きくなり、より多くの一般人が煎茶の趣味に惹かれて茶席に加入した。煎茶グループは知り合い同士の間の狭い交流の場所ではなくなり、団体としての社交性が高まった。そこで、喫茶を楽しむことを主な目的とし、かつ多職種・多領域の知識人の交流促進を望む煎茶結社が次第に出現した。その中で最も代表的なのは木村兼葭堂が主催した清風社である。『良山堂茶話』はこの木村兼葭堂の清風社の会約を収録している¹⁶⁶。

此会専尚儉素、唯取団樂之意。一歳中限小会六、大会二。小会社中各月定主。当日集其家、或室狭者。仮他亭亦不妨。其人止四五輩、不許入他客。茗具飲膳、其主措辦。大会先期発単、汎報諸子。扱一勝地、社友各携茗籃

¹⁶⁵ 頼山陽の序。田能村竹田、『泡茶新書三種』、新日本古典籍総合データベース、請求番号 325-23-1-C R640、1831。

¹⁶⁶ 『良山堂茶話』二編、阿部縑洲、『良山堂茶話 芸苑叢書』、吉川弘文館、1919、p. 47。

果盒而至。每人分席、一主一小廝、以饗會客。自午至申、宜致半日之歡。

木世肅の烹茶會約に云く、此会は専ら儉素を尚ぶ。唯だ取団樂の意を取るのみ。一歳の中に小会六つ、大会二つに限る。小会は社中各月に主を定む。当日は其の家、或ひは室の狭き者に集む。他亭を仮するも亦た妨げず。其の人は止だ四五輩のみ、他客を入れることを許さず。茗具と飲膳は、其の主措辦す。大会は先期に單を發し、^{あまね} 汎く諸子に報ず。一勝地を択び、社友は各々茗籃と果盒を携へて至る。人ごとに席を分け、一主一小廝、以て會客を饗す。午より申に至り、半日の歡を致すに宜し。

この内容を踏まえると、木村兼葭堂は茶会を開催して茶の節儉素朴な品性を重視し、社友間の友好と団らんを求めた。年内には小会が6回あり、それぞれ2月、4月、5月、8月、10月、11月に開催した。毎月茶主を決め、その茶主の家や狭い茶室に集合した。あるいは他人の茶亭を借りてもよかったが、ただし、参加人数は厳しく制限され、4人か5人が上限であった。また、ほかの客人を勝手に連れてくるのは禁じられた。大会は年2回あり、3月と9月に開催した。会前は積極的に宣伝を行って社友に周知し、当日は景色のよい所を選んだ。社友たちは各自茶器箱とお菓子箱を運んできて集合しグループを分けた。そして、茶主と従僕二人は茶会の客人を招待した。茶会は昼から午後まで行なわれ、半日ほどかかった、とされる。

そして、阿部縑洲は木村兼葭堂の茶会を真似して定期的に煎茶の集会を開き、多くの知識人を招待した。縑洲は茶会の風景について次のように述べている¹⁶⁷。

特刻日立茶会。為期在每月初五。請社友同朋於齋中、以供手煎之茶。此会也、相集者皆翰卿墨客、縑流羽士、抛擲世味、脱略形骸者、而素心同調、彼此暢適。

特に日を刻みて茶会を立つ。期を毎月の初五に在るとす。社友と同朋を

¹⁶⁷ 『良山堂茶話』自序、阿部縑洲、『良山堂茶話 芸苑叢書』、吉川弘文館、1919、p. 2。

齋中に請ひ、以て手煎の茶を供す。此の会や、相ひ集むる者は皆翰卿墨客、縉流羽士、世味を抛擲して形骸を脱略する者にして素心は同調にして、彼此暢適たり。

このように、良山堂の煎茶会は、毎月の5日に自宅で開催した。客として招待されたのは、文人墨客と僧侶隠者のような脱俗な人々であった。また、縉洲は自分の煎茶会に対して以下の五つの会約を設けた¹⁶⁸。

不尚豊奢。願久要也。(豊奢を尚ばず。久要を願へばなり。)

不問卑尊。欲歡洽也。(卑尊を問わず。歡洽を欲すればなり。)

不論座位。舍虚礼也。(座位を論ぜず。虚礼を舍つればなり。)

不語公事。嫌出位也。(公事を語らず。出位を嫌へばなり。)

不談人短。恐損趣也。(人短を談ぜず。趣を損なふを恐るればなり。)

奢侈の風をとらばないのは、長続きする茶会を維持したいからである。身分の尊卑を問わないのは、打ち解けた茶会を行いたいからである。上座下座を分けないのは、形式的な礼儀を捨てたいからである。公務の話进行禁じるのは、職分を越える発言を避けたいからである。人の悪口をいわないのは、茶席の友好的な雰囲気を守りたいからである、というのがその内容であった。

江戸末期に入り、煎茶の流行とともに、大規模な煎茶結社が大量に増えるとともに、文人茶が盛んになって日本全国に広く普及した。たとえば、田能村直入が主導した大型煎茶会が大阪を中心に行なわれ、明治期の茶人に多大な影響を及ぼした。また、売茶東牛と蓬仙仙史は多くの知識人を集めて、大寄煎茶会で多くの客人をもてなした。江戸を拠点として文人間の交流が盛んに行われたのであった。

以上に述べている通り、中国の文人茶の日本での受容を検討した。江戸時代の

¹⁶⁸ 『良山堂茶話』二編、阿部縉洲、『良山堂茶話 芸苑叢書』、吉川弘文館、1919、p. 48。

煎茶家は喫茶を楽しむ際に、特に清雅な環境と高雅な相手を好んだ。また、江戸文人は熱心に煎茶のグループを結成して煎茶席を積極的に開催した。明代の文人的な喫茶趣味は日本の茶人に多大な影響を与えたことを明らかにした。

第五章. 大枝流芳の煎茶書に関する研究：『青湾茶話』と文人雅遊

はじめに

第一章から第四章までは作品全般の状況と内容について検討を行い、総合的な煎茶書という視点で論じたが、個別具体的な視点も重要であり、代表的な作者と作品を踏まえて研究する必要がある。したがって、第五章から第九章は具体的な煎茶書を取り上げて考察を行いたい。

本章は大枝流芳の『青湾茶話』を中心に検討したい。周知のように、江戸中期に入り、喫茶人口が日々増大するとともに、煎茶への情熱も益々高まるようになった。そして、嗅覚の鋭い商人はすぐに商機を察し、専門性の高い指南書の刊行計画を積極的に立てた。宝暦6年（1756）、浪華の書籍商の後押しで、日本最古の煎茶論著『青湾茶話』が著された。『青湾茶話』は大枝流芳の著で、浪華の書肆渋川清右衛門・大賀惣兵衛上梓によって刊行された。本書は、その後煎茶書が次々と刊行されるきっかけとなり、煎茶の手引書として高く評されて江戸後期と末期の煎茶人に多大な影響を及ぼした。

作者の先行研究について、翠川文子の『大枝流芳（岩田信安）小考』があり、大枝流芳の身分について詳しく考察した¹。先行研究によれば、大枝流芳の本名は岩田信安であり、本姓は大江であり、また一字の姓は岩、崑、巖である。号は流芳、四川、脩然翁、青湾、釣隠、漱芳などである。一般的に香道家として知られ、大口樵翁（大口含翠、1689～1764）に従って芸を学んだ。浪華出身の富家の子であり、若い頃は京都で暮らし、晩年になって浪華に戻り、隠棲して余生を送った。生年は未詳であるが、寛延2年（1749）に没した。しかし、翠川文子の研究は大枝流芳と香道との関係に中心を置き、大枝流芳の煎茶書に関する検討が

¹ 翠川文子、「大枝流芳（岩田信安）小考」、『川村学園女子大学研究紀要』第15巻第2号、2004、pp. 132～152。

少ない。

また、『青湾茶話』の先行研究について、奥田昌子の『大枝流芳と青湾茶話～上田秋成著「清風瑣言」の再検討』²があるが、内容は『青湾茶話』と『清風瑣言』の比較が研究の中心となり、特に両書の共通点を示している。

本章は大枝流芳の煎茶書『青湾茶話』について検討を行いたい。特に、『青湾茶話』にみる中国の茶書からの受容状況を中心に考察したい。また、翠川文子と奥田昌子の研究を踏まえ、大枝流芳の人生を踏まえて彼がどのように煎茶と結びついているのかを考察したい。最後に、『雅遊漫録』と『青湾茶話』の刊行上の関係性について検討したい。

第一節. 『青湾茶話』について

一. 『青湾茶話』と中国の茶書

『青湾茶話』は上・下・付録の三巻で構成される³。上巻は蔵茶・焙茶・洗茶・湯候・庵茶・辨水・選器（附論炭）・秤量・盪滌・茶製（附医茶）・茶所・茶事・論客・飲時・良友・不宜用・不宜近・得趣という項目で構成され、中国の茶書をはじめとする漢籍 49 書が取り上げられ、典拠として紹介された。下巻は水注・茶鼎・焙鉤・炭斗・茶注・包育・瓢杓・器局・建城・器具銘・茶品彙・名水品彙・論水・水軽重という十四項目で構成され、挿図を添付した茶器が紹介され、また水の選び方に関する詳細な論述がある。付録に闘茶に関する項目が収録され、闘茶七要具図・闘茶新式・闘茶通例・闘茶式・通仙式・玉川式という 6 項目が論じられた。

麓和善の研究では、日本の煎茶関係の文献資料を二種類に分類できると指摘している⁴。一つは、茶の伝来・製法・貯蔵法・品質・水論・煎法・器具・建築

² 奥田昌子、「大枝流芳と青湾茶話～上田秋成著「清風瑣言」の再検討」、『藝能史研究』15号、藝能史研究会、1966、pp. 35～41。

³ 大枝流芳、『青湾茶話』3巻、新日本古典籍総合データベース、請求記号：225-201-5、1756。

⁴ 麓和善、「煎茶席の歴史的・地域的特徴」、『庭と建築の煎茶文化』、思文閣、2018、p. 215。

などを記し、一般論として煎茶全般の理論を紹介する書物である。この類に属する作品は四十件以上あり、煎茶ブームとともに現れて江戸時代の中期と後期において多く出されたのである。代表的な作品として『青湾茶話』、『清風瑣言』、『煎茶略説』などがある。もう一つは、実際に開催された煎茶会に基づいて書かれた書物である。つまり、茶会の様子を提示して席上の書画・茶器・文房具などの記録をする茶会記である。この類に属する作品は明治に入ってから急増し、50書以上を超えている。代表作は『煎茶小集』、『青湾茶会図録』、『青湾茗醺図録』などがある。

さらに、守屋雅史は前者の煎茶書に対してより細かい区分を付けようとした⁵。彼の考えでは、江戸期の煎茶書はおおよそ二つの進展傾向がある。一つは、過去の中国の茶書を総覧し抜粋し検証し、著者趣向と思想を語るという、高踏的な一類である。したがって、読者に高度な漢文の素養が要求されている。『青湾茶話』・『清風瑣言』・『竹田荘泡茶訣』・『竹田荘茶説』が代表的である。もう一つは平易さを重視する簡便な入門書の系譜である。一般人でも気軽に閲覧して実用性に重点を置く一類である。例えば、『煎茶略説』・『煎茶早指南』・『煎茶小述』・『煎茶手引之種』はこの類に入る。実際、『青湾茶話』のような文人的思想性・精神性を唱えた煎茶書の高踏性はかなりのものである。しかし、平易さを重視する入門書と比べて難解とはいえ、その内容は古くさくなく、時代遅れでもないのである。そのため、『青湾茶話』は後に『煎茶仕用集』と改題され、何度も重版された。例えば、「谷村為海煎茶関連資料リスト」によれば、文化2年（1805）と大正2年（1913）の再印・再刻の刊記が見える。さらに、刊行年が確認できない版本も数冊残っている⁶。ほかには、国文学研究資料館の新日本古典籍総合データベースによれば、享和2年、天保3年、天保14年の刊記のある版本も存在する

⁵ 守屋雅史、「大阪市立美術館所蔵「谷村為海煎茶関連資料」の煎茶書について」、『大阪市立美術館紀要』第15号、2015、p. 28。

⁶ 「谷村為海煎茶関連資料リスト」の資料A/〇〇八は文化2年刊。資料A/〇一一と資料A/〇一二は大正2年刊。資料A/〇〇九と資料A/〇〇十は刊行年不明。守屋雅史、資料紹介「大阪市立美術館所蔵『谷村為海煎茶関連資料』の煎茶書について」、『大阪市立美術館紀要』、大阪市立美術館編、p.30、2015。

ことがわかる⁷。

『青湾茶話』の本文を読めば、中国の茶書からの引用が大半を占めていることが明らかである。本作の最大の特徴は、明代と清代の茶書から喫茶の新理論を掘り出すという方法論を茶人に提示したところである。本書は、後に刊行された煎茶書にとっても先導的な存在である。実際、大枝流芳は多くの漢籍を渉猟し、清国の舶来漢籍から多大な影響を受けたことが『青湾茶話』の冒頭を通して確認できる。『青湾茶話』の序文と目録の間に「採摭諸書」という内容があり、本書の参考書が取り上げられている。そこでは『茶経』・『北苑貢茶録』・『北苑別録』・『品茶要録』など中国唐宋の茶書が収録されている。また、『茶譜』、『茶録』、『茶疏』、『茶寮記』、『煎茶七類』など明代の茶書も入っている。さらに、『本草綱目』・『三才図会』・『便覧群芳』・『五雜俎』・『遵生八箋』・『岩棲幽事』などの茶書以外の書籍もこの参考目録で確認できる。。

「採摭諸書」では全部で37書の中国茶書が取り上げられている。その中の24書が、『説郛』の正篇と続篇から引き出されたことは明らかである。『説郛』は、元末明初の陶宗儀（1329～1410）が、雑史・随筆・筆記小説など、経・典のような正統でない書物千種以上を抄録して編纂した大型叢書である。

「採摭諸書」の最初に取り上げられた13書は『説郛』正篇第93巻からの引用である。

一方、『説郛』から引用された24部の茶書のうち、残りの11書は『説郛』の続編の第37巻から引用されたことも明白である。それぞれ『茶譜』・『茶録』・『茶疏』・『茶寮記』・『煎茶七類』など明代の代表的な茶書であり、並び順も『説郛』と一致している。

さらに、『説郛』に由来する24種の茶書以外に、ほかの茶書の書名も載せているところに注目したい。それぞれ『薺茗録』・『茶話』・『湯品』・『茗苳』・『茗苳品

⁷ 新日本古典籍総合データベースに収録されている請求番号8-63セ1の『煎茶仕用集』は享和2年刊。請求番号363-212-1の『煎茶仕用集』は天保3年刊。請求番号30-1118-2の『煎茶仕用集』は天保14年刊。

藻』・『茗考』・『茗説』・『蒙史』・『蔡端明別記』・『茶譚』・『茶集』・『煮茶園集』・『茶略』・『茶具図譜』である。それらの茶書の由来について少し検討したい。まず、陳昌其の『茶略』はつまり陳元輔の『枕山樓茶略』であり、清人の茶書である。陳昌其の『茶略』を除いて、ほかの茶書は明人喻政の『茶書』に由来するものかもしれない。例えば、『荈茗録』・『茶話』・『湯品』・『茗芟』・『茗芟品藻』・『蒙史』・『茶集』・『茶具図譜』は、喻政の『茶書』に収録されている作品の書名である。ほかには、書名が若干違うが、作者によって、同じく喻政の『茶書』に収録された作品だと推測ができる。例えば、陳思貞の『茗考』は、つまり陳師の『茶考』であろう。そして、屠隆の『茗説』は『茶説』の誤りであろう。また、徐興公の『茶譚』は徐焞の『茗譚』の誤記であり、『蔡端明別記』も徐焞の作品で、茶に関する記事を抜き出し収めたものであるが、この二作は、喻政の『茶書』に収録されている『茗譚』と『蔡端明別紀』であろう。さらに、『煮茶園集』は『烹茶図集』の誤記であろう。この作品も喻政の『茶書』の中にあり、『茶集』の後に収録されている。したがって、大枝流芳は『青湾茶話』を編集する際に、『説郛』以外に、喻政の『茶書』も参照した可能性が高いと推測できる。」

p.160 4～5行目「それ以外に、田芸蘅の『煮泉小品』・顧元慶の『茶譜』・陸樹声の『茶寮記』など明人の茶書からの引用も本書の中に多く見られる。」→

「それ以外に、ほかの明人の茶書からの引用も本書の中に見られる。例えば、田芸蘅の『煮泉小品』からの引用は、本書の焙茶・湯候・辨水・附炭・茶事の項に見られる。また、顧元慶の『茶譜』からの引用は、本書の洗茶・選器・秤量の項に見られる。また、羅廩の『茶解』からの引用は、本書の蔵茶の項に見られる。」

二. 『青湾茶話』にみる煎茶

前述の通り、大枝流芳は中国の歴代の茶書を渉猟していたのだが、実際に『青湾茶話』を編集する際、成立時代によって明らかに取捨選択の傾向がある。彼は「此の書、もっぱら煮茶しゆちやのためにす。末茶・点茶のことを論ぜず」と述べた通り、抹茶・点茶関係の書物に対してはあまり興味がなかったようである。故に、抹茶・

点茶の源流といえる宋代の中国茶書がほぼ言及されていない。一方、煮茶の作法を重視したため、明代以降の茶書が多く使われている。

例えば、明人許次紆の『茶疏』が『青湾茶話』の中で大きな役割を果たした。本節の冒頭でも述べた通り、『青湾茶話』の上巻は二十項目で構成されており、本書の最も重要な部分として、中国の新たな茶論が述べられている。その中では、『茶疏』に関わる引用が、蔵茶・洗茶・湯候・辯水・選器・秤量・茶所・論客・飲時・良友・不宜用・不宜近の12項目もあり、全体の半分以上であった。『茶疏』は江浙地域の代表的な茶書であり、また明人の茶書の中で最も充実していると評されている。筆者の許次紆は明代後期の銭塘（現在浙江省杭州）の人、字は然明、号は南華である。彼は独自の実践と経験を踏まえ、姚紹憲⁸など茶事に精通した呉派（現在長江下遊江蘇省・浙江省のあたり）文人の知恵を取り入れて『茶疏』を編著した。大枝流芳はこの『茶疏』から学んだことが多かったに間違いはない。それ以外に、ほかの明人の茶書からの引用も本書の中に見られる。例えば、田芸蘅の『煮泉小品』からの引用は本書の焙茶・湯候・辨水・附炭・茶事の項に見られる。また、顧元慶の『茶譜』からの引用は、本書の洗茶・選器・秤量の項に見られる。また、羅廩の『茶解』からの引用は、本書の蔵茶の項に見られる。もちろん、茶書の引用回数が多ければ多いほどいいというわけではない。また、大枝流芳は『茶疏』をはじめとする多くの明代の茶書を引用したが、実際彼がその内容をどのくらい正確に理解できていたのか、さらに詳しく検討すべきである。しかし、多くの明代の茶書が『青湾茶話』に引用されたことによって、より多くの日本人がこの作品を通して当時の中国の喫茶文化を知り、新しい知識に触れることが可能となった。その点からみれば、多くの明代の茶書が、日本の煎茶文化の発展に有益な影響を与えたといえよう。

ところで、当時「煎茶」という言葉がまだ定着していなかったため、大枝流芳は「煎茶」と言わず、「煮茶」と言ったのである。煎茶も煮茶も明代以降日本に伝来した新たな喫茶法のことを指している。高橋忠彦が指摘したように、そもそ

⁸ 姚紹憲（生没年不詳）、明代呉興（現在中国浙江省湖州市）の文人。

も煎茶の語義は唐代からすでに現れ、当時の文人によく使われるようになった⁹。そして、明代には唐代と違った喫茶法が現れ、葉茶が主流となり、泡茶法が明代の代表的な喫茶法となっている。唐代の煎茶法（あるいは煮茶法）とは異なる喫茶法に発展したが、明代の茶人は陸羽など唐代の茶人を常に強く意識していたため「煎茶（煮茶）」の言葉を使い続けていた。特に精神的・文化的な面では、二者の間に強い伝承関係が見られる。

例えば、明代以降の茶書の中でよく使用された「煎茶・煮茶・烹茶」という言葉は、いずれも泡茶法のことを指すものが多く、はっきり使い分けられていたわけではない。つまり、「煎茶」と「煮茶」と「泡茶」は同じく明代の泡茶法を指すことが多く見られる。煎茶の語義については、大槻幹郎の論文で論じられているので参考にされたい¹⁰。つまり、大枝流芳は「煮茶」という言い方を選んだが、ここでの「煮茶」はおそらく唐代の喫茶法を意識しながら使われ、宋代の「点茶」と区別するために使用されたのだろう。実際、その中身は葉茶を喫むこと、つまり明代の泡茶法だと考えた方が妥当である。要するに、「煮茶」であれ「煎茶」であれ、大枝流芳は強調したいのは言葉の本義ではなく、それらが唐代の茶人から趣や精神を受け継いだ面であり、また従来那点茶とは異質なところなのである。

また、大枝流芳は中国の新しい喫茶法を積極的に受け入れている。一方、おそらくそもそも彼は点茶の現状にも不満を持っていたであろう。従来喫茶法の革新のために、何か新しいものを考案し続けていたのかもしれない。そのために、『青湾茶話』を創作したとき、彼はあえて点茶ではなく、もっぱら煎茶を論じる方針を決めた¹¹。『青湾茶話』の創作の初心が、中国の文人文化への純粋な憧れなのか、あるいは墮落した点茶への反感なのか、はっきりと断言できないが、大

⁹ 高橋忠彦、「中国茶文化における「煎茶」の語と伝統の形成」、『東京学芸大学紀要』第65号、2014。

¹⁰ 大槻幹郎、「「煎茶」の語義について」、『野村美術館研究紀要』特集煎茶、2007、pp. 27～29。

¹¹ 「此の書、もっぱら煮茶のためにす。抹茶・点茶を論ぜず」とある。『青湾茶話』凡例、『日本の茶書2』、1972、p. 74。

枝流芳が日本の従来の喫茶法より、新しく受け入れた中国の喫茶法を偏愛し、強い関心を示していたことは間違いないであろう。例えば、『青湾茶話』の凡例では、以下のような評語があり、彼の主張が容易に窺える¹²。

煎茶の事、今此の土、点茶家者流のごとく、法にかかわり、律に泥むの
費を用いず。雅趣を専らとして新奇を出すべし。一定の法なし。

従来の点茶家が過去に定められた作法や規則に過度に拘泥することを、大枝流芳は厳しく批判している。彼の主張では、雅趣が最も重要なところである。喫茶を行う際には今までにない新しさと独自性を出すべきである、ということである。例えば、茶道具は昔から日本の茶人に大事にされてきたが、古くて値段が高いものばかりに注目するのは俗人の遊びに過ぎないと彼は考えた。手頃な値段であっても新味のある茶器であれば、それを価値のあるものとして貴ぶべきであり、それこそ山中で隠棲生活を送る雅人に相応しい選択である、という。

では、大枝流芳の言う「価賤しくとも新を貴む」べき茶器はどのようなものであるか。『青湾茶話』の下巻を読めば明らかであるが、それは葉茶用の新式茶器を指している。明代以降、茶葉の製造方法は宋代のそれと大いに違ったため、製茶法の進歩によって喫茶法にもいくつか大きな変化が起こった。例えば、火を起すための竹炉の地位が上がった。また、宋人が黒くて大きい茶碗を重視したのと比べて、明人は白くて小さい茶碗を好んだ。それに加え、急須の使用も明代以降に流行した。大枝流芳は明代の茶書を重視していたため、明人の好んだ茶器を推奨していた。彼の主張は後に現れた煎茶家にも確実な影響を与えた。例えば、上田秋成『茶瘕醉言』には「豪富の家には珍奇を搜り索めて、奢靡の情を恣にす。山林の士は新僮を嫌はず。効用清潔を専らと択ぶべし」、また「煎茶家、茶具新調をもはらとす。茶味の清に宜しく、水の清に宜し」との記述が見られる。

¹² 大枝流芳、『青湾茶話』凡例、『日本の茶書 2』、1972、pp. 74～75。

第二節.大枝流芳の人物について

『青湾茶話』を検討するには、作者本人の人物と経歴を知る必要がある。茶人としての大枝流芳への印象について、上田秋成は『茶痕醉言』の自筆本と西荘文庫本の中で以下のように述べている¹³。

浪花の大枝流芳は、富家の子にて、弱きより風流をこのみたる畸人也。茶を闘かはせ、器をえらふは、翁に勝れり。青湾茶話、雅遊漫録等を著せしに見るへし。(自筆本)

浪花の大枝流芳は、翁に謁して煎法をつたへし人也。元富家の出身、点法香技に熟せしかは、器物の高賈をとせられたれとも、席上の式、おのつから静にて風致あり。故に茶品をたゝかはし、香烟をくゆらせて、隠逸の興は疎きと云。青湾茶話、雅遊漫録の著を見て、其人をしるへし。晩に城外の網島に茶舗をひらきて、遊戯三昧也。此人の事、我大江先生(都賀庭鐘)の『雅遊漫録』の序にいはれたり。(西荘文庫本)

大枝流芳は浪華の富家の子であり、幼少期から病気のために京の泉谷(現在の京都市鳴滝泉谷町)で隠棲生活を送った。また、上田秋成の『茶痕醉言』の中に言及された『雅遊漫録』という作品も大枝流芳の力作であり、そして『青湾茶話』の刊行にも大きく関係している。それについては第四節で詳しく述べたい。

大枝流芳の生涯は、前半生の京都泉谷での静養生活と後半生の大阪での隠棲生活の二段階に大きく二分される。彼は京都で病気を静養する間、すでに茶事に関心を寄せていた。

翠川文子が指摘しているように、京都泉谷での静養生活で、彼は中古の公家の雅遊に関心をもちはじめ、また超俗的な趣味として茶道、抛入花、貝谷、楽器に

¹³ 上田秋成、『茶痕醉言』、『上田秋成全集』第9巻随筆篇、中央公論社、1992。『茶痕醉言』は、自筆本と西荘文庫本があり、内容には異同が多い。自筆本 p. 329。西荘文庫本 p. 365。

親しんだ¹⁴。また、身近な文房具への関心を示し、投壺・鬪茶・鬪草など文人の雅遊に目を向けていた。『茶痕醉言』に序文を寄せた都賀庭鐘（1718～1794）は日本近世の有名な読本小説家であり、また大枝流芳の親友であり、さらに上田秋成の先生でもある。彼は『雅遊漫録』にも漢文の序文を寄せ、次のように述べている¹⁵。

余年少時客於京師。偶遊西山之泉谷。泉谷。古址也。有隱一人。自號脩然翁。野衲草居。采於山釣於水。大有道人之風。而翁本同鄉人。以多病故不欲與世交。慕水土之美。來寓京城。擇幽閑之地棲止焉。人以翁為好茶理之人。問之。則曰：予也。辟人之惰民。倦送迎。離礼義。欲從心所適也。茶則山人之物。茶理則吾不知焉。

余は年少の時京師に客たり。偶々西山の泉谷に遊す。泉谷は古址なり。隠れたる一人有り。自ら脩然翁と号す。野衲草居。山に采り、水に釣る。大いに道人の風有り。而して翁はもと同郷の人なり。多病の故を以て世と交することを欲せんとせず。水土の美を慕いて京城に来たりて寓す。幽閑の地を択びて棲止す。人は翁を以て茶理を好むの人と為す。これを問へば、則ち曰く：予や、人を辟くるの惰民なり。送迎に倦み、礼義に離れ、心の適く所に従わんと欲す。茶は則ち山人の物なり。茶理は則ち吾の知らざることなり、と。

これによると、彼は、人との付き合いを避け、出迎えることを嫌がり、煩雑な礼法を敬遠し、自由自在な隠棲生活を慕っている。故に、彼は茶のことを好きとはいへ、茶の湯の煩わしい道理は知らないと自称している。また、茶は山人のものであり、山人は世俗を嫌って山中に隠棲する人であるため、茶事を行う時は山

¹⁴ 翠川文子、「大枝流芳（岩田信安）小考」、『川村学園女子大学研究紀要』第15巻第2号、2004、pp. 132～152。

¹⁵ 大枝流芳、『雅遊漫録』、『日本随筆大成』第二期第23巻、1974、p. 255。

人のやり方で行えばいい、と述べた。ここで山人という言葉が出てきたが、明代で有名な山人と言え、陳繼儒ちんけいじゆという人物である。陳繼儒は江蘇華亭（現在の上海）の人で、字は仲醇ちゆうじゆんで、号は眉公びこうである。彼は明代の山人の代表者といえる。大枝流芳は陳繼儒の『岩栖幽事』を愛読していたようで、そのほか、高濂の『遵生八牋』じゆんせいはっせんなど文房生活の趣味書も彼に多大な影響を与えたのである。

大枝流芳はかつて大口樵翁と親交があり、彼に従って香道を学んだ。大口樵翁はまた江戸中期の茶人でもあり、石州流のお茶を学んで大口流の流派を開いたが、茶の湯の茶人であるため、どうやら大枝流芳の煎茶の師ではないようである。それでは、大枝流芳の煎茶への関心は、一体誰に喚起されたのだろうかという、それは恐らく売茶翁であろう。上田秋成は「浪花の大枝流芳は、翁えつに謁して煎法をつたへし人也」¹⁶と述べているが、売茶翁との交遊によって大枝流芳は煎茶に関心を持つようになったのである。また、二人の関係について、『売茶翁偈語』には以下のような記述がある¹⁷。

坂陽求志齋主人。姓岩田氏。號玄山。雖昧平生。然知其為端人也。嬰病作寄賣茶翁國風一章。起草既成。弗果而物故矣。令兄漱芳英士述其始末。裝潢以見貽。余乃嘉其來意。因作薦偈。往托漱芳。而備諸靈牀之前云。

遺稿寄來奇絶篇 幾回吟詠仰蒼天

薦君一椀家傳茗 莫道趙州無味禪

坂陽はんようの求志齋きゆうしさい主人。姓は岩田氏。号は玄山。平生くらに昧いしと雖も。然も其の端人たんじん為ることを知るなり。病かかに嬰るとき、売茶翁こくふうに寄せる国風一章を作

¹⁶ 上田秋成、『茶癡醉言』、『上田秋成全集』第9巻隨筆篇、中央公論社、1992、p. 365。

¹⁷ 大槻幹郎、『売茶翁偈語訳注』、全日本煎茶道連盟、2013、p. 225。

る。起草既に成る。果さずにして物故す。令兄の漱芳英士は其の始末を述べ。裝潢して以て貽らる。余乃ち其の來意を嘉す。因りて薦偈を作す。往きて漱芳に托して諸れを靈床の前に備うと云う。

遺稿寄せ來る奇絶の篇、幾回か吟詠して蒼天を仰ぐ。

君に薦む一椀家伝の茗、道うこと莫れ趙州無味の禪。

坂陽（大阪南部）の求志齋主人岩田玄山という文人は、売茶翁に和歌を贈呈しようとしたが、残念なことに作品が完成する前に亡くなった。岩田玄山の兄岩田漱芳がその事情を売茶翁に伝え、弟の遺稿を表装して翁に渡した。売茶翁は漱芳の來意に感激し、その場で偈を作り、弟の靈前に飾るよう漱芳に頼んだ。大枝流芳の旧称は岩田であり、漱芳は彼の号である。この詩は大枝流芳と売茶翁とが交友関係を結んだ証拠であり、また岩田兄弟が翁のことを尊重していたこともわかる。このように、売茶翁との付き合いは、彼の煎茶への関心が生まれる一因となったのであろう。

晩年の大枝流芳は浪華へ帰り、大阪城北側の網島（現在大阪市都島区網島町）で隠棲し、澱川東側（現在桜ノ宮駅桜宮公園のあたり）で茶寮を築き、青湾の額を掲げた。青湾は日本の煎茶文化に深い縁を持つ勝地である。ここは桃山時代から茶によい水が汲めるところとして知られている。江戸時代の後期、青湾の水脈が中国の西湖の水と相通ずるといふ伝説がある¹⁸。青湾の水味が西湖に肩を並べていると賞賛されている。当然、それは西湖を慕っていた江戸文人の冗談に過ぎないが、青湾の優れた水質が、茶人の好評を得たことは指摘できるであろう。大枝流芳がわざと京都から引っ越してこの地を選んだのも青湾の名声を知ったか

¹⁸ この伝説は『青湾茶会図録』による。「青湾之説、諸口紛々。……或云水脉接西土西湖而涌生。」とある。田能村直入、『青湾茶会図録』、「青湾茶会図録例言」、国立国会図書館蔵本（請求番号 839-138）、1863。

らであろう。文久2年(1862)、売茶翁百年忌の際、有名な南画家田能村直入は青湾で煎茶家を集め、大型煎茶会を開催した。後に青湾茶会と呼ばれている。田能村直入は青湾の川畔で記念碑を立ち上げ、石碑の後ろに以下の銘文を刻み込んだ¹⁹。

此地青湾之稱尚矣。蓋始於豐公好茶。而後自隱元禪師全。賣茶、流芳、余齋、蒹葭、鶴翁、先師竹田諸老。皆有賞評。

此の地、青湾の稱尚^{ひさ}し。蓋し豊公茶を好むことに始む。而して後に
隱元禪師^{いんげんぜんじ}より全^{まっとう}す。売茶、流芳、余齋^{よさい}、蒹葭^{けんか}、鶴翁^{かくおう}、先師竹田^{ちくでん}の諸老。
皆賞評^{しょうひょう}有り。

豊臣秀吉・隠元隆琦・売茶翁が実際に青湾でその水を味わったのかどうか確認できないが、噂話の可能性もある。ただし、大支流芳は確実に青湾を煎茶と強く結びつけており、後の上田秋成・木村蒹葭堂・花月庵鶴翁・田能村竹田等、江戸時代の煎茶界で有力であった煎茶人たちは、青湾の水を高く評価したようである。青湾は大支流芳の『青湾茶話』によって名声がさらに上がり、また、現在の煎茶人にとっても、巡礼する聖地として、必ず行く人気の場所となったようである。

第三節. 『雅遊漫録』と『青湾茶話』の関係

一. 大支流芳の雅遊趣味

大支流芳の著作は全部で十余書ある。彼が晩年に最も関心を寄せていたのは香道であり、『香道秋の光』、『香道滝之糸』、『香道千代の秋』、『香道軒の水』、『改正香法秘伝』などがある。故に、彼は香道家として世間に知られている。実際、香道での成功は彼の雅遊(風流な遊び・遊芸)趣味に密に関わっている。香道

¹⁹ 田能村直入、『青湾茶会図録』、煙嵐深處田氏蔵梓、1806。

書のほか、貝遊びの具の書『貝尽浦の錦』、紐結びの書『御家流白露結集』、華道の書『抛入岸の波』、『心遠齋草花譜』、また前述の煎茶の書『青湾茶話』など多様な作品からは、大枝流芳の多才さと博識さが容易にわかるだろう。大枝流芳は前半生の時間を勉強に献げ、また膨大な読書量を積み、それから豊富な雅遊知識と経験を蓄え、晩年になってついに香道の成果を成し遂げた。そもそも雅遊の知識の蘊蓄がなければ、香道での成果は生み出されなかったと言ってもよいであろう。

西山松之助が「町人の茶」で指摘した通り、日本では早くから遊芸という文化様式が成立したが、歌・香・連歌・俳韻・茶・花といった、いわゆる遊芸文化には、かなりの高度の教養が必要であった²⁰。日本の遊芸の伝統は平安時代の貴族の間にすでに存在した。そして近世になり、まず武家社会に広範な遊芸人口を創出したのであったが、元禄時代を迎えるに及んで、町人社会の拡大とともに、遊芸人口は町人をも加えて、日本史上空前の数に達したのである。また、江戸時代の町人たちは40代を過ぎると、遊芸で過ごす隠棲生活に憧れていたと言われている。また、邱徳亮は文人的雅遊生活を過ごすには二大要素があると提示している。それは「余閑」（余った時間）と「余財」（余ったお金）である²¹。二つの条件は、雅遊に没頭して余技を育てるのに不可欠なものである。

そして、大枝流芳は少年期から二つの条件をすでに満たしたと考える。彼は豊かな家庭で生まれ、また病気のため京都泉谷で静養生活を送っており、お金も閑暇も他人より一歩先に手に入れていた。したがって、より深く文人の雅遊の世界に没頭することができたわけである。

二. 『雅遊漫録』について

一方、『青湾茶話』を研究する際には、『雅遊漫録』のことを紹介しなければな

²⁰ 西山松之助、「町人と茶」、芳賀幸四郎・西山松之助、『茶の文化史図説茶道大系 2』、1974、pp. 200～203。

²¹ 邱徳亮、「癖嗜文化：論晚明文人詭態的美學形象」、『文化研究』第8期、2009、p. 79。

らない。『雅遊漫録』は大枝流芳の雅遊生活に関する集大成的な作品である。本書は宝暦13年(1763)に出版され、文房清玩趣味を中心に書かれた作品であり、全七巻である。各巻の内容を確認してみると、第一巻は器物総論をはじめ、書・墨・筆・硯など文房関係の用具が紹介されている。第二巻は文房用具の紹介の続きとして、^{ぶんちん} 圧書・^{こがたな} 刀子・^{きり} 錐子・^{ふでたてふでたせ} 筆床筆架・硯屏・印章などさらに細かいジャンル別の25種類の文房用品が取り上げられている。第三巻から趣旨が少々変わり、前半は^{おい} 避秦・^{ほうべんろう} 方便囊・^{しろろ} 詩囊など旅行雑具関係の紹介であり、後半は^{はないれ} 花尊・^{せきしょうぼち} 菖蒲盆・没字碑・方枕・菊枕・水石供など書齋の飾り物について述べている。第四巻は金欄など^{めいぶつきんしゅうず} 名物錦繡図について書かれている。第五巻は琴・箏・和琴・琵琶・笛などいわゆる楽器と楽譜など音楽関係のことが紹介されている。第六巻は27種の結繩の結び方と詳細な図解である。第七巻は^{うたがい} 投壺・貝合・歌貝・文字鎖・鬪茶・鬪草などいわゆる中国の貴族の遊びについて書かれている。文房清玩趣味のマニュアル本と言ってよい作品で、中国文人から明らかに大きな影響を受けていたことがわかる。

『青湾茶話』は宝暦6年(1756)に刊行されたが、これは大枝流芳が亡くなった七年後の作品である。また、『雅遊漫録』は宝暦13年(1763)に出された作品である。しかし、実際、『雅遊漫録』は『青湾茶話』より先に完成されていたのである。これは、両書の序文を読めばわかるが、それはともに都賀庭鐘によって書かれ、『雅遊漫録』の序は宝暦5年(1755)にすでに完成され、『青湾茶話』の序文は宝暦6年(1756)に書かれたものである。また、なぜ『青湾茶話』を先に刊行したかについて、『青湾茶話』の序文に具体的な事情が書かれている²²。

巖四川子著茶話。附雅遊漫録之後以授木。良有以也。剗剗未竣功而此篇先成。書肆為急卒公之。余曰：是以遊軍為先鋒。奇兵接應。貴其神速者。亦有取軍利之類乎。

²² 大枝流芳、『青湾茶話』、林屋辰三郎・横井清・榎林忠男編注『日本の茶書2』、東洋文庫、1972、p. 72。

巖四川子（大枝流芳）は茶話を著し、雅遊漫録の後に附して以て木に授く。良に以有るなり。剗刷は未だ功を竣せずにして、此の篇は先ず成る。書肆が為に急卒にしてこれを公す。余曰く、「是れ遊軍を以て先鋒と為す。奇兵接応なり。其の神速を貴ぶは、亦た軍利に取ること有るの類か。」と。

要するに、本来、『青湾茶話』は『雅遊漫録』の付録として刊行する予定だったが、『雅遊漫録』の版木の彫刻が終わる前に『青湾茶話』の部分の版木が先に完成してしまった。恐らく当時の煎茶趣味の高揚に合わせるため、浪華書坊の渋川清右衛門・大賀惣兵衛が『青湾茶話』を前もって出版することを急に決めて、それを早速公刊した。そのため、都賀庭鐘はユーモアを交えて『雅遊漫録』を軍勢と喩え、『青湾茶話』を先鋒の遊軍と比喻している。『青湾茶話』の先行販売によって、早めに売上を回収することを期待していたようである。一方、この点に関しては、現代、長谷川瀟々居による「書賈射利之書」²³とあるように、本書の価値を低く評価している。

『青湾茶話』と『雅遊漫録』は、ともに渋川清右衛門・大賀惣兵衛の合同出版によって出されたものである。渋川清右衛門はつまり柏原屋清右衛門のことで、堂号は稱觥堂、本姓は渋川、大坂の板元である。『倭名類聚鈔』など多くの作品を刊行した²⁴。また、大賀惣兵衛はつまり菊屋惣兵衛のことで、堂号は揚芳堂、本姓は大賀、同じく大坂の板元である²⁵。『雅遊漫録』最終巻第七巻の目録は、投壺・貝合・歌貝・弾碁・韻室・文字鎖・鬪茶・鬪草で構成されている。実際に出版された『雅遊漫録』第七巻をみると、「鬪茶」の内容を載せていないが、本来「鬪茶」は「文字鎖」と「鬪草」の間に置く予定であったのだろう。目次には「鬪茶 此式、青湾茶話ニ出」と書かれているが、これは「鬪茶の様式については、さきに刊行された『青湾茶話』にある」という意味である。

²³ 長谷川瀟々居、『煎茶志』、平凡社、1983、p. 310。

²⁴ 井上隆明、『日本書誌学大系 14 近世書林板本総覧』、青裳堂書店、1971、p. 178。

²⁵ 井上隆明、『日本書誌学大系 14 近世書林板本総覧』、青裳堂書店、1971、p. 230。

注目すべきことに、『青湾茶話』と『雅遊漫録』に序文を寄せた都賀庭鐘が、実は渋川清右衛門・大賀惣兵衛の合同出版に数回関わっている。例えば、『青湾茶話』を刊行する一年前、宝暦5年（1755）、都賀庭鐘はすでに渋川清右衛門と大賀惣兵衛と手を組んで、李贄の笑話集『開卷一笑』の訓訳本を出版した。都賀庭鐘は本書に序文を寄せ、校閲と訓訳を行った²⁶。そして、『雅遊漫録』と同年の作品、都賀庭鐘の訳した読本『通俗医王者婆伝』も宝暦13年（1763）に渋川清右衛門と大賀惣兵衛によって合同出版された²⁷。書肆は人気作家の都賀庭鐘の名声を利用するとともに、都賀庭鐘も書肆から相当な潤筆料がもらえたのであろう。

そうであるとする、『青湾茶話』と『雅遊漫録』は大支流芳の生前の承諾を得ず、書肆が勝手に刊行したものだったのかもしれない。また、大支流芳の親友であった都賀庭鐘の力を借りた可能性もある。その目的は、やはり都賀庭鐘の言葉通り、「軍利に取ること」、つまり利益を逐うためであろう。おそらく渋川清右衛門と大賀惣兵衛が当時の煎茶の流行の傾向を洞察し、『青湾茶話』を先に出版しようとしたが、その後、『青湾茶話』の刊行が大成功を得たため、さらに儲かる原稿を出そうと思って、大支流芳の遺稿を整理して『雅遊漫録』を出版したのであろう。

おわりに

以上、『青湾茶話』は中国から伝来した茶書から多大な影響を受けたことが明らかである。また、作者の大支流芳は高度な漢文素養を持っていた知識人・隠者として、俗世の抹茶家を批判し、中国文人らしい生活に夢中になっていた。『雅遊漫録』は大支流芳の中国風の文人趣味の集大成である。『青湾茶話』は『雅遊漫録』から生まれた作品であり、大支流芳の文人的な煎茶趣味の集中的な表現で

²⁶ 李贄編・都賀庭鐘訳、『開卷一笑』、国文学研究資料館新日本古典籍総合データベース、請求番号 DIG-OTKY-29、1755。川上陽介、「『開卷一笑』小考」、京都大学国文学論叢（2）、1990、pp. 15～33。

²⁷ 都賀庭鐘訳・白沙後生校、『通俗医王者婆伝』、国文学研究資料館新日本古典籍総合データベース、請求番号 DIG-KYOT-50872、1763。

もある。さらに、『雅遊漫録』と『青湾茶話』の刊行の前後関係を通して江戸時代の出版業の後ろ押しの一面が窺える。また、『青湾茶話』を通して、中国の舶来漢籍が江戸時代の茶人たちに新たな喫茶理論をもたらしたことがわかった。大枝流芳は明代茶書から学んだ知識を生かして、茶の湯と違う方向の喫茶文化を江戸時代の日本茶人に示し、煎茶書の先駆者となった。本書は上田秋成・村瀬栲亭・田能村竹田・深田精一等の江戸後期と末期の煎茶人にも多大な影響を及ぼした。当時の日本では海外の世界を見ることはできなかったが、それでも学習意欲は減らず、海外からの舶来書を受け容れて勉強して知識を得ており、鎖国下の江戸文人たちが中国の喫茶法を勉強していた姿が想像できる。京都と大坂は優れた煎茶家の宝庫であり、売茶翁・木村兼葭堂・大典顕常のような代表的な茶人を生み出した。『青湾茶話』を始めとした煎茶書を通して日本の茶人と中国の茶人は時代を超えて国境を越えて茶文化の交流を成し遂げた。

第六章. 大典禪師の煎茶書に関する研究：『茶経詳説』と『煎茶訣』を中心に

はじめに

大典禪師（1719～1801）は、江戸時代中期の京都五山の相国寺の禪僧である。俗姓は今堀、通称は大次郎、諱は顕常、竺常、字は梅莊、号は大典、蕉中、東湖山人、不生主人など、室は小雲棲と号し、書院は北禅と号す。近江国神崎郡に生まれ、8才の時、儒医である父と京都に行き、はじめは宇治黄檗山の華蔵院で学び、法兄のいじめにより10才の時京都の相国寺の慈雲庵に転入して独峰慈秀に師事し、11才の時に得度した。相国寺で禅を学ぶ傍ら、当時の京都で有名であった儒者宇野明霞に従って漢詩を学び、また、明霞の親友で、当時の京都各地で遊学中の大潮元皓と親しく交遊した。二人から影響を受け、大典は漢学に心酔し、特に漢詩に長じた。また京都禅林の中において当時随一の詩僧と評価された。また、同門の師弟の片山北海が主催した漢詩結社、混沌社に積極的に参加し、大坂の文壇の活躍者たちと頻りに交流を行い、文人墨客同士で互いに励まし合って詩文を磨いた。その間、大典の碩学と名声は江戸幕府にも届いた。後に幕府の招聘を受けて朝鮮修文使を務め、朝鮮使者に送る外交文書の起草と執筆を担当した。61才の時、相国寺の第113世の住持を担当し、京都禅林に多大な貢献を果たした。享和元年、83才で没し、生涯に大量の作品を残した¹。

江戸中期に、煎茶の趣味が急速に大阪と京都を中心に勃興してきた。それとともに、多くの煎茶書が現れて江戸文人に愛読された。大典は豊富な漢詩作品群の

¹ 大典禪師の生涯の説明については、主に以下の典拠による。小島文鼎著、『大典禪師』、国立国会図書館蔵本（請求番号570-89）、1927。富士川英郎・松下忠・佐野正巳編、『詩集日本漢詩』第六巻、『北禅詩草』の解題、1976、pp.17～20。大槻幹郎・加藤正俊・林雪光、『黄檗文化人名辞典』、1988、pp.302～303。上田正昭・西澤潤一、平山郁夫、三浦朱門編、『日本人名大辞典』、講談社、2001、p.1479。

ほか、煎茶文化に関する代表的な作品も残している。一つは『茶経詳説』²である。本書は安永3年（1774）に著され、中国唐の陸羽の『茶経』三巻の注釈書にあたるものである。日本では『茶経』の最古の注釈書でもある。もう一つは『煎茶訣』³である。この書の原作者は清国の葉雋である。葉雋の字は永之である。また、清国の人の作品とはいえ、日本のみで刊行され、中国では刊行された記録がないようである。現存最古の『煎茶訣』には大典の補注が付けられ、寛政8年（1794）に刊行されたという。

以上の二つの作品は日本の煎茶文化と関係が深いと思われた。茶文化史の視点から考えれば、大典は中国の茶文化を日本に受け入れることに大きな力を注いだので、彼の貢献は軽視できず、より評価されるべきであろう。しかし、先行研究を調べると、その作者である大典の名が言及されるのは少なく、大典の煎茶書に関する研究は殆どない。彼の煎茶書の価値はまだ重視されていない、というのが現状である。

そこで、本章では、以下の四つの角度から日本における中国茶文化の受容について、大典の茶書を中心に考察したい。一、茶書の創作期の歴史的背景の考察。二、茶書より見える中国茶文化への認識の確認。三、大典の喫茶の交遊対象を検討したい。四、大典の煎茶書への評価を確認したい。最後に改めて大典を評価することを試み、大典が後世において評価されていない理由も検討したい。

第一節.大典禅師の煎茶書

大典は煎茶文化の宣伝と普及にも熱心に取り組んでおり、煎茶書の編著と刊行に多大な影響を与えた。

宝暦14年（1764）、時に46才の大典は親友の木村兼葭堂の支援により、中国から伝来した茶書『煎茶訣』を日本で彫刻して刊行した。『煎茶訣』は葉雋の作

² 大典頭常、『茶経詳説』、布目潮風編、『中国茶書全集』下巻、汲古書院、1987、pp. 241-265。

³ （清）葉雋著、大典頭常補、『煎茶訣』、関西大学図書館蔵本、1764。

品である。作者の人物と経歴については不詳である。『煎茶訣』の巻首によれば、字の「永之」と出身地の「越溪」しか記述されていない⁴。また、明治12年(1879)、鹿鳴舎によって再刻された『煎茶訣』によれば、見返しに「清国 葉雋永之撰」⁵と記されているため、葉雋は清国の人であることを示している。これによれば、論者の考察によれば、ここの「越溪」は、おそらく清代台州府寧海県越溪（現在浙江省寧波市寧海県越溪郷）を指している⁶。清代の地図から見れば、寧海県越溪は浙江省の沿岸部に位置し、寧波府と隣接している。清代の寧波は対日貿易の重要な港であるため、もし葉雋が本当に寧海県越溪の人であれば、彼の作品は貿易港を経由して日本に伝来した可能性がある。もちろん、葉雋に関する記録が少ないため、現時点では推測しかできない。本作品は、清の貿易船を経由して日本に伝わり、後に大典がこれに補筆したものであろう。本書は冒頭に大典の序と末尾に跋があり、内容は製茶、蔵茶、扱茶、潔瓶、侯湯、煎茶、淹茶、花香茶の八章を掲げており、中国明清以降の喫茶法について論じている。最後に木村兼葭堂による

煎茶訣一篇、語不多而要眇尽矣。命之剞劂以施四方君子云。

煎茶訣一篇、語は多からず、要眇（要妙）は尽く。之を命じて剞劂（版木を彫刻する）して以て四方の君子に施す。⁷

という識語があり、煎茶の要訣を普及することを目的として刊行を行ったと述べている。木村兼葭堂は、江戸中期の文人であり、大坂の人、名は孔恭、通称坪井屋吉右衛門、別号は巽、本草学・南画を学び、奇書珍籍・骨董品を蒐集した人物である。大典と兼葭堂は、ともに売茶翁の後輩であり、同時に忠実な信者である。二人は『煎茶訣』を通して翁の煎茶の宣伝に大きな力を注ぎ入れていた。『煎

⁴ 『煎茶訣』の巻首による。(清)葉雋著、大典頭常補、『煎茶訣』、関西大学図書館蔵本、1764。

⁵ 葉雋著、『煎茶訣』、国立国会図書館蔵本、1879。

⁶ 『中国歴史地図集』の清代の浙江の地図による。譚其驤著、『中国歴史地図集』清時期、中国地図出版社、1996年第6版、p. 32。

⁷ 木村兼葭堂の識語、『煎茶訣』、関西大学図書館蔵本、1764。

茶訣』の刊行によって、煎茶の普及における確かな宣伝効果が得られた。例えば、沢田楽水居『煎茶略説』、柳下亭嵐翠『煎茶早指南』、天保九年再刊本の『煎茶訣』、明治十三年の再刊本の『煎茶訣』などの後続書の刊行は、いずれも本書の価値を示している。

一方、大典の代表的な煎茶書は『茶経詳説』である。本書は安永3年(1774)、禅師56才の時の作品である。上下二巻あり、次のような内容構成である。冒頭には正二位香海高辻家長の序文があり、過去に大典が茶経を取り上げて講義を行ったことが述べられている。次に付言があり、日本と中国、それぞれの歴代の製茶と喫茶の方法、およびその歴史について、どのように変遷していったのかを詳細に記述したものである。その次は茶事品目であり、中国歴代の代表的な茶書『茶録』・『茶疏』などから、茶器と茶葉の名前と釈義を列挙している。そして本文に入り、『茶経』上中下三巻の内容に対して、訓点付きの本文と仮名交じりの和文で注解を行っている。また末尾には、中国明代の文人孫大綬が編集した『茶経外集』をそのまま付録として収録しているが、これは『茶経』の作者陸羽を詠じた唐宋の有名な詩を載せたものである。春田永豊は本書の影響を受けて『茶器図解』を著し、大典の解説を踏まえて茶器の図解を添えた。

さらに、大典が売茶翁の禅詩を集めて『売茶翁偈語』の編集に参加した。周知のように、江戸時代の黄檗宗の禅僧売茶翁は煎茶の祖と呼ばれている。大典は売茶翁が活躍した時代に生まれ、この煎茶文化の提唱者と直接話し合い、彼の喫茶法を学ぶことができた。

売茶翁は、肥前蓮池(佐賀県蓮池町)の人であり、俗姓は柴山、僧号は月海、諱は元昭、晩年は売茶翁高遊外と自称した。化霖道龍が開山した龍津寺で禅を学び、また京都黄檗山万福寺で遊学した。61才になって京都の東山で通仙亭を開いて煎茶を売る生活を始めた。売茶翁は長崎の清人から中国の喫茶法を学んだと言われ、清代に当たる中国の最新式の茶器の使用を積極的に自分の商売に導入し、独特な煎茶法を創案したが、それは従来の日本の喫茶法と大いに異なったため、京都で大勢の注目を集めた。そのみならず、売茶翁は煎茶を通して積極的に自分の価値観を発信し続けた。

売茶翁はもともと黄檗宗の禅僧である。黄檗宗は明僧隠元禅師が中国福建から日本に渡来して、宇治の黄檗山万福寺を建立し、江戸時代に成立させた新興の禅宗であり、曹洞宗・臨済宗と合わせて日本の三大禅宗と呼ばれ、日本の仏教に新風を伝えた。売茶翁は黄檗僧として中国風の禅宗の思想をベースとしたが、禅の思想だけにとどまらず、儒教の思想と老荘の思想も同時に受け入れ、多様な思想を混ぜ合わせて独自の価値観を持った。新しい喫茶法、斬新な思想により、売茶翁の京都での名声は日増しに轟き、風流な人物として当地の好事者に認められ、煎茶の魅力を京洛の辺りに広く拡散した⁸。

大典は売茶翁と交遊したことがあり、翁の煎茶法を直接に習った重要な人物である。彼は売茶翁と親しくなった原因は漢詩の師である宇野明霞であろう。宇野明霞はかつて大潮元皓に従って詩を学んだことがある。大潮は江戸時代中期の禅僧で、名は元皓、字は月枝、俗姓は諫早氏である。大潮または魯寮と号す。翁と同じく肥前の龍津寺の化霖禅師の弟子であり、つまり売茶翁の法弟に当たる人物である。翁が京都での売茶生活を始める前から、三人は親交を保っていた。そこで、大典は明霞先生と大潮禅師を介して売茶翁と知り合う機会を得たのであろう。大典と翁は43才の年齢差があったとはいえ、二人は忘年の友となり、煎茶の師かつ友人としての深い信頼関係を築いた。そして、大典は近距離で売茶翁の煎茶を習い、翁が茶に寄託した精神性を直接受け継ぐことができ、翁の伝承者として後に活躍することができた。また、大典は売茶翁の喫茶精神の宣伝者でもある。その代表的な事例として、彼は売茶翁の平生の詩を蒐集し、『売茶翁偈語』の編集に参加した。そして、本書の冒頭に「売茶翁伝」を寄せ、当時89才で高齢であった売茶翁の生涯に極めて高い評価を与えた。本書もまた売茶翁の煎茶に託した精神と理念を知るために貴重な史料となっている。

以上のことから、大典が煎茶書の出版によって煎茶の普及と宣伝に積極的に

⁸ 売茶翁の生涯については、主に以下の典拠による。谷村為海、「売茶翁年譜」、『売茶翁』、佐賀県立博物館、1973、pp. 86～99。大槻幹郎・加藤正俊・林雪光、『黄檗文化人名辞典』、1988、pp. 93～94。売茶翁と黄檗宗の関係については、主に以下の典拠による。ノーマン・ワデル著・樋口章信訳、『売茶翁の生涯』、思文閣、2016年。馬叢慧、『売茶翁の逍遙遊』、駿河台出版社、2020。

関わり、煎茶の流行の発生に大きく貢献したことは明らかである。

第二節.大典禅師の茶書刊行の背景

大典の茶書が刊行された時代にはどのような特徴があるのか、大典の茶書の刊行は偶然の産物なのか、それとも、歴史的必然性のあったものなのか、大典の中国の茶の知識はどこから得たのか、江戸時代の歴史の背景を踏まえて検討したい。

まず、考察の対象期間を 1735 年から 1834 年にかけての約 90 年間に限定したいと考える。それはつまり、売茶翁が京都で売茶活動を開始した時期から、花月庵田中鶴翁によって煎茶の道化が確定した時期にあたる。この期間を考察期間とする理由は、この 90 年間はまさに煎茶文化の芽生える時期であったからである。この時期の煎茶文化には、中国茶文化の影響が顕著に見られ、茶の湯から受けた影響は比較的小さい。この時期は、まさに煎茶家が新理論を構築して実践を試みていた時期であり、中国茶文化の知識を最も積極的に取り入れた時期でもある。

この時期の茶書刊行に見られる特徴が二つある。一つは、中国の茶書が次々と日本で翻刻されていることである。もう一つは、日本人が著した中国の茶書関係書も続々と登場していたことである。さて、どうして中国茶書は盛んに刊行されていたのか。そこには四つの理由が考えられる。

一つ目は、徳川幕府の儒教重視である。統治者として、徳川幕府は儒学（主に朱子学）を利用し、被統治者に対して幕府思想に忠義を尽くす思想を灌輸し、それによって社会を安定させることを望んでいた。そのため、江戸時代の人々の教養は昔よりも高まり、老若男女を問わず識字率が高い。その中で、漢文、漢詩など漢学の素養を身につけた知識層も増えてきた。漢学の教養のある知識人の増加は、漢籍の読者の増加に繋がるであろう。

二つ目は、鎖国体制下の漢籍の伝入である。江戸幕府の鎖国を行って海外との交流が制限されており、漢籍に対する需要が増えた。江戸時代の輸入漢籍は非常

に数多く、内容も幅広く儒学・医学・文学まで及んだ。大部分の漢籍は清国からの貿易船で長崎港を経由して輸入された。日本国内で複写・翻刻した和漢書もあった。もちろん、中国の茶書も輸入漢籍の一種である。おそらく、当時日本に流通した中国の茶書の数は少なくはなかったであろう。例えば、『茶経』をはじめ、『茶譜』、『茶集』、『介翁茶史』など明清以降の茶書も多く日本で翻刻された。さらに、『煎茶訣』と『枕山楼茶略』のような、現代中国では逸失した茶書も刊行された。中国の茶書の伝来は江戸の茶人に豊かな知識を与え、彼らの視野を広げたであろう。

三つ目は、茶道人口の増加である。江戸の人々の教養の高まりと共に、町人の精神的な生活も豊かになった。その間、遊芸文化（茶道、華道、書道などの稽古事）も空前の盛り上がりを見せた。茶道を行う人々も急速に増えた。このような茶道人口の急増に対応するために、茶道は集団稽古の方式で行われた。しかし、問題もあった。稽古の流儀のみが次第に茶道の目的となり、肝心の茶は軽視された。茶道のこのような変質に対して、警鐘を鳴らす茶人もいた。一方、一部分の茶人は中国から伝来された茶書から新たな刺激を受け、茶書によって中国の喫茶を学ぼうと望んだ。三谷良朴の『和漢茶書』はその中の一作である。茶道人口の急増による茶道の変質は、おそらく江戸茶人を中国茶書に目を向けることへと導いた重要な原因であろう。

四つ目は、刊行技術の向上である。江戸時代の印刷技術の高まりは、煎茶書の刊行にも技術的な可能性を提供した。刊行物は庶民の趣味を満足する機能も持ち始めた。印刷技術の進歩とともに、書物が庶民にも容易に手の届くものになり、読書は日常生活の一部となった。

大典の茶書は宝暦年間から安永年間にかけて集中的に刊行され、三谷良朴の『和漢茶話』と大枝流芳の『青湾茶話』の出版よりやや遅れたが、数多くの煎茶書の中においては初期の作品であり、新しい領域を開拓した作品であるといえる。また、書物は経済が発達した地域に集中しやすい。近世中期には、京都・大坂・江戸の三大都市は商業出版が発達した地域であり、書籍の流通量が多い地域であった<注の追加>。大典は長年京都と大坂で生活していたため、様々な書籍

と触れ合うことが可能であっただろう。茶書を含め多くの漢籍を博覧する機会も少なくなかったはずである⁹。そのほか、彼の親友である木村兼葭堂は浪華（大阪）で有名な蔵書家であるとともに、煎茶を嗜む人でもあったので、豊富な茶書を所持した兼葭堂との往来も、大典が特に中国の茶書に親しんだ理由の一つだとも考えられる。そう考えれば、大典が中国の茶についてとりわけ博識であることも、他の茶人より早く『茶経』の注釈書を出版したことも可能となる、と考えられる。

第三節.大典禪師と『茶経詳説』

つづいて、本節は『茶経』について考察する。大典はなぜ『茶経詳説』を出版しようとしたのか、また、彼は中国の茶文化に対してどのような見解を持っていたのか。

『茶経詳説』の巻頭、香海の序には「竟陵氏茶経三卷、世皆苦其難読。有人請大典禪師講説、極得著明、乃識其所聞、遂欲上梓、與世共之。（竟陵氏の茶経三卷、世は皆読み難きことを苦しむ。人有りて大典禪師を請ひて講説し、極めて著明を得る。乃ち其れ聞く所を識し、遂に上梓して世と之を共せんと欲す）」¹⁰とある。「正二位香海」は正二位権中納言高辻家長（1717～1776）の法名である。高辻家は代々天皇の侍読を務めた家系であり、高度な漢学素養を持つ人物である。そうではあっても、彼を始め、皆難解な『茶経』には苦しんだようである。そのため、高辻家長は大典を招いて内容を講説させた。大典の講説が分かりやすかったので、高辻家長はこれを上梓して世人と共有しようとした、ということがこの序で述べられている。

以上、大典が『茶経詳説』を刊行した動機は、友人の要求に応じて『茶経』の

⁹ 近世の書林の盛況につて、井上隆明は「初期は京、中期大阪、末期が江戸」と述べている。近世中期の出版について、堀川貴司は「版元が組織化され、商業出版が三都それぞれに特色を持ちながら発達していきます」と述べている。井上隆明、『日本書誌学大系 14 近世書林板本総覧』、青裳堂書店、1971、p. 6。堀川貴司、『書誌学入門 古典籍を見る・知る・読む』、勉誠出版、2019、p. 163。

¹⁰ 大典頭常、『茶経詳説』、布目潮風編、『中国茶書全集』下巻、汲古書院、1987、p. 241。

難解な箇所を解説するためであったことがわかる。

次に、『茶経詳説』の附言に移る。大典が中国の茶文化の歴史的変遷にどのような認識を持ったのか、また日中の茶文化の異同に対してどう考えたのか、附言ではその答えを提示している。附言の内容はおよそ四つの部分に分けられる。

第一部分は陸羽の『茶経』への評価である。大典は陸羽の『茶経』を高く賞賛する。彼の考えでは、喫茶は「風流の賞」（風雅な遊び）であり、唐より前に、既に広く僧家において展開されていた。陸羽の『茶経』の完成によって、さらに、「桑苧翁コノ書ヲ撰スルヨリ品目ヲ立テ其法ヲソナフ。此茶道ノ鼻祖トイフベシ。」¹¹と述べている通り、茶の品目が立ち、法度が備わるようになった。大典は陸羽を茶道の開祖として敬意を表している。そして、宋・元・明代を通して、中国での製茶の方法も数度革新があったとはいえ、「風流の賞」は今もなお断たれてはいる、と考えている。さらに、大典は中国の種々の茶書は、すべて『茶経』に基づいて編撰された、と評価している。

第二部分は日本の茶文化への歴史観である。大典は聖武天王、嵯峨天王の賞茶の式から、つづいて栄西の茶種伝来の歴史、高師直と足利義満の茶に至るまで、日本の茶に関する重大な出来事を時間軸に沿って示した。そして、「爾来茶道マスマス盛ニシテ或ハ王公ノ貴玩トナリ」¹²と述べ、日本の茶道が益々盛んになる一方、権力者の玩具にもなってしまった、と日本茶道の変質への心配を語っている。

第三部分は中国の茶の発展への認識である。大典の考えでは、唐代以前、中国では粗末な団茶が作られて煎服したものである。宋代に至り、団茶の製造が精緻になり、竜団・鳳団の類の高級団茶が次第に現れた。飲み方も、団茶を細末にして茶匙を用いて粉末を茶碗に点じる方法に変わった。元代になると、末茶を服する際は茶匙をやめて茶筴を使用し始めた。しばらくすると末茶をやめて葉茶を煎じるようになった。明代より、葉茶を煎じる方法もなくなりはじめ、茶葉を茶瓶や茶鍾に入れて湯を注ぎ込む、という方法に革新された。いわゆる泡茶、冲茶

¹¹ 前掲『茶経詳説』、p. 242。

¹² 前掲『茶経詳説』、p. 243。

である。

第四部分は茶具茶器の解説に当る。『茶録』『茶疏』などの茶書より引用した茶事の諸品目を紹介している。

もちろん、現在の観点からは、大典の中国茶文化への認識には瑕疵があるのも否定はできないが、当時における彼の見識に潜む進歩性も認められるべきだと考える。

一方、附文に注目すると、そこから大典の主張を窺うことができる。まず、彼は素朴な茶の本性に帰ることを勧めている。附文に「其言ニ茶性儉不宜広、又イフ、茶宜精行儉徳之人ト、此茶道ノ重トスル所ニシテ僧家ノ風流ニ帰スルコト宜ナリ」¹³とあるように、茶の本性は儉約質素で、茶は「精行儉徳」（行を精粹純一にして徳を節儉簡朴にすること）の人にふさわしい。だから、茶道の重んじるべきところはまさにこの点にあり、さらに、茶は僧家の風流に帰るべきである、と主張している。

また、附文では「茶ノ製法古今次第ニ変換ス」¹⁴、また「古今ノ法亦自不同也」¹⁵と述べている。彼の考えでは、茶の製法は発展するもので、喫茶の方法も製茶法に則って変化していく。したがって、今も昔も製茶の方法は当然同じではない。仮に現在の人々が『茶経』の記事に従って、唐代の喫茶法を復元しようとしても、茶の製法が変わったので、「古法ノ如ニコレヲ飲ハ不可ナリ」¹⁶とあるように、古人の方法のままに茶を飲んではいけない、と考えている。

以上、江戸期の時代背景を含めて考えると、大典の博学さは同時代の日本人の中には滅多に見られないといえる。彼は中国の茶史をよく理解し、茶文化の長期的な発展の流れを正確に見極めた。『茶経詳説』の当時における進歩性も含めて、大典を積極的に評価すべきであると考えられる。

¹³ 前掲『茶経詳説』、p. 243。

¹⁴ 前掲『茶経詳説』、p. 244。

¹⁵ 前掲『茶経詳説』、p. 244。

¹⁶ 前掲『茶経詳説』、p. 244。

第四節.大典禪師と『煎茶訣』

次に、大典禪師と『煎茶訣』について考察する。『煎茶訣』には製茶、蔵茶、拭水、潔瓶、侯湯、煎茶、淹茶、花香茶の八節がある。このような節構成は明清の茶書によく見える特徴である。内容をみると、葉茶を使った煎茶と泡茶のことが書かれていて、唐宋の茶文化ではなく、より新しい明清の茶文化を紹介したものである。ただし、同じ中国の茶書とはいえ、『茶経』と『煎茶訣』の知名度は違う。陸羽が中国で茶神と奉られてきたのに対し、葉雋は全く無名の人である。なぜ大典は世に名を知られていない『煎茶訣』を刊行しようとしたのか。まず、『煎茶訣』には蕉中老衲（大典）の自序がある¹⁷。

点茶之法、世有其式。至於煎茶、香味之間、不可不精細用心、非復点茶比、而世率不然。葉氏之訣、實得其要、猶有遺漏、頃予乘閑補苴、別為一本、以遺蒹葭氏。如或災木與好事者共之、亦所不辭。

点茶の法は、世に其の式有り。煎茶に至りては、香味の間、精細用心せざるべからず。復た点茶の比に非ず、而るに世は率ね然らず。葉氏の訣は、實に其の要を得るも、猶ほ遺漏有り。さきごろ予は閑に乗じて補苴し、別に一本と為し、以て蒹葭氏に遺る。如し或は災木して、好事者とこれを共にすれば、亦た辞せざる所なり。

と述べている。ここからは、重要な事が二点読み取れる。一つは、日本の点茶には定法があるが、煎茶の作法は点茶より注意深くする必要がある。しかし、世間の人にはこれを知らない、というものである。二つ目は、葉雋の『煎茶訣』には煎茶の要点が収められているが、まだ足りないところがある。それ故、大典は『煎茶訣』に補説を加え、また木村蒹葭堂に出版を依頼し、より多くの人に知らせようとした。つまり、『煎茶訣』の刊行意図は世間に煎茶の作法を広げることであった、といえる。

¹⁷ 前掲『煎茶訣』、蕉中老衲序。

『煎茶訣』の刊行時期に関しては、明和元年（1764）以前に初版がすでに存在したはずである。これは『煎茶訣』の兼葭堂の識語によって得られた結論である。つまり、安永3年（1774）に刊行された『茶経詳説』より前に、『煎茶訣』の初版がすでに木村兼葭堂の手元にあったと考えられる。しかし、『煎茶訣』の冒頭の蕉中老衲つまり大典禅師の序によれば、『煎茶訣』に補説を加えた時期は寛政8年（1796）であった。つまり、『煎茶訣』の初版の成立時期は『茶経詳説』より早い、大典は『茶経詳説』の刊行以降、『煎茶訣』に補説を行ったはずである。『煎茶訣』の最初の節「製茶」に次のように述べている¹⁸。

西夏製茶之法、世変者凡四。古者蒸茶、出而擣爛之、為团乾置、投湯煮之、如茶経所載是也。

西夏に茶を製するの法、世に変わる者凡て四あり。古者は茶を蒸し、出でてこれを擣き爛し、团と為して乾置し、湯に投じてこれを煮る。『茶経』に載する所の如きは是れなり。

その下には、小文字で「余茶経詳説備悉之。（余が『茶経詳説』にこれを備へ悉す）」¹⁹と注が付いている。先に『茶経詳説』を完成していなければ、この注はないはずなのである。

さて、前述の大典の自序には「実得其要、猶有遺漏（実に其の要を得るも、猶ほ遺漏有り）」と評しているが、一体葉雋の書には何が足りないと考えられ、また大典はどのような補注を付けたのか。現存最古の『煎茶訣』（寛政八年）を調べても、葉雋の原文と大典の補文は混同して刊行されたので、区別をつけ難い。しかし、『茶経詳説』の附文と照合してみれば、大典の執筆に当る部分を見分けられなくもない。例えば、『煎茶訣』の「製茶」は、『茶経詳説』の附言の内容に似ている。前者は漢文、後者は和文であるが、論理の展開にはほぼ違いがなく、同一人物の作といえる。また、用例として挙げられた引用文も同じである。さら

¹⁸ 前掲『煎茶訣』、製茶。

¹⁹ 前掲『煎茶訣』、製茶。

に、「宇治」など日本の地名が出ているので、大典の補説であろう。ほかに、「江州、肥筑」など日本の地名の示す言葉も見える。以下、大典の補説と考えられる文章を整理した。例えば、「製茶」の章には次のように述べている²⁰。

吾日本抹茶煎茶俱存而用之。抹茶獨出自宇治。蓋不舍其葉、故極其精細。製造之法、宜抹而不宜煎。煎茶之製、所在有之。然江州所産、為最近好事者家製之。率皆用炒法、重芳烈故也。

吾が日本に抹茶、煎茶は俱に存してこれを用ゆ。抹茶は独り宇治より出で、蓋し其の葉を棄てず、故に其の精細を極む。製造の法、抹に宜しくして煎に宜しからず。煎茶の製は、在る所にこれ有り。然れども江州に産する所は、最近の好事者家にこれを製するなり。率ね皆炒法を用ゆ、芳烈を重んずるが故なり。

宇治の抹茶と近江の煎茶の製法と特徴について紹介している。また、「煎茶」の章には次のように述べている²¹。

世人多貯茶不密、臨煎焙之、或至欲焦。此婆子村所供、大非雅賞。江州茶尤不宜焙。

世人多くは茶を貯へること密ならず。煎に臨みてこれを焙す。或は焦げんと欲するに至る。此れ婆子村の供する所にして、大ひに雅賞に非ず。江州の茶は尤け焙するに宜しからず。

近江の煎茶の焙り方について紹介している。さらに、「淹茶」の章には次のように述べている²²。

唐茶舶來上者、亦為精細、但經時之久、失其鮮芳。肥筑間亦有称唐製者、

²⁰ 前掲『煎茶訣』、製茶。

²¹ 前掲『煎茶訣』、煎茶。

²² 前掲『煎茶訣』、淹茶。

然氣味頗薄、地産固然。大抵唐製茶不容煎。

唐茶舶来し上なる者も亦た精細なり。但だ時を経ること久しく、其の鮮芳を失ふ。肥筑の間にも亦た唐製と称する者有り、然れども氣味頗る薄し。地産固より然り。大抵唐製の茶は煎ずるを容れず。

ここでは、肥筑（肥前、肥後、筑前、筑後地域）で生産された唐茶（中国茶）の煎法について述べている。これより、大典が『煎茶訣』で関心を示したのは製茶法と喫茶法のようなことがわかる。彼はいつも中国と日本の茶文化の違いを意識していたのであろう。そのため、彼は日本の製茶の現状を踏まえ、日本に相応しい喫茶法を提示しようとしている。以上を考えると、大典が中国の茶文化を受け入れる際、何もかも一概に吸収したわけではなく、吟味のもとで判断を下したことが窺える。これは大典の優れた所であるといえる。

さて、本節の冒頭の疑問、なぜ大典が『茶経詳説』のほか、『煎茶訣』も刊行しようとしたのか、に戻りたい。その答えは恐らく、『煎茶訣』が『茶経詳説』において不足している清王朝の中国の最新の喫茶法を記載しているから、である。大典は『茶経詳説』を著しながらも、「古法ノ如ニコレヲ飲ハ不可ナリ」²³ということをよく心得ていた。しかし、確かに『茶経』は茶書の經典であるが、その理論は明らかに当時の中国の最新の喫茶法と異なり、時代に遅れている、ということも深く認識していた。そのため、彼は時代にふさわしい最新の中国の茶文化を紹介する作品を求めていた。その一つの証拠として、『煎茶訣』の巻尾では、不生道人（大典）の跋文に「葉氏之訣、得其精哉、殆纘竟陵氏之緒矣（葉氏の訣は其の精を得たるかな。殆ど竟陵氏の緒を纘げりや）」²⁴と述べ、葉雋を陸羽の後継者と高く評価していた。『煎茶訣』は中国では名が知られていないが、内容は充実している。明清の茶文化をよく記していたので、大典から見ると、最新の中国茶文化を示す得難い作品であった、と言えよう。

以上のように、『茶経詳説』と『煎茶訣』はそれぞれ伝統の茶文化と新興の茶

²³ 前掲『茶経詳説』、p. 244。

²⁴ 前掲『煎茶訣』、不生道人跋。

文化を代表して、互いに補い合って中国茶文化をより完全な形で示している。大典は『茶経詳説』と『煎茶訣』をもって、古今の中国茶文化を江戸時代の日本人に紹介したほか、合理的に両国の茶文化を比較しながら取捨選択をした。この点こそが、大典の優れた所と言ってもよからう。

第五節.大典禪師の周辺

本節では、大典と売茶翁、また二人の周辺の文人との交遊状況を考察し、大典の茶と文人交遊との関係を検討する。

大典の茶を考察するには、前述の二つの茶書のほか、大典の作品集に見られる多くの詩文についても考察を行った。それらの詩文は基本的に年次順で編集されており、大典の生活を窺う大切な資料である。大典の漢詩集を調べた結果、茶に言及した詠茶詩が多く見つかった。これは、大典の日常に茶事がよく行われたことを示している。これらの詩文を通して、大典が禅僧や文人と広く交遊関係を結んでいたこと、そして茶が彼の好む交遊手段の一つであったことがわかった。

茶の交遊においては、中でも売茶翁との往来が注意すべき点であると考ええる。陸羽が「煎茶の祖」と奉じられる一方、売茶翁は「煎茶中興の祖」と尊重される。売茶翁がこのように崇高な地位につけたことは、やはり彼の親友である大典の役は軽視できない。大典の茶は売茶翁の茶と緊密に繋がり、互いに影響しあっていたと考える。また、大典の『売茶翁伝』がなければ、世間は売茶翁の生涯を詳しく知ることができなかつたであろう。

(1) 売茶翁

売茶翁(1675～1763)は肥前蓮池の人で、黄檗宗の竜津寺で化霖禅師の弟子として禅を学んだ。化霖の遷化後、竜津寺を法弟の大潮にまかせ、京都で売茶生活を始め、六一歳の時に東山で「通仙亭」を開いた。売茶翁は禅の理に拘らずに俗世に身を投げ、清貧な生活を通して人生の意義を深く見抜き、「非禅非道又非儒

(禅に非ず、道に非ず、又た儒に非ず)」²⁵と詠んだように、独自の哲理を創り出した。それが周りに多くの風流雅人を集めることとなった。

そして、売茶翁は「遊相国寺楓下煮茶（相国寺に遊して楓の下に茶を煮る）」²⁶詩に、相国寺の楓の下で煮茶する光景を描いた。

城外古禅刹 城外の古禅刹、

聯芳四百秋 芳を^{つら}聯ぬ 四百秋。

山門朝魏闕 山門は魏闕に朝し、

池水繞高楼 池水は高楼を繞る。

松籟入炉響 松籟は炉に入りて響き、

茶烟籠鼎幽 茶烟は鼎を籠めて幽たり。

楓林招友坐 楓林 友を招きて坐せしめ、

茗飲渴心休 茗飲して渴心休む。

尾聯の句は、友人を招いて共に煮茶したことが書かれている。大典は売茶翁の親友であり、相国寺に住持を担当していたため、売茶翁の茶会に招待された可能性が高いと考えられる。売茶翁は83歳の時に、自分の伝記を書くことを大典に託した。大典が執筆した売茶翁の伝記は『売茶翁偈語』の冒頭に収録され、売茶翁の生涯を知る貴重な資料である。また、二人に長年の深交と信頼があることは明白である。

(2) 大潮元皓と宇野明霞

大典が売茶翁と知り合ったきっかけについては冒頭でも少し言及したが、そ

²⁵ 大槻幹郎、『売茶翁偈語訳注』、全日本煎茶連盟、2013、p. 193。

²⁶ 前掲『売茶翁偈語訳注』、p. 102

れは大典の二人の漢詩の師、大潮元皓と宇野明霞に遡れると考える。両者とも売茶翁の親友であった。恐らく若き大典は彼らを通して売茶翁と知り合ったのであろう。

大潮元皓（1676～1768）、は売茶翁の師弟で、号は月枝、魯寮、西溟。肥前蓮池の竜津寺の黄檗禅僧である。彼はかつて長崎で中国語を学び、儒学、詩文に長じていた。大典の「玄翹師至自肥受戒黄檗、與余邂逅浪華。及余入京、師亦戒満将西帰、問余告别、眎以数作、因留談往事、為之愀然。賦送之。（玄翹師至る。肥より戒黄檗を受け、余と浪華に邂逅す。余が京に入るに及び、師も亦た戒満して将に西帰せんとなす。余に問ひて告别し、数作を以て眎す。因りて留めて往事を談じ、之の為に愀然たり。賦して之を送る）」があり、詩中に注が、「昔者大潮和尚在京也。一日與高居士煮茶糾林為遊、余与翹陪焉。（昔、大潮和尚は京に在り。一日、高居士と茶を煮て糾林に遊を為す。余は翹と陪す）」²⁷と述べられている。「高居士」は売茶翁の別号高遊外のことである。大典が若い時、玄翹禅師と共に大潮と売茶翁に付き添って下鴨神社の糾林で茶を煮て遊宴していたことを記録している。

宇野明霞（1698～1745）は近江国野州（滋賀県野州市）出身で、字は士新。儒学者、漢詩人で、かつて大潮に古文辞学と漢詩を学び、古書、典籍に長じていた。大典は明霞を非常に尊敬し、常に明霞の私邸を訪問して教えを請うた。明霞は売茶翁とも親しく往来した。大典の「売茶翁携茶具訪士新先生煎茶飲之、余亦與焉。席上奉贈先生（売茶翁茶具を携えて士新先生を訪ね、茶を煎じて之を飲む。余も亦たこれに与る。席上先生に奉じて贈る）」詩に、

蕭然茶鼎竹林傍　　蕭然たり　茶鼎竹林の旁、

朝夕風烟颺草堂　　朝夕風烟草堂に颺ぐ。

為是人間少相賞　　是れ人間少なく相い賞する為に、

²⁷ 大典顕常、『小雲棲稿』卷三、国文学研究資料館蔵本、1775。

携来今日與君嘗 携え来りて今日君に嘗せしむ。

と述べている²⁸。ある日売茶翁が茶具を携えて明霞を訪問して煎茶を行い、大典が明霞に相席したことが述べられている。さらに、木村兼葭堂の『売茶翁茶器図』には、売茶翁が使用した茶器が詳細に描かれている。売茶翁所持の茶器の中に、大潮贈一つ、明霞贈三つ、大典贈六つがあったと記録されている²⁹。

龕扉裏：大潮禅師銘	鍾母子：士新所贈
注子：宇野明霞先生銘	吹管：梅莊禅師銘
滓盃：梅莊禅師銘	檐子：宇野明霞先生銘
提籃：梅莊禅師銘	注子：梅莊禅師銘
炉囲：梅莊禅師銘	茶旗：大典禅師書

大典は大潮と明霞よりも、多くの茶具を売茶翁に贈っていたことがわかる。大典は売茶翁と親密な関係にあっただけでなく、売茶翁の煎茶についても熟知していたことが考えられる。

(3) 木村兼葭堂と片山北海

『売茶翁茶器図』と言えば、作者である木村兼葭堂のことも述べなければならない。彼も大典と売茶翁の親友である。大典は売茶翁から直接的に煎茶の影響を受け、兼葭堂との交遊によって、間接的に売茶翁の茶を広めた、と考える。

木村孔恭(1736～1802)は浪華(大阪)の人で、字は世肅、号は兼葭堂、巽齋。文人画家、蔵書家であり、金石、書画、煎茶など多様な趣味を持っていた。彼はかつて片山北海に師事して漢詩を習っていた。片山北海(1723～1790)は越後(新潟)の人で、字は孝秩。儒者、漢詩人であった。片山北海も宇野明霞に漢詩を学んでいたため、大典とは同門である。大典は北海と兼葭堂とも親しく、頻りに往来している。北海も兼葭堂も喫茶を嗜む人である。大典の『小雲棲稿』に二人と茶宴を行う詩が多く見える。また、『昨非集』をはじめ、大典は常に自分の詩稿

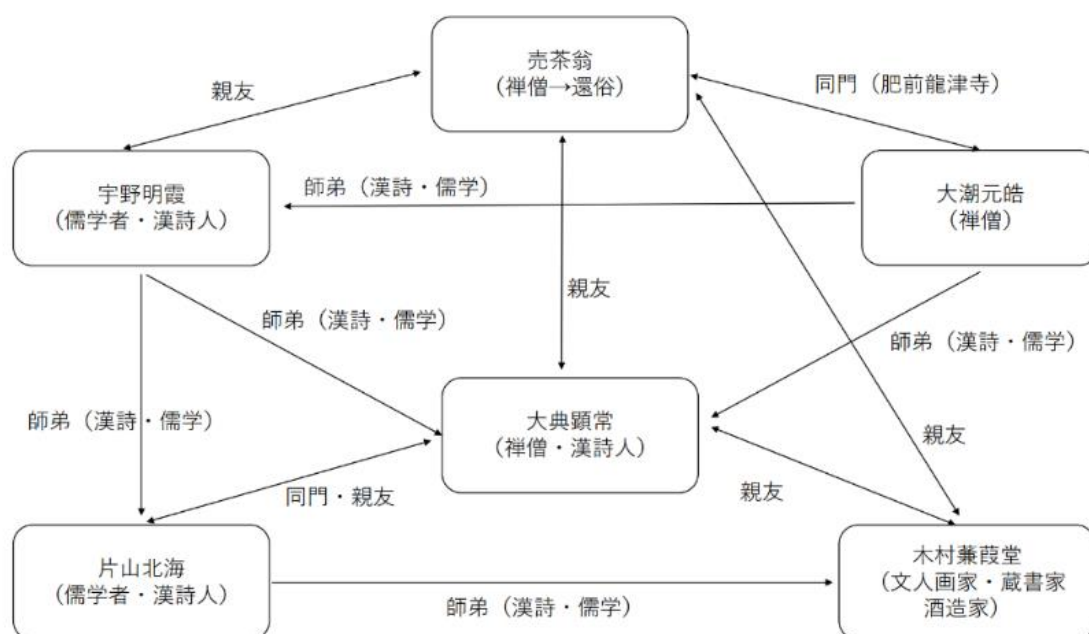
²⁸ 大典顕常、『昨非集』卷坤、国文学研究資料館蔵本、1759。

²⁹ 木村孔陽、『売茶翁茶器図』、早稲田大学図書館蔵、1823年。

を兼葭堂に渡して出版を請うた。『煎茶訣』はまさに兼葭堂を経由して出版されたものである。兼葭堂は酒造の家業を持っていたが、本人は酒を嗜まず、茶を好んだようである。これは恐らく売茶翁の影響を受けたのであろう。彼はかつて「余平生茶を好む酒を用いず。烹茶は京師売茶翁親友たり。故にその烹法を用ゆ。」³⁰と述べていた。さらに、兼葭堂は「清風社」という喫茶サロンを開き、年に六回の小会、二回の大会を行い、多くの風流雅人を集めた。売茶翁が亡くなった翌年、片山北海は「混沌詩社」という漢詩サロンを創立した。これは詩文結社「兼葭堂会」が前身であり、「混沌詩社」もまた多くの文人を集め、後に大坂でもっとも盛んな詩社となったと言われている。

清風社と混沌詩社とのいずれにも、大典は積極的に参加していた。茶文化に博識な大典は文人たちの交遊活動に積極的に参加したので、風雅な茶を文人集団に普及させることも容易にできたであろう。

このように、大典は生涯を通じて数多くの文人と交遊し、漢詩の師の大潮元皓及び宇野明霞をきっかけに、売茶翁と親しくなり、そして直接的に売茶翁の煎茶の影響を受けたであろう。その後、木村兼葭堂と片山北海の主催した文人サロンへの参加を通して、間接的に煎茶文化を文人に広げた可能性が高いと考える。つ



³⁰ 木村兼葭堂、『兼葭堂雑録』巻一、国立国会図書館蔵本、1859。

まり、大典は売茶翁と一般文人との間における茶文化の伝承に重要な媒介的役割を果たしたと言ってもよからう。これは恐らく売茶翁が亡くなった後、間もなく煎茶文化が大阪と京都の文人の間に幅広く流行した一因であろう。

第六節.大典禅師の茶書への評価

本節は後世の茶人の大典への評価を考察し、大典が煎茶家として評価されていない理由を検討したい。まず、以下の五つの資料を取り挙げる。

深田精一は『木石居煎茶訣』に次のように述べている³¹。

和漢古今の茶書多しといえども、大典禅師ほど今日の煎茶家に益あるはなし。禅師の力量且つ此の清戯に深切なる事、『茶経詳説』を玩味して知るべし

とある。深田精一（1802～1856）は江戸後期の儒学者である。彼は『茶経詳説』ほど当時の煎茶家に有益な茶書はなく、深く学ばなければならないと評した。

真間人は『茶史』に次のように述べている³²。

自陸羽著『茶経』、而後言茶書不一而足。……以至於国人、蕉中師『茶経詳説』、木世肅『煎茶略説』、求而読之、可謂真篤於茶者也已。

陸羽茶経を著す後より、茶を言ふの書は一にして足らず。以て国人の蕉中師の茶経詳説、木世肅の煎茶略説に至る。求めてこれを読めば、真に茶に篤き者と謂ふべし。

とある。真間人はどのような人物か不詳だが、筆者の考察によれば、明治18年

³¹ 深田精一、『木石居煎茶訣』坤、林屋辰三郎、横井清、檜林忠男編注、『日本の茶書2』、1972、p. 266。

³² 真間人、『茶史』掌故、国立国会図書館蔵本、1808。

に同書の翻刻であった『評注茶史』³³が刊行され、『茶史』の作者を春田九皋（1778～1828）と記している。それによれば、真間人はおそらく春田九皋という江戸後期の儒学者であろう。彼は『茶経詳説』と『煎茶略説』を読み、大典と兼葭堂は茶を詳しく知る人物であると評価した。一つ注意すべき点は、春田が言った『煎茶略説』は、その制茶から花香までの八節をすべて『煎茶訣』から抽出して訳したものである。つまり、『煎茶訣』の和文版と見てよい。そのため、春田は『茶経詳説』と『煎茶訣』を評価している、と見てよい。

森鷗外は『茶事雑抄』に次のように述べている³⁴。

茶事ノ載籍ニ見ハル々ヤ久シ。然レドモ、特ニ茶書ヲ以テ著ハル々者ハ寥々ノミ。……本朝ニ『本朝食鑑』アリ。茶ヲ説テ甚詳ナリ。又大典禪師『茶経』、上田豫斎『清風瑣言』、南川三谷『茶誌』、皆見ル可キ者之

とある。森鷗外（1862～1922）は、『茶経詳説』は読む価値があると評価している。

彼らは、茶書発展の視点から大典の『茶経詳説』と『煎茶訣』に評価を与えている。共通点として、彼らは大典の茶についての博学さを称賛し、『茶経詳説』と『煎茶訣』は茶史を知るために非常に役立つと高く評価している。

瓦礫舎主人は『煎茶早指南』の序に次のように述べている³⁵。

乍入の輩は、不用の道具、煎茶の意味にくわしからず。尤も先輩の数奇人、幾篇の書をあらわす。就中、『清風瑣言』、『煎茶仕用集』、『煎茶訣』等、専ら世におこなわるれども、向上にして、初心の人の一見に解しがたし。

³³ 春田九皋、『評注茶史』、1885、国立国会図書館蔵本デジタルコレクション公開画像参照、請求記号：特 43-585。

³⁴ 森鷗外、『茶事雑抄』茶史、東京大学鷗外文庫蔵本、1877。

³⁵ 嵐翠、『煎茶早指南』瓦礫舎主人叙、林屋辰三郎、横井清、檜林忠男編注、『日本の茶書2』、1972、p. 226。

とある。また、嵐翠は『煎茶早指南』の附言に次のように述べている³⁶。

『茶経』をあらわしたる唐の陸鴻漸は、茶神といわれし人故、此の道に遊ぶもの、しらでかなわぬことなり。されども、『茶経』は容易に解しがたく、近頃、京師相国寺の大典禅師『茶経詳説』をあらわし玉えども、なお初心の人、見てすめやすからず

とある。瓦礫舎主人と嵐翠は江戸後期名古屋の茶人であり、二人は兄弟である。彼らは初心者立場に立って大典を評価している。彼らの考えでは、大典の『茶経詳説』と『煎茶訣』は確かに煎茶に詳しいが、初心者にとってはわかりづらいと評価している。このように見ると、恐らく漢学の素養の高低が大典の評価を左右する要因の一つであろう。実際に大典も読者層を高い漢学素養のある文人を前提として茶書を刊行していたのであろうし、だからこそ、一般人は大典の茶書を読み辛いと思った、と言えよう。

売茶翁をはじめ、木村蒹葭堂、大潮元皓、宇野明霞、片山北海、深田精一、真間人、森鷗外は、みな漢学の素養を持つからこそ、大典の茶書の精妙をよく理解し、高く評価することができた。しかし、一般の煎茶の初心者にとっては敷居があまりに高すぎて障害になる。いくら内容が精妙であろうと、読者層が狭く限定されては、著書が広まるには不利であろう。この点こそ、大典が煎茶家として評価されていない理由ではないか、と考える。

おわりに

本章は大典の茶書の刊行背景、刊行意図、大典の交遊、また後世の評価など多方面において考察を行った。まず、大典の茶書は早期の煎茶書として、中国茶文化を受け入れた姿勢を見せている。彼の茶書の誕生は偶然のものではなく、歴史的な必然性があったと考える。それは幕府の儒学重視、鎖国の下での漢籍伝来、

³⁶ 前掲『煎茶早指南』、p. 253。

茶道人口の急増、刊行技術の進歩など諸々の原因によるものであろう。『茶経詳説』にはおいて、大典は中国の茶文化の歴史を把握し、またその発展の趨勢と法則を見極めようとした。無論、彼の見解には瑕疵もあるが、その努力を肯定すべきだと考える。大典の『茶経詳説』と『煎茶訣』は古今の代表として内容を互いに補い合い、より完全な形の中国茶文化を日本人に伝えた。それと同時に、大典は単純に中国の茶文化を全面的に受け入れるのではなく、日本の状況に合わせて合理的な取捨選択を行っていた。さらに、大典は大潮元皓、宇野明霞との交遊を通して売茶翁と親しみ、売茶翁の煎茶から多大な影響を受けた。さらに、木村兼葭堂と片山北海の文人サロンに参加し、煎茶文化を地域に広く敷衍した。大典は江戸文人との交遊を通じて、売茶翁の茶の伝承のかけ橋として機能していたのであろう。後世における大典への評価は様々であるが、読者の漢学素養の高低が彼の評価を左右した理由であると考えられる。

第七章. 上田秋成の煎茶書に関する研究：『清風瑣言』と『茶癡醉言』にみる文人茶癡

はじめに

上田秋成（1734～1809、以下秋成）は大坂の人で、江戸中期の読本作者、国学者、茶人である。本名は上田東作、号は余斎である。ほかに無腸、和訳太郎、剪枝畸人という名も使用している。秋成は学識の豊かな人で、一時期都賀庭鐘に従って白話小説を学んでいた。また、高井几圭に従って国学、連歌、俳句を学び、国学においても独自の道を切り開いた。さらにその後、医学を学んで大坂で医館を開いた。また、彼は当時の有名な国学者である本居宣長と、日本神話に登場した日の神（天照大神）を巡って激しい論争をしたことでもよく知られている。秋成は『剪灯新話』、『醒世恒言』、『警世通言』など、中国の古典から題材を得て、有名な読本小説『雨月物語』、『春雨物語』を著した。そのほか、浮世草子『世間妾形記』、歌文集『藤篋冊子』、随筆書『癩癖録』、『胆大小心録』など多数の作品を残した。秋成は文化6年（1809）に亡くなったが、享年は76歳であった。

晩年の秋成は大坂を転々とした後京都に移住し、その間に煎茶の趣味を身に付けた。また、彼は煎茶を題材として多くの作品を著した。その中でも『清風瑣言』は煎茶創成期における最も重要な煎茶書の一つとして、江戸後期の煎茶家に大きな影響を与えた。

秋成の煎茶について、これまで日本では様々な視点から研究が行われている。例えば、日本近世の文人式煎茶について、布目は、中国明代の喫茶と日本の煎茶の間に繋がりがあることをはじめて指摘した¹。檜林は、売茶翁から上田秋成ま

¹ 布目潮風、「喫茶の発展と起源 23 明代の喫茶（二）わが国煎茶の起源」、『日本美術工芸』614号、日本美術工芸社、1989、pp. 36～42。

での文人煎茶の成立過程を論じた²。秋成の煎茶による交際について、小川は秋成と芦庵、寂窓など友人との交遊関係を考察した³。水田は、売茶翁と上田秋成を中心とした煎茶家グループについて論述した⁴。妹尾は、上田秋成と村瀬栲亭二人の交流について詳細に考察した⁵。秋成の煎茶書について、浅野は、上田秋成の煎茶書『清風瑣言』の成立過程について述べた⁶。奥田は『青湾茶話』と『清風瑣言』の共通点を整理し、両書の関連性を検討した⁷。森山は、『清風瑣言』の重要な章節について詳細な解説を行った⁸。林屋は、『清風瑣言』の中で言及されている京都の名水を整理した⁹。また、秋成『茶神の物語』を詳細に解説し、茶神の正体を解明した¹⁰。中村は、『茶痕酔言』と『胆大小心録』を中心に、現存の異版本の校異と比較分析を行った¹¹。

秋成の煎茶の先行研究については、以上のようにすでに数多くの研究成果が

² 檜林忠男、「近世煎茶道の成立について」『芸能史研究 特集煎茶』第三十一号、芸能史研究会、1970、pp. 1～32。

³ 小川後楽、「近世煎茶交遊録 3-上田秋成- 世を拗ねて、日本美術工芸(510)、日本美術工芸社、1981、pp. 44～48。

小川後楽、「近世煎茶交遊録 4-芦庵と秋成- 水の扱ひ」、日本美術工芸(511)、日本美術工芸社、1981、pp. 28～32。

小川後楽、「近世煎茶交遊録 5-寂窓と秋成- 風雅のパトロン」、日本美術工芸(512)、日本美術工芸社、1981、pp. 89～93。

小川後楽、「近世煎茶交遊録 6-村瀬栲亭- 煎茶の論客」日本美術工芸(510)、日本美術工芸社、1981、pp. 86～90。

⁴ 水田紀久、「売茶翁グループ」、『秋成とその時代：共同研究』、勉誠社、1994、pp. 247～254。

⁵ 妹尾和夫、「村瀬栲亭とその周辺」、『秋成とその時代：共同研究』、勉誠社、1994、pp. 369～285。

⁶ 浅野三平、「上田秋成の晩年と煎茶」、『近世文学続攷』、株式会社おうふう、2005、pp. 91～94。

⁷ 奥田昌子、「大枝流芳と青湾茶話 上田秋成「清風瑣言」の再検討」、『芸能史研究』第十五号、芸能史研究会、1966、pp. 35～41。

⁸ 森山重雄、「茶人としての秋成」、『日本文学』64号、日本文学協会、1993、pp. 49～64。

⁹ 林屋辰三郎、「煎茶と名水」、『芸能史研究 特集煎茶』第三十一号、芸能史研究会、1970、pp. 55～57。

¹⁰ 堺光一、「茶神の物語考」、『秋成 語りと幻夢』、『日本文学研究資料新集』八、有精堂、1987、pp. 225～242。

¹¹ 中村幸彦、「茶痕酔言と胆大小心録」、『国語国文』第二十三卷二三五号、京都帝国大学国文学会、1954、pp. 166～183。

ある。例えば、秋成が『雨月物語』を著した時期に大量の中国古典小説を読みあさったように、『清風瑣言』の創作に際しても同様に大量の中国古典茶書を渉猟したことがわかっている。しかし、これまでの研究を見ると、中国古典茶書に関する研究は十分ではない。『清風瑣言』に引用された資料を正しく解読することは大変重要であるが、日本人研究者が中国の古典文献を扱う時、漢文文献の文脈と文意を正確に把握できていないことが往々にしてあったように思う。そのため、秋成の煎茶書に潜んでいる中国社会の文化・歴史・背景などに関する重要な情報を、いまだに掘り出せていない。

筆者の考えでは、秋成の煎茶書にある主張をより正確に解読するために、中国古典文献を十分に読み解くという視点で研究を進める必要がある。現在、中国では茶文化に関する研究が急速に発展している。特に、近年茶学の文献研究の面で優れた成果を収めている。古代茶書文献の収集・整理・校異・注釈はもちろん、文献のデータベース化も進められており、世界各国の研究者からの評価は高い。そこで、筆者は本研究において、日本側の優れた研究成果を活用し、さらに中国側の豊富な文献資料の蓄積を取り入れて研究を進めたいと考える。両国の研究の強みを活かすことで、秋成の煎茶の研究に新たな視点が得られるだろう。

以上のことから、本章では次の二点について考察したい。一点目は、秋成の煎茶に見る中国茶文化との共通点を明らかにすること。二点目は、秋成の煎茶に宿る「清」という主張について、その由来と本質を究明することである。「一体、秋成が煎茶という現実的な行動を通して精神的に何を追い求めていたのか」、その疑問を解き明かすことが本研究の最も大きな関心の所在である。

第一節.上田秋成と煎茶

一. 『清風瑣言』について

秋成の煎茶文学の中で最も高く評価されたのは『清風瑣言』である。本書は漢文訓読体で書かれた煎茶の解説書である。また、『清風瑣言』の続篇として出版された『茶癡醉言』は、和文体で書かれた煎茶関連の随筆である。そのほかの煎

茶を主題とした作品としては、『背振翁伝』（『茶神の物語』とも呼ばれる）、『尾張門人大館高門へ答ふ』、『清風瑣言興讌歌』、『茶は煎を貴とす』、『蘇東坡茶説』、『茶痕稗言』などがある。また、『麻知文』、『文反古稿』、『藤簍冊子』、『胆大小心録』などの作品にも煎茶に関する主張がしばしば見られる。以下では『清風瑣言』と『茶痕稗言』を中心に、秋成の煎茶文学の特徴について検討したい。

まず『清風瑣言』について述べると、この書は寛政6年（1794）に出版された。書名の「清風」二字は、単に清らかな風の意味を持つだけではなく、典故がある。唐代の文人盧仝の七言古詩「走筆謝孟諫議寄新茶（筆を走らせて孟諫議の新茶を寄するを謝す）」に「一椀喉吻潤おい、二椀孤悶を破り、三椀枯腸を搜し、惟だ文字五千卷有るのみ、四椀輕汗を發し、平生の不平の事、ことごと 尽く毛孔に向って散ず、五椀肌骨清く、六椀仙靈に通ず、七椀喫し得ざるなり、唯だ覚ゆりょうわきしゅうしゅう 兩腋習習として清風生ずるを」¹²とある。この詩は盧仝が友人から土産にもらった新茶を、一気に七碗も飲んだことを詠ったものである。七碗の茶を通して茶の効能を巧みに詠み上げ、さらに茶を飲めば飲むほど、愈々仙人の境に近づくようになり、七碗目に至ると、脇の下に清らかな風が起ちのぼり、気持ちよくなってひらひらと舞い上がり、天に昇るが如くである、と詠っているのである。この詩は中国古典文学の世界では広く知られた名作で、唐以降の漢詩創作にもしばしば引用された。秋成は「清風」を通して巧みに盧仝の茶詩を連想させることで、作品に中国文学の趣を添えたのである。

また、「瑣言」については、この言葉の本義は正史の反対概念である野史に対する記述手法の一つであったが、後にはひたすら逸話、異聞を記載する文体を指すようになった。こうした書名から秋成の創作意図を探ることができる。彼が故意に「瑣言」という聞きなれない言葉を選んだ理由は、おそらく、茶聖陸羽の『茶経』のような専門性の高い論著を刊行することが目的ではなく、漢学を愛する

¹² 石川忠久、『茶をうたう詩』、研文出版、2016、p. 99。「走筆謝孟諫議寄新茶」、「一椀喉吻潤、二椀破孤悶。三椀搜枯腸、惟有文字五千卷。四椀發輕汗、平生不平事、ことごと 尽向毛孔散。五椀肌骨清、六椀通仙靈。七椀吃不得也、唯覚兩腋習習清風生。」

人々なら誰でも楽しく読んでもらえるような、中国茶事の逸聞集の創作を目指していたのであろう。

『清風瑣言』の目次については、この書は「東渡、考古、秉性、天時、製造、地霊、品解、表異、品目、入雑、煎法、分量、煮散、茗戦、湯候、辨水、選器、収貯、久蔵、取火、附余、遺事」¹³で構成され、茶の歴史、製茶法、喫茶法、茶器など内容別に分類している。それぞれの項目では明解な主題を示し、中国茶書から論拠を集め、詳細な解説を加えた。各項目の内容は、独自性を持ちながらも内在的に繋がっている。また、秋成が博覧強記で名高いことも、『清風瑣言』を読めば納得できる。本書はまさに清代に至るまでの中国の喫茶知識を幅広く内包した、厚い情報量を積み貯えている宝の山と言っても過言ではない。『清風瑣言』では唐宋の茶書、例えば陸羽の『茶経』、趙佶の『大観茶論』を引用しているだけでなく、明清の茶書、例えば陸樹声の『茶寮記』、張源の『茶録』、許次紆の『茶疏』、田芸蘅の『煮泉小品』、熊明遇の『羅峴茶記』、陳元輔の『枕山樓茶略』も大量に引用している。これほど大量の中国茶書、特に明清の茶書も重視し、引用したことは、本書の著しい特徴である〔表1〕。それは『青湾茶話』から明らかに影響を受けたからであろう。奥田昌子は『青湾茶話』が『清風瑣言』刊行の土台であると指摘している¹⁴。

〔表1〕『清風瑣言』に引用された中国喫茶関係文献

目次	茶書・茶詩・茶事関係文献	目次	茶書・茶詩・茶事関係文献
1.東渡	百丈清規（百丈懷海）	12.分量	
2.考古	日知録（顧炎武）	13.煮散	茶経（陸羽）
	毛詩		五雜俎（謝肇淛）
	尔雅	千金方（孫思邈）	
	方言（揚雄）	14.茗戦	
本草綱目（李時珍）	15.湯候	茶経（陸羽）	
茶経（陸羽）		茶譜（張源）	

¹³ 上田秋成、『清風瑣言』、中村幸彦編、『上田秋成全集』第九巻、中央公論社、1992、pp. 278-314。

¹⁴ 奥田昌子、「大枝流芳と青湾茶話 上田秋成「清風瑣言」の再検討」、『芸能史研究』第十五号、芸能史研究会、1966、p. 35。

			十六湯品 (蘇虞)
3.秉性	本草綱目 (李時珍) 山家清供 (林洪) 茶説 (蘇軾) 伐茶飲序 (綦母旻) 枕山樓茶略 (陳元輔)	16.辨水	羅嶺茶記 (熊遇明) 茶譜 (毛文錫) 茶經 (陸羽) 五雜俎 (謝肇淛) 煎茶 (丁謂) 謝黃從善司業寄惠山泉 (黃庭堅) 煮泉小品 (田芸蘅) 知新録 (王棠)
4.天時	大觀茶論 (趙佶)		
5.製造	茶史 (劉源長)		
6.地靈			
7.品解		17.選器	茶譜 (張源) 茶疏 (許次紆) 茶解 (羅廩) 茶箋 (屠隆) 茶經 (陸羽) 遵生八箋 (高濂)
8.表異	大觀茶論 (趙佶) 東溪試茶録 (宋子安) 品茶要録 (黃儒) 大觀茶論 (趙佶)		18.收貯
9.品目		19.久藏	茶史 (劉源長) 苕溪詩話 (米芾) 蛮甌志 茶録 (蔡襄) 朱氏談綺 (朱舜水)
10.入雜	茶譜 (顧元慶) 品茶要録 (黃儒) 食物本草		20.取火
11.煎法	茶經 (陸羽) 茶譜 (張源) 茶疏 (許次紆) 茶歌 (盧仝) 茶録 (張源)	21.附余	茶寮記 (陸樹声) 走筆謝孟諫議寄新茶 (盧仝) 雲林遺事 (顧元慶) 枕山樓茶略 (陳元輔) 嘗新茶呈聖歐 (陽脩詩) 百丈清規 (百丈懷海)

『清風瑣言』では茶の歴史、製茶法、喫茶法、茶器など内容別に分類して22項目を立てている。それぞれの項目では明解な主題を示し、中国茶書から論拠を集め、詳細な解説を加えた。各項目の内容は、独自性を持ちながらも内在的に繋がっている。『清風瑣言』の優れた点は、中国茶書から新理論を幅広く探った上で日本の国情にふさわしい理論を選別したところであろう。『清風瑣言』は『青湾茶話』を参照して利用したため、『青湾茶話』と同様に中国茶書の理論を重視している。もちろん、秋成が中国茶書の漢文の内容を十分に消化していないまま引用しているという限界もある¹⁵が、中国茶文化を受け入れつつ、同時に日本産の

¹⁵ 晩年の秋成は『清風瑣言』の刊行に誤りと欠漏があることを自分で反省した。『茶癡醉言(異文)』一、前掲『上田秋成全集』第九巻、p. 354。

茶の特徴を踏まえてその知識を論理的に吸収しようとした姿勢が窺える。一例として、『清風瑣言』に「西土にては、白色の茶を貴む。此国にてはいまだ見ざる品なり。……西土の白茶、ここには浅花田なるものと、気味相近き也。国の大小、土地の厚薄にて物の性不同事常に理なるべし。況や海洋を隔たる国とは、事物同じからざるべきものぞ」¹⁶とある。文中の「西土」は、中国のことを指す。「白茶」とは薄くて白い茶葉で作成した、白く半透明な団茶を指すが、白茶の名が最初に見られるのは宋徽宗趙佶の『大觀茶論』である。「表裏は昭澈たり、玉の璞に在るが如く、他に倫となること無し」¹⁷とある。これは、匹敵するものがない玉のような高級品の茶葉のことである。秋成は、両国の国土面積の差は大きく、また土地の養分の状況も大いに異なるうえ、両国が海洋に隔てられているため、中国の白茶のような貴重な茶葉は日本で栽培するのは難しい、と指摘したのである。

二. 『茶痕酔言』について

次に『茶痕酔言』について見てみる。この書は、『清風瑣言』の刊行の十余年後、文化4年（1807）に著された続篇である。江戸後期の著名な文人画家田能村竹田の『屠赤瑣瑣録』には、秋成と村瀬栲亭の次のような対話が残されている。「丁卯正月十三日、阮秋成再び栲亭先生の所に造る。朝より昼頃まで咄しあり、余も側に侍す。清風茶言の続編を録し度由の話にて、此の度は茶痕酔言と題して、面白き話を叢るよしなり」¹⁸と。面白い話を集めて編集し、刊行すると述べている。

書名にある「茶痕」の意味について、「痕」の字は、『史記』太倉公の伝記によ

¹⁶ 『清風瑣言』表異、前掲『上田秋成全集』第九卷、p. 286。

¹⁷ 宋徽宗、『大觀茶論』白茶、熊倉功夫、程啓坤編、『徽宗『大觀茶論』の研究』、宮帯出版社、2017、p. 263。

¹⁸ 田能村竹田、『屠赤瑣瑣録』巻2、『田能村竹田全集』、国文名著刊行会、1916、p. 26。

ると、「遺積は瘕なり」¹⁹とあり、腹中に生じる結石のことを指す。故に、茶の病の意である。しかし、秋成の「茶瘕」にはさらに深い意味がある。以前に「茶の虫」と解釈する研究者もあり、それはもっともな意見である。中村幸彦の収集した『茶瘕醉言』の二つの写本を較べてみると、一つの写本では「本性茶瘕を病むにあらず」²⁰とあり、これは友人である木村兼葭堂に対する秋成の評価であり、茶瘕に侵されていないことを述べている。そして、同じ箇所についてもう一つの写本では「茶瘕を病む」というややこしい表現をやめ、「茶味の嗜好」²¹として、容易に理解できる表現に書き替えている。つまり、「茶瘕」は「嗜茶症」であり、茶に感溺した一種の病的な状態と言ってもよい。「嗜酒症」のように、茶に対して病的な欲求をもつ症状である。「茶瘕」の意味がわかれば、「醉言」の意味もわかりやすい。まさに字面のとおり、茶に酔って放言することである。

秋成の煎茶理念の中の重要な主張の一つは、茶は人を迷い酔わせる神秘的な力を持つ、ということである。『茶瘕醉言』に「茶に酔へはすむ、酒には乱る」²²とある。これは、人間は茶に酔うとますます清らかになり、逆に酒に酔うといよいよ迷乱になる、ということである。ここの「すむ」の漢字表記は清濁の「清」で、濁りがなくなり、清らかになる、という意である。

江戸後期の煎茶家嵐翠が『煎茶早指南』に「清風瑣言は浪花の無腸翁のあらわす所にして、実に煎茶家の第一書なり。されども文の向上なるもの故、初心の人はすめぬ所も多し」²³と評したように、『清風瑣言』は中国茶書の内容をそのまま引用した箇所が多かったため、漢文に馴染みのない読者には難解なところが多かった。実際、『清風瑣言』の刊行後も、秋成自身も『清風瑣言』の内容には満足していなかったようだ。そこで、彼は『茶瘕醉言』の冒頭で「前の清風瑣言に云あやまち、且云漏し、又、後来に見聞し話説を、此頃の朝茶の酔こちに云

¹⁹ 『史記』卷一〇五。扁鵲倉公列伝、「遺積、瘕也。」

²⁰ 『茶瘕醉言』二一、前掲『上田秋成全集』第九卷、p. 330。

²¹ 『茶瘕醉言（異文）』二三、前掲『上田秋成全集』第九卷、p. 365。

²² 『茶瘕醉言（異文）』一九、前掲『上田秋成全集』第九卷、p. 364。

²³ 嵐翠、『煎茶早指南』、林屋辰三郎、横井清、榎林忠男編注、『日本の茶書2』、平凡社、1972、p. 254

ん」²⁴と述べている。『茶痕酔言』は、『清風瑣言』の続篇として前作の誤りを修正し、また欠漏を補うために刊行されたのである。

三. 秋成の煎茶交遊

秋成は一生の大半を大坂に住み、晩年の16年間を京都で暮らした。大坂での秋成の交遊のうち、比較的付き合いが長い友人は細合半齋、十時梅屋、木村兼葭堂、森川竹窓などであった。寛政5年（1793）六十歳の時、秋成は大阪を去って京都に転居した。京都では、村瀬栲亭、小沢芦庵、伴蒿蹊、皆川淇園、富士谷成章、円山応挙、松村月溪、田能村竹田などと仲良く付き合った。秋成の友人には国学者、漢学者、文人画家など教養の高い知識人が多かった。当然、秋成の煎茶趣味も彼の交遊関係の影響を受ける。秋成の友人の中で、特に秋成の煎茶観に大きな影響を与えた人物と言え、売茶翁、大枝流芳、木村兼葭堂、村瀬栲亭の四人であろう。彼らはみな中国の喫茶文化と因縁が深かった人物である。

売茶翁（1675～1763）は佐賀県神埼郡蓮池の人、肥前の竜津寺の黄檗僧であった。若い頃、長崎の僧に従って、清国から伝来した武夷茶の喫茶法を見学した。後に還俗して京都へ移住して東山で「通仙亭」という茶店を開き、煎茶を売り始めた。売茶翁の煎茶の理念と主張には禅の思想だけでなく、道教の思想と儒学思想も内包するため、京都で文人墨客に大いに歓迎された。後に売茶翁は「煎茶中興の祖」と仰がれた。秋成と売茶翁には実質的な交遊記録はほぼ残されていないが、ただひとつ確信を持っていえることは、秋成が売茶翁の煎茶を高く賞賛したということである。恐らく秋成は売茶翁の親友であった木村兼葭堂を介して、翁と知り合ったのであろう。『茶痕酔言』に「貧士なれば、富家の交りなく、茶具玩器、当時の唐山製の物を用ひ……翁によりて煎茶の行るる事、寛保より明和にいたりて、上制しきしきに出せり。是は翁の徳也」²⁵とあるように、秋成は売

²⁴ 『茶痕酔言（異文）』一、前掲『上田秋成全集』第九巻、p. 354。

²⁵ 『茶痕酔言』一九、前掲『上田秋成全集』第九巻、p. 329。

茶翁が清貧な生活に甘んじ、富貴や金銭に心を動かされることがないことに深く感服した。さらに、売茶翁がはじめて清代の煎茶器を使用したことが、寛保から明和にかけて（1741～1771）煎茶趣味の急速な発展につながったと考え、これを売茶翁の功績として高く評価したのである。

木村兼葭堂（1736～1802）は大坂の造り酒屋に生まれた商人で、多芸多才な好事者であった。皆川淇園と池大雅に師事して画を学び、高芙蓉に師事して篆刻を学び、片山北海と大典顕常に師事して漢詩を学び、売茶翁に師事して煎茶を学んだ。多芸多才な木村兼葭堂はとくに煎茶については熱心で、多くの煎茶書の刊行に関与していた。例えば、葉雋の『煎茶訣』、劉源長の『介翁茶史』、楽水居主人の『煎茶略説』などである。また、彼は日本最初の煎茶結社「清風社」を立ち上げ、周囲の人を集めて定期的に煎茶会を開き、煎茶趣味の普及に力を注いだ。しかし、秋成は木村兼葭堂の煎茶に対して不満があった。『茶癡醉言』で「（兼葭堂は）送迎にいとまなく、茶味の嗜好、器のえらび、煎法の事におきては疎也しかは、高翁の風流にいたらず。流芳の茶、且水のえらびにおきては次也」²⁶と述べているように、木村兼葭堂は交際に巧みな人で、いつも賓客の接待のために忙しく、煎茶の技量は高くなかったようだ。そのため、彼の煎茶は売茶翁の風雅に及ばず、また大支流芳の辨水の能力に及ばなかった、としたのである。

大支流芳（1716～1736）は大坂の数寄者で、香道、華道、茶道に造詣が深く、文筆活動も行っている。代表作に『雅遊漫録』があるが、これは中国明清の文人生活を紹介した作品である。日本最初の煎茶書『青湾茶話』（後に『煎茶仕用集』と改名）はこの『雅遊漫録』の一部を抜き出して刊行したものである。『茶癡醉言』では「浪花の大支流芳は、富家の子にて、弱きより風流をこのみたる畸人也。茶を闘かはせ、器をえらぶは、翁に勝れり。青湾茶話、雅遊漫録等を著せしに見るべし」²⁷と評している。秋成は、大支流芳の闘茶の技術と茶器選択の感覚が売茶翁よりも優れていたと考えていたのである。また、『青湾茶話』は日本におけ

²⁶ 『茶癡醉言』二一、前掲『上田秋成全集』第九巻、p. 330。

²⁷ 『茶癡醉言』二〇、前掲『上田秋成全集』第九巻、p. 329。

る最古の煎茶書で、本書で引用された中国茶書は40余作にも上る。秋成は本書から多大な刺激を受け、また、「青湾茶話、雅遊漫録等を著せしに見るべし」²⁸とある。特に、流芳の択水の概念には大きな影響を受けている。秋成と大枝流芳の交遊記録が残されていないため、二人がどのような付き合いをしたのか現時点では不明だが、恐らく秋成の読本小説の先生である都賀庭鍾を經由して大枝流芳と知り合ったのだろう。都賀庭鍾は大枝流芳の親友であり、また『雅遊漫録』に序を寄せている。『茶痕醉言』に「此人（大枝流芳）の事、我大江先生（都賀庭鍾）の雅遊漫録の序にいはれたり」²⁹とある。

村瀬栲亭（1734～1802）は京都の儒学者、漢詩人であった。晩年、秋成が京都へ移住した時、村瀬栲亭の隣に住んでいた。二人はしばしば会っては茶事について閑談した。村瀬栲亭は『清風瑣言』の序文の撰者として、まさに最も近くで秋成の煎茶観に大きな影響を与えた人物であった。秋成は村瀬栲亭を自分の最も大切な親友と見なしていた。二人の煎茶観は一致していた。『胆大小心録』に「知己と云ば、必よく文を玩ぶ人にあらず。文の意をしりて問かわす人なり。東都に南畝子といふ人あり、我をしる人なり。京には、栲亭子、芦庵翁なり。浪花になし」³⁰とある。これを見ると、秋成が認めた知己といえる親友は、わずか三人しかいない。その三人は江戸の大田南畝、京都の村瀬栲亭と小沢芦庵である。

以上、取り上げた四人は、福州から伝来した黄檗宗を熟知した禅僧、来日した清国の貿易商と親しく往来した商人、中国の文人生活に憧れを持つ隠者、漢学に没頭した儒学者、とそれぞれ異なる身分と背景を有していたが、中国文化に大きな影響を受けたという共通点がある。そのため、秋成の煎茶にも中国の影響が強く感じられるのだろう。

²⁸ 『茶痕醉言』二〇、前掲『上田秋成全集』第九巻、p. 329。

²⁹ 『茶痕醉言（異文）』二三、前掲『上田秋成全集』第九巻、p. 366。

³⁰ 『胆大小心録（異文四）』、前掲『上田秋成全集』第九巻、p. 260。

四. 秋成の煎茶書にみる中国茶文化受容

日本近世の煎茶趣味興起の時期は、ちょうど中国清代の乾隆年間（1736～1795）に当たる。最初に触れたとおり、当時中国で流行していた喫茶法は泡茶法であった。泡茶法は、日本の茶の湯が伝えてきた点茶法とは大きな違いがある。秋成は古今の茶書を幅広く渉猟したため、ほかの茶人より一歩先んじて当時の最新の中国茶文化を知り、それを受け入れた。その具体的な受容の証左は以下のとおりである。

水を選択することは、秋成の煎茶書において最も重視される部分である。「択水」は『清風瑣言』の中で最も詳細に論述されている。中国文人は古来より茶と水の関係を重視している。その傾向は、唐代と宋代の茶書にすでに見えていた。例えば、陸羽の『茶経』には「其の水、山水を用いるは上、江水は中、井水は下なり」³¹という言葉があり、張又新の『煎茶水記』では、全国各地の名泉の水質に基づいて順位を付けている。明代に入ると、文人たちにとって茶に相応しい水を選択は一層重要になった。天下の名水を探り尽くすために、莫大な金銭と精力を費やして各地を遊歴する好事家が続々と登場した。田芸蘅の『煮泉小品』と徐猷忠の『水品』は、その代表的な作品といえる。また、清代の文人陳元輔の『枕山楼茶略』に「天は一に水を生ず、水万物を潤す所以なり、但し清濁の異を無くすこと能わざるなり。今夫の性の最も清なるものは、茶の如きなし。清と清を合せしめば、自然にして相宜し」³²とある。つまり、水の性質は万物を受け入れることができるが、物事の清濁を区別せずに水の中に投入してはならず、万物の中で、茶の性質は最も清らかであるため、至清な茶と至清な水を組み合わせることが最も適切なことである、としているのである。陳元輔の言葉は、まさに明清の文人の水に対する一般的な考え方を示している。

31 高橋忠彦著、『茶経・喫茶養生記・茶録・茶具図贊』、淡交社、2013、p. 67。『茶経』五之煮、「其水、用山水上、江水中、井水下。」

32 鄭培凱、朱自振編、『中国歴代茶書匯編校注本』下、2014、p. 934。『枕山楼茶略』辨水、「天一生水、水者所以潤万物也、但不能無清濁之异也。今夫性之最清者、莫如茶。使清与清合、自然相宜。」

秋成もこの考え方をもっともなことだ、と認めている。『茶癡醉言』に「水のえらひ大事也。茶ありとも水清からねは、伯樂なしのたくい也。陸羽か六羨の歌に、不羨黄金罍、不羨白玉杯、不羨朝入省、不羨暮入台、千羨万羨西江水、流向竟陵城下来。^{おうごんらい}（黄金罍を羨まず、^{はくぎよくはい}白玉杯を羨まず、朝に省に入るを不羨、暮に台に入るを羨まず、千に羨む万に羨む 西江の水を、^{きょうりょうじょう}竟陵城に流れ向かいて下り来たる）」³³という一文がある。秋成は水の選択の重要さを格別強調している。彼は韓愈の『馬説』の典故を引用し、良い茶を千里馬に、良い水を伯樂に譬えている。「世に伯樂有りて、然る後に千里の馬有り。千里の馬は常に有れども、伯樂は常には有らず」³⁴とある。そして、茶聖陸羽の「六羨歌」を引用し、黄金で飾られた罍器（酒器）をうらやましいと思わず、また、白玉の酒杯もうらやましいと思わず、さらに、朝に参内し皇帝に謁見したり、夕刻に禁中に入って皇帝に仕えたりするのもうらやましいと思わず、千にも万にも羨ましいと思うのは竟陵城に流れ込む西江の美水のみである、としている。陸羽は、貴重な宝物を求めず、朝廷で出世するつもりもなく、名声にも憧れず、ただ西江の水とともに故郷の竟陵で静かに暮らしたいと語っていた。陸羽の「六羨歌」は故郷で隠遁生活を送る志向を表す詩であるが、水を選ぶことの重要性については言及していない。したがって、秋成が「六羨歌」を水の選びと結びつけたのは強引な解釈であり、陸羽の文章をよく理解していなかったといえる。

また、秋成には「水択ばざれば湯の功なし。湯は寔に茶の司命也」³⁵という論もある。つまり、水を選べなければ湯の効き目は現れず、湯は茶の命をつかさどる「司命」^{しめい}だというのである。

さらに、秋成は煩を厭わずに水の大切さを強調すると同時に、清貧な生活態度を持つべきだとした。また、「煎は清韻を水にしらる故に、水品をえらふ事をつ

³³ 『茶癡醉言』一一、前掲『上田秋成全集』第九卷、p. 326。

³⁴ 韓愈、『雜説』四。「馬説」、「世有伯樂、然後有千里馬。千里馬常有、而伯樂不常有。」

³⁵ 『清風瑣言』辨水、前掲『上田秋成全集』第九卷、p. 301。

とむ。器は新調に足て、珍玩をもとめず。昔、老か独言して、真茶真水俱清味、貧必非清清自貧（真茶と真水俱に清味あり、貧は必ず清に非ず清は自ずから貧なり）、と云しを、同じ寒酸の友のよしと云し也」³⁶とある。つまり、煎茶を楽しむたい人は珍奇な茶器を求めるべきではなく、清貧な生活態度を以て本当の茶と本当の水にしかない清らかな余韻を会得すべきである、というのである。

秋成は喫茶と健康も重視している。秋成は、茶を飲むことは三碗を理想的とすべきである、と主張し、さもなければ健康を損なう、と考えている。盧仝の茶詩には茶を七碗も飲んだと描かれているが、彼はそれを真似することに反対し、「大酔の妄言」と批判している。秋成は『清風瑣言』で次のように自分の体験を語っている。「予前年浪華の喫茶家にて、点茶三碗を貪り、即時に立て一里の行程を帰る。此日中冬下旬、郊外の晩景風尤烈しく、往来の人皆苦吟して走る。予一人北風を面に浴すれども、更に飢寒を思はず、却て軽汗を発し、薄暮蝸廬に帰りぬ。是暫く茶仙の酔境に入し者也。平生渴を患ひて漏卮の癖あれど、いまだ其害を覚らず、蓋暗中の損有べし」³⁷とあるが、これは秋成が三碗の点茶を貪飲して、茶に酔ってしまったという逸話である。「軽汗を発し」と「酔境に入し」云々は明らかに前述した盧仝の茶詩を踏まえた発想である。ただし、仙人の境に入るために盧仝のように七碗も茶を飲む必要はない、三碗だけで十分である、と秋成は考えている。しかし、秋成はなぜ「三碗」にこだわったのであろうか。その考えは、おそらく明代の文人許次紓の茶書『茶疏』に由来している。本書の「飲啜」に「一壺の茶、只だ再巡に堪う。初巡にして鮮美にして、再びにして則ち甘醇にして、三巡にして意欲尽く」³⁸とある。明代に入ると中国の喫茶法が変化し、茶湯の量より茶湯の質を大切にしていた。そのため、許次紓は、三煎が茶の香りの限界である、三回の限度を超えたら、茶の芳醇を損なうと考えたのである。

秋成は茶の中に適量の花を入れ、香りをつけることを薦めている。『追花擬月

³⁶ 『茶痕醉言』一四、前掲『上田秋成全集』第九卷、p. 328

³⁷ 『清風瑣言』煎法、前掲『上田秋成全集』第九卷、p. 292。

³⁸ 前掲『中国歴代茶書匯編校注本』上、p. 273。『茶疏』飲啜、「一壺之茶、只堪再巡、初巡鮮美、再巡甘醇、三巡意欲尽矣。」

令』に「茶梅馥、俗は山茶花と称す。もと同類なり、唯だ芬香の有無のみ、此の土の花、白き者は芬秀なり、これを摘みて陰乾してこれを湯に投じれば、氣韻愛すべし。玩味も亦た甘美なり。又た花は紅白を問わず、春芽の鎗簇たる時、采摘陰乾してこれを収め、烹茗瓶の中に一二葉を撮りて以てこれを投じれば、則ち大に茶氣を助け、若し多くにして過ぎれば則ち氣は丁香の如く、却て茶韻を奪う。予は居に常に試むる所なり」³⁹とある。彼は屢々山茶花を茶に入れており、これにより茶の趣が増すと唱えている。茶に花の香りを混入させるのは、元末明初の文人画家倪瓚が創始した蓮花茶に端を発するようである。倪瓚は過度な潔癖症で、奇人として広く知られていた文人であり、また喫茶において独自の作法を生み出したことで、一般には知られてないが、好事家の間では有名である。蓮花茶とは、毎日茶葉を新鮮な蓮の花の中に封じ込めて三日間発酵させ、茶葉に蓮の花の香りを十分に吸収させる、という方法である。この製法は明清の好事家に大いに好まれ、多くの明清の茶書でも紹介されている。この製法は顧元慶の『茶譜』と陳元輔の『枕山樓茶略』にも見えるので、それを通して秋成は習得したのであろう。

秋成は、中国の喫茶文学から和歌の創作の着想を得ることを試みていたことがある。江戸時代、中国北宋の詩人蘇軾の詩集は江戸時代の漢詩人に愛読され、秋成も蘇軾の作品を愛した。例えば、蘇軾の『次韻曹輔寄壑源試焙新芽（曹輔が壑源試焙の新芽を寄するに次韻す）』「仙山の靈草 行雲に湿う、洗い遍くして香肌の粉末だ勻はず。明月来り投ず 玉川子、清風吹き破る 武林の春。冰雪心腸の好きを知らんと要す、是れ膏油首面の新なるならず。戯れに小詩を作る

³⁹ 『追花擬月令』、前掲『上田秋成全集』第十一卷、p. 374。「茶梅馥、俗称山茶花本同類、唯芬香有無耳。……此土花白者香芬秀、摘之陰乾、投之湯氣韻可愛玩、味亦甘美、又花不問紅白、春芽鎗簇之時、采摘陰乾収之、烹茗瓶中撮一二葉以投之、則大助茶氣、若過多則氣如丁香、却奪茶韻。予居常所試也。」

君笑ふ勿れ、従来佳茗は佳人に似たり」⁴⁰という七言律詩がある。本詩の中の最も美しい一句は、最後の「従来佳茗は佳人に似たり」であろう。これは佳い茗茶のみずみずしい姿から佳人の美しい容姿を連想し、佳人の美貌を以て佳茗の美味を賞賛しているのである。非常に的を射た譬えである。日本では、蘇軾の作品が愛読されたのは五山文学以来のことである。したがって、蘇軾の詠茶詩も人口に膾炙しており、広く知れ渡ったはずである。秋成もいつの間にか蘇軾の詠茶詩と出会って、それを読んで心に留めたであろう。特に「佳茗似佳人」の句は秋成に愛唱されてよく引用されている。例えば、彼は「蘇子瞻の詩、佳茗似佳人と云句有。予云。茶者高貴の人に応接するが如し。烹点共に、法を濫れば、其悔かへるべからず。」⁴¹と述べている。また、「東坡又云、佳茗似佳人。この句を味わひて、煎点いづれに遊ぶとも可也。」⁴²とある。また『藤簞冊子』の中で、最後の一句を踏まえて歌を詠んでいる。歌名を「東坡云、佳茗似佳人」として「すむといひ清しと云もよき人の常とし聞けはあかぬ我友」⁴³と詠じた。つまり、「清」というのは人の当たり前の本性である、清らかな茶を飲むことは美人をめでのと同じで、どれだけ味わっても飽きることはない、というのである。

秋成は中国文人の書齋にも関心が高かった。中国式の書齋で行われた茶席の特徴は、喫茶に適した雰囲気を整えることと、適切な相手を選ぶことである。『清風瑣言』に「客に対する饗式、茶寮の結構、点茶家法則備れり、古老の人に聴べし。しかし、守株刻舟の弊有て、進退活用ならぬ者聞ゆ」⁴⁴と記し、点茶家の対客の作法と茶室の構築に対して不満を持っていることがわかる。点茶家の伝習はよく備わっているが、旧習を墨守する欠点がある、というのが彼の考えである。

⁴⁰ 「次韻曹輔寄壑源試焙新芽」、前掲『茶をうたう詩』、p. 333。「仙山靈草湿行雲、洗遍香肌粉末勻。明月來投玉川子、清風吹破武林春。要知冰雪心腸好、不是膏油首面新。戲作小詩君勿笑、従来佳茗似佳人。」

⁴¹ 『清風瑣言』煎法、前掲『上田秋成全集』第九卷、p. 290。

⁴² [茶は煎を貴とす]、前掲『上田秋成全集』第九卷、p. 394。

⁴³ 『藤簞冊子』、前掲『上田秋成全集』第十卷、p. 114。

⁴⁴ 『清風瑣言』附余、前掲『上田秋成全集』第九卷、p. 308。

秋成の中国文人の書齋への関心は、明代の文人陸樹声の『茶寮記』の影響で生まれたのであろう。『茶寮記』の「煎茶七類」第五類「茶候」に「涼台浄室、曲几明窓。僧寮道院、松風竹月、晏坐行吟、清談把卷」⁴⁵と喫茶に相応しい時機と状況を羅列している。また第六類「茶侶」に「翰卿墨客、緇衣羽士、逸老散人、或軒冕中之徒、超軼世味者」⁴⁶と喫茶に適切な相手を提示している。秋成の『麻知文』に「涼台、僧寮、道院、松風、竹月、行吟、把卷、翰卿、墨客、緇衣、逸老、散人」⁴⁷と題した十四首の歌を詠んでいる。それらはまさに、陸樹声の『茶寮記』を踏まえて作ったものである⁴⁸。さらに、秋成は友人の世継寂窓の書齋落成のお祝いとして『居然亭茶寮十友』を作っている。「鶯囀、嶺花、萍池、清涼、山月、鹿鳴、落葉、積雪、閑談、書画」⁴⁹と題する十首の歌である。秋成が中国文人の文房生活に憧れを抱き、中国式の書齋に高い関心を持っていたことは明らかである。

第二節. 明代文人の茶癖

一. 明代社会と嗜好としての「癖」

「癖」は現代中国語で嗜好や趣味のことを指す。「嗜癖」、「癖好」ともいう。「癖」の最初の意味は両脇の下に固まった塊状の病のことであり、もともと嗜好の意味がない。「癖」における嗜好の意味が一般的に普及したのは、明代以降である。ところが、嗜癖は病的なほどの状態として、あるいは変わった趣味として、また社会生産には不必要なものとして、意外にも明代文人の処世にとって不可欠な条件となった。嗜癖文化は明代社会にとって無駄なものであるかもしれな

⁴⁵ 『茶寮記』煎茶七類・五茶候、前掲『中国歴代茶書匯編校注本』上、p. 223。

⁴⁶ 『茶寮記』煎茶七類・六茶候、前掲『中国歴代茶書匯編校注本』上、p. 223。

⁴⁷ 『麻知文』、前掲『上田秋成全集』第九卷、p. 39。

⁴⁸ 陸樹声の『茶寮記』と秋成の歌の関係について、中村幸彦の『清風瑣言』の解題では題詠の成立年に関する考察がある。『清風瑣言』解題、前掲『上田秋成全集』第九卷、pp. 441～442。

⁴⁹ 「居然亭茶寮十友」、前掲『上田秋成全集』第十二卷（1995）、pp. 386～387。

いが、明代文人にとっては自我意識を確立させるための不可欠な要素だったのである。

茶癖とは茶の嗜癖、あるいは茶の嗜好のことである。明代文人の考えでは、嗜癖には雅俗の区分がある。茶癖は雅癖であり、文人には上品な嗜癖として歓迎された。茶嗜の普及は、明代の喫茶生活の変貌と緊密に繋がっている。前朝と較べ明代の喫茶文化の変遷には主に四つの特徴が見える。

(一) 明代の製茶法は蒸す製茶法から釜炒り製茶法に変化した。また飲まれる茶は、固形茶から散茶に替わり、日常生活の中で必要なものとなった。宋代特有の製茶法としての蒸す工程は、明代の中国ではほぼ消滅した。

(二) 喫茶法は点茶法から瀹飲法に変化した。固形茶に用いられた点茶法が次第に用いられなくなり、散茶に湯を足して浸す方法が普及した。瀹飲法は茶を淹れる茶器によって、「杯飲法」と「壺飲法」にさらに細く分けられた。

(三) 明代の茶書刊行数は50を超え、歴代最高数となった。喫茶文学が盛んであったことを示している。

(四) 地域ごとに茶人集団が形成され、地域文化の特色に溢れた喫茶文化が広がった。明代に入ると、文人の喫茶はどこでも見られる風景となった。

嗜癖は明代以前の中国社会では一般的に認知されていなかった。その原因は、個人の嗜好や欲求に熱中することは、「修身齐家治国平天下（身を修め、家^{ととの}を齊へ・国を治め・天下を平らかにす）」といった儒教の基本精神を忘れることに相当するからだと思われる。これは将来朝廷の予備軍となるべき知識人としては、恥じるべきことである。癖嗜は文人にとって、有っても無くてもよいものである。下品なものではないが、上品な席で見せるものでもない。『学林』に「凡人有所好癖者、鮮有不為物所役（凡人は好癖なるところ有るは、物に役せしまざること^{すくな}鮮し）」とあるように、趣味と嗜好に惑溺しやすい人間は、自分の欲望に束縛されやすいとみなされ、また、おのれの行為をきちんと整えることができないことは、学問の精進を妨げるとされていたのである。

しかし、明代に入ると、状況が一変し、文人が嗜癖に没頭することは容認され

た。嗜癖とは、明代の文人にとってなくても困らない余分な物であったがために、自由と個性を誇示する手段だったのである。袁宏道の『瓶史』に「嵇康の鍛、武子の馬、陸羽の茶、米顛の石、倪雲林の潔、皆癖を以てその磊塊俊逸の気を寄する者なり」⁵⁰とある。磊塊俊逸とは高傲洒脱の意味である。袁宏道は嵇康、王武子、陸羽など歴代の文人を取り上げ、嗜癖を持つことは人情の常であり、古代の有名人ですらみな変わった嗜癖を持っていた。むしろ嗜癖があることが有能を示すものであり、自分の磊塊俊逸の品性を仮託できると言ったのである。明代文人は嗜癖を恥と思わないどころか、友人同士で自慢しあっていたようだ。

明代の文人において嗜癖は一般的なものになったが、それは当時の社会背景と密接な関係がある。明代中後期には、二つの社会問題が生じていた。それは人口と銀貨の過剰である。人口の過剰は生員の過剰に直結する。生員は科挙に参加する知識人のことを指し、生員の過剰によって官僚になることは非常に困難になった。そこで、生計を維持するために、彼らは自らの知識を活用して筆記、小品、雑曲、小説などの文化的商品の創作に転じた。一方、銀貨の過剰は一般民衆の消費力の向上と商売の繁盛をもたらし、文化的商品の交易を活発にさせた。大量の銀貨資金の流通は、日増しに広がる文化的商品の売買を支え、世間では書画、骨董、金石、文房具などの文化的商品がますます充実していった。

明代の文化的商品生産の主体は、主に三種類ある。士大夫階層（あるいは官僚階層）、文人階層と商人階層である。文化商品市場は、明代に著しい発展を遂げた。文化商品市場に於ける文人階層の勢力は日々拡大し、文化商品の生産に多大な影響力を及ぼした。

さらに、明代文人の社会的地位の急上昇とともに、この新興勢力は従来の士大夫階層を中心とした文化市場に大きな衝撃を与えた。文人、商人と士大夫の三者は同時に文化市場という舞台上に上り、文化商品の生産において重要な役割を演じていた。三者は互いを参考としながら、模倣し合い、競い合った。明代以前、

⁵⁰ 袁宏道、『瓶史』十好事、早稲田大学図書館蔵本。「嵇康之鍛也、武子之馬也、陸羽之茶也、米顛之石也、倪雲林之潔也、皆以癖而寄其磊塊俊逸之氣者也。」

官僚は文化生産活動の主導者であり権威を持っていた。それに対して、一般の文人の影響力は大きくなかった。例えば、書画創作の場合、明末の文人謝肇淛の『五雜俎』に「晋唐及び宋元より、書画を善くする者往往にして紳士大夫より出で、山林隱逸の踪は百に一を得ず。……蓋し国朝に至りて布衣処士の書画を以て名を顕ずる者絶えず、蓋し富貴なる者は文翰を薄して不急の務めと為し、情を仕進に溺れ、復た心を留めず、故に山林の士をして擅にしてその美を得る。これも亦た以て世の変を見る可し」⁵¹とある。晋唐から宋元にかけて、書画に得意な人はたいてい官宦、貴紳のような特権階級で、彼らは社会の大半の財力と権力を握っており、高い教養を備えていた。しかし、明朝にはいると、書画で世間に名の知られた人はほぼ貧乏な庶民となった。明代の特権階級は書画などの諸芸を無用な技能として軽視し、昇進と地位を求めることに熱中していた。そこで、低い地位について一般文人が才能を披露する機会を手に入れたというのである。明代の文人が次第に士大夫に取って代わり、文化市場の主導者となったのだ。しかし、文人の作品創作は常に順調であるとは言い難かった。例えば、山人（山の中に隠棲する人）の売名、商賈の模倣、贋作の増加など様々な問題が出現した。そうした状況に対応し、常に文化の発展と流れの主導権を確保するため、文人は自らの独特な審美眼を標準化していかなければならなかったのだ。そこで、新興文人は仕官を目的とせず、専ら「清」の生活を送ることで自らを芸術家とし、名声を博することを狙った。「清」の生活はまた「清供」、「清賞」、「清玩」などいろいろな呼び方がある。

⁵¹ 謝肇淛、『五雜俎』卷七人部三、国文学研究資料館蔵本。「自晋唐及宋元、善書画者往往出于紳士大夫、而山林隱逸之踪百不得一。……蓋至国朝而布衣処士以書画顯名者不絶、蓋有富貴者薄文翰為不急之務、溺情仕進、不復留心、故令山林之士擅得其美、是亦可以觀世変也。」

二. 嗜癖における「清」

明代の文人張岱の『陶庵夢憶』に「人は癖無ければ興に交わる可からず、その深情の無き以なり。人は疵無ければ興に交わる可べからず、その真氣無き以なり」⁵²とある。つまり、嗜癖さえもない人間とは深く付き合うべきではない、そのような人間は相手を深く思いやる気持ちがないからである。また、自分の疵瑕や欠点を示す勇気のない人間とも付き合うべきではない。このような人間は偽りであり、人との付き合いに本心を込めていないからである、と言うのである。文人、商人と士大夫三者の競争関係の中に、癖嗜に偽りのない真情を注ぎ込んだ文人は、疑いなく「深情」と「真氣」を備えた人間である。嗜癖に仮託された深情と真氣こそが、文化市場の激しい競争の中で必死に生きようとする文人の、最も重要なセールスポイントだったのである。

明代文人は嗜癖を通して深情と真氣を求めている。また、深情と真氣にとって不可欠なものは「清」である。「清」とは人間の最も原始的な、最も素朴な天性のことを言っていると思われる。「清」の重要性が強調されたのは、明代の文化商品市場の発達と関係がある。明代の文人達は自分の作品を売りこむ際、その魅力と特徴を客に訴えなければならない。彼らは士大夫と商人との競争の中で主導権を確保するため、独自の特徴を強調する必要がある。明代の文人の考えでは、士大夫は腐敗した官界に汚され、商人は拝金主義的な市場に親しんでいるため、二者とも「清」の境地に到達できないのである。「清」は文人特有の性質で、他人には安易に真似できないものなのである。晩明以降、文人嗜好は一層奇妙な方向へ変化し、審美の規準もさらに抽象的になっていった。甚だしいものになると、怪異で猟奇的な嗜好を持つ人も世間に尊敬されるような現象も見られるようになった。

清代の文人張潮の『幽夢影』に「花以て蝶無かる可からず、山以て泉無かる可

⁵² 張岱、『陶庵夢憶』 祁止祥癖、「人無癖不可與交、以其無深情也。人無疵不可與交、以其無真氣也。」

からず、石以て苔無かる可からず、水以て藻無かる可からず、喬木以て藤蘿^{とうら}無かる可からず、人以て癖無かる可からず」⁵³とある。つまり、蝶の美しさは花の飾りがなければ成立しない。山の美しさは泉の潤いがなければ成立しない。石の美しさは苔敷きがなければ成立しない。高木の美しさは藤蔓の巻き付きがなければ成立しない。したがって、人間の美しさが嗜好から離れられないのも同じ道理である、と言うのである。これは明代文人の嗜癖から生み出された、彼らが求める概念である。このような考え方は次第に明代社会に認められ、新たな審美眼の基準となっていく

明代の茶癖の普及も、以上の考えに基づいて生まれた社会現象であった。陳元輔が『枕山樓茶略』の中で「人性は皆善なり、茶性は皆清なり」⁵⁴と述べたとおり、人間の本性は善良であり、茶の本性は清である。つまり、茶における清の性質から人間における善の性質を見出すことができ、人間における善の性質を通して茶における清の性質を感じ取ることができる。清雅な人はその性格も必ず善良である。善美な茶はその茶性も必ず清らかであると言うのである。「清」は茶の本性だけでなく、人間の本性でもある。善と清は共通であり、ともに人に生まれつき備わっている気質である。人間における善性は内潜的のもので、それに対して茶の清性は外顯的なものである。朱子学では「格物致知」という方法論を提唱している。物事の理を窮め尽くし、万物の真理を究明することによって学問や知識を深め、より深い自己認知と自己理解に至る、というものだ。明代茶人は茶の本性を究めることによって、自己認識を深めようとする。茶の中に「清」といった性質が潜在している。それは茶の生まれつきの性質である。茶人たちは茶の「清」を理解すれば、心の中の「善」を喚び起こし、共鳴させようことが可能であると信じていた。

⁵³ 張潮、『幽夢影』論癖、「花不可以無蝶、山不可以無泉、石不可以無苔、水不可以無藻、喬木不可以無藤蘿、人不可以無癖。」

⁵⁴ 前掲『中国歴代茶書匯編校注本』下、2014、p. 934。『枕山樓茶略』稟性、「人性皆善、茶性皆清。」

第三節.上田秋成の茶癖

一. 秋成の文人的性格

明代の文人は、旧時代の礼儀と道徳に抑圧されてきた人間としての本性を、嗜癖を通して追い求め、人間のありのままの感情を、儒教の提唱した経典と倫理観の束縛から解放させ、個人の欲望に正当性を持たせようとした。つまり、人が生来持っている欲の解放を主張しているのである。このような主張は明清の茶書にしばしば見られる。文人の茶癖の正当性を公に知らしめているのである。

秋成は『清風瑣言』を著す際、陸樹声の『茶寮記』、張源の『茶録』、許次紆の『茶疏』、田芸蘅の『煮泉小品』、陳元輔の『枕山楼茶略』など、多くの明清の茶書を渉猟したため、喫茶の趣味・好みにおいて秋成自身は中国の文人に近い考え方を持っている。彼は明清茶書における人欲解放の主張に強く賛同している。この主張は彼の煎茶観を通して現われ、日本の煎茶道に多大な影響を与えた。秋成にとって煎茶は日頃の思いを託す手段である。秋成は正直すぎて気がきかない性格で、意に沿わぬことに妥協せず、また相手の機嫌を取るような振る舞いもしない、自分の気持ちにしたがって素直に生きた人であった。その性格のために周囲からは畸人と呼ばれた。

村瀬栲亭は秋成と親しく付き合った、数少ない親友の一人であった。彼は秋成の『毎月集』に寄せた序で、秋成の性格について次のような長文を書いた。

凡そ物の異常なる者、物の病なり、然して世俗は物に在らばその病を^{たつと}貴び、人に在らばその病を^い忌む。……茶鍾の窯変有ることは、陶の病なり。石の眼有ることは、硯の病なり。巢許の狷、夷齊の清、陳仲子の潔は、人の病なり。世俗は天地、山川、草木、器械、に在らば其の病の少きを患い、人に在らばすなわちこれを忌む。これを畏れてこれを避けること^{じゃさ}蛇虺の如く、亦た^{かたより}ただ左ならんや。吾が友^{むちようお}無腸翁は、^{けんかいしょうちよく}狷介峭直、富貴を^{ふしよ}視て腐鼠の如く、俗士を以て^{きょうろう}蜣螂と為す。世俗はその病を忌み、畏れてこれを

避く。その門を遊する者、厖厖如たり。然して一毀一譽、翁に於いて何ぞ有らん。

とある⁵⁵。栲亭の考えによれば、世の中の異常なる者は全て「病」をもっている。「病」とは普通と異なっていること、つまり物事の特異な点を指す。天地、山川、草木など自然の「病」は奇景奇勝と大切に思われる。それに対して人間の「病」は世間に嫌われている。例えば、中国上古の堯の時代の巢父と許由、中国周の時代の伯夷と叔齊、中国の戦国時代の斉国の人である陳仲子の五人は、当時の王朝を輔けることを拒否して世を捨てた有名な隠士である。彼らはみな孤高の人で、俗世間からは嫌われ、疎まれていた。村瀬栲亭は、秋成をそのような中国の名高い隠士に譬えているのである。これは非常に高い評価だといえる。今の世の人は専ら自然界にある「病」を寵愛し、その奇特な点が多ければ多いほどなおさら好しと思う。ところが、人間にある「病」は忌み嫌う。これは不公平ではないだろうか、と栲亭は指摘しているのだ。

秋成は正直すぎて融通がきかない人で、富貴を貴ぶ人を腐った鼠と見なし、俗士を害虫と見なしていた。このような性格から、秋成は次第に周囲の人々から疎まれるようになっていった。もちろん、秋成は自分が人から敬遠されていることを自覚している。だが彼は、常に静かに世間の毀誉褒貶の言葉を受け入れている。中国の文人は俗世間の事にかかわることを嫌い、超俗的な生活に憧れている。秋成の性格や態度からは、中国の文人と同じ願いや理想を持っていることがわかる。

⁵⁵ 『毎月集』序、前掲『上田秋成全集』第十二巻、p. 187、「凡物之異常者、物之病也。然世俗在物貴其病、在人忌其病。……茶鍾之有窯変、陶之病也。石之有眼、硯之病也。巢許之狷、夷齊之清、陳仲子之潔、人之病也。世俗在天地、山川、草木、器械、患其病之少。在人、則忌之、畏之、避之如蛇虺、不亦太左乎。吾友無腸翁、狷介峭直。視富貴如腐鼠。以俗士為蜚蜋。世俗忌其病、畏而避之。遊其門者、厖厖如也。然一毀一譽、於翁乎何有。」

二. 秋成の点茶批判

秋成の煎茶観の中で一番大切なものは、「清」である。秋成は煎茶の趣は「清」にあると考えたが、彼の提唱した「清」は人の持って生まれた本性、真情のことを指していた。点茶は人間の純粋な感情を抑えるものだ、と秋成は考えている。故に煎茶でないと真情を表すことはできない、と考えたのだ。これは明代文人の考え方に基づくものであろう。つまり、「清」は俗人には存在しない文人特有の天性なので、これを以て自身の優位性を示すことができる、としたのである。

『清風瑣言』の序に「水の茶と相い得ることは、特に其の清を以てすのみ、而して茶は真香有り、純香有り、浮香有り、間香有り。水は甘者、冽なる者有り、軽なる者有り、重なる者有り。これを譬えば猶お人性の万に同じからざるが如し。故に人のこれを好むは、其の性至清に非ざれば、則ち其の真趣を会してこれに適して自然とするを得ざるなり」⁵⁶とある。つまり、もし茶人が茶の本質である「清」を会得できなければ、茶の本当の趣は理解できない、というのである。「清」こそ『清風瑣言』を解くための重要なキーワードである。茶を選ぶ時も、水を選ぶ時も、茶器を選ぶ時も、同席者を選ぶ時も、その基準となったのは「清」の有無である。

秋成は茶事における「清」の重要性を強調するだけでなく、茶事を行う人の心にある「清」も重視している。煎茶は、秋成にとって俗世からの汚れを取り除き、素直な心境を保つ手段だと認識されている。大坂の儒医藤田顥^{ふじた ぎょうきん}謹は『猷神和歌帖』で、「先生（秋成）の性は正直なり、世俗に汚さるる所を惡む。常に喫茶を好みて曰く、菟道^{うじ}の茗、大湖の水を煮用すれば、則ち明月空を走らせる思い生じ、亦た以て吾が腸胃を洗う可し、と。人と交じわる毎に、人に横心あらば、

⁵⁶ 『清風瑣言』序、前掲『上田秋成全集』第九卷、p. 275、「水之与茶相得、特以其清耳矣、而茶有真香、有純香、有浮香、有間香、水有甘者、有冽者、有軽者、有重者、譬之猶人性之万不同、故人好之、非其性至清、則不得会其真趣而適之自然矣。」

忽にして面折して絶交す。以て故に郷人に容されず」⁵⁷と述べている。つまり、秋成は率直剛正な性格で、汚れた俗世間に染まりたくない、と考えている。また、秋成は宇治のいい茶と大湖（琵琶湖）のいい水を厳選し、そのような茶を飲めば仙人となって天へのぼり、明月の上で舞い上がるような幻覚も起き、さらに胃腸の汚穢を洗浄することもできる、としたのであった。また、この文は墓誌として秋成の墓碑に刻まれた。

秋成は「煎茶の清は文雅の友なり」⁵⁸と書いているように、清らかな煎茶は風雅な友人である、と考えている。彼は点茶を俗事と見なし、煎茶を超俗的な行為と見なした。そのため、点茶を厳しく批判し、煎茶を強く推奨した。「清」は秋成の点茶批判の最も重要なキーワードである。以下は『清風瑣言』と『茶癡醉言』から採った代表的な例である。

秋成は健康と病気という観点から、点茶を次のように批判している。『茶癡醉言』には「煎品は才也。気花ありて、味薄し。点品は味こまやかにて、胸膈を塞き、病をまうくる也」⁵⁹と述べている。また、「点服胸膈を塞きて、弱壯には害あり。是気のみならず、味のこまかなるを服する故也」⁶⁰とある。彼の考えでは、点茶を飲み過ぎると、胸が塞がれたようになり、体内の気・血の循環が乱れて消化不良を起こすことがある。体が弱い人にとっては、病気を招くことになりかねない。

また、水の選択という観点から次のように述べている。「煎は清韻を水にしらる故に、水品をえらぶ事をつとむ」⁶¹とある。また、「煎、点ともに、水品をえらべども、煎品はことに気を貴しとすれば、水よからねば品おとり、清韻消す」⁶²

⁵⁷ 『献神和歌帖』序、前掲『上田秋成全集』第十二巻、p. 72、「先生性正直、惡為世俗所汚、常好喫茶曰。菟道之茗、煮用大湖之水、則明月走空之思生焉、亦可以洗吾腸胃、每与人交、人有横心、忽面折絶交、以故為郷人不容。」

⁵⁸ 『胆大小心録（異文四）』、前掲『上田秋成全集』第九巻、p. 260。

⁵⁹ 『茶癡醉言』六二、前掲『上田秋成全集』第九巻、p. 352。

⁶⁰ 『茶癡醉言』三八、前掲『上田秋成全集』第九巻、p. 340。

⁶¹ 『茶癡醉言（異文）』一八、前掲『上田秋成全集』第九巻、p. 363。

⁶² 『茶癡醉言』一四、前掲『上田秋成全集』第九巻、pp. 327～328。

と述べている。彼の考えでは、煎茶と点茶を行う人たちは、どちらも水に拘りがある。しかし、煎茶家は点茶家よりなおさら水選びに気を配らなければならない。煎茶は茶葉の状態を大切にしているため、相応しくない悪い水を使用すると、茶葉の品質が劣化し、茶自身の清雅な芳韻が消える。

そして、茶器の選択という観点から、点茶を次のように批判している。「淹煎の器、今も多く来たる。古代の物に比ぶれば、^{そひん}僿品にて愛玩する者なし。古器を得んと欲するは、効用の為にて、点茶家の^{しゅんわん う きょう}舜盃禹筮を檢索する談にあらず」⁶³とある。また、「豪富の家には、珍奇を^{さぐ もと}搜り索めて、奢靡の情を^{ほしいまま}恣にす。山林の士は、^{しんそ}新僿を嫌はず。効用清潔を専らと択ぶべし」⁶⁴とある。さらに、「玩器伝来賞すへし。其余は、舜盃といへとも、古廢器也。煎茶家、茶具新調をもはらとす。茶味の清に宣しく、水の清に宣し」⁶⁵とある。さらに、「茶器は皆唐山の新製にて、古物を好まず。氣韻を損害する故也。茶瓶一席に捨て、又新たにす。是清韻の興也」⁶⁶とある。以上の用例より、秋成は清潔な新しい茶器を使用することを推奨することが明らかである。当時の点茶家は、いつも高価な古茶器の蒐収（唐物などの舶来品）に夢中になり、お金を無駄に使ってしまう。しかし、彼の考えでは、古い茶器は必ずしもいいとは限らず、茶の氣韻を損ないやすい旧茶器も常にあるため、煎茶家は新しい茶器を使用すべきで、高価な旧茶器に拘る必要はない、としている。舜盃禹筮とは古い茶器を指す言葉である。舜と禹はともに中国上古の伝説の聖明な天子である。

さらに、秋成は茶の選択という観点から、点茶を次のように批判している。例えば、「茗戦、鬪茶の遊戯。宋の代の文人盛に玩べり。勝敗の氣、必俗情を惹くべし。点茶家に^{ちやかぶき}茶哥舞妓と呼も、清雅ならぬ名目なるにおもふべし」⁶⁷とある。

⁶³ 『清風瑣言』選器、前掲『上田秋成全集』第九卷、p. 302。

⁶⁴ 『清風瑣言』選器、前掲『上田秋成全集』第九卷、p. 304。

⁶⁵ 『茶癡醉言』一七、前掲『上田秋成全集』第九卷、p. 328。

⁶⁶ 『茶癡醉言』三八、前掲『上田秋成全集』第九卷、p. 340。

⁶⁷ 『清風瑣言』茗戦、前掲『上田秋成全集』第九卷、p. 294。

秋成は煎茶書を通して鬪茶への関心を示した。一方、大枝流芳の煎茶書『青湾茶話』にも鬪茶についての記述がある。『青湾茶話』では、宋代茶人の鬪茶を踏まえて、新たにいくつかの鬪茶の遊び方を考案した。鬪茶は点茶家に「茶歌舞伎」とも呼ばれる。彼らは京都の梅尾産の茶を本茶、それ以外の産地の茶を非茶とし、本茶と非茶を飲み当てることを競い、やがてその勝負に豪華な賞品を賭けるようになった。秋成の考えでは、鬪茶は茶人を勝ち負けに拘らせ、勝敗という俗念を生じさせやすいため、煎茶家が行うべき清雅な行為ではないとしたのである。

秋成の煎茶観は、中国文人の「清」の意識を受容して成立したものである。「清」の意識は彼の煎茶観だけではなく、人生観にも大きな影響を与えた。秋成最晩年の文化5年（1808）には著書廃棄という有名な事件が起きている。秋成は弟子に命じ、自分の文集、詩集、研究筆記をすべて廃井の中に捨てさせたのである。村瀬栲亭はこれを聞いて甚だ嘆き、秋成にその原因を尋ねると、秋成は笑って、「一時の謾筆、意未だ尽かざる者頗る多く、然して年力頹侵し、区区たる鉛槧の業に就くこと能わず、且く夢の中に夢を説きて癡人に向かい、井の中に投げて我が魂を清むるに如かず」⁶⁸と答えた。つまり、年を取って体力が衰えた秋成は、作品の中に自分の思いを書き尽くすことが次第に難しくなり、未練が残る品ばかりを世間に残すことになる可能性が高いと自覚した、というのである。愚かな痴人が夢を説くような荒唐無稽な言葉を世人に吐く真似をするより、いつそそれらを全部廃棄してしまったほうが楽であり、そうすれば自分の魂を清めることができる、と答えたのである。亡くなる直前の秋成にとって「清我魂（我が魂を清む）」ことが、人生を悔いなく生きるために最も大切なことだったのである。

秋成が中国の文人から学んだ「清」の考え方は、次世代の煎茶家に多大な影響を与えた。例えば、深田精一は「煎茶家に二つあり。一は文人茶、一は俗人茶なり、これは孔門の科目に君子儒と小人儒とのふたつあるに等しく、多くは俗人茶

⁶⁸ 『毎月集』序、前掲『上田秋成全集』第十二巻、p. 188。「一時謾筆、意未尽者頗多矣。然年力頹侵、不能就区区鉛槧之業。且与夢中説夢向癡人、不如投井中清我魂。」。

に陥る也。如何にというに、文人茶は茶飲清事の真趣を主にして淡泊を甘んず。俗人茶は、此の清事淡泊の意を解せず。」⁶⁹と述べている。つまり、茶にある「清」の概念への理解の可否で、文人茶と俗人茶と煎茶家を区分する。煎茶は清雅な事であり、「清」の境界に踏み込むためには、淡泊な生活に甘んずる覚悟が必要で、富貴な生活に未練が残る人は、煎茶の趣を会得することができないと主張している。現在に至っても、日本の煎茶家は依然俗世と離れて孤高に生きる中国の文人に憧れを抱き、「清」の意識を大切にしている。それは秋成の偉大な功績だといえる。

おわりに

以上、本章では秋成の煎茶書を通して中国喫茶文化との共通点を考察し、彼の煎茶観と中国の文人の「茶癖」の関係を検討した。

まず、秋成の代表的な煎茶書『清風瑣言』が、多数の中国茶書を典故とし、参考にしたことは明らかである。『清風瑣言』が、明清時代の斬新な喫茶に関する内容を記載したことは、同書の特徴だといえる。『茶痕醉言』は『清風瑣言』の続篇である。この書は中国の喫茶文化を習得した上で、日本産の茶の特徴を見極め、それを尊重しつつ、中国で生まれた理論を日本の喫茶文化に導入することに挑戦した。

そして、秋成の煎茶観は、彼の交遊関係から大きな影響を受けていたことがわかった。売茶翁の扱器観、大枝流芳の扱水観など、先輩煎茶家の革新的な理論は秋成の視野を広げ、茶書創作の礎石となった。秋成は水の選び方、花香茶の作り方など、明清の茶書から得た多くの新たな知識を自分の茶書に取り入れた。また、蘇軾など中国の文人の茶詩を題材として和歌を作った。そのことは、江戸文学を一層豊かにし、茶文学の創作に新しい道を開いた。

また、秋成が提唱した煎茶は、中国の文人の「茶癖」に繋がる。茶癖は中国の文人の好んだ嗜癖の一つである。嗜癖はかつて中国で病気と扱われ、忌み嫌われ

⁶⁹ 深田精一、『木石居煎茶訣』、前掲『日本の茶書 2』、p. 267。

たが、明代に入ると徐々に社会に認められた。嗜癖に寛容な社会環境と急速に発展した明代喫茶文化、この二つの条件は茶癖が広く認識されることの助けとなった。また、人口と銀貨の過剰により、仕官を目的としない有閑文人階級が増加し、続々と文化商品市場に参入し、文化商品生産の主導権を、はじめて士大夫階層から奪った。明代文人は、士大夫階層と商人階層との激しい競争の中で、商品販売の独自性と優位性を維持する必要があった。そのため、「清」という概念が生まれた。「清」は文人の生まれつきの独特な美意識だとし、また、文人たちは嗜癖を通して「清」を示すことができると自らアピールした。その結果、明清の茶書の中には、「清」の意識を主張するという内容が随所に見られるようになった。

最後に、秋成の性格は、もともと、明代以降の文人の性格と共通するところが多かった。また、彼は中国の書籍を広く渉猟したことで、中国の文人の考え方に大きく影響を受けた。そのため、明代文人の趣味や好みをすらすらと受け入れてしまった。彼は煎茶に内在した「清」を格別に重視し、また「清」の欠如を理由として点茶家を批判した。日本の煎茶道は、現在に至っても秋成の煎茶観に影響され続けている。

第八章. 陳元輔の煎茶書に関する研究：『枕山楼茶略』の日本伝来

はじめに

『枕山楼茶略』は、近年日本から中国に逆輸入された清代中期の茶書である。1990年、中国の茶文化研究者の万国鼎は日本の『静嘉堂文庫漢籍分類目録』から本書を初めて見つけた。『枕山楼茶略』は上田秋成、田能村竹田等の江戸時代の代表的な煎茶家に読まれ、日本近世における煎茶趣味の展開に大きな影響を与えた。しかし、本書についての先行研究はまだ少ない。特に、本書の日本への伝来と、著者である陳元輔の身分については不明な点が多く残っている。江戸時代の日本人は一体どのようなルートを経て陳元輔を知り得たのか、また『枕山楼茶略』をどのように手に入れたのか。

周知のように、煎茶文化は最初に江戸中期において京都を中心に興り、江戸後期に至って最盛期を迎えた。当時の時代背景として、日本は厳しい鎖国政策を施行し、中国・オランダ以外の外国商船との通商・交易を強く制限し、また日本人の海外渡航を厳しく禁じていた。そのため、当時の日本人にとっては、自由に清国へ赴いて自らの目で海の向こう側の情報を得ることは非常に困難であった。最も可能性が高いと考えられるのは清人の貿易船による漢籍輸入である。明代中後期以降、喫茶が中国文人の趣味・嗜好として書齋生活に浸透するとともに、文人による茶書創作もにわかには盛んになった。それらの茶書は日本近世の煎茶ブームを起こした一因である。そして、18～19世紀の日中貿易・文化交流は過去の歴代に比べて大きな変化が起こった。その中で特に目立つ変化は、日中貿易の形式である。従来の日本から中国への進貢貿易から、中国から日本への輸出という一方的な貿易に変わり、また民間の商船が室町幕府の進貢船に代わって貿易の主導者となった。一方、徳川幕府は国民の海外渡航を禁じたが、中国商人の上陸と漢籍の輸入などは条件付きで認めている。例えば、長崎の唐人貿易は漢籍輸入の重要な手段と場所であった。そのため、商船によって広々とした海の向こ

うから舶来した書籍こそ、自由に出国できない近世の漢学者にとって、外側の世界を認識する大切な手段となった。

以上の歴史的背景を踏まえ、本章は『枕山楼茶略』を例として茶書の海外流布について検討を試みたい。また、日本現存の陳元輔関連資料を活用して『枕山楼茶略』の刊行と影響力について考察したい。さらに、著者の陳元輔の身分を明らかにしたい。最後に、当時清国へ留学した琉球王国の勤学生と密接に関わっていたことを考察して『枕山楼茶略』の伝来過程について検討したい。

第一節. 『枕山楼茶略』について

まずは中国国内の『枕山楼茶略』に関わる先行研究を整理する。『枕山楼茶略』の存在を最初に知らしめたのは、万国鼎の『茶書総目提要』（1990）である。万国鼎は次のように述べた。「枕山楼茶略、一卷。清陳元輔撰。見『静嘉堂文庫漢籍分類目録』（未見）（『枕山楼茶略』一卷。清陳元輔の撰。『静嘉堂文庫漢籍分類目録』に見える。（未見））」¹とある。その後、王河は『中国散佚茶書輯考』（2015）においてこれに近い見解を述べた。「陳元輔『枕山楼茶略』清代茶書、一卷。作者生平事迹不詳。日本『静嘉堂文庫漢籍分類目録』已著録。未見。不知此書今在否（陳元輔『枕山楼茶略』。清代茶書。一卷。作者の生平と事迹は不詳。日本『静嘉堂文庫漢籍分類目録』に已に著録す。現物は未確認。存在は不明）」²とある。万国鼎と王河は静嘉堂文庫の蔵書目録で書名を確認しただけで、本書の存在を確かめていないようである。

また、最初に本書を確認し、その原文を翻刻したのは朱自振である。『中国古代茶書集成』（2010）の編集によって本書の内容が中国の研究者に知られた³。しかし、本書の著者陳元輔は一体どういう人物か、朱自振も把握できておらず、陳は清代の福建省の人ということしか確認できていなかった。それに、朱自振はも

¹ 万国鼎、「茶書総目提要」、『博遠茶学叢書 中国茶書提要』、博遠出版有限公司、1990、pp. 73～74。

² 王河、虞文霞、『中国散佚茶書輯考』、世界図書出版社、2015、pp. 330。

³ 朱自振、沈冬梅、増勤主編、『中国古代茶書集成』、上海文化出版社、2010、p. 820。

う一つ重要な情報を提示した。それは、本書が中国国内のその他の茶書あるいは蔵書の目録において一度も言及されていないだけでなく、中国全国の図書館で調べても記録が見つからないということである。つまり、本書は清代の人の作品でありながら、国内で刊行された書物ではなく、日本でしか流布されていなかったかもしれない。

しかし、陳元輔の身分と経歴、『枕山楼茶略』の完成時期、日本へ輸入する理由、および流布した後の影響など、『枕山楼茶略』については先行研究がほぼなく、不明点が多く残っている。

また、中国の研究者は日本における本書の所蔵状況について情報をうまく把握できていないようである。例えば、万国鼎と王河はともに本書について未見と述べたが、実際全国漢籍データベースで『枕山楼茶略』について日本国内の所蔵状況を調べたところ、大阪の関西大学図書館、京都の今日庵、東京の静嘉堂文庫、国立国会図書館、都立中央図書館、仙台の東北大学図書館など、多くの図書館で本書の刊本が現存することが確認できた。このように、日本全国で所蔵が発見されており、日本においては普及した作品だといえよう。そこで、筆者は早稲田大学図書館蔵『枕山楼茶略』⁴と静嘉堂文庫蔵『枕山楼茶略』⁵の複写本を手に入れて調査を行った。

まず、『中国古代茶書集成』における朱自振の解題では、本書の書誌情報に関して詳しく説明されていない部分が多いため、補足をしたい。静嘉堂文庫の蔵本によると、本書は全部で16丁あり、表紙、陳元輔の自序、目録、本文で構成され、最後の奥付には出版の年月と刊行者など出版に関する情報が載せられている。

奥付によると、本書は文化2年(1805)に刊行された。これは現存する最古の刊本である。それに、同じく文化2年の版本であるにも関わらず、二種類の刊記が存在している。一つは「文化乙丑(1805)秋九月清廬蔵」とあり早稲田大学図書館の蔵本はこれである。こちらの「清廬」は尾張の国学者大館高門の号である。

⁴ 陳元輔、『枕山楼茶略』、早稲田大学図書館蔵本。

⁵ 陳元輔、『枕山楼茶略』、静嘉堂文庫蔵本。

もう一つには「文化乙丑秋九月平安書肆林喜兵衛」とあり、静嘉堂蔵本はこれである。林喜兵衛は当時の大手版元の屋号である。本書は京都の書肆によって刊行されたことが明らかである。

同じ年に出版された『枕山楼茶略』に二つの刊記がある。その理由について、『上田秋成全集』によると、文化2年(1805)、大館高門には『枕山楼茶略』を翻刻して出版する計画があり、そのために上田秋成に手紙を送って本書の校閲を依頼したとの記載があった。また、上田秋成は当時の京都に住んでいた有名な国学者であり、中国の茶文化に精通した学問者として、当時の人によく知られていた。彼は大量の中国茶書を渉猟し、『清風瑣言』を著した。恐らく大館高門は上田秋成が中国の茶の専門家であることを承知した上で、『枕山楼茶略』の校閲を彼に依頼したのだろう。その依頼を受けた秋成は「尾張門人大館高門へ答ふ」で次のように述べている⁶。

酒わかきよりいみいみしく、茶こそ久しき友なりしを、是だに色をあやまり、味はひをさへわかためぬは、此友にだに疎^{うと}まれぬる事よ。老は誰しもかゝ覧ものをと、思ひしつりをる此頃、尾張^{おわり}の人の文あり、披きて見れば、陳昌其の茶略と云書を、我机に置つるを、去年の春もていきて、桜木にゑらすとて、手をえらひて書清めさせしを、一わたり^{けみ}閲てよとて、こせし也。

とある。ここから、陳昌其の茶略を刊行する計画について、大館高門から手紙を受け取ったことがわかる。本書の刊行に対して、『上田秋成全集』の中村幸彦の解題では次のように解説している⁷。

陳昌其は清代の人で、陳元輔とも。『茶略』の名は『清風瑣言』にもみ

⁶ 上田秋成、「尾張門人大館高門へ答ふ」、『上田秋成全集』第九卷随筆篇、中央公論社、1992、p. 386。

⁷ 上田秋成、「尾張門人大館高門へ答ふ」解題、『上田秋成全集』第九卷随筆篇、中央公論社、1992、p. 452。

えて、秋成の高く評価する茶書であった。本編本文中には、高門の出版意図に対して、秋成は、『清風瑣言』の出版を引き合いに出して、思い留まるように忠告しているが、最終的には許したということであろうか。『茶略』は、高門によって出版された。

中村幸彦は「最終的には許したということであろう」と推測しているが、実際、秋成自身も昔『清風瑣言』を出版したものの、誤りと漏れが多かったことに後悔していたようである⁸。おそらく秋成はこの出版の計画に反対し、校閲に協力しなくなかったであろう。いずれにせよ、大館高門は文化2年の秋に自費で『枕山楼茶略』を出版したことは間違いない。これにより、同じ年の文化2年(1805)に二種の奥付が存在していることが説明できよう。

『枕山楼茶略』の和刻本は現在日本国内で一番流布した版本であるが、その底本はどこにあるのか不明である。実際、大枝流芳『青湾茶話』⁹と上田秋成『清風瑣言』¹⁰の中に、『枕山楼茶略』からの引用がすでに見える。それはつまり、現在日本各地の図書館で所蔵している大館高門の翻刻本は日本国内既存の最も古い版本ではなく、その前にほかの版本あるいは写本が日本に伝来したはずだということである。したがって、『枕山楼茶略』は文化2年(1805)以前、すでに日本に伝来していた。そして、おそらく、数少ない煎茶家の所蔵となったのであろう。その後、大館高門の再刻刊行によって広く普及した、といえる。

次に『枕山楼茶略』の内容について検討する。本書は全部で20個の項目があり、それぞれの章題と概要は下表の通りである。

『枕山楼茶略』の各章の章題と概要

項目	章題	概要	備考
----	----	----	----

⁸ 『茶痕醉言』に「前の清風瑣言に云あやまち、且云漏し」とある。上田秋成、『上田秋成全集』第九巻随筆篇、中央公論社、1992。『茶痕醉言(異文)』、p. 354。また、「尾張門人大館高門へ答ふ」に「吾も十歳ばかりいにしへ(十余年前、『清風瑣言』の刊行年の寛政六年を指す)、人に誘われて、かかるに似たるさかしらして、二とちのいたづら言を世にほこらしくせし。思へば取かげさまほしきをば、後おもひあわせよかし」とある。前掲書、「尾張門人大館高門へ答ふ」、pp. 386~387。

⁹ 大枝流芳、『青湾茶話』、国文学研究資料館蔵本、1756。

¹⁰ 上田秋成、『清風瑣言』、国文学研究資料館蔵本、1794。

1	稟性	茶の性質「清」	陳元輔の独自の見解（書下ろし）
2	考古	唐代と宋代の茶書に拠る典故	錢椿年『茶譜』の顧元慶の書いた序文の一部の書き写し
3	天時	茶を採る時節	陳元輔の独自の見解
4	地気	前半は中国各地の名茶、後半は故郷の閩茶について詳しく論じる	前半は『茶譜』「茶品」の書き写し。後半は陳元輔の独自の見解
5	表異	いい茶樹の見分け方	『茶譜』「茶略」の全文の書き写し
6	樹芸	茶樹の栽培方法	『茶譜』「芸茶」の全文の書き写し
7	採摘	茶葉の採摘のタイミング	『茶譜』「采茶」の全文の書き写し
8	製法	橙茶、蓮花茶及びほか数種の花茶の作り方	『茶譜』「製茶諸法」の全文の書き写し
9	収貯	茶の保存方法、優先順位：錫＞瓦	前半は『茶譜』「蔵茶」の書き写し、後半は陳元輔の独自の見解
10	久蔵	茶葉を長時間貯蔵する	陳元輔の独自の見解
11	烹点	茶菓子を選び方	『茶譜』「扱菓」の陳元輔の独自の見解
12	辨水	水を選び方 優先順位：雨水＞泉水＞江水＞井水	陳元輔の独自の見解
13	取火	火のたきつけ方	陳元輔の独自の見解
14	選器	茶器を選び方、 優先順位：瓦＞錫＞銅＞鉄	陳元輔の独自の見解
15	用水	水の使い方	陳元輔の独自の見解
16	火候	煎茶の火加減	『茶譜』「煎茶四要」の三「侯湯」の一部の書き写し
17	冲泡	茶の淹れ方	『茶譜』「煎茶四要」の二「洗茶」の一部の書き写し
18	躬親	自力で茶を淹れることを勧め、童仆の使用に反対	陳元輔の独自の見解
19	洗滌	茶器の洗い方	陳元輔の独自の見解
20	得趣	茶の趣	陳元輔の独自の見解

作者陳元輔は明代文人の喫茶を重んじて、明人の喫茶様式を受け継ぐという意図がみえる。特に、明代の文人錢椿年と顧元慶の茶書『茶譜』から理論を多く受け入れたことが明らかである。前人の説を摘録しながら、自分の説も展開している。

『枕山楼茶略』は日本の茶人に多大な刺激を与えた。特に本書の「得趣」の一文が日本茶人に与えた影響は最も大きかった。日本の近世において、江戸文人が中国文人の真似をして喫茶に夢中になる社会的ブームが起こった一因は、『枕山楼茶略』の伝来にもある。本書は明末の茶人の高雅な淹れ方を大事に受け継ぎ、

茶葉の選び方から茶具の扱い方まで丁寧に記録した。特に「得趣」の一文によって喫茶の独特な趣を、読者に美しく描き出したのである。『枕山楼茶略』「得趣」ではこう述べられている¹¹。

飲茶貴得茶中之趣、若不得其趣而信口嘯啜、與嚼蠟何異。然趣固不易知、知趣亦不難。……山窓涼雨、対客清談時知之。躡屐登山、扣舷汎棹時知之。竹楼待月、草榻迎風時知之。梅花樹下、読『離騷』時知之。楊柳池辺、聴黄鸝時知之。

茶を飲むは、茶の中の趣を得るを貴ぶ、若し其の趣を得ず、口に信せて嘯み啜れば、蠟を嚼むと何ぞ異ならんや。然れども趣は固より知り易からず、趣を知るも亦た難からず。……山窓と涼雨、客に対して清談する時、これを知るべし。屐を躡みて山を登り、舷を扣きて棹を汎ぐ時、これを知るべし。竹楼にて月を待ち、草榻にて風を迎える時、これを知るべし。梅花樹の下、『離騷』を読む時、これを知るべし。楊柳の池辺にて、黄鸝を聴く時、これを知るべし。

では、ここの喫茶の趣とは一体何を指しているのか。それは心の自由と解放である。喫茶行為を通して俗世に身を置く文人達は、煩わしい儀礼や、心を悩ますことから一時的に離れることができる。つまり自由自在になって安心感を得ることができるのである。この考え方は、当時の日本抹茶家の考え方とはかなり違う。喫茶を通して自由を求める中国文人は、煩雑な礼法・技法に拘らず、難解な宗教理念にも触れず、心を一つに喫茶という純粋な行為を楽しんでいた。

ところで、『枕山楼茶略』についての最初の記録は大枝流芳の『青湾茶話』に見える。大枝流芳は浪華の隠士・文人である。そして『青湾茶話』は、日本における最も古い煎茶書と考えられている。この『青湾茶話』の冒頭の「採摭諸書（諸

¹¹ 陳元輔著、『枕山楼茶略』得趣、朱自振、沈冬梅、増勤主編、『中国古代茶書集成』、上海文化出版社、2010、p.824。

書を採り撫める)」に、初めて『枕山楼茶略』の記録が見える。

そして、後に出版された上田秋成の『清風瑣言』は、『枕山楼茶略』の内容をより明らかに意識して参照している。『清風瑣言』は、近世の日本の煎茶道に最も重要な影響を与えた煎茶書の一つと考えられている。上田秋成は茶に内在する清らかな気性を非常に重視している。茶の「清」を通して文人の清らかな魂を称賛する。

『清風瑣言』の中には『枕山楼茶略』からの引用とそれに対する評論が散見される。文化3年(1806)、『清風瑣言』を浄書した際、上田秋成は『枕山楼茶略』の「得趣」を踏まえ、「清風瑣言興宴歌」を創作した。そのなかに、「陳昌其茶略得趣」と名づけた8章の歌を書き上げた。この歌軸は現在、早稲田大学図書館に所蔵されている。その内容は次の通りである¹²。

一、山窓涼雨（山窓と涼雨）

山風は 小雨^{こさめ}ましりに 吹入て 庵の北まと ゆふへすずしも

二、対客清談（客に対して清談す）

心あれや 人をととむと 降雨^{ふるあめ}に かたりはてねは 夜は更にけり

三、躡屐登山（屐を躡みて山を登る）

里に出て かへる坂道を ふみなれし 低きあしだに 足は忘れて

四、扣舷汎棹（舷^{ふなばた}を扣きて棹を汎ぐ）

春の雨を ゆたにたゆたに 漕^{こきいで}出て 沖の鷗^{かもめ}よ 友舟^{ともふね}にせん

五、竹楼待月（竹楼に月を待つ）

¹² 上田秋成、「清風瑣言興宴歌」、『上田秋成全集』第九卷随筆篇、中央公論社、1992、pp. 391～392。

おとたてし 竹の瓦かわらのむら雨 ははれてまたるる 山のはの月

六、草榻迎風（草榻に風を迎う）

おり折ふせし くさ葉の牀は 風まちて おのと起たつ 秋の庭もせ

七、梅花樹下読離騷（梅花樹の下に離騷を読む）

いにしへの 人かも我は 梅か（春）の かをれる窓に 文をひらきて

八、楊柳池辺聴黄鸝（楊柳池辺に黄鸝を聴く）

柳おふる 池の堤を ゆき行かへり きけともあかす うぐいす鶯のこゑ

上田秋成の友人かつ後輩の南画（文人画）家、田能村竹田も『清風瑣言』の影響で煎茶を始め、茶書・茶詩・茶画を多く著した。当然、田能村竹田も『枕山楼茶略』を愛読し、彼の茶書『竹田荘泡茶訣』では本書を次のように評価している¹³。

陳昌其所論得趣一条、我所欲言、一一説尽、無復余蘊矣。余友阿縑洲喜之、録掛齋壁。然得趣與不得亦在人。其人果韻、極熱場中、化作清涼世界。其人倘俗、竹雨松風、變與市声塵喧一般。嗚呼！何但茶而已哉、何但茶而已哉

陳昌其の得趣を論ずる所の一条、我が言わんと欲する所、一一として説き尽くし。復た余蘊無し。余の友阿縑洲（阿部縑洲）これを喜び、録して齋壁に掛く。然るに趣を得ることと得ざることと、亦た人に在り。其の人果たして韻ならば、極熱場（酷熱の地）の中をも、化して清涼世界なと作す。其の人倘もし俗ならば、竹雨松風をも、変えて市声塵喧と一般なり。嗚呼！あ あ

¹³ 田能村竹田、『竹田荘泡茶訣』、『田能村竹田全集』、国書刊行会、1916。

何ぞ但だ茶のみや、何ぞ但だ茶のみや)。

要するに、田能村竹田はかつて喫茶の楽しみについて論じたいと思っていたが、『枕山楼茶略』を読んでから自分の言いたいことがすべて陳元輔に書き尽くされ、贅言を要しないことに気づいた。また、他にも『枕山楼茶略』によって茶の本当の趣の所在を悟った。それは茶の中だけでなく、人の心の中にある。書中に記載された中国明清の文人の高雅な喫茶生活は日本の芸術者の考え方を、硬直した伝統的な抹茶道から解放し、彼らに新たな刺激をもたらした。田能村竹田は最初に漢文で『竹田荘泡茶訣』を書き上げたが、漢文で書いた茶書は読みづらいため、翌年彼はまたそれを訓読文に訳し、新たに『竹田荘茶説』と名づけて出版した。『竹田荘泡茶訣』と『竹田荘茶説』は、いずれも中国文人的な品茶理念が、海を越えて日本に伝わってきた証拠である。

以上のように、本節では、日本に現存する『枕山楼茶略』の版本を確かめ、本書の内容及び日本の茶人に与えた影響を考察した。次節では、『枕山楼茶略』の著者陳元輔の身分と経歴を考察し、本書の創作時間と日本への伝来過程を検討したい。

第二節.陳元輔について

まず、従来の研究でわかったのは、陳元輔の身分を確かめることが困難である、ということである。『枕山楼茶略』を通しては、ただ彼が閩の人（福建省の人）であることしかわからない。清代の文人とはいえ、具体的にどの時期の人か、どうして日本でしか刊行されていないのか、『枕山楼茶略』の序文においては言及されていない。ところが、この疑問については、長谷川瀟々居の『煎茶志』(1965)によって解決の糸口をつかむことができた。『煎茶志』には、

陳元輔、字は昌其。書室を枕山楼と云ふ。福建の人。伝は明らかでないが、康熙十三年に刊行された枕山楼文集一卷と詩集一卷があり、其序によれば科挙に及第したが官途につかず、門を杜ぢて隠栖し、二三の心友との

吟詠の応酬を以て世を終つたと謂ふ。茶略は中国の茶書にほとんど其名が見えないが、吾邦では其詩と共に頗る愛読されて屢々諸書に引用されてある

とある¹⁴。これをみると、『枕山楼茶略』のほか、『枕山楼文集』と『枕山楼詩集』といった二つの作品が日本国内に存在したことが明らかとなる。それに、陳元輔の詩は当時の日本人に愛読されたようである。また、過去に日本に伝わってきた陳元輔の作品の数は少なくないことが推測でき、『枕山楼茶略』もその中の一つだったのであろう。

そこで、日本に現存する陳元輔の作品を突破口として彼の人物像を探ることが可能になる。『枕山楼文集』と『枕山楼詩集』、『枕山楼課児詩話』、『中山自了伝』などの資料を踏まえ、筆者は次の「陳元輔関連作品、序跋整理」一覧表に整理して掲げる。

陳元輔関連作品、序跋整理

程順則の清国滞在歴	書名	西暦	作者	序の作者	跋の作者	冊数	備考
一回目の渡清 1683—1687 五年間							
二回目の渡清 1689—1692 三年間	『中山自了伝』	1688	陳元輔	陳元輔		一	『中山詩文集』に収録。
	『執圭堂詩草』	1689	曾益	陳元輔		一	『中山詩文集』に収録。
	『觀光堂詩草』	1690	蔡鐸	陳元輔		一	『中山詩文集』に収録。
	『枕山楼詩集』	1691	陳元輔	鄭宗圭、林潭		一	和刻本。 『琉球史料文献彙編』に収録。 本書の刊行について、陳元輔は程順則の援助を受けたと林潭の序に記録されている。

¹⁴ 長谷川瀟々居、『煎茶志』、平凡社、1965、p. 303。

	『枕山楼課兒詩話』	1、1691 前 (戴翼序) 2、1736 (奥 田蘭汀序) 3、1818 (大 窪詩仏序) 4、1696 (程 順則跋)	陳元輔	1、戴翼 2、奥田蘭汀 3、大窪詩仏	4、程順則	一	和刻本。『枕山楼拾玉詩話』とも呼ばれる。『和刻本漢籍隨筆録』第二十集に収録。本書の刊行について、陳元輔は程順則の援助を受けたと戴翼の序に記録されている。大窪の序によれば、本書は琉球王国を計有して日本に伝来した。
	『枕山楼文集』	1692	陳元輔	楊昌任、 王化純	林潭	一	和刻本。『枕山楼集』とも呼ばれる。『琉球史料文献彙編』に収録。
三回目の渡清 1696—1698 三年間	『雪堂紀栄詩』	1698	程順則	蔡鐸	陳元輔	一	『中山詩文集』に収録。
	『雪堂燕遊草』	1698	程順則	陳元輔、 蔡鐸		一	『中山詩文集』に収録。
	『雪堂贈言』	1698	陳元輔、陳文雄(陳元輔の子)等	陳文雄		一	『中山詩文集』に収録。
四回目の渡清 1706—1708 三年間	『指南広義』	1708	程順則	陳元輔、 程順則		一	和刻本。国文学研究資料館に所蔵。
	『焚余稿』	1708	程仲扶(陳元輔の子)	陳元輔		一	『中山詩文集』に収録。
五回目の渡清 1720 春—1721 二年間	『晚香園梅詩』	1、1678 (陳元輔序) 2、1725 (王登瀛跋) 3、1854 (横山湖山序) 4、1855 (盤谷井暉跋)	林潭著、陳元輔注	1、陳元輔 3、横山湖山	2、王登瀛 4、盤谷井暉	一	和刻本。『和刻本漢籍隨筆録』第十八輯に収録。王登瀛の跋によれば、本書の刊行は程順則の援助を受けた。
程順則の清国滞在歴	書名	西暦	作者	序の作者	跋の作者	冊数	備考
本書は何回目の滞在中にもたらされたの は不明。	『枕山楼茶略』	不明	陳元輔	陳元輔		一	和刻本。刊記に「文化乙丑(1805)秋九月清廬藏」とある。

上表に掲げた資料から、ようやく陳元輔の人物像が見えてきた。まずは陳元輔の故郷についてみてみたい。『枕山楼詩集』の鄭宗圭の序に、

康熙辛未仲春同里八十五叟鄭宗圭拜撰。

康熙辛未(1691)の仲春、同里(同郷)の八十五叟(八十五歳の老人)の鄭宗圭拜撰す。

とある¹⁵。鄭宗圭と陳元輔は同郷の仲間であることがわかった。

次に、『福建府志』には、

鄭宗圭。字圭甫。閩県人。明崇禎壬午拳人。

鄭宗圭、字は圭甫、閩県の人なり。明崇禎壬午（1642）の拳人なり。

とある¹⁶。つまり、鄭宗圭は清代の福建省福州府閩県の人であることが確認できた。そして、二人は同郷人のため、陳元輔も福州府閩県の人である。

次に、枕山楼の所在地について検討したい。枕山楼は陳元輔の書斎の名前である。陳元輔は親友である林潭の詩集『晚香園梅詩』に序を寄せた¹⁷。

康熙戊午仲冬年家同学弟陳元輔拜題於烏石枕山楼。

康熙戊午仲冬（1678）、年家同学弟18陳元輔、烏石枕山楼にて拜題す。

とある。「烏石」は地名であり、枕山楼は福州府閩県の烏石山にあることが確認できた。

次に陳元輔の生年についてである。地方志『漳浦県志』の進士名簿によれば、彼は明代の万暦 19 年（1591）の進士と記録されていることもある¹⁹が、同名による誤記である可能性が高い。その理由は、前述した鄭宗圭の序で、鄭宗圭が「八十五叟」と自称し、陳元輔より年配であることである。鄭宗圭は清代の康熙 30 年（1691）時に 85 歳、逆算すれば明の万暦 35 年（1607）に生まれている。もし陳元輔が万暦 19 年の進士（1591）であれば、鄭宗圭より年上になってしまうため、『漳浦県志』の陳元輔は別人である可能性が高い。実は『枕山楼詩集』の林

¹⁵ 陳元輔、『枕山楼文集』鄭宗圭序、方宝川、謝必震主編、『琉球文献史料彙編』、海洋出版社、2014、p. 1269。

¹⁶ 歐陽英修、陳衍纂、『閩侯県志』卷四十八、民国 22 年刊、1933。

¹⁷ 林潭、『晚香園梅詩』陳元輔序、長澤規矩也編、『和刻本漢詩集成』18、汲古書院、1987。

¹⁸ 「年家」とは科挙試験の時、同じ年の合格者の間の呼び方。明末以後は同じ年の合格者の間に限らず、同じく科挙試験の受験者の間の連絡であれば「年家」を使うことができる。

¹⁹ 陳汝咸修、林登虎纂、『漳浦県志』卷之十二、民国 17 年本、1928。

潭の序文には以下の記述があった。林潭は明末清初の福建省の人で、字は二恥、前述したとおり、陳元輔の「年家同学弟」つまり、一緒に科挙試験に参加した同門の先輩で、陳元輔の一生の親友である。さらに林潭は、

自余庚戌得交昌其。時方束髮。

余は庚戌(1670)より昌其と交わることを得、時にして方めて髪を束す。

と述べている²⁰。「束髮」とは中国の古人の成人式であり、子供たちが15歳になると髪を縛って成人になったことを示している。つまり、二人は年齢が近いはずであり、幼馴染の関係を持っている。そして、康熙庚戌年(1670)から逆算すれば、陳元輔は清の順治13年(1656)の前後に生まれたことがわかる。これによって、陳元輔の生年を推測できた。

次に、陳元輔の卒年についてである。結論から先に述べると、残念ながら具体的な年は確定できない。しかし、『晩香園梅詩』に、陳元輔のもう一人の親友である王登瀛の跋文がある²¹。

噫、今昌其已逝矣。独予垂白牖下。日與諸秀士談詩染翰。辛丑春中山紫金大夫程君寵文從都門回。好此六詠。捐資重梓

噫、今昌其は已に逝く。独り予は白を牖の下に垂る。日び諸秀士と詩を談じて翰を染む(墨で字を書くこと)。辛丑(1721)の春、中山22の紫金大夫程君寵文は都門より回り、この六詠を好み、捐資して重梓す。

とある。この序文は康熙辛丑年(1721)に書かれたため、陳元輔は遅くとも1721年の前に亡くなったことがわかる。さらに、康熙戊子年(1708)に陳元輔は弟子

²⁰ 林潭、『晩香園梅詩』陳元輔序、長澤規矩也編、『和刻本漢詩集成』第18輯、汲古書院、1987。

²¹ 林潭、『晩香園梅詩』王登瀛跋、長澤規矩也編、『和刻本漢詩集成』第18輯、汲古書院、1987。

²² 琉球王国の中の中山王国で、現在の那覇市、浦添市を中心に主に沖縄県中頭郡に存在していた。

程順則の著書と『指南広義』²³のために序文を寄せており、程順則の息子程仲扶の遺作『焚余稿』²⁴に序文と弔文を寄せた。したがって、少なくとも1708年まで彼は生きていたことが明らかである。そうすると、陳元輔は康熙戊子年(1708)から康熙辛丑年(1721)までの十余年の間に亡くなったことが推測できる。

次に、陳元輔の仕官の経歴についてである。『閩侯県志』では順治年間の書生と記録されている²⁵。若い頃、科挙試験に励んで官職を追い求めた時期があったようである。しかし、彼の仕官の道は順調に進まなかったようだ。『枕山楼詩集』における林潭の序によれば、「遇與心違、懷才莫展（遇は心と違い、才を懷きて展ずること莫し）」²⁶とあるように、康熙甲子年から乙丑年まで(1684～1685)彼は仕官が叶わなかったのである。失意した陳元輔は、間もなく科挙試験を放棄して清の軍隊に身を投じた。『枕山楼文集』の中には、竺鏡筠の著書『耽癖集』のために寄せた序文が収録されている²⁷。

丙辰烽火燭天、羽書旁午、余因鍛羽芸林、慨然慕弃繻生、定遠候之為人、遂投筆仗劍、浪賦從戎、底定之後、論功酬爵

丙辰(1676)の烽火天を燭し、羽書(軍事の緊急連絡書)旁午す(入り混じる)。余は芸林を鍛羽する(文学の志を遂げない)に因り、慨然として繻(儒)生を慕弃(放棄)し、定遠候(後漢の武人班超の封号)の人と為り、遂に筆を投じて劍に仗り、賦を浪(放棄)して從戎(從軍)し、底定(平定)する後、功を論じて爵を酬す。

²³ 程順則、『指南広義』、『大日本海志編纂資料』第六部門地誌、東京大学駒場図書館蔵本。

²⁴ 程仲扶、「焚余稿」、上里賢一編、『中山詩文集校訂本』、九州大学出版会、1998、pp. 287～288。

²⁵ 歐陽英修、陳衍纂、『閩侯県志』卷四十八、民国22年刊、1933。

²⁶ 陳元輔、『枕山楼詩集』林潭序、方宝川、謝必震主編、『琉球文献史料彙編』、海洋出版社、2014、p. 1274。

²⁷ 陳元輔著、『枕山楼文集』、「耽癖集」序、方宝川、謝必震主編、『琉球文献史料彙編』、海洋出版社、2014、p. 1409。

と述べられている。「丙辰烽火」とは、清の三藩王の一人、靖南王耿精忠が福建省で起こした叛乱（1674～1676）のことを指す。「底定之後、論功酬爵（底定する後、功を論じて爵を酬す）」とあることから、陳元輔は、反乱を平定した功績で、ようやく出世できたことがわかった。また、福州府儒学司訓を務めた戴翼は『枕山楼課児詩話』に序文を寄せている²⁸。

元戎喇公延之帷幕。以軍功叙録。提軍張公征聘入幕。以国士待之。

元戎喇公²⁹は之（陳元輔）を帷幕に^ひ延き、軍功を以て叙録す（名簿に登録する）、提軍張公は^{せいへい}征聘して幕に入れ、国士を以て之を待す。

と述べた。ここから、陳元輔は先に元戎喇公の幕内に入り、後に提軍の張公の幕僚になったことが確認できる。さらに、陳元輔の文学の才能についてであるが、戴翼が次のように述べている³⁰。

昌其甫弱冠即有文壇飛將之称。凡經史百家言。悉兼綜博採。……読其前刻、高渾典雅、不愧沈宋一流人物

昌其は弱冠(男子が20歳になる)より甫めて即ち文壇の飛將の称有り。
凡そ^{おおよ}經史百家の^{こと}言、^{ことごと}悉く兼綜して博採す（博覧して涉獵する）。……其の前刻を読めば、高渾典雅にして、沈宋一流（初唐詩人沈佺期和宋之問と肩を並べる）の人物に愧じず

このように、陳元輔の文才を文壇の飛將軍として非常に高く賞賛していた。その後、軍務を辞めた陳元輔は自分の才能を活かして福州の柔遠駅で詩文の

²⁸ 陳元輔、『枕山楼課児詩話』、戴翼序、長沢規矩也解題、『和刻本漢籍随筆集』第20輯、汲古書院、1978、p. 7。

²⁹ 清王朝の皇族愛新覺羅・喇布のこと。

³⁰ 陳元輔、『枕山楼課児詩話』、戴翼序、長沢規矩也解題、『和刻本漢籍随筆集』第20輯、汲古書院、1978、p. 6。

教授を始めた。柔遠駅は当時、琉球王国から皇帝に朝貢して来た使者や貴賓を接待するために設けられた招待所である。身分の高い重臣は福州で暫く休んで北京へ出発するが、身分の低い船工や匠人は福州で泊まり、重臣が帰還するまで福州で当地の技術を学んだ。また、琉球勤学生と呼ばれた勤学生も多く船に乗って中国に渡って来た。そして彼らの授業を担当したのは、陳元輔を始めとする福州出身の役人であった。勤学生程順則を見送るために作った、『雪堂贈言』という詩集では、陳元輔は「候補県丞」（県知事の補佐官候補）と自称し、当時の職位が示されている³¹。また、『枕山楼詩集』の「江楼秋日懷中山程順則（江楼秋日、中山の程順則を懷す）」では程順則と分かれた後の自分の晩年生活について次のように述べている³²。

自雪堂（程順則）送別後。眼見对酒笙歌者不少也。即從彼時杜門謝客。而至於今矣。

雪堂（程順則の号）送別するより後、眼に酒に対し笙歌する者を見ること少なからざるなり。即ち彼の時より門を杜じて客を謝して今に至る。

とあるように、康熙5年（1692）、一番気に入った弟子程順則を見送った後、陳元輔は門を閉じて客の面会を謝絶し、隠棲生活を始めた。また、『枕山楼文集』では彼の妻の弟の楊昌任は序文を寄せた。中にも陳元輔の晩年の隠棲生活について述べている³³。

烟台其翁隱遁於世、不求聞達。或有興而言、言如金石。有時而筆、筆似竜蛇。

烟台（姻戚）の其翁（陳元輔の字は昌其）は、世に隱遁し、聞達（出世）

³¹ 『中山詩文集』、「雪堂贈言」、上里賢一編、『中山詩文集校訂本』、九州大学出版会、1998、p. 232。

³² 陳元輔、『枕山楼詩集』、「江楼秋日懷中山程順則」、方宝川、謝必震主編、『琉球文献史料彙編』、海洋出版社、2014、p. 1431。

³³ 陳元輔、『枕山楼文集』楊昌任序、方宝川、謝必震主編、『琉球文献史料彙編』、海洋出版社、2014。

を求めず。或ひは興有りて言ひ、言ふこと金石の如し。時有りて筆し、筆は竜蛇に似たり。

とある。彼は晩年に入ってから仕途への執着心がなくなり、隠棲生活を送つことを述べている。

ここで一度『枕山楼茶略』の話に戻る。以上の考察によって、陳元輔の生卒年が確認できたため、『枕山楼茶略』の創作時間が特定できる。本書は順治 13 年（1656）から康熙 60 年（1721）までの間に完成されたといえる。これ以上具体的な年数を確かめるのは難しいが、陳元輔の作風の変化に基づいてそれを推測することは可能であろう。

筆者の考えでは、本書は早年の作品である可能性が高い。その理由について、『枕山楼茶略』の創作は陳元輔の早年の作風と一番一致していると考える。『枕山楼詩集』の林潭の序によれば、陳元輔の作風には主に三回の大きな変化が起きている。まず、彼の少年期の作風（1670 前後）について、

蓋昌其詩凡三变矣。自余庚戌（1670）。得交昌其。時方束髮。慎交游。愛嚶笑。嘯讀一室。風雨寒暑弗輟。余間披其帷。相與較論售世事業。覘其胸中眼中。若在峨嵋天半矣。而月夕花辰。時借吟詠。寄興清新雋永。恍如月立空山。水流殘夜。無一点塵埃氣。此昌其少年時詩也。然而非其好也。

蓋し昌其の詩は凡そ三変することあり。余は庚戌より、昌其と交わることを得たり。時に方めて髪を束し、交游を慎み、嚶笑を愛し^おみ、一室に嘯讀し、風雨寒暑にも輟めず。余は間ま^ま其の帷を披き、相い與に售世の事業を較べ論ず。其の胸中と眼中を覘うに、峨嵋の天半に在るが如し。而して月夕花辰、時に吟詠を借りて、興を寄せること清新雋永なり。恍として月の空山に立ち、水の残夜に流るるが如く、一点の塵埃の氣無し。此れは昌其の少年の時の詩なり。然して其の好むことに非ざるなり。

とある³⁴。この時期の彼の作品は清新で味わいが深く、「一点の埃気も無し」純真無垢という特徴があった。

そして、彼の科挙に失敗した失意期の作風（1673以降）について、

以後南轅北轍。不相聚首。甲寅乙卯。予学第一山下。與昌其居益近。交益密。攻苦磨斫益力。彼此隱衷益可相告語。乃此日之昌其大非昔日之昌其矣。有時見其携琴抱史。坐梧桐樹下矣。有時見其觸緒興懷。翰墨淋漓。滿人間矣。有時見其涉江陟嶺。作平原十日歡矣。有時見其焚書碎硯。慟哭青山矣。有時見其痛飲讀楚辭。不則按劍詠盧炤隣悲道窮詞。江淹恨賦。或徐文長疲驢破帽詩矣。孤懷幽緒不一。悉於詩而發之。故昌其癸丑以後詩。多感愴牢騷。猶之少陵在江夔府諸作。一字一淚者。無非以遇與心違。懷才莫展耳。

以後、南轅北轍にして、相い聚首せず。甲寅乙卯、予は第一山の下に学び、昌其の居と益ます近くなり。交わりも益ます密なり。攻苦磨斫にも益ます力む。彼此の隱衷をも益ます相い告げ語る可し。迺ち此の日の昌其は大に昔日の昌其に非ず。時に其れ琴を携えて史を抱き、梧桐樹の下に坐るを見ること有り。時に其れ緒を触れて懷を興し、翰墨を淋漓として、人間に満つるを見ること有り。時に其れ江をわたりてみねをのぼり、平原十日の歡びを作すを見ること有り。時に其れ書をたきてすずり硯をくだき、青山に慟哭するを見ること有り。時に其れ痛飲して楚辭を読み、しからずんば則ち劍を按じて盧炤隣の悲道窮詞、江淹の恨賦、或いは徐文長の疲驢破帽詩を詠ずるを見ること有り。孤懷幽緒一にならず、悉く詩に於いてこれを發す。故に昌其きちゅう癸丑の以後の詩は、感愴牢騷多く、猶おこれ少陵の江夔府に在るときの諸作のごとし。一字一淚は、遇すること心と違ひ、才を懷くも展ぶる

³⁴ 陳元輔、『枕山樓詩集』林潭序、方宝川、謝必震主編、『琉球文献史料彙編』、海洋出版社、2014、pp. 1271～1272。

こと莫きを以てすに非ざる無きのみ。

とある³⁵。この時期の彼は仕官が叶わなかったため、感情的で不満も多かった。才能がありながら発揮する場所に恵まれないという、未来への不安が作品の主調である。

最後に、彼が従軍生活から復帰した後の作風（1686以降）について、

丙辰深秋。余扁舟南還。旅食五山。不才多病。與昌其又成風馬牛。迄今十有余載。而昌其或磨盾草檄。浪賦從戎。或匹馬孤舟。遠尋知己。閱歷久而識胆深。識胆深而性情摯。向之怫悒無聊。忽啼忽笑者。今皆韜鋒斂穎。坐春風中。讀其近作。顛顛噩噩。鬱而善愁。婉而多風。吾不意昌其寸管寸腸變至此也。

丙辰の深秋、余は扁舟して南に還り、五山に旅食す。不才にして病多し。昌其と又た風馬牛と成り、今に迄^{いた}るまで十余載有り。而して昌其は或いは盾を磨きて檄を草し、賦を浪して戎に従う。或いは匹馬孤舟にして、遠く知己を尋ねる。閱歷久しければ識胆深し。識胆深ければ性情摯^{きき}たり。向の怫悒無聊、忽ち啼きて忽ち笑う者も、今にして皆な鋒^{つつ}を韜^{おさ}みて穎^{おさ}を斂む。春風の中に坐して、其の近作を読むに、顛顛噩噩として、鬱として善く愁い、婉としえ風多し。吾は昌其の寸管寸腸の變じて此に至ることを意せず。

とある³⁶。この時期に彼は科挙と仕官を諦めて軍隊に入ったが、長年の軍隊生活を通じて人生経験を積み、世間の事情を一層理解できるようになった。少年期のように喜怒哀楽をすぐ顔に出すことはなくなり、彼の作風は感傷的で婉曲になった。

³⁵ 陳元輔、『枕山樓詩集』林潭序、方宝川、謝必震主編、『琉球文献史料彙編』、海洋出版社、2014、p. 1272～1274。

³⁶ 陳元輔、『枕山樓詩集』林潭序、方宝川、謝必震主編、『琉球文献史料彙編』、海洋出版社、2014、pp. 1274～1275。

『枕山楼茶略』の完成時期について、書中には記載がないため、具体的な刊行年は不詳であるが、筆者は林潭が述べた陳元輔の作風の変化に基づいて推測する。まず、『枕山楼茶略』の序文に「竹窓涼雨、能助清談、月夕風辰、堪資覓趣、茶非騷人之流匪歟」とあるように、この作品を作成した際に、陳元輔は風流な喫茶生活に憧れを抱いていたことが窺えるであろう。また、作者は自分の生活に対して積極的な態度を持った人間だとみえる。しかし、林潭の記憶によれば、陳元輔が科挙に失敗した失意の時期の作風は「多感愴牢騷」であり、また軍隊生活の時期の作風は「鬱而善愁。婉而多風」であるため、いずれも消極的な性格を持った人間に見える。これは『枕山楼茶略』の序文に現れる陳元輔像とはやや異なると筆者は考えている。一方、少年期の陳元輔の作風は「寄興清新雋永、恍如月立空山。水流残夜、無一点塵埃氣」であり、明るくて清らかな性格を持った人間だと窺える。この時期の作風は、『枕山楼茶略』の序文の作風に最も近いであろうと筆者は考えている。以上より、作風上から推測すると、『枕山楼茶略』は少年期の陳元輔の作品であろう。つまり康熙12年（1673）の郷試受験の前ごろに完成されたのではないかと推測する。もちろん、これだけで『枕山楼茶略』の完成時期を正しく確定できるというわけではないが、一つの参考になればと考えている。

第三節.陳元輔と程順則

本節は『枕山楼茶略』の伝来について検討したい。『枕山楼詩集』の中の酬贈詩によれば、陳元輔は多数の琉球王国の使者と友好的な関係を保った。彼の勤学生弟子の中で、まだ名前が残っているのは程順則、蔡声亭、蔡文敏、梁得濟、梁得声、梁本寧、鄭克叙などであり、彼らは後に琉球王国に帰って政治、教育など複数の領域で重要な役割を果たした。先生の陳元輔への恩返しとして、彼らは出資して陳元輔の作品を出版した。例えば、『枕山楼詩集』と『枕山楼課兒詩話』はその形で出版された。勤学生弟子の中で、陳元輔の書物を出版することを最も積極的に支持したのは程順則である。程順則は後に名護親方（名護の市長）とな

り、紫金大夫³⁷（最高位階の中国への謝恩使）を務めた。筆者の考えでは、『枕山楼茶略』の出版と日本への伝来は程順則を経由して成し遂げられた可能性が高い。具体的には以下の通りである。

まず、琉球王国（現在日本の沖縄県）は中国の福建省と日本の九州の間に位置し、当時は清国と日本の中継貿易で大きな役割を果たした。琉球人は清の人および日本人と貿易していたため、中国（特に福建省）の文化と日本の文化の影響を同時に受けて、地域特色のある文化が育った。琉球王国は明太祖朱元璋の時から冊封を受け、清朝に至っても朝廷に朝貢し続けた。慶長14年（1609）、島津軍の琉球出兵で薩摩藩の軍が首里城を陥とし、琉球国王尚寧を捕えた。それ以降、琉球王国は王国の名目を保っていたが、実質的には薩摩藩の付属国となり、同時に両方へ進貢しなければならないことになった。

琉球王国は明代以降の慣例に従い、定期的に中国に留学生を派遣して必要な知識と技術を習っていた。留学生は主に二種類に分けられ、「官学生」と呼ばれた公費留学生と、「勤学生」と呼ばれた私費留学生がいた。官学生は国の未来を担う人材として、主に北京の国子監という一流学校へ送られ国を治める儒学思想と政治知識を学んだ。基本的に、官学生は帰国後すぐ琉球国王に重用され、国の要職に身を置く。勤学生は、官学生のように重大な任務を背負っているわけではないが、基本的には琉球王国の出身のいい家庭の若者たちである。彼らは中国に憧れを抱き、北京ではなく福建省の福州に滞在し、現地の先生に従って漢籍漢詩の知識、公文書の処理方法、または航海知識を学んだ。優秀な勤学生は帰国後に官職を授けられることもよくあった。勤学生は一般的に、中国に3～5年間滞在した。潘相の『琉球入学見聞録』には琉球王国の留学生について、

閩又有存留館。留館通事之從人。多秀才。仮名入閩以尋師者。或寓閩數年而後歸。日與閩人為友。故能知儒先之書。携歸另刊。旁附球字。以便習球讀法。非日本人所能。

³⁷ 琉球王国久米村最高の位階、金糸の入った紫冠を戴くのが名称の由来。

閩は又た留館存すること有り。留館通事の従人(随行者)は、秀才多し。名を仮して閩に入り、以て師を尋ねる者なり。或いは閩に寓して数年にして後に帰る。日び閩人と友と為り、故に能く儒先の書を知る。携え歸りて另ねて刊し、^{かたわら}旁に球字(琉球字)を^つ附け、以て球の読法を習うを便(便利)にす。日本人の能くする所に非ず。

との記述がある³⁸。文中の留館は琉球から来た使者・官学生・勤学生をもてなす施設である。例えば第二節で言及した福州の柔遠駅(琉球館)はその施設の一つである。

第二節でも述べた通り、当時陳元輔は柔遠駅で勤学生の先生を担当していた。陳元輔の弟子の中で最も優秀なのは程順則である。程順則、字は寵文、琉球王国の久米(現在沖縄県那覇市久米)で生まれ、近世琉球王国の代表的な政治家、教育家、外交官、文人である。久米は明代の福建から琉球へ渡来した中国人の村落で、久米三十六姓と称している。程順則は久米三十六姓の程家の跡を継いだ。彼は自分の一生を清国と琉球王国の友好関係に捧げた。彼は5回清へ渡り、中国から大量の書籍を持ち帰り、琉球の教育に多大な貢献をした。具体的には次の通りである。

一度目(1683~1687)：勤学生として初めて清へ赴き、福州に留学して5年間滞在した。その間、柔遠駅で二人の恩師陳元輔と竺天植と出会った。

二度目(1689~1692)：接貢存留通事(福州で朝貢使を迎える通訳官)として清へ赴き、福州に3年間滞在した。福州瓊江の近くで雪堂という書齋を築き、地元の知識人と頻繁に付き合った。帰国前、自費で大量の書籍を購入した。そのほか、恩師陳元輔の『枕山楼詩集』、『枕山楼課児詩話』を琉球へ持ち帰った。この二作品については、彼自身出資して出版もしているが、印刷地については不明。

三度目(1696~1698)：朝京都通事(朝貢使と一緒に北京へ赴く通訳官)として清へ赴き、三年間滞在した。北京への朝貢任務を終えた後福州へ戻り、陳元輔

³⁸ 潘相、『琉球入学見聞録』巻二書籍、早稲田大学図書館蔵本、1764。

とも再会した。『雪堂紀栄詩』、『雪堂燕遊草』、『雪堂贈言』には酬贈詩がたくさん残っている。

四度目（1706～1708）：進貢正議大夫副使（朝貢使者団の副団長）として清へ赴き、三年間滞在した。自費で儒学著作『六諭衍義』と航海著作『指南広義』を出版した。また、夭死した次男程搏万の詩集を出版し、恩師陳元輔に序を求めた。これは程順則と陳元輔の最後の面会となった。

五度目（1720～1721）：謝冊封使節団副使（謝恩使者団の副団長）として清へ赴き、中国で二年間滞在した。その間に程順則は林潭の詩集『晚香園梅詩』を出版した。林潭は陳元輔の大切な親友である。『晚香園梅詩』には既に亡くなった陳元輔の寄せた序文がある。さらに、この序文は康熙17年（1678）に書き上げられ、程順則の最初の渡清より早い作品であることがわかった。

以上より、陳元輔と琉球勤学生程順則とは、明らかに親密な師徒関係を持っていた。

それでは、『枕山楼茶略』の話に戻る。筆者の考えでは、『枕山楼茶略』は程順則の助成金を受けて出版された可能性が高い。理由は三つある。

まず、二人の関係は師徒関係より父子関係に近い。程順則の父親程泰祚は朝貢使の通訳官を務め、康熙13年（1674）正議大夫蔡彬とともに北京へ赴き、途中で海賊に襲われて負傷した。康熙15年（1676）朝貢任務を果たした程泰祚は帰国の途中、蘇州で亡くなった。そのため、程順則は13歳から父親がおらず、陳元輔を父親のような存在だと見なした。彼は『寄懷陳士知世兄』で、「吾師於吾若父子、世好弟兄吾与爾。吾が師は吾に於いて父子の如く、世好（一生の親友）の弟兄、吾と爾なり」と述べている³⁹。「陳士知」は陳元輔の息子で、程順則にとって兄弟のような存在である。程順則は頭脳明晰で、ほかの勤学生よりずば抜けて優れていたため、陳元輔に好まれている。陳元輔はかつて程順則を、

挺生程子擅才華、海外文風賴以起。……老夫双眼閱人多、舍君何処尋知

³⁹ 『中山詩文集』、「雪堂雜組」、「寄懷陳士知世兄」、上里賢一編、『中山詩文集校訂本』、九州大学出版会、1998、p. 208。

己。

挺生（優れた弟子）程子（程順則）は才華を^{ほしいまま}擅にし、海外の文風頼りて以て起す。……老夫の双眼 人を^{けみ}閲すること多く、君を^す舍つれば^{いづれのところ}何処に知己を^{たず}尋ねん。

と称賛した⁴⁰。これは、たくさんの人と出会ってきたが、君だけは私の知己だと認める、という意である。そのため、程順則は恩師陳元輔をとりわけ尊敬し、何度も自費で先生の作品を出版した。陳元輔が亡くなる以前、程順則は必ず陳元輔の許可をもらってから出版を行ったため、書物の前には必ず陳元輔の序文があり、助成金を受けて出版の詳細な経緯について述べている。例えば、『枕山楼詩集』、『枕山楼課児詩話』、『中山自了伝』などにそうした序文が見られる。しかし、『晚香園梅詩』のような陳元輔死後に出版された作品は、陳元輔の許可をもらったものではないため、彼が経緯を説明できるはずはなく、当然序文には出版に関する記述もないのである。『枕山楼茶略』と『晚香園梅詩』には、類似点が二つある。一つは同じく陳元輔の早期の作品（程順則の最初の渡清より前）である可能性が高いことである。その理由は、出版について程順則の助成を受けたことに関わる記述がないことである。筆者の推測では、おそらく『枕山楼茶略』も程順則が陳元輔の死後に集めた作品の一つであろう。

また、琉球王国は僻遠の地であるため、中国大陸から伝わってきた知識と技術を学ぶことをしきりに望んでいた。程順則は中国で学んだ知識を琉球へ持ち帰るという使命感を抱き続け、国のために貢献するという責任感を持っていた。それについて、紫金大夫蔡鐸は『雪堂燕遊草』の序文で、

中山僻處東溟。孤懸於扶桑之表。自受天朝封典以來。沐浴於文教者深。故人皆知學。且奏允陪臣子弟入成均讀書。迄今國人有所觀感。悉蒸蒸向化。

⁴⁰ 『中山詩文集』、「雪堂贈言」陳元輔、上里賢一編、『中山詩文集校訂本』、九州大学出版会、1998、p. 231。

独程子籠文為独異。少聰穎。長復嗜古。前後三至閩兩入都。雖王事鞅掌。而執經問業。寒暑弗輟。

中山は僻にして東溟に^お処り、孤りにして扶桑の表に懸く。天朝の封典を受くるより以来、文教に沐浴する者深し。故に人は皆学を知る。且つ奏(奏書)して陪臣の子弟成均(成均監、官設の大学を指す)に入りて読書するを^{ゆる}允す。今に^{いた}迄りて国人觀て感ずる所有り、悉く蒸蒸として向化す(帰順、帰服)。独り程子籠文は独異なり、少にして聰穎なり、長じて復た古を嗜み、前後にして三たび閩(福建)に至り、^{ふた}兩たび都(北京)に入る。王事鞅掌なり(公務で忙しい)と雖も、經を執りて業を問う(勉学すること)、寒暑にも^や輟めず。

と彼を評価した⁴¹。福建は昔から中国茶の産地である。加えて、清代に入ると福建の喫茶文化には大きな変化が起こった。長年福州で留學生活を送り、当地の人と親しく付き合った程順則は、その変化に気づかなかつたはずがない。彼は当地の茶文化をよくわかつていたはずである。

また、琉球王国には伝統的な茶文化がある。『琉球入学見聞録』によれば、

烹茶之法、以茶末雜細米粉少許入碗、沸水半甌、用小竹帚攪之起沫、滿甌面為度、以敬客。

烹茶の法、茶末を以て細き米粉少許を雜ぜて碗に入れ、沸水半甌にして、^{たけぼうき}小竹帚を用いてこれを^{みだ}攪して^{あわ}沫を起し、甌面を満たすことを度と為す。以て客に敬す。

とある⁴²。当時の琉球の喫茶法は、今の「ぶくぶく茶」に当たるであろう。「ぶ

⁴¹ 『中山詩文集』、「雪堂燕遊草」蔡鐸序、上里賢一編、『中山詩文集校訂本』、九州大学出版会、1998、p. 231。

⁴² 潘相、『琉球入学見聞録』卷二風俗、早稲田大学図書館蔵本、1764。

くぶく茶」は茶筌を使って玄米と茶の粉末をお湯に入れて混ぜ込んで泡を立てて飲む方法である。また、振り茶と呼ばれる泡立て茶の一種である。現在も沖縄県で飲まれている。この喫茶法は、当時の中国で流行した泡茶法と異なる。おそらく、程順則は福建で体験した新しい茶文化を琉球王国の人と共有したかったか、あるいは恩師の茶書を海外に広めたかったという動機で、『枕山楼茶略』の流布を推進したという可能性も考えられる。最後に、程順則は、まさに中国と日本の文化を繋げた重要な人物であるといえる。彼は中国の朝貢使だけでなく、日本の朝貢使を務めた経験もあった。正徳4年（1714）、彼は江戸慶賀掌翰史（將軍への贈書を管理する朝貢使）として、徳川家継が七代目將軍となったことを祝うため、江戸（東京）へ上り、途中、薩摩藩（鹿児島県）を經由して大守中将吉貴公に『六諭衍義』、『指南広義』をはじめとする大量の漢籍を献上した。当時、程順則は立派な儒学者として、名前が日本にも響き渡っていた。江戸に滞在する間、程順則は新井白石、荻生徂徠、太宰春台など日本の儒学者を訪問し、親しく付き合った。当時、公家の大物たちも程順則訪問に深い興味を示している。例えば、享保4年（1719）、摂政近衛家熙公は自分の新しく築き上げた「物外楼」の題字を、程順則に頼んで福建の有名な書道家、陳元輔の親友である王登瀛に墨蹟を求めた⁴³。以上のことから、程順則は江戸の高官や学者にも繋がっていたことは明らかである。

そして、『枕山楼茶略』も当時程順則の手によって幕府に献上された数多くの寄贈書の中の一つではないか、と筆者は推測している。

おわりに

以上、本章は陳元輔と『枕山楼茶略』のことについて検討した。まず、『枕山

⁴³ 緑川明憲、『豫楽院：近衛家熙公年譜稿（四）』、『京都大学国文学論叢』、2011、p. 43。「十月三日、口切りの茶の湯を催す。客は刑部大輔進藤長之及び久田宗也。同日、琉球人の程順則を介して清・閩南の儒者王登瀛に揮毫を依頼して自邸「物外楼」の額字が届き、物外楼に掛ける。程順則（名護親方）は天和三年より四年間、清国の閩に滞在経験があり、王登瀛との交流はこのあたりから生まれたか」とある。

『楼茶略』の内容を確認した上で、日本の現存版本について検討し、本書が上田秋成、大館高門、田能村竹田など江戸後期の煎茶を嗜んだ茶人に影響を及ぼしたことが明らかである。そして、作者陳元輔の身分について考察を行い、いままで考察されていなかった陳元輔の出身地、生卒年と経歴を考察した。さらに、『枕山楼茶略』の完成時間をさらに絞り込むことができた。最後に、陳元輔と交流した程順則の渡清の経歴を整理した上で、福建文人の茶書『枕山楼茶略』が琉球王国の勤学生程順則を経由して日本へ伝わってきた可能性が大きいと推測している。

第九章. 大典禅師の漢詩集に関する研究：詠茶詩にみる喫茶交遊

はじめに

大典禅師は江戸中期の禅僧であり、また当時の有名な漢詩人である。字は梅荘、諱は顕常、淡海、蕉中等と号し、筆名は不生道人、淡海天常、東湖上人等。享保4年（1719）に近江国の神崎郡伊庭郷（滋賀県）に生まれ、8歳で父親に随って上洛し、後に宇治の黄檗山華藏院に入り、11歳で京都五山の相国寺慈雲庵で得度し、独峰慈秀を師と奉じた。また、少年大典は黄檗禅僧の大潮元皓と儒者の宇野明霞に師事して漢学を学んだ。享和元年（1801）で辞世し、享年83歳である。代表作に『昨非集』、『詩語解』、『文語解』、『小雲棲稿』、『北禅詩草』、『北禅遺草』などがある。その中でも、とりわけ漢詩集は彼の集大成である。

第六章では大典の煎茶書についてすでに検討したが、茶人交遊の様子についてはまだ不明なところが多く残っている。したがって、本章は大典の漢詩集を煎茶書の補足資料として考察を行いたい。そして、大典の漢詩集の中に書かれた喫茶関係の語句を調査した上で、解説を行いたい。その結果に基づいて大典の喫茶交遊の様子を復元し、江戸中期の茶人が如何に煎茶を京都・大坂地方で拡散して流行したのかについて解明したい。大典の漢詩集と詠茶詩を研究することによって、江戸時代の茶人の間に行われた喫茶交遊の実態を解明することができ、煎茶書研究において欠如した情報を補足することが可能になる。

第一節. 大典禅師の漢詩集

大典が活躍していた時代は江戸時代の享保（1716～1736）から寛政（1789～1801）までの時期である。この期間は日本国内では八代将軍徳川吉宗の享保の改革（1716～1745）、また老中松平定信の寛政の改革（1787～1793）が行われた江戸時代の重要な時期であり、社会・経済・文化が大きく変革を始めた時期でもある。この時代の一つの特徴として、町人は徐々に日本国内の商品流通の貿易の主導権を握り、町人経済の実力は次第に武士を超えて影響力は一層拡大した。その

変化は、社会文化にも反映されている。例えば、この時期に印刷業が発達し、絵草子・読本・浮世絵などの日本独特の文化が発展し、庶民の教育施設である寺子屋が全国に設立され、また漢学や漢詩を熱心に研鑽する儒者が増え、本草学の研究も全盛期を迎えた。町人階級が武士階級にかわり、新しい時代を動かす主役として登場して江戸文化の主導者となっていったのである。

その中で、漢詩文と儒学が町人間で盛んに展開されたことも注目すべきである。江戸時代前期、幕府は政権を維持するため、自らの正当性を支持する思想として、儒学の中でも特に道徳を重視する朱子学を官学として採用し、徳川家康は朱子学者林羅山を起用した。道徳の実践を重んじる朱子学において、はじめ漢詩文は儒者にとって余技に過ぎなかったが、時代が進むと、だんだん儒学者の中から漢詩文をよくする者が現れ、すぐれた詩文集を残した人も増えていった。例えば、石川丈山・新井白石・室鳩巢・祇園南海などがいた。元禄になると、京都では町人出身の伊藤仁斎が仁を重視すべきだと主張し、古義学を提唱した。また、江戸では荻生徂徠を祖とする古文辞派が台頭し、朱子学を批判し、儒学は古典の原典にさかのぼって、古典の真義を探るべきだと主張した。古学は、一世を風靡して町人階級にも刺激を与えた。古学派は、人情を重視し、道徳の実践より文学の価値を認めたので、時代が進むと、ついに儒学や政治よりも漢詩文や文学を専門とする文人が輩出するようになった。この時期の庶民は、中国の盛唐詩を模倣することを作詩の方法として漢詩を作り始め、またもともと漢文素養の高かった禅僧・儒者に作詩を教えてもらうことが多かった。18世紀になると、漢詩文の趣味がさらに拡大した。この傾向は都市だけではなく、地方にも大きく広がった。漢詩人口が急激に増加し、多くの漢詩結社が現れ、多数の漢詩集・漢文集が出版された¹。

そのような背景で、大典は旺盛に詩作と著述に励み、大量の著作を残した。『小雲棲稿』の広告において、彼の作品が以下の通りに宣伝されている²。

¹ 本段落は、秋山虔・三好行雄編著、『標準 四訂新版 日本文学史』、「漢詩文と儒学」、文英堂、2009、pp. 132~133。を参照した。

² 大典顕常、『小雲棲稿』、国文学研究資料館蔵本、1775。

昨非集二卷、小雲棲稿十二卷、小雲棲詠物詩二卷、小雲棲手簡二卷、小雲棲手簡二編二卷、北禅詩草二卷、萍遇録一卷未刻、北禅文草四卷、諸宗伝略一卷、唐詩礎続編一卷、四書越俎四卷、皇朝事苑四卷、柿本人丸事迹考 一卷、世説鈔撮四卷、世説鈔撮補二卷、世説鈔撮集成六卷、唐詩集注七卷、唐詩解頤七卷、峨嵋山図説一卷、欧蘇手簡附訳二卷、詩語解二卷、文語解五卷、学語解二卷、九族称呼図一卷、初学文譚一卷、尺牘式三卷、尺牘式補遺一卷、聯句式一卷、唐詩擷英補一卷、宋三大師尺牘附訳三卷、茶経詳説一卷、拝説一卷未刻、左伝考三卷、杜律三卷未刻、三韻通考附訳一卷、続文変一卷等、舎利講式未刻

ここから、大典によって膨大な数の作品が刊行されたことがわかる。また、彼の作品は仏学、儒学、漢詩など多くの領域に関わり、知識人としての高い素養と博学多識を示したことがわかる。

大典は読者に高い人気を博し、作品が積極的に出版された。また、江戸時代中期の京都禅林の中でも一流の詩僧とされ、彼の漢詩も多くの人に愛読されていた。そして、大典の漢詩集を調べた結果、煎茶に関わる記録も多く見られた。これらの漢詩を通して、煎茶の流行の初期の状況を知ることが可能となる。また、大典の交遊圏を通して、煎茶の京都・大坂地域における拡大も考察できる。そのため、大典の漢詩集はとても貴重な、重視すべき資料である。ここでは大典の五つの重要な漢詩集を取り上げ、各詩集における茶に関わる記事を整理する。

一点目は『昨非集』である³。本書は大典の最初の個人の漢詩集であり、宝暦9年（1759）に刊行され、乾坤二巻あり、41才までの漢詩を収録している。序は同門かつ親友の菅原家長（高辻家長）が作成し、跋は門人五瀬浄王（聞中浄復）が作成、木村兼葭堂の支援を得て刊行した。本漢詩集から「元日」、「庚午二月十四日洛下諸彦見会同賦得香字」⁴など茶事に関わる漢詩 14 首が見つかった。特

³ 大典顕常、『昨非集』、国立国会図書館蔵本、1761。

⁴ 『昨非集』巻乾。

に、この時期には「大雪夜高居士携安田氏見過情話謝之」⁵、「売茶翁携茶具訪士新先生煎茶飲之余亦與焉席上奉贈先生二首」⁶の二作があり、売茶翁と宇野明霞の二人との交遊が見られる重要な史料である。

二点目は『小雲棲稿』である⁷。本書は大典の漢詩集かつ漢文集であり、安永4年(1775)に刊行され、『茶経詳説』の翌年に出た作品である。当時、大典は57才であった。本書は全六冊十二巻で構成され、前六巻は漢詩、後六巻は漢文であり、宝暦9年(1759)から安永2年(1773)までの作品を収録している。序は同門の師弟片山北海が、跋は親友の藤元穡(字は秋卿)が作成した。刊記に「京都菱屋孫兵衛・林伊兵衛/大坂播磨屋新兵衛河内屋太助/江戸須原屋伊八」とあり、本詩集は京都・大坂・江戸の版元によって発売され、この三地を中心に流布されたと思われる。この詩集の中から「清静行贈孝秩」⁸、「與聞中遊双林靈山清水諸地煮茗」⁹など56首の茶詩が見つかった。そのなかでも、片山北海をはじめとする漢詩結社混沌社の文人たちとの交流記録には注目すべきである。

三点目は『小雲棲詠物詩』である¹⁰。本書は大典の三冊目の漢詩集であり、寛政2年(1790)に門下の弟子によって刊行された。当時の大典は72才であった。同年には『北禅文草』四冊が刊行されている。本詩集は詠物詩を中心に収録した作品で、大典の親友六如慈周の序を付し、上下二巻ある。上巻は天部、地部、虫禽部、下巻は草木部、雑詠部、図画部となる。本詩集の中からは「進櫛澹因用煮茶」¹¹、「與聞種二子携茶具遊東岩蔵」¹²など6首の茶詩が確認できる。『小雲棲稿』と重なる詩もあるが、そこには未収録の新作が多い。

⁵ 『昨非集』巻乾。

⁶ 『昨非集』巻乾。

⁷ 大典顕常、『小雲棲稿』、国文学研究資料館蔵本、1775。

⁸ 『小雲棲稿』巻一。

⁹ 『小雲棲稿』巻一。

¹⁰ 大典顕常、『小雲棲詠物詩』、国文学研究資料館蔵本、1790。

¹¹ 『小雲棲詠物詩』巻上。

¹² 『小雲棲詠物詩』巻上。

四点目は『北禅詩草』である¹³。本書は大典在世時最後の漢詩集であり、寛政5年（1793）、75才の時の作品である。上下二冊、全六巻、安政3年（1774）から寛政3年（1791）までの詩を収録している。六如慈周の序があり、弟子武藏天爵（伊藤天爵）が江戸で版木を彫刻した。刊記に「京都近江屋庄右衛門、田原勘兵衛、江戸須原屋伊八梓行」とある。本詩集の中からは、「茶詩五天見過」¹⁴、「與諸子携茶具山門納涼」¹⁵など75首の茶詩が見つかり、すべての詩集の中で最多の数である。これは大典が晩年に入ってから茶事に熱心に参与したことを示している。『小雲棲稿』では大坂の文人墨客との喫茶交遊が目立ったが、『北禅詩草』の茶詩では、京都が活動の中心となり、また交遊対象は僧侶を中心とした友人や門下弟子にかわっている。本詩集は大典の晩年の喫茶生活を考察するうえで不可欠である。

五点目は『北禅遺草』である¹⁶。本書は大典没後7年、文化4年（1807）の作品であり、弟子によって整理された遺作である。寛政三年から寛政11年までの作品を収録している。全四冊、八巻あり、第一巻から第三巻までは漢詩集で、第四巻から第八巻は序、記、説、跋などの漢文集である。序文は弟子武藏天爵が作成した。表紙に「皇都星文堂 江都青藜閣」、刊記に「書林江戸須原屋伊八、京都石田治兵衛」とあり、江戸と京都の両地を中心に販売された作品であろう。本詩集の中から「春生以茶宴見招與維明新州同会実冬至前三日也席上賦贈」¹⁷、「辛亥至日諸子為余設宴賦示」¹⁸など23首の茶詩が見つかった。大典禅師の最晩年の喫茶生活を知るうえで貴重な史料である。

筆者は以上の五種類の漢詩集にある茶詩を整理し、文末の附録「大典禅師の漢詩における茶事関連表現一覧」に載せた。一覧表をみると、大典の漢詩集においては、煎茶に関わる記事が大量に残されていた。彼は売茶翁の煎茶の継承者かつ

¹³ 大典顕常、『北禅詩草』、国文学研究資料館蔵本、1793。

¹⁴ 『北禅詩草』巻一。

¹⁵ 『北禅詩草』巻一。

¹⁶ 大典顕常、『北禅遺草』、国文学研究資料館蔵本、1807。

¹⁷ 『北禅遺草』巻一。

¹⁸ 『北禅遺草』巻一。

宣伝者として、煎茶書を出版するだけでなく、日常生活から煎茶の普及に熱心に参与していたといえる。

第二節.大典禪師の詠茶詩

前節に提示した大典の五つの代表的な漢詩集の中には、喫茶を詠む記録も多く見つかった。つまり、喫茶も大典の漢詩における重要な詠唱対象ということである。本節では、附録の「大典禪師の漢詩における茶事関連表現一覧表」を踏まえて具体的な例を検討した上で、大典の茶席の様子を考察したい。また、茶席の参加者の身分と出身について調査したい¹⁹。

【21】「與友人携茶遊糾林有懷往事（友人と茶を携えて糾林に遊し往事を懐うこと有り）」に「煎茶心且適、藉卉境還幽（茶を煎じて心は且つ適し、卉をして境は還た幽なり）」²⁰とあり、友人とともに糾ノ森（京都市左京区下鴨神社の森）で煎茶席を行って往事を思い起こしたことを述べている。

【26】「將赴浪華、逢雨、過西村氏、留以供養、講余煎茶訣、率有此詩、時庭下山茶、正花淡紅非凡、云是禁園所出者（將に浪華に赴かんとして雨に逢いて西村氏に過ぎりて留めて以て供養して余が煎茶訣を講す。率に此の詩有り。時に庭下の山茶、正に花^き淡紅にして凡に非ず。是れ禁園（皇居の庭園）より出る所と云う）」に「憐君甘恬淡 茶莽愛逃禪（憐む 君は恬淡（淡泊）を甘して、茶莽 逃禪（隱棲）を愛することを）」²¹とあり、大典が大坂へ行く途中、雨宿りで西村氏の隱棲の地を訪ね、西村氏に接待されたことを述べている。大典がその場で『煎茶訣』を講授し、また西村氏が庭に植えていた禁園の花を觀賞した。西村氏は隱者であるため、隱棲生活にふさわしい煎茶の話に興味を湧いたのであろう。

【27】「乘剡與、更惠郢歌、余未能報、下澱舟中吟誦次韻四首、其二（剡の與

¹⁹ 以下、【 】は附録「大典禪師の漢詩における茶事関連表現一覧」の通し番号を示す。

²⁰ 『小雲棲稿』卷一。

²¹ 『小雲棲稿』卷一。

に乗り、更に郢歌を恵まる。余は未だ報すること能わず。澗を下りて舟の中に吟誦し、韻を次ぐ四首、其の二)」に「堀口稀行客、欲煎特為茶（堀口行客稀なり、特為の茶を煎ぜんと欲す）」²²とある。大典が友人から高雅な和歌をいただいたため、お礼として返したことを述べている。「乗剡興」は『世説新語』が典故であり、隠者王子猷が興に乗じて舟に乗り、剡溪に住んでいた友人戴安道を訪ねた、という意味である。大典の詩題では、興に乗じて舟に乗り、淀川を楽しみながら友人を訪ねることを指し、まさに中国の文人らしさを踏まえた遊び方である。

「堀口」については、詩の下に自注があり、「理即門前、煎茶施行、号堀口亭（理即門の前、茶を煎じて施行（布施を行う）し、堀口亭と号す）」とする。淀川の近くの理即門の前で煎茶席を開いたことを述べている。

【36】「余借河野生斎頭住数日、蓋有所業也。生為挹清泉、煎高雄茶給之、贈以此詩（余は河野生の斎頭を借りて住むこと数日、蓋し業とする所有るなり。生は為に清泉を挹みて高雄茶を煎じて之を給す。贈るに此の詩を以てす）」に「碗面浮山味、炉頭起岫雲（碗面山味を浮かべ、炉頭岫雲（山のほら穴からわきおこる雲）を起こす）」²³とあり、大典が医者河野氏の屋敷で数日間宿泊したことを述べている。その間、河野氏は清らかな泉水を掬って、高雄茶を煎じて彼を招待した。高雄茶とは、京都の高雄山産のお茶であろう。

【37】「訪神州和尚在金福養病、見其高作、次韻為贈（神州和尚の金福に在りて病を養うを訪ね、其の高作を見、韻を次ぎて贈と為す）」に「邂逅逢煎茗、倘伴共解襟（邂逅 茗を煎ずるに逢い、倘伴（心の安らかなさま）共に襟を解（解）す）」²⁴とあり、京都の金福寺で療養中の神州禅師を訪ね、禅師の作品を拝見してから詩を作って贈ったことを述べている。二人は僧袍を脱いで茶を煎じながら、再会のことをこころから喜んでいる。

【53】「子琴邀登楼饗給、家枕大川、汲以煎茶尤佳、席上為贈（子琴邀へて楼

²² 『小雲棲稿』巻二。

²³ 『小雲棲稿』巻二。

²⁴ 『小雲棲稿』巻二。

に登りて饗給す。家は大川に枕し、汲みて以て茶を煎ずるに尤も佳なり。席上に贈と為す)」に「山僧固厭滄浪独、一碗春芽汲上池（山僧固より厭う滄浪の独なるを 一碗の春芽（茶葉）上池より汲む）」²⁵とあり、大典が葛子琴の誘いを受け、子琴の書斎の御風楼に赴いたことを述べている。御風楼は大川（淀川）に近いため、上質の水が容易に手に入り、煎茶に最適である。大典は煎茶の用水に特に心得がある人である。そのため、いい水のある場所を探求するために、よく各地を旅していた。

【56】「夏晚携子承稚明納涼二条河移床水中煎茶為娛（夏晚、子承と稚明を携えて二条河に納涼す。床を水中に移して茶を煎じて娛と為す）」に「茶入幽期堪弄水、松生爽吹已知秋（茶は幽期に入りて水を弄るに堪え、松は爽吹（爽やかな風）を生じて已に秋を知る）」²⁶とあり、大典は弟子浦子浦および親友稚明禪師と一緒に、暑い夏の夜に京都二条河の畔で水遊びをし、煎茶を楽しんだことを述べている。

【75】「琉璃瓶、近有一種製、遇火不破、可用煖酒。一日與客試用煎茶、紅火逼映、斯須沸騰、而茶之禁翻、湯之變緑、皆歴歴透徹、亦佳戲也、因同題（琉璃瓶（ガラス瓶）、近くに一種の製有り、火に遇いて破れず、煖酒（酒をあたためる）に用いる可し。一日、客と試しに茶を煎ずるに用い、紅火逼映（日が照り輝くこと）して、^{しばらく}斯須にして沸騰し、而るに茶の禁翻（茶葉の乱れて翻るさま）、湯の緑に変わること、皆歴歴（歴然）として透徹し、亦た佳戲なり、因りて同題す）」に「急湍濺沫魚兒集、驟雨漂流蟻子忙。不数崑崙称火浣、瓊漿汲処轉清凉（急湍濺沫 魚兒（茶葉の喩え）集まり、驟雨漂流 蟻子（茶葉の喩え）忙し。数えず 崑崙（中国の山名）火浣（火浣布、耐火性の織物）を称するを、瓊漿（美酒）汲む処 ^{うた} 転た清凉なり）」²⁷とあり、大典が当時の新製のガラス瓶を手に入れ、客人と一緒に煎茶に試用したことを述べている。透明の琉璃瓶を通して、

²⁵ 『小雲棲稿』卷三。

²⁶ 『小雲棲稿』卷三。

²⁷ 『小雲棲咏物詩』卷下。

瓶中の茶葉の美しい姿がよくわかる。この琉璃瓶を試すという発想から、私たちは当時の煎茶を嗜む人々の性格が窺えよう。彼らは古来の規則や古い茶器に拘らず、新式の茶器に挑戦して積極的に喫茶の実践に取り入れていたことがわかった。

【106】「雨中煎茶示二三子（雨の中に茶を煎じて二三子に示す）」に「祇応将爾輩、煮茗一炉風（祇だ応に爾の輩を^{ひき}将いて、一炉風に茗を煮ん）」²⁸とあり、雨の中で二三人の弟子とともに煎茶席を開いたことを述べている。

【111】「早春夜策禅見過得韻迎字（早春の夜、策禅に過ぎらる。韻迎の字を得たり）」に「剪灯禅室静 煎茗寿泉清（灯を剪りて禅室は静かなり 茗を煎じて寿泉清し）」²⁹とあり、弟子仙崖中策は早春の夜に、大典の禅室を訪ね、二人が静かな部屋の中で、清らかな寿泉の水を汲んで茶を煎じた場面を述べている。

以上の例より、大典は積極的に周辺の友人・弟子と煎茶席を開いたことがわかる。また、大典のように煎茶を嗜む人が京都・大坂に多くいたことも推測できる。したがって、京都・大坂は最初に煎茶の文人趣味を受け入れ、最初に文学世界に煎茶関連の書物を生み出した地域といえる。また、煎茶書はその産物である。例えば、最初の煎茶書『青湾茶話』の作者大枝流芳は京都出身で、のちに大坂で隠居生活をおくった文人である。また、最も著名な煎茶書『清風瑣言』の作者上田秋成も京都で隠棲している間に煎茶書を書き始めた。このような、文人間の高雅な喫茶交遊活動が京都・大坂地域の人々の煎茶への関心を高めたのである。

さらに、大典の茶詩に記録された同席者について、『日本人名大辞典』などを利用して身分調査を行い、その結果を次の「大典禅師の茶詩の詩題に見える人名」一覧表に整理した。この一覧表によって、大典の茶席の同席者の身分、出身地などを確認でき、大典の交遊圏の様子が窺える。

²⁸ 『北禅詩草』巻四。

²⁹ 『北禅詩草』巻四。

大典禪師の茶詩の詩題に見える人名³⁰

	詩題に見える人名	名前	職業	出身地
1	万浪	万浪照達	禅僧	京都
2	薬樹／聞中	聞中浄復	禅僧	伊勢（三重）
3	高居士／高翁	売茶翁高遊外	禅僧	肥前（佐賀）
4	賢公	不詳	不詳	不詳
5	士新	宇野明霞	儒者	京都
6	世肅	木村兼葭堂	儒者	大坂
7	孝秩	片山北海	儒者	大坂
8	渡村二子	不詳	不詳	不詳
9	藤二君	不詳	不詳	不詳
10	福承明／承明	福原承明	儒者・医者	大坂
11	西村氏	西村古愚	儒者	不詳
12	子玄	賀川玄悦	医者	京都
13	北村氏	不詳	不詳	不詳
14	春江和尚	不詳	禅僧	京都
15	藤村氏	不詳	不詳	不詳
16	河野氏	不詳	医者	不詳
17	神州和尚	不詳	禅僧	不詳
18	子承	浦世績	医者	石見（島根）
19	希高	不詳	禅僧	不詳
20	希逸	不詳	禅僧	不詳
21	維宣上人	維宣和尚	禅僧	不詳
22	岡生／公翼	岡公翼	儒者・医者	大坂
23	子章	織田南豊	画家	京都
24	玄翹師	不詳	禅僧	肥前（佐賀）
25	大潮	大潮元皓	禅僧	肥前（佐賀）

³⁰ 名前・職業・出身地の確認については、主に以下の典拠による。小島文鼎著、『大典禪師』、国立国会図書館蔵本（請求番号 570-89）、1927。大槻幹郎・加藤正俊・林雪光、『黄檗文化人名辞典』、1988。上田正昭・西澤潤一・平山郁夫、三浦朱門編、『日本人名大辞典』、講談社、2001。

26	麗王	細川半齋	儒者	伊勢（三重）
27	浚明	青木夙夜	儒者	京都
28	子葉／子琴	葛子琴	儒者・医者	大坂
29	稚明	上田爽	儒者	大坂
30	秋卿	藤元穡	儒者	伊勢（三重）
31	百煉	福原百煉	医者	大坂
32	僧膺	不詳	禅僧	不詳
33	玄通	不詳	禅僧	不詳
34	菅公	高辻家長	公卿	京都
35	梅叟	不詳	不詳	不詳
36	子明	内田子明	儒者	不詳
37	養先	不詳	不詳	不詳
38	種	不詳	禅僧	不詳
39	君孝	沢田永世	儒者	伊勢（三重）
40	松源上人	不詳	禅僧	京都
41	東睿大王	公遵法親王	中御門天皇の第 二皇子	京都
42	喆子	景先顯喆	禅僧	京都
43	策／策禅	仙崖中策	禅僧	大坂
44	瑄	不詳	禅僧	不詳
45	藤諤卿	不詳	不詳	不詳
46	冥鴻歳寒二尊者	不詳	禅僧	不詳
47	烈風主人	不詳	不詳	不詳
48	晴雲和尚	不詳	禅僧	不詳
49	樸寔二子	不詳	不詳	不詳
50	南堂上人	天竜南堂禅師	禅僧	京都
51	南昌尊者	不詳	禅僧	不詳
52	君栗	平君栗	不詳	尾張（愛知）
53	六如上人	六如慈周	禅僧	近江（滋賀）
54	栗齋丈人	内山栗齋	不詳	大坂
55	島田亭主人久保氏	不詳	不詳	対馬（長崎）
56	天圭禅士	不詳	禅僧	不詳

57	維明	維明上人	禅僧	不詳
58	新州	新州上人	禅僧	不詳
59	子济	春日亀政美	儒者	不詳
60	栄禅	不詳	禅僧	不詳
61	雪岡陽峰二上人	不詳	禅僧	不詳
62	伯寧	不詳	不詳	不詳
63	仲用	千賀氏	医者	不詳
64	藤井丈人	不詳	不詳	不詳
65	世吉生	畑世吉	不詳	不詳
66	雪暁穎腆二子	不詳	不詳	不詳

大典の茶詩から確認できる人名は60人を超えている。それでは、大典の煎茶を実際に体験して彼の煎茶精神に触れた人が少なくないと推測できる。その中で、本名や通称を確認できるのは36人、そして身分を確認および推測できるものは49人である。大典の喫茶交遊の相手は禅僧が一番多く、29人が確認できた。その次は儒者であり、13人が確認でき、ほとんど片山北海の混沌社関係の文人である。それ以外には医者も多いが、これは本草学が発達した江戸時代において、相当の漢学素養を持つ医者が多くいたためであろう。さらに、高辻家長、公遵法親王のような貴族や王族と同席したことも見られる。出身地については、京都・大坂地域出身の人がほとんどであり、とくに京都と大坂出身の人が多い。京都出身は11人、大坂出身は9人であり、大典の喫茶交遊の活動範囲が京都・大坂地域に集中していたことは明らかである。それ以外にもう一つ注目すべきなのは、片山北海、木村兼葭堂を代表とする儒者文人たちと、六如慈周をはじめとする禅僧は、当地の文化に強い影響力を持った人物であるため、彼らの参与により煎茶文化が幅広く普及した、ということである。

第三節.大典禅師の喫茶交遊

本節では、大典の各時期の茶詩を分析し、その中で特に注目すべき交遊の同席者を取り上げ、喫茶交遊の実態を詳細に考察したい。代表として取り上げたいの

は大典の師匠宇野明霞、同門の師弟片山北海、また年下の門人聞中浄復である。この三人との交遊を通して、大典の煎茶における習得・普及・伝承という三つの重要な時期の姿が垣間見える。宇野明霞との交遊は、大典の煎茶の始まりであり、きっかけでもある。また、片山北海との交遊によって、大典の煎茶の影響力は京都・大坂地域に拡大した。さらに、聞中浄復との交遊によって、大典の煎茶が江戸後期の茶人に多大な影響を及ぼした。このような喫茶交遊活動は、江戸時代の煎茶家の日常生活の縮図だといえる。

一. 宇野明霞との喫茶交遊

先述の通り、大典と売茶翁の交友関係は、彼の漢詩の師匠の宇野明霞を通して結ばれたといわれる。宇野明霞、名は鼎、字は士新、通称は三平、号は明霞である。向井滄州に師事し、最初は荻生徂徠の学説を奉じたが、のちに折衷派の説を取り、独自の一家の説を立てた。弟士朗がおり、二人は平安二字先生と呼ばれていた。門下に大典のほか、竜草廬、赤松滄州、片山北海、高辻家長、武田梅龍などがいた。著書に『論語考』六卷、『左伝考』三卷、『明霞先生遺稿』八卷などがある。

明霞は、かつて大潮元皓に従って漢詩を学んだことがあり、二人は親友であり、元皓の法兄の売茶翁とも関係を保っていた。『明霞先生遺稿』の中には、「月海禅師暫還肥前（月海禅師暫く肥前に還る）」、「売茶翁詩題贈月海老禅師（売茶翁詩、題して月海老禅師に贈る）」、「重贈月海禅師（重ねて月海禅師に贈る）」、「謝月海禅師見貽橘子（月海禅師橘子を貽らるるに謝す）」³¹など明霞と売茶翁との親厚な友情がみえる詩がある。また、明霞は「煮茗歌」という茶詩を残しているため、自身も煎茶に高い興味を持っていたことがわかる。大典も宇野明霞の門下で学ぶ際、売茶翁と接触する貴重な機会を得た。

例えば、『昨非集』に【10】「売茶翁携茶具訪士新先生、煎茶飲之、余亦与焉。席上奉贈先生（売茶翁茶具を携えて士新先生を訪ね、茶を煎じて之を飲む。余も

³¹ 宇野明霞、『明霞先生遺稿』、早稲田大学図書館蔵本。

亦たこれに与る。席上先生に奉じて贈る)」があり、「蕭然茶鼎竹林旁、朝夕風烟颺草堂。為是人間少相賞、携来今日與君嘗（蕭然たり 茶鼎竹林の旁、朝夕風烟草堂に颺ぐ。是れ人間少なく相い賞する為に、携え来りて今日君に嘗せしむ）」³²とあり、ある日、売茶翁が茶具を持って宇野明霞を訪問し、大典が明霞を同伴して売茶翁の煎茶席に参加したことを述べている。茶鼎を静かに竹林の傍に置き、朝から夕方まで風と茶煙は明霞の草堂の上に漂っていた。翁の茶を玩賞できる人は少ないが、明霞と大典は翁の茶を珍重する人だから、特別に宅に招いて味わわせよう、といった趣である。

この茶席については『明霞先生遺稿』にも記録が見える。「売茶翁僑居相国寺。九月八日為余荷茶具来、大典禅師伴之、有詩見贈。乃賦以謝翁、兼酬禅師（売茶翁は相国寺に僑居す。九月八日余が為に茶具荷して来たり、大典禅師之に伴し、詩ありて贈らる。乃ち賦して以て翁に謝し、兼ねて禅師に酬す）」³³とある。全部で3首あり、次の通りである。

其一

九日陶家載酒来 九日陶家（酒屋）酒を載せて来たり

携僧煮茗席先開 僧を携えて茗を煮て席は先に開く

白蓮坐入林中社 白蓮坐り入る林中の社

黄菊寧思籬畔杯 黄菊寧ぞ思わん 籬畔の杯

其二

³² 『昨非集』卷坤。

³³ 『明霞先生遺稿』卷五。

茶味芬芳添爽氣　茶味は芬芳として爽氣を添え
詩篇慷慨起清風　詩篇は慷慨として清風を起こす
旧病暫得遊塵外　旧病して暫く得たり　塵外に遊するを
高臥何妨在市中　高臥して何ぞ妨げられんや　市中に在るを

其三

年年病裏感秋深　年年病裏　秋深きを感じ
叢菊秋深転不禁　叢菊　秋深くして転た禁せず
此日逢君俱啜茗　此の日君に逢いて俱に茗を啜り
玩芳非復楚臣心　芳を玩びて復た楚臣の心に非ず

明霞の詩によれば、売茶翁は肥前から京都まで来て相国寺にしばらく滞在した。某年の9月8日、茶具を運んで私（明霞）の家を訪ねてきた。大典禅師も付き合ってくれた。詩を贈ってくれたため、明霞も3首を作って感謝の意を表した、とのことである。一首目に「九日陶家載酒来、携僧煮茗席先開」とあり、9月9日に陶淵明のように重陽節を祝っている人々が酒を届ける予定だが、8日に売茶翁が先に茶を持ってきた、と述べている。茶も酒も、隠棲中の明霞の大好物である。二首目に「茶味芬芳添爽氣、詩篇慷慨起清風」とあり、茶席は愉快的な雰囲気であり、三人は楽しみ、興に乗じて詩を作り始めたことを述べている。また、二首目に「旧病暫得遊塵外」、三首目に「年年病裏感秋深」とあり、明霞は長年持病があったので、自由に外出できず、毎年秋になると寂しく感じていたが、このときは、売茶翁がわざわざ茶具を持ってきて茶席を開いてくれて、心から嬉しくて感謝している、と述べている。上記の詩を通して、大典と明霞と売茶翁の三

人の深い友情が窺える。

二. 片山北海との喫茶交遊

片山北海は明霞の門下であり、大典の師弟である。名は猷、字は孝秩、通称は忠藏、号は北海である。幼い頃から頭がよくて記憶力が抜群といわれ、若い頃から明霞に従って詩を学んだ。明霞が亡くなった後、ほかの門人の誘いで大坂へ引っ越した。「北海先生片君墓碣銘」に「性好音楽、善笛、其伎盖不下伶官云。又嗜茶事、有雅澹之賞。君既閑靖、无意乎当世（（北海）性は音楽を好み、笛を善くし、其の伎蓋し伶官（芸者）に下らず。又た茶事を嗜み、雅澹（高雅淡泊）の賞有り、君は既に閑靖（静かで上品な性格）にして当世に意無し）」³⁴とある。片山北海も明霞の影響を受けて煎茶を好んだ。北海の名は頻繁に大典の詩集に現れ、二人は畢生の親友である。また、『小雲棲稿』では北海に関わる茶事の記録が一番多く、大典の同門の親友のなかでも一番積極的に煎茶席を開いた友人であったのであろう。具体的な詩例は以下の通りである。

【24】「孝秩設茶見招同諸子賦得静字（孝秩茶を設けて招かれ、諸子と賦し、静の字を得る）」に「青松釜底風、紅葉窓間影（青松 釜底の風、紅葉 窓間の影）」³⁵とあり、北海は大典を含めて多くの賓客を招いて茶会を開き、茶釜の下の薪の音を聞きながら、窓の外にある鮮やかな花を觀賞し、諸子と一緒に詩を作った、という場面を述べている。

【46】「孝秩茶室同岡生賦得諧字（孝秩の茶室岡生と賦す。諧の字得たり）」に「高談従茗熟、逸興入詩佳。儒服乃交態、僧伽亦雅懷（高談は茗熟に従い、逸興は詩に入りて佳し。儒服（儒者）乃ち交態（常態）、僧伽（僧侶）も亦た雅懷なり）」³⁶とあり、大典は友人の岡公翼と一緒に北海家の茶室で詩を作り、茶を煎じながら、遠慮無く話し合うことができた。そして、脱俗の興味を詩の中に書

³⁴ 『北禅遺草』巻六。

³⁵ 『小雲棲稿』巻一。

³⁶ 『小雲棲稿』巻二。

き込み、いい作品ができあがったことを述べている。また、「儒服乃交態、僧伽亦雅懷」の句を通して、三人のように、儒者と僧侶が同席して煎茶を楽しみながら詩を作る中国文人風の高雅な生活が、当時では珍しいことではなかったことも述べている。

【47】「孝秩設茶見招與子章承明同至主人指瓶中梨花乞詩共賦得韻墻字（孝秩茶を設けて招かれ、子章承明と同に至る。主人は瓶の中の梨花を指して詩を乞い、共に賦して韻墻の字を得る）」に「冷艶紅炉外、清芳玉饌旁（冷艶たる紅炉の外、清芳たる玉饌の旁）」³⁷とある。北海は大典、織田子章、福原承明を誘い茶席を設け、屋内の瓶の梨花を題にして三人に詩を作ってもらった、という場面である。このように、茶席の途中に即興で詩を作ることが、当時の京都・大坂文壇ではよくみられた。煎茶席は彼らにとって、漢詩をよむのに都合のいい場所であった。

ところで、片山北海といえは混沌社について言及しなければならない。混沌社は明和2年（1765）に片山北海を盟主として大坂で結成された漢詩結社である。細合半齋・中井竹山・柴野栗山・高芙蓉・木村兼葭堂・頼春水などの社友がおり、自由な交遊サロンとしての役割を果たした。頼春水は混沌社の活動について、「社友相会、交際甚昵、浪華之俗、酒餽極豊、拈韻賦詩於杯盤交錯間、各言爾志（社友相会し、交際は甚だ昵（親近）なり。浪華の俗、酒餽は極めてめ豊かにして、杯盤交錯（宴会が盛り上がる様子）の間に韻を拈じて詩を賦し、各爾の志を言う）」³⁸と述べ、北海は混沌社の盟主として、常に大人数の宴会や出遊を計画していたことがわかる。大典も大坂へ行き、積極的に参加したため、混沌社の社友とは親密な関係を持っていた。

例えば、【65】「四月三日、百鍊孝秩諸子、為余命舩中津、遡至三頭、南廻而友、遨遊終日、人齎饌具、相得驩甚、盖以余病久、在茲歸思促促、乃為諸子憇憑、如不得已者、及至放棹中流、汎汎乎、與鳧鷗上下、北蔭崇禪松林、南揖百雉、風詠而歸也、浩然我思、不復知身之何在、諸子奏笙管、一闕山水清音、洋洋盈耳哉、吾不可不以報也、乃作十絶句（四月三日、百鍊孝秩の諸子、余が為に舩を中津（大

³⁷ 『小雲棲稿』卷二。

³⁸ 『春水遺稿別録』卷一。

阪中津)に命じ、遡りて三頭に至る。南廻して友とし、遨游して終日なり。人ごとに饌具を齎し、相い得て甚だ驩(歡)ぶ。蓋し余病みて久しく、茲に在りて帰思は促促(せきたてるさま)たり、乃ち諸子に慫慂せらるを以てし、已むを得ざるが如し。棹を中流に放ち、汎汎として鳧鷖と與に上下し、北のかた崇禪(大阪崇禪寺)の松林に蔭し、南のかた百雉にをし、風詠して帰るに至るに及びて、浩然たる我が思い、復た身の何に在るかを知らず。諸子は笙管を奏し、一闕山水の清音、洋洋として耳に盈つ。吾以て報せざる可からず、乃ち十絶句を作る)」³⁹という長い詩題があり、某年の4月3日における混沌社の集団出遊を記録している。福原百鍊と片山北海を主催者として、病中の大典のために舟を用意して一日中淀川の観光を行った。諸子は舟の中で景色を眺めたり、宴会を開いたり、演奏をしたりし、とても賑やかで楽しかったという。大典は混沌社の社友たちに感謝の気持ちを表すために、全部で十首の絶句を作った。10首中8首が同行者に贈呈したものである。詩題によって、福原百鍊、片山北海、内田子明、福原承明、木村兼葭堂、岡公翼、葛子琴と正平が参加したことがわかった。五首目の「贈子明(其の五、子明に贈る)」に「山茗便随禅境去、岸花猶入醉卿看(山茗 便ち禅境に随いて去り、岸花 猶お醉卿に入りて看る)」⁴⁰とあり、内田子明が自分のために茶を持ってきて川の上で茶席を開いたことを述べている。

【25】「余在福承明家、三月晦日、邀孝秩諸子興余供茶、同賦得門字(余は福承明の家に在り、三月の晦日、孝秩諸子を邀えて余と茶を供す。同に賦して門の字を得たり)」に「閑話同茶味、清齋異簋飧(閑話 茶味を同にし、清齋 簋飧(簋飧。簋、穀類を盛る器)を異にす)」⁴¹とあり、大典が福原承明の住所で、三月三十日に北海たちを誘って茶席を開いたことを述べている。

【52】「余遊浪華、至之日、風寒為疾、擁塞在世肅家、不能周咨社中諸子。一日、浚明、公翼、子栞前後來問、乃作詩相贈。既有懷孝秩、麗王、承明、賦以具

³⁹ 『小雲棲稿』卷五。

⁴⁰ 『小雲棲稿』卷五。

⁴¹ 『小雲棲稿』卷一。

列、聊以遣悶（余は浪華に遊び、至るの日、風寒疾を為し、擁塞（お邪魔する）して世肅の家に在り、社中諸子に周咨（挨拶）すること能わず。一日、浚明、公翼、子栞（琴）前後に来たりて問い、乃ち詩を作りて相贈る。既に孝秩、麗王、承明を懐すること有り、賦して以て具列し、聊かに以て悶を遣す）」⁴²とある。ある日、大典が大坂へ遊びに行った時、風邪を引いたため、仕方なく木村兼葭堂の家で療養することになった。混沌社の社友が次々に挨拶にきて、詩を作って大典に贈った。また、大典が病中に北海、麗王と承明を思い出したため、各人に詩を作って贈ったことも述べている。全部で八首の詩で構成され、一首目以外はそれぞれ混沌社の社友を指名して作った作品であり、「贈子琴」・「贈公翼」・「贈浚明」・「贈世肅」・「懐孝秩」・「懐麗王」・「懐承明」の七首である。その中の「懐孝秩」に「小窓清静茶応熟、古楽優游曲幾催（小窓清静 茶応に熟すべく、古楽優游 ^{いくたび} 曲幾か催せん）」とあり、北海家の茶室を詠んでいる。

【54】「早春來浪華舍世肅氏、孝秩見過、主人留供、先是孝秩有信未発、遂手見致、且投詩言意、次韻酬之、併及所聞近況云（早春浪華に来たりて世肅氏に舍す。孝秩に過ぎられ、主人留供す。是より孝秩信有りて未だ発せず、遂に手に致せられ、且つ詩を投じて意を言う。韻を次いで之に酬し、併せて近況を聞く所に及ぶ）」に「桃園日暖催高宴、茶室風廻思静居（桃園 日暖かくして高宴を催し、茶室 風廻りて静居を思う）」⁴³とあり、早春、大典は大坂へ行って木村兼葭堂の屋敷に宿泊し、その間に北海が訪ねてきて、三人が兼葭堂家の桃園で宴会を開催し、また兼葭堂の茶室で茶会を開いたことを述べている。北海はまだ大典に出せていなかった手紙があったため、その場で渡して同時に詩も作って大典に送った。大典も詩を作って返し、近況について報告した、とのことである。

【61】「世肅為余買舟遊墨江、相携者孝秩僧膺及二童子也。世肅則以疾不往（世肅は余が為に舟を買って墨江を遊ぶ。相携者は孝秩、僧膺及び二童子なり。世肅は則ち疾を以て往かず）」に「二八当壚女、茶烟迎客到（二八（16才）壚に当た

⁴² 『小雲棲稿』卷三。

⁴³ 『小雲棲稿』卷三。

る女、茶烟 客の到るを迎える)」⁴⁴とあり、木村兼葭堂は大典のために舟を貸し切って墨江（大阪住之江）に遊ぶ予定で、北海と膺という僧人を誘って同行したが、自分が病気で行けなくなったことを述べている。

以上、大典と北海および混沌社の社友との文人交遊活動の実態が窺える。大典と北海はともに宇野明霞の弟子であり、二人は先生から強い影響を受けて売茶翁の煎茶を日常生活に積極的に取り入れていたことがわかった。おそらくそれは、煎茶という行為が中国文人らしい行動だと認識していたためであろう。実際、煎茶席を開くことは北海をはじめとする混沌社の社員たちに漢詩創作の場所と集まる理由を提供し、互いに漢詩の実力を高め、文人交流を深める機会を与えたのである。

三. 聞中浄復との喫茶交遊

大典の詩集の中には、門下の弟子と一緒に煎茶を行った記録が多い。その中でも、よく彼の茶席に同席した弟子が聞中浄復、景先顕喆、仙崖中策の三人であった。景先顕喆と仙崖中策の同席の記録については、【96】「冬日携喆子遊旧院、策禅亦来同赋（冬日喆子を携えて旧院を遊び、策禅も亦た来たりて同に賦す）」⁴⁵、【102】「策瑄二公見邀、携喆子同席上赋贈（策瑄二公に邀えられ、喆子を携えて同席上赋贈す）」⁴⁶、【111】「早春夜策禅見過得韻迎字（早春の夜、策禅に過ぎられ、韻迎の字を得たり）」⁴⁷、【113】「有人送饌具與花枝、邀策禅同赋得篁字（人有りて饌具と花枝を贈る。策禅を邀えて同に賦して篁の字を得たり）」⁴⁸、【118】「過喆策二子有供、卒詠（喆策に過ぎて二子供有り、卒に詠ず）」⁴⁹、

⁴⁴ 『小雲棲稿』卷四。

⁴⁵ 『北禅詩草』卷三。

⁴⁶ 『北禅詩草』卷四。

⁴⁷ 『北禅詩草』卷四。

⁴⁸ 『北禅詩草』卷四。

⁴⁹ 『北禅詩草』卷五。

【138】「暁雪歩憩後亭、偶興、示喆子臥病（暁の雪に歩いて後亭に憩し、^{たまたま}偶興じて喆子の病に臥するに示す）」⁵⁰などに見られる。今回、主に取り上げて考察したいのは、大典との付き合いが一番長かった聞中浄復である。

聞中浄復、道号は聞中、字は薬樹、法諱は浄復、浄王、徳復、衍復、契復と称す。別号は小溪、大芝、幻処、大耳などである。宝暦8年（1758）に大典に従学し、当時は20才だった。翌年、木村兼葭堂の依頼を受け、大典の詩を集めて『昨非集』の編集を手伝い、また跋を寄せた。大典の詩集の中には、聞中との付き合いの記事が多く見られるため、一番親交のあった弟子だといえる。大典と聞中の同席記録は以下の通りである。

【4】「万浪薬樹二子、近寄錫慶雲、一日見招佳饗、席上賦贈（万浪薬樹二子、近寄錫慶雲、一日見招佳饗、席上賦贈）」に「四隣寒竹色、一鼎颺茶烟（四隣 寒竹の色、一鼎 茶烟を颺ぐ）」⁵¹とあり、万浪照達と聞中浄復が相国寺中の慶雲院で掛錫（禅僧が僧堂に滞在し修行すること）した時、宴会で大典と出会い、席上で大典に詩を贈られたことを述べている。

【16】「與聞中遊双林靈山清水諸地煮茗（聞中と双林靈山清水の諸地に遊び、茗を煮る）」に「淹留相啜茗、落日向山隅（淹留（一か所に長い間とどまる） 相い茗を啜り、落日 山隅に向く）」⁵²とあり、大典と聞中が双林山（京都天台宗双林院の付近）でいい水を探して茶を煮たことを述べている。

【17】「與聞種二子携茶具遊東岩石蔵（聞種二子と茶具を携えて東岩の石蔵を遊す）」に「茶烟連夕靄、松子落天風（茶烟 夕靄に連なり、松子 天風に落つ）」⁵³とあり、大典が聞中と種（身分未詳）という弟子、三人で一緒に茶具を持って東岩の石蔵を遊覧し、そこで茶事を行ったことを述べている。

【18】「和聞中雪中作（聞中の雪中の作に和す）」に「最好閑生計、芳茶此共

⁵⁰ 『北禅遺草』卷一。

⁵¹ 『昨非集』卷乾。

⁵² 『小雲棲稿』卷一。

⁵³ 『小雲棲稿』卷一。

煎（最も好む 閑生計を、芳茶 此れ共に煎ず）」⁵⁴とあり、大典が聞中と香ばしい茶を煎じ、聞中の「雪中作」の詩に唱和したことを述べている。

【32】「聞中携饌具見訪賦謝（聞中饌具を携えて訪ねられ、賦して謝す）」に「清斎何以報、茶菴向君煎（清斎 何を以て報じ、茶菴 君に向けて煎ず）」⁵⁵とあり、聞中が膳立に用いる食器と美味しい精進料理を持ってきて、大典が感謝の気持ちを表すために茶を煎じて接待したことを述べている。

【44】「宿理即院贈聞中（理即院に宿して聞中に贈る）」に「徐榻懸猶在、趙茶供且留（徐榻懸けて猶お在ち、趙茶供して且く留む）」⁵⁶とあり、「徐榻」は「徐稚榻」の略で、来客を大切にもてなす意味である。後漢の時、もともと訪客を好まない太守の陳蕃が徐稚一人のためだけに榻（寝台）を準備したという典故に拠る。「趙茶」は「趙州茶」の略で、禅家の茶を指す。唐代高僧趙州從諗の「喫茶去」という典故に拠る⁵⁷。大典が理即院（京都左京区山端理即院）に宿泊した際に、聞中と一緒に茶を飲みながら、詩を贈ったことを述べている。

【83】「聞中上人見訪留宿卒賦（聞中上人訪ねられ、留まりて宿す。卒に賦す）」に「寂歴古禅房、茶烟一室揚（寂歴たる古禅房、茶烟 一室に揚ぐ）」⁵⁸とあり、聞中が大典を訪ねてきたとき、大典は聞中を宿泊させ、二人は古い禅房で茶を飲んだことを述べている。

聞中は長年大典と交遊し、大典の茶をよく知っていた。そのため、聞中は売茶翁の茶についても一番詳しい人と世間に思われていた。例えば、江戸時代後期の公卿一条忠香から最初の煎茶家元の称を贈られた田中鶴翁（花月庵）は、聞中に師事して喫茶法を学んだため、売茶翁の正統の煎茶法を学んで翁の遺風を受け継いだと宣伝していた。その後、「清風流」という煎茶道の流派を興したが、これは煎茶道流派としては小川流と並んで最も古い流派であり、「宗匠茶」の代表

⁵⁴ 『小雲棲稿』巻一。

⁵⁵ 『小雲棲稿』巻二。

⁵⁶ 『小雲棲稿』巻二。

⁵⁷ 徐稚榻については、『後漢書』巻53 列伝43の徐稚伝を参照。趙州茶については、今日庵茶道資料館監修、『茶道文化検定公式テキスト 1級2級用』、淡交社、2015年、p.145。を参照。

⁵⁸ 『北禅詩草』巻二

格とされる。そこにおいて、従来抹茶を中心に用いられた茶道とは異なる「煎茶道」の概念がはじめて日本に現れたのである。

また、江戸時代後期の漢詩人館柳湾も大典と聞中の影響を受けて、煎茶に強い興味を示し、大典の次世代の煎茶の流行に大きく貢献した。館柳湾は、越後の人、名は機、通称は雄二郎、号は柳湾、賞雨老人。晩年は江戸の目白台で隠棲生活を送り、漢詩で名高い。著に『柳湾漁唱』、『林園月令』、『四詠唱和』、『詠茶詩録』などがある。『柳湾漁唱』の中からは、多くの煎茶詩が見つかった。館柳湾は江戸を中心に活躍した煎茶人である。『四詠唱和』と『詠茶詩録』は彼が抜粋した歴代中国の茶詩を収録した作品である。また、椿々山の『煎茶小集』と山本徳潤『煎茶小述』にも、館柳湾と息子館霞舫が同時に題詩と題画を寄せた。煎茶書の出版に積極的に関与した人物である。柳湾と聞中の交遊については『柳湾漁唱』に見られる。

たとえば、「寄呈聞中禪師乞茶 自注：師時在宇治（聞中禪師に寄せ呈して茶を乞う 自注：師は時に宇治に在り）」⁵⁹に「報師休説頻伽鉢、近日茶餅也貯空（師に報ず 頻伽（迦陵頻伽、仏教の伝説中の鳥）鉢を説くを休めよと、近日茶餅（茶葉を蓄える容器）も也た貯え空なり）」とあり、柳湾が聞中に手紙を送って宇治茶を乞うたことを述べている。宇治の茶葉は最高級の茶葉というのは、江戸時代の茶人たちの共通認識である。

また、「聞中禪師久在京師、不得相見十七年矣。丙戌之夏、飄然東游、蒙來訪弊舎、席上話次賦三絶句奉呈（聞中禪師久しく京師に在り、相見るを得ざること十七年。丙戌の夏、飄然として東游し、弊舎を來訪するを蒙る。席上話次、三絶句を賦して奉呈す）」とあり、その三首目に「相別相逢感旧因、虚窓煮茗話相親（相い別れ相い逢いて旧因を感じ、虚窓茗を煮す 話相い親し）」⁶⁰とあり、文政9年（1826）の夏、聞中禪師が17年ぶりに江戸へ行って館柳湾を訪ねてきたが、二人は茶席を開いて別れた後の状況と再会後の気持ちを親しく話し合った、と述べている。ここから、二人の親厚な友情が見えよう。このような聞中と柳湾

⁵⁹ 館柳湾、『柳湾漁唱』。

⁶⁰ 館柳湾、『柳湾漁唱二編』。

の交遊によって、大典から受け継がれた煎茶の茶法が京都・大坂地方から関東地方にも伝わり、売茶翁と大典の茶法が伝承された、ということが言えよう。

以上のように、大典は宇野明霞と売茶翁との交遊を通して最新の煎茶法を習得し、片山北海をはじめとする混沌社の社友との交遊を経由して煎茶の趣味を京都と大坂に拡大し、さらに弟子聞中浄復を通して次世代の煎茶人を育てたことがわかった。このように、大典とその交友関係を通じて、江戸時代中期における煎茶の普及の過程が見えてくるのである。

おわりに

本文は、江戸時代の漢詩集について、煎茶研究における煎茶書の補足資料としての価値を示した。大典禅師の漢詩集『昨非集』、『小雲棲稿』、『小雲棲詠物詩』、『北禅詩草』、『北禅遺草』などの作品中の詠茶詩の考察によって、江戸時代の文人間の煎茶交遊について新しい視点と情報を提示することが出来た。また、詠茶詩への調査によって大典の茶席の同席者の身分を確認した上で、彼の喫茶交遊の姿を明らかにした。最後に、宇野明霞、片山北海、聞中浄復に関わる詠茶詩を通して、江戸時代の煎茶家の交際の実態を考察した。ここから、江戸文人の漢詩集は煎茶書の研究にとって重要な資料であったといえる。

附録

大典禪師の漢詩における茶事関連表現一覧表⁶¹

大典禪師の漢詩における茶事関連表現一覧表				
通し 番号	詩題	茶に関連する部分	出自	巻数
昨非集 宝暦9年(1759) 収録範囲：宝暦9年(1795)まで				
1	元日	炉撥去年火 鼎煎新歳茶	昨非集	乾
2	庚午二月十四日洛下諸彦見 会同賦得香字	地偏千畝竹 日永一炉香	昨非集	乾
3	歳杪同諸子会松鷗得青字	緑茶禅味異 彩筆梵雲停	昨非集	乾
4	万浪葉樹二子近寄錫慶雲一 日見招佳饗席上賦贈	四隣寒竹色 一鼎颺茶烟	昨非集	乾
5	寄題補陀洛伽山十首 其七	樹色春深罔淨刹 茶烟秋冷散禅棲	昨非集	乾
6	大雪夜高居士携安田氏見過 情話謝之	掃雪門前迎鶴斃 敲水瓶裡煮童团	昨非集	乾
7	夏日與友人遊糾林	緑茗浮盃潔 青荷裹飯香	昨非集	坤
8	西軒有旧礎石径三尺強移諸 庭下命以明月礎偶賦三絶 其二	時携茶甌煮 適見松卵落	昨非集	坤
9	月夜賢公見過	清貧無一事 且坐緑茶杯	昨非集	坤
10	壳茶翁携茶具訪士新先生煎 茶飲之余亦與焉席上奉贈 先生二首 其一	蕭然茶鼎竹林旁 朝夕風烟颺草堂	昨非集	坤
11	同上 其二	芳鮮新發雷溪色 争若当年載酒来	昨非集	坤
12	秋日世肅惠近江茶賦謝三首 其一	别有芳鮮供瓦鼎 風流贏得白蓮人	昨非集	坤
13	同上 其二	蕭条客舍絶将迎 包匭新茶淡海名	昨非集	坤

⁶¹ 本一覧表は大典禪師の漢詩の中から、茶事関連の詩句を抄録したものである。しかし、必ずしもすべてが煎茶詩というわけではない。詩的表現が曖昧であるため、煎茶と抹茶、どちらとも解釈できる場合がある。

14	同上 其三	江流千里大湖來 湖水湖茶賞更開	昨非集	坤
	小雲棲稿 安永4年(1775) 収録範囲：宝暦9年(1795)から安永2年(1773)まで			
15	清静行贈孝秩	時汲江流煎活火 盃中芳緑湊以盈 啜之雋永涼腸胃 況復松風滿座鳴 長夏下帷無客到 逍遙為我煮雲萌 飲罷試拈銀不律 好向千古掇精英	小雲棲稿	一
16	與聞中遊双林靈山清水諸地 煮茗	淹留相啜茗 落日向山隅	小雲棲稿	一
17	與聞種二子携茶具遊東岩石 藏 其二	茶烟連夕靄 松子落天風	小雲棲稿	一
18	和聞中雪中作	最好閑生計 芳茶此共煎	小雲棲稿	一
19	與渡村二子携茶具遊溪上	草坐隨漚轉 茶烟逐吹輕	小雲棲稿	一
20	謝敬上人見訪草廬	相供但茶笋 幸得一逍遙	小雲棲稿	一
21	與友人携茶遊糾林有懷往事	煎茶心且適 藉卉境還幽	小雲棲稿	一
22	對雪	閑來堪試茗 且起煮瓊英	小雲棲稿	一
23	藤二君枉駕山端有命賦詩分 韻多字時余外出君特見埃 故及 又得芳字	煮茗僧供薄 論文儒雅長	小雲棲稿	一
24	孝秩設茶見招同諸子賦得静 字	青松釜底風 紅藥窓間影 瓮賞柿油名 杯知桑落境	小雲棲稿	一
25	余在福承明家三月晦日邀孝 秩諸子與余供茶同賦得門 字	閑話同茶味 清齋異簋飡	小雲棲稿	一
26	將赴浪華逢雨過西村氏留以 供養講余煎茶訣率有此詩 時庭下山茶正花淡紅非凡 云是禁園所出者	隣君甘恬淡 茶笋愛逃禪	小雲棲稿	一
27	乘剡與更惠郢歌余未能報下 澱舟中吟誦次韻四首 其二 自注：理即門前煎茶施行号 棚口亭	棚口稀行客 欲煎特為茶	小雲棲稿	二

28	清玄道見招席上共賦得花字 時清明前一日也	苦駐比丘筏 為開博士茶 松風忽移境 榆火正隨家 味共簋中食 香兼瓶底花 不妨塵坌路 只尺隔窓紗	小雲棲稿	二
29	十月一日雨後過子玄	榻下談逾久 炉開坐始圉	小雲棲稿	二
30	宿蹕尾北村氏乞言因贈以此 其一	齋幽宜秉燭 茶熟當開樽	小雲棲稿	二
31	同上 其二	市塵無染素 茶味可參玄	小雲棲稿	二
32	聞中携饌具見訪賦謝	清齋何以報 茶芽向君煎	小雲棲稿	二
33	初夏世肅見訪留遊數處有詩 酬之	為汲烏溪水 俱嘗兔道茶	小雲棲稿	二
34	春江和尚見招佳饗同諸君賦 得六魚庭有一井名西來泉 沸溢太清	珠樹毫相外 鼎茶禪悅餘	小雲棲稿	二
35	題藤村氏茶室	老去甘閑事 日將茶鼻親雲生疑岫近 風起似 松隣	小雲棲稿	二
36	余借河野生齋頭住數日盖有 所業也生為挹清泉煎高雉 茶給之贈以此詩 自注：河野生業医	碗面浮山味 炉頭起岫雲	小雲棲稿	二
37	訪神州和尚在金福養病見其 高作次韻為贈	齋近逢煎茗 倘伴共解襟	小雲棲稿	二
38	憇清澗山店	開亭臨曲岸 煮茗挹澄潭	小雲棲稿	二
39	瓶中梅花卒賦	春生炉上火 香合碗中茶	小雲棲稿	二
40	宿子家有詩言同棲山端時事 次韻	清談把茗碗 偶坐忘塵寰	小雲棲稿	二
41	秋夜子承見過有詩次韻	但坐瓶中茗 足娛方外遊	小雲棲稿	二
42	逃虛寮與希高希逸同賦得裁 字時待安之不至	絳鉢澗沱飯 綠茶沆瀣杯	小雲棲稿	二
43	維宣上人子玄五天見過得同 字	炉茗消中日 瓶梅座上風	小雲棲稿	二
44	宿理即院贈聞中	徐榻懸猶在 趙茶供且留	小雲棲稿	二

45	九日歸京舟中作	澄江茶可煮 佳節酒無酬	小雲棲稿	二
46	孝秩茶室同岡生賦得諧字	市井元非住 薄言君子諧 高談從茗熟 逸興入詩佳 儒服乃交態 僧伽亦雅懷	小雲棲稿	二
47	孝秩設茶見招與子章承明同 至主人指瓶中梨花乞詩共 賦得韻牆字	冷艷紅爐外 清芳玉饌旁	小雲棲稿	二
48	偶作	清貧只有湖南茗 起拾乾脆瓦鼎煎	小雲棲稿	三
49	玄翹師至自肥受戒黃檗與余 邂逅浪華及余入京師亦戒 滿將西歸問余告別以數 作因留談往事為之愀然賦 送之	綠茗曾陪遊鴨水 赤梢終許躍鼉津 自注：昔者大潮和尚在京也一日與高居士 煮茶糾林為遊而余與鼉津寺在肥之蓮池即 和尚所往	小雲棲稿	三
50	乙酉元日	碗浮雪乳青山茗 窓引香風綻苑梅	小雲棲稿	三
51	仲春麗王來京將欲訪余阻雨 不果而西歸爾後與書信至 酬之	久要曾諳茶笋氣 何嫌松月重盤桓	小雲棲稿	三
52	余遊浪華至之日風寒為疾擁 塞在世肅家不能周咨社中 諸子一日浚明公翼子棗前 後來問乃作詩相贈既有懷 孝秩麗王承明賦以具列聊 以遣悶 右懷孝秩	小窓清靜茶心熟 古樂優游曲幾催 自注：聞近修繕齋室顏以清靜處孝秩好樂 能笛	小雲棲稿	三
53	子琴邀登樓饗給家枕大川汲 以煎茶尤佳席上為贈	山僧固厭滄浪獨 一碗春芽汲上池 自注：子琴家醫	小雲棲稿	三
54	早春來浪華舍世肅氏孝秩見 過主人留供先是孝秩有信 未發遂手見致且投詩言意 次韻酬之併及所聞近況云	桃園日暖催高宴 茶室風迴思靜居	小雲棲稿	三
55	赴浪華至伏水客舍偶遇公翼 西還遂與同舟舟中分韻得 杯字	我有雲芽汲清冷 江湖何謝散人才 自注：言陸龜蒙事	小雲棲稿	三

56	夏晚携子承稚明納涼二条河 移床水中煎茶為娛	茶入幽期堪弄水 松生霜吹已知秋	小雲棲稿	三
57	洞津邂逅秋卿賦贈	竹影瀟瀟扃窓動 茶烟靄靄傍床生	小雲棲稿	四
58	與百鍊孝秩舟遊城東因憶數 十年來往浪華所共嬉遊幾 遭而其間親疏互易存亡有 變獨二君者論交如一日矣 欲作詩以叙所感適逢井生 者隨孝秩至竟成斯詠	港頭繫纜呼皆至 篷底煎茶談共清	小雲棲稿	四
59	城山梅花余所奇愛前既為之 記癸巳之春重遊清涼庵則 梅減三一矣問之民窮所致 云庵主云供茶偶作此詩	碧窓半日山僧與 遮莫榮枯在眼中	小雲棲稿	四
60	壳茶高翁圖	獨出溪橋上 回手看白雲 担頭濟勝具 何處發芬芳	小雲棲稿	四
61	世肅為余買舟遊墨江相携者 孝秩僧膺及二童子也世肅 則以疾不往	二八當壚女 茶烟迎客到 即令杓柄長 那得留貧道	小雲棲稿	四
62	余在慈雲也玄通來寓後院爾 來三載余從運東西而通尚 在焉時還掃塔得與周旋一 日見招供茶賦贈之	清貧且有盈甌茗 解道人間此味稀	小雲棲稿	五
63	三位營公同九条見枉有詩次 韻 其一	清貧只得煎茶葑 敢道家風似趙州	小雲棲稿	五
64	梅叟袖詩見訪不過既有江茶 之貽乃作二絕句謝之 其二	松風瑟瑟起溪瀆 疏懶平生臥白雲 今日因君茶葑貽 移來一鼎更堪聞	小雲棲稿	五
65	四月三日百鍊孝秩諸子為余 命舩中津遡至三頭南廻而 友遨遊終日人齎饌具相得 驩甚蓋以余病久在茲歸思 促促乃為諸子慙慙如不得 已者及至放棹中流汎汎乎	山茗便隨禪境去 岸花猶入醉卿看 自注：子明為余携抹茶來	小雲棲稿	五

	與鳧鷗上下北蔭崇禪松林 南揖百雉風詠而歸也浩然 我思不復知身之何在諸子 奏笙管一闕山水清音洋洋 盈耳哉吾不可不以報也乃 作十絕句 其五贈子明			
66	山科準後宮使至賜菊花菓糕 花皆名品賦此奉謝 其三	併將一鼎雲芽熟 餽饋誰知自大王	小雲棲稿	六
67	養先携佳厨見訪属余出遇諸 塗遂要過富永氏見供卒有 此作	清齋也得途中用 轉覺芳鮮生趙茶	小雲棲稿	六
68	府中有醴泉云泉之国以此水 故方進厨滄因用煮茶	千年靈液国為名 沙磧清冷冲更盈 謾道移封酒泉去 何知一鼎試春萌	小雲棲稿	六
69	壳茶翁水注銘	汰濁抱清 恣其灑落 太盈若冲 君子所酌	小雲棲稿	十
70	壳茶翁吹管銘	大其細 顯其微 汝其勇於為者邪	小雲棲稿	十
<p>小雲棲詠物詩 寬政2年(1790) 収録範圍：寬政2年(1790)まで</p>				
71	進厨滄因用煮茶	謾道移封酒泉去 何知一鼎試春萌	小雲棲詠物詩	上
72	與聞種二子携茶具遊東岩藏	茶烟連夕靄 松子落天風	小雲棲詠物詩	上
73	憇清瀧山店	开亭臨曲岸 煮茗挹澄潭	小雲棲詠物詩	上
74	遊竜谷山 自注：山在貝塚東二十里而 近行基所創為觀音道場二 水環之合而為一故俗名水 間寺余與至中父子相約今 得始詣	肆席溪声外 煎茶樹影中	小雲棲詠物詩	上
75	琉璃瓶近有一種製遇火不破 可用燂酒一日與客試用煎 茶紅火逼映斯須沸騰而茶 之禁翻湯之變綠皆歷歷透 徹亦佳戲也因同題	五台拈盞傲南方 列焰誰知一顆光 壁月乍疑生赤水 壺天直欲發紅芳 急湍濺沫魚儿集 驟雨漂流蟻子忙 不數崑崙稱火浣 瓊漿汲处轉清凉	小雲棲詠物詩	下

76	賞秋茶	山園一叢茗 晚節亦抽芳 嫩葉仍羨露 寒条且傲霜 秋收非銜艾 風味自槍旗 三碗佳辰飲 孰如黃菊觴	小雲樓詠物詩	下
北禪詩草 寛政5年(1793) 収録範囲：安永3年(1774)から寛政3年(1791)まで				
77	五天見過	茶芽交情淡 鉢釘生態微	北禪詩草	一
78	與諸子携茶具山門納涼	興來携茗具 織月掛風林	北禪詩草	一
79	遊鹿苑寺	茶鼎行隨席 鳧雛看近人	北禪詩草	一
80	遊君孝山庄	厨帳呼童至 茶炉引客留	北禪詩草	一
81	杪冬松源上人見招有詩次韻	憂游静室茶烟起 南海不勞求宝陀	北禪詩草	一
82	赴伊勢道中口号十首	瓶中兔道茗 言汲大湖流	北禪詩草	一
83	聞中上人見訪留宿卒賦	寂歷古禪房 茶烟一室揚	北禪詩草	一
84	暫寓城中宅	紅炉煎茗熟 黄卷檢文成	北禪詩草	一
85	東睿大王六宜樓上手親賜茶 席上奉呈	不独遠來遇王膳 芳茶兼得比醞酬	北禪詩草	二
86	興臨席上與諸禪同賦得薰字	碗茗為浮北焙乳 庭楓偏動南風薰	北禪詩草	二
87	舟中五日同賦得浮字是日發 三田尻	粉团聊擬菱粽給 茗飲何須菖酒酬	北禪詩草	二
88	橘洲諸禪見和余梯氏亭作風 流可嘉因再礎之	秋陽疏樹影 晚吹颺茶烟	北禪詩草	三
89	九月十四夜偶作	今宵禪室興 清静對茶炉	北禪詩草	三
90	後園賞菊歌	向披榛莽收茶芽 又把鋤比園丁 何須送酒白衣至 自有雲芽滿瓦餅	北禪詩草	三
91	歲初内集得時字贈諸子	茗飲堪乘暇 芳遊欲及時	北禪詩草	三
92	遊東山	行帳茶唯在 軟莎茵不如	北禪詩草	三
93	諸子乞南岳院採茶	芳芳旋出焙 清冷正盈甌		
94	二月九日雨中内集適值上午 憶稻荷社事因及	烟花行未洽 山茶坐堪遊	北禪詩草	三
95	諸子乞南岳院採茶	露浥攀枝上 風含負筥頭	北禪詩草	三
96	冬日携拈子遊旧院策禪亦來 同賦	紅紛經雨葉 綠汎汲泉茶	北禪詩草	三

97	貧樂齋同諸子賦得齊字	春泉一甌茗 并坐賦詩齊	北禪詩草	三
98	春初與維明天真遊鷹峰空中庵	更掩幽窓点濃茗 不知世上有風塵	北禪詩草	三
99	春日訪養花魯公耕月和尚來 會有佳供即事贈魯公	室設清齋供野蕨 泉盈新甃試雲芽	北禪詩草	三
100	小至夕喆子寮為我設供會拾 沙彌具榭饋喆亦為有受業 故也因用充膳策禪亦至漫 賦示二三子	茗熟炉中火 梅開瓶裏枝	北禪詩草	三
101	春雨訪人	野菜宜時物 溪茶當臘醅	北禪詩草	三
102	策瑄二公見邀携喆子同席上 賦贈	松風鼎上起 雪蕊瓶頭披	北禪詩草	四
103	五瀨藤謬卿欲見余而頻頻來 扣於鴨之寓居始相面嘉其 誼贈之	草廬只有玄談熟 一鼎雲芽鳴水濱	北禪詩草	四
104	糺林即事	提炉來煮茗 汲水去盈瓶	北禪詩草	四
105	冥鴻歲寒二尊者枉臨席上奉 謝	圃菜充齋膳 溪茶當酒缸	北禪詩草	四
106	雨中煎茶示二三子	祇忘將爾輩 煮茗一炉風	北禪詩草	四
107	齋罷雨甚加以烈風主人款留 設讌因用前韻奉呈	却酌雲芽淨 交歡得共携	北禪詩草	四
108	北軒点茶偶作	將何慰衰老 喚汝点鮮芳		
109	雪後遊觀山門將欲過訪晴雲 和尚聞其不安而罷歸因賦	歸來也盼庭柯罷 綠茗紅炉坐獨閑	北禪詩草	四
110	季冬四日往唯心庵偶作	自撥炉灰吹竹火 旋聞茶鼎起松聲	北禪詩草	四
111	早春夜策禪見過得韻迎字	剪灯禪室靜 煎茗壽泉清	北禪詩草	四
112	二月廿日賞庭前櫻花述懷	庭院曾栽數樹桜 時開茶宴倚前楹	北禪詩草	四
113	有人送饌具與花枝邀策禪同 賦得篋字	佳膳从人送 清茶共客賞	北禪詩草	四
114	早秋遊慈照寺寺主不在般微 二禪招待因賦	千年留興僧伽賞 一室茶烟態轉真	北禪詩草	五
115	七夕二三子集柏竈賦示	文比線工寧乞巧 茶同杯物亦忘憂	北禪詩草	五

116	中秋後軒賦示樸寔二子	只好一甌茗 同茲物外情	北禪詩草	五
117	過雲興偶興示二子	離僧持菓至 老衲点茶嘗	北禪詩草	五
118	過喆策二子有供卒詠	十字俱分饅 一甌更煮茶	北禪詩草	五
119	十一月六日早起坐炉頭属大嘗会四無鍾磬響窺漏籌殆五更矣彷彿如聞人語意寮僧相言而止既而將詣殿課誦起室觀北窗外有灯光怪而就之貼一赫蹏箒上乃直翁所題云及睡覺或乘輿一來乎因悟向者語声即此也急提其燈以往則居齋見待而炉中火熾湯熟矣於是土銚煮粥又探後圃款冬和味醬為菜其趣不可言粥罷供茶皆用一炉遞而辨之益賞其雅澹卒作三絕 其二	扣戶閑相見 茶烟滿室飄	北禪詩草	五
120	同上 其三	清齋恰進粥 静舍旋供茶	北禪詩草	五
121	曉雪詣鹿苑寺歸過一枝齋壁上見月潭禪師詩乃杪冬所吟情景恰同次其韻作	一炉茶熟处 也得味精微	北禪詩草	五
122	有送梅枝者花正爛熳為詠	清香同啜茗 幽賞異銜杯	北禪詩草	五
123	慈照寺值開基相公三百年忌辰設齋見招供給備至席上賦一律	苔封幽徑知塵隔 茶熟清齋許客過	北禪詩草	五
124	十月廿二日慈照聯句会值雨庭下菊花猶殘開軒賞之因以雨荒深院菊為題	色映簾櫳艷 氣添茶菴香	北禪詩草	五
125	巳酉五月歸北禪作	独有寒泉映星在 為言郝老煮茶宜	北禪詩草	五
126	蒼龍嘉会延款投宿辱遇南堂上人周旋且和余詩見贈再礎謝之	山厨借手賑 鼎茗兼心清		

127	南昌尊者見邀洗月澗上觀楓 席上即事	移席越綯合 汲流建茗清	北禪詩草	五
128	鳴海過平君栗席上賦乞得茗 瓶因及	別有山僧求活計 茶瓶乞去劫災餘	北禪詩草	五
129	白雲六如上人有別業在嵯峨 久約見邀庚戌仲春以事赴 天竜寺次訪之席上十韻聊 写懷抱	移座紅瓊設 汲流緑茗携	北禪詩草	六
130	立秋後東隣溪上移床示樸彙 二子	溪茶滌煩熱 野飯慰稽留	北禪詩草	六
131	浪華栗齋丈人遊京借東山慈 照禪室日設茶招集余亦與 焉喜其韻致卒有斯作	進士風流兼味茗 相君方丈重披闌	北禪詩草	六
132	開炉偶作	十月小齋炉始開 炎炎槽榼覺春回	北禪詩草	六
133	早起点茶自喫	烏炭撥殘火 竜団候熟湯	北禪詩草	六
134	宿島田亭主人久保氏嗜茶乞 余筆迹因示以此	雲芽一甌味 恬淡少人知	北禪詩草	六
135	肥前天圭禪士在江戸将帰郷 山属有採真之会停装而来 與余始見尋輒告别賦此贈 之	忝隣白発到天涯 為緩前期来会茶	北禪詩草	六
北禪遺草 文化4年(1807) 収録範囲：寛政3年(1791)から寛政11年(1799)まで				
136	春生以茶宴見招與維明新州 同会実冬至前三日也席上 賦贈	為憐茶菴賞 一味属支郎	北禪遺草	一
137	辛亥至日諸子為余設宴賦示	茗炉香案齋頭列 野藪山餽厨下催	北禪遺草	一
138	曉雪步憩後亭偶興示喆子臥 病	下塔双履步 倚榻一茶催	北禪遺草	一
139	壬子季冬立春前一日一枝寮 小集分韻幽字	梅蕊瓶間媚 茶香碗上浮	北禪遺草	一
140	癸丑元日	斯須茗粥熟 一啜賞芳春	北禪遺草	一

141	八月十八日自牧偶作似諸徒	林外鼓声起 室中茶味清	北禪遺草	一
142	真珠精舍見邀邂逅供給勤至 即事賦申謝院藏宋華六祖 大師像始得瞻拜膳設餐舖 乃当山法製云併及之	餅擬雲門珍可賞 茶同趙老味元殊	北禪遺草	一
143	甲寅歲首口号 其二	自牧齋頭茶正熟 依然一疋淡生涯	北禪遺草	一
144	子濟向以伊蒲招予老懶不応 一日東福帰途過訪属有茶 宴餘興見留供給備至率賦 申謝	何料還成不招客 多君特為罄交情 自注：不招容易語禪林有特為茶儀	北禪遺草	一
145	壁掛竹筒插花賞觀筒乃茶博 士藪内子所截以贈題曰九 臯鳴鶴亦率尔為詠	瓶頭春色齋頭興 秉燭細看紅白明	北禪遺草	一
146	過榮禪寓居即事贈之	炉上唯新茗 盤中且露葵	北禪遺草	一
147	詣金地院雪岡陽峰二上人引 過寮頭供給款至因書即事	芳羞慰楡景 茶鼎起松涛	北禪遺草	二
148	雪夜講会伯寧仲用携醴見饋 漫賦	甘醴偏因穆生設 芳茶未用趙州煎	北禪遺草	二
149	藤井丈人邀遊三谷氏別業因 成儲待宴賞終日漫書即事	濃茶供室内 細草步庭陰	北禪遺草	二
150	九月二十四日過慈照寺問吉 孔夷不遇新州上人見留供 給是日即村民社会云	茶熟禪齋味 鼓聞村社音	北禪遺草	二
151	遊世繼氏白河山庄時余有東 府之召將發	泉生巖罅盈甌潔 寵傍松根調菜多	北禪遺草	二
152	世吉生見惠茶及茶具卒賦謝 之 其一	載筆往來林下好 更令茶道愜吾真 自注：皎然詩孰知茶道全爾真	北禪遺草	三
153	同上 其二	一炉恰足清齋給 非復壺觴自酌情 自注：壺觴自酌出自帰去來辭	北禪遺草	三
154	席上洪卿扇紹真画松太復因 鶴戲題一絶	不翅清風供啜茗 聯翮影入數杯醴 自注：大川和尚偈万壑松風供一啜	北禪遺草	三

	四月二十九日訪丈中見留投			
155	宿即事申謝	非唯淨膳能留客 況復清齋為点茶	北禪遺草	三
156	二月廿二日到江戸偶作	明明記取喫茶去 何処鮮芳不上唇	北禪遺草	三
157	南軒煮茶偶作	啜罷雲芽味無味 松風鼎上坐悠然	北禪遺草	三
158	雪曉穎腆二子点茶卒賦 其二	郝老恁禪味 殷勤向我供	北禪遺草	三

資料編. 葉雋の煎茶書に関する研究：『煎茶訣』の翻刻と訳注

本編は、寛政8年版の『煎茶訣』と明治12年版の『煎茶訣』に対して翻刻と翻訳をした上で、語釈と校異を行ったものである。『煎茶訣』の内容解明を目的とする。

第一節. 解題

室町時代と安土桃山時代を経て茶道は日本の伝統的芸道として大成した。江戸時代に入ると、三千家をはじめ各流派が続々と現れた。また、茶道の繁栄は茶道人口の迅速な拡大をもたらした。しかし、家元制度の確立によって、喫茶の技法が形式化されるという問題も顕在化した。一方、一部の漢学の教養を持つ江戸文人は中国文人からの影響を受け、俗世を隔てた風雅の日常生活を試み始めた。その影響で、江戸文人は明清の文人趣味を積極的に受け入れ、ますます硬直化してきていた茶道を「俗芸」として避け、明清文人の喫茶を「雅賞」と捉えて憧れをもっていた。

宝暦以降、売茶翁の活躍と蒸し製煎茶の発明とともに、明清の喫茶趣味を紹介する書物が一気に増えた。大枝流芳著『清湾茶話』（1756）、大典顕常著『茶経詳説』（1774）、上田秋成著『清風瑣言』（1794）など多くの煎茶書が出現した。そして、『煎茶訣』はこの時期に現れた代表的な煎茶書である。

『煎茶訣』の先行研究についてであるが、最初に本書に注目して研究を進めたのは中国の研究者である。2006年、南京農業大学茶学研究所の教授朱自振は日本の茶文化研究者小泊重洋教授と東海大学の顧雯教授の協力で、日本で『煎茶訣』の原本を手に入れたことを章伝政は発表した¹。これによりこの茶書が初めて中国の研究者に知られた。その後、南京茶葉科学研究所の劉卿秋等が『煎茶訣』

¹ 章伝政、朱世桂、「茶書『煎茶訣』的初步研究」、『茶葉通報』2006年第8期、p. 39。

の作者の身分、完成時間、現存版本に対して研究を行った²。その成果として、『煎茶訣』は初めて清代の茶書として『中国歴代茶書匯編校注本』に翻刻の形で収録されたが、翻字や句読の誤りが少なくなかった³。中国で近年以上のような研究が行われ始めている一方、日本では、この書はいまだ研究対象とはなっていない。

劉卿秋の上記論文「茶書『煎茶訣』の考訂」によると、『煎茶訣』は清人葉雋の作品と記されているが、中国歴代の茶書目録には載っておらず、作者の記録も残されていないので、朱自振氏の発表以前には中国では認識されていなかった茶書だと考えられる。『煎茶訣』の完成時期については、蕉中老衲の序文に「葉氏之訣……予乘閑補苴、別為一本、以遺兼葭氏。」とあり、また木村兼葭堂の跋文に「時寶曆甲申二月」と記していることから、1764年以前だと推測される。

『煎茶訣』についてはまだ多くの不明な点が残されている。例えば、大典は葉雋の原作を持っていたと推測されるが、入手の経路は不明である。大典頭常は近江の相国寺の住持で、一方の木村兼葭堂は浪花の商人であり、二人とも清国人と積極的に交わっていたので、『煎茶訣』は清国商人がもたらした漢籍の可能性もある。また、浙江出身の葉雋は渡日文人である可能性もある。

現存の『煎茶訣』の版本は二本ある。いずれも添削されたものであり、葉雋の原作ではないことである。一つ目は寛政8年(1796)葉雋著・蕉中老衲(大典頭常)補本である。もう一つ目は明治12年(1879)葉雋著・小田誠一郎訓点本である。書誌情報は以下の通りである。

○底本 関西大学図書館蔵本 一冊。

○請求番号 68—228。

○寸法 20.5×15.5 cm。

○題簽 表紙左肩「煎茶訣」。

○丁数 白紙半丁、序1丁、本文5丁、跋1丁、白紙半丁、以上8丁。

○刊記 浪華兼葭堂蔵版。

² 劉卿秋、「茶書『煎茶訣』の考訂」、『茶葉科学』28期、2008年、pp.72～76。

³ 鄭培凱、朱自振主編、『中国歴代茶書匯編校注本』、商務印書館、2010年、pp.850～856。

○備考 大典の加筆が混ざり込んでいるため、どの部分が原作で、どの部分が補説か区別しにくい。

一方、国立国会図書館蔵の明治12年本は、寛政8年本を踏まえて再刻された新しい版本であるため、関西大学図書館蔵本の内容と相違点が見える。

○底本 国立国会図書館蔵本 一冊

○請求番号 L23C6838。

○寸法 縦16cm。

○題簽 表紙左肩「煎茶訣」。

○丁数 内題半丁、白紙1丁、詩1丁、序3丁、本文6丁、補8丁、跋2丁、版元半丁、以上22丁。

○刊記 鹿鳴舎蔵版

○備考 大典の加筆部分を削除し、他の作者による補説として、『考槃餘事』から一部を引用して加えたものである。

『煎茶訣』を研究するためには、先ずその内容を正確に把握する必要がある。従って、以下では二つの版本の『煎茶訣』の翻訳と訳注を試みた。

第二節.『煎茶訣』訳注

凡例

〔全体の構成について〕

『煎茶訣』の序文、本文と跋文について訳注を作成した。内容はそれぞれに【本文】、【校異】、【訓読】、【語釈】、【現代語訳】を施したものである。

1、本文について、関西大学図書館蔵『煎茶訣』は現存最古の版本であり、また、国立国会図書館蔵『煎茶訣』に較べて、原文の削除された部分が少ないため、テキストとしてより適切だと考える。従って前者を底本として翻字を行った。本文の翻字は底本の通りに旧漢字を用いた。訓読と現代語訳は常用漢字に改めた。文意に基づき、適宜句読点を施した。

2、校異について、関西大学図書館蔵本を底本として、国立国会図書館蔵本と

照らし合わせて校異を施した。異同のある場合はすべて取り上げ、添削された内容について論じた。資料二は、国立国会図書館蔵本の異文のみに適宜注釈と現代語訳を施した。国立国会図書館蔵本のみにある『考槃餘事』の「補」について、校異用のテキストは一橋大学図書館蔵『考槃餘事』⁴を用いた。

3、語釈について、必要な語句の意味を中心に注釈を施した。出典と用例は適宜提示した。

一、資料1 関西大学図書館蔵本『煎茶訣』

【本文】1

煎茶訣

點茶之法、世有其式。至於煎茶、香味之間、不可不精細用心、非復點茶比、而世率不然。葉氏之訣、實得其要、猶有遺漏、頃予乘閑補苴、別爲一本、以遺蒹葭氏。如或災木、與好事者共之、亦所不辭。

丙辰孟冬 蕉中老衲識 森世黃書

【校異】

関西大学図書館蔵本には大典頭常の序文がある。「葉氏之訣、實得其要、猶有遺漏、頃予乘閑補」とあるように、葉雋の『煎茶訣』に補苴を加えて遺漏を補った記録がある。また、完成作を木村蒹葭堂に贈り、茶の好事者たちと共に楽しもうとする出版意図が窺える。大典の序は国立国会図書館蔵本では削除され、代わりに王治本の序を入れた。

【訓読】

点茶の法は、世に其の式有り。煎茶に至りては、香味の間、精細用心せざるべからず。復た点茶の比に非ず、而るに世は率ね然らず。葉氏の訣は、実に其の要

⁴ 屠隆撰、日本源謙校、『考槃餘事』、一橋大学図書館蔵本、1803。

を得るも、猶ほ遺漏有り。さきごろ予は閑に乗じて補苴し、別に一本と為し、以て兼葭氏に遺る。如し或は災木して、好事者とこれを共にすれば、亦た辞せざる所なり。

【語釈】

・世...「世」と同じ。・兼葭氏...木村孔恭（1736-1802）、字は世肅、号は兼葭堂、浪花の商人、文人。・災木...「災梨」と同じ。無用の書を刻印する。謙遜語。・好事者...好事家。風流を好む人。・丙辰...大典は元文元年（1736）と寛政八年（1796）、二つの丙辰年を歴した。彼の序には「老衲」と自称したため、後者であろう。・蕉中老衲...大典顕常（1719-1801）。近江の禅僧、漢詩人。『茶経詳説』を著した。・森世黄...森川世黄（1763-1830）。字は離吉、号は竹窓。大和の書家、画家。

【現代語訳】

点茶の方法について、世間には法式がある。煎茶の場合は、香と味に対して、精細な心を用いなければいけない。これはまた点茶と比べられるものではない。しかし世間の多くはそれに従わない。葉氏の『煎茶訣』は、確実にその要点をつかんでいるが、まだ遺漏がある。この前、私は閑暇を利用して『煎茶訣』を補輯し、別の一冊として新しく作成し、木村兼葭堂氏に送った。もし誰かがこの本を出版し、茶事を好む人と共に楽しむことを望むのならば、どうぞ遠慮しないでいただきたい。

【本文】 2

煎茶訣

越溪 葉雋永之撰
蕉中老衲補

【校異】

関西大学図書館蔵本の「蕉中老衲補」、国立国会図書館蔵本には無い。国立国会図書館蔵本の編集者は大典の補説を削除しており、葉雋作の『煎茶訣』の原貌を復元しようとする意図が窺える。

【語釈】

・越溪...中国浙江省寧海県越溪。・葉雋...清国人、字は永之。生没年、経歴不詳。葉雋の名前も『煎茶訣』も、中国国内の文献資料に記録が無い。

【本文】 3

製茶

西夏製茶之法、世變者凡四。古者蒸茶、出而擣爛之、(自注：或曰擣而蒸之。)爲團乾置、投湯煮之、如茶經所載是也。(余茶經詳説備悉之。)其後磨茶爲末、匙而實碗沃湯、筥攪勻之以供。其後蒸茶而布散乾之焙之、是所謂煎茶也。後又不用蒸、直熬之數過、撚之使縮。及用、實瓶如碗、湯沃之、謂之泡茶沖茶。文公家禮注不諳筥製。五雜俎曰、今之茶惟用沸湯投之、稍著火卽色黃而味澀、不中飲矣。可知展轉而不復古也。吾日本抹茶、煎茶俱存而用之。抹茶獨出自宇治。蓋不舍其葉、故極其精細。製造之法、宜抹而不宜煎。煎茶之製、所在有之。然江州所產、爲最近好事者家製之。率皆用熬法、重芳烈故也。蓋能其精良、不必所產、然非地近山者不爲宜。若其製法、一一茲不詳説。獨五雜俎載松蘿僧説曰、茶之香 原不甚相遠、惟焙者火候極難調耳。茶葉尖者太嫩、而蒂多老、火候勻時尖者已焦、而蒂尙未熟。二者雜之、茶安得佳。松蘿茶製者、每葉皆剪去尖蒂、但留中段、故茶皆一色、而功力煩矣、宜其價之高也。余以爲此説、眞製茶之要也。若或撿取其尖而焙製之、恐最上之品也。

【校異】

「製茶」の一節は、国立国会図書館蔵本には無い。四つの製茶法の論説については、大典の『茶經詳説』の附言にも確認できる。また、「吾日本抹茶、煎茶俱存而用之」という文言から、この節は大典の補説である可能性が高い。

【訓読】

茶を製す

西夏に茶を製するの法、世に變はる者凡て四あり。古者は茶を蒸し、出でてこれを擣き爛し（或は擣きてこれを蒸すと曰ふ）、団と為して乾置し、湯に投じてこれを煮る。『茶經』に載する所の如きは是れなり。（余が『茶經詳說』にこれを備へ悉す）。其の後茶を磨きて末と為す。匙すくひて碗に実れて湯を沃ぎ、筥にしてこれを攪勻して以て供す。其の後、茶を蒸して布散し、これを乾してこれを焙る。是れ所謂煎茶なり。後には又た蒸すを用いず。直ちにこれを煎める數過、これをよすりて縮ましめ、用に及ぶときは瓶もしくは碗が如きに実れ、湯をもつてこれに沃ぐ。これを泡茶、沖茶と謂ふ。『文公家礼』の注は筥製を諳せず。『五雜俎』に曰く「今の茶は惟だ沸湯を用いてこれに投じ、稍や火に著けば即ち色黄ばみて味渋し。飲むに中はず。展轉して古に復せざるを知るべきなり」と。吾が日本に抹茶、煎茶は俱に存してこれを用ゆ。抹茶は独り宇治より出で、蓋し其の葉を棄てず、故に其の精細を極む。製造の法、抹に宜しくして煎に宜しからず。煎茶の製は、在る所にこれ有り。然れども江州に産する所は、最近の好事者家にこれを製するなり。率ね用いるは皆煎法、芳烈を重んずるが故なり。蓋し其の精良を能くす。産する所を必せず。然して地の山に近き者に非ざれば宜しきとなさず。其の製法の若きは一一茲に詳說せず。独り『五雜俎』に松蘿の僧說を載せて曰く「茶の香は、原と甚だ相ひ遠からず。惟だ焙するもの火候は極めて調し難きのみ。茶葉の尖なる者は太だ嫩にして蒂は老なること多し。火候勻なる時、尖なる者は已に焦て蒂は尚ほ未だ熟ならず。二者これを雜せば、茶は安くんぞ佳なることを得んや。松蘿茶の製する者は每葉皆尖と蒂を剪り去り、但だ中段を留む。故に茶は皆一色なり、而して功力煩し。其の価の高きこと宜なり」と。余以為く「此の説は真に製茶の要なり。若し或は其の尖をむべ採取してこれを焙製せば、恐らくは最上の品ならん」と。

【語釈】

・西夏...中国を指す。西は西方、夏は華夏であろう。・茶経詳説...日本最初の『茶経』注釈書。作者は大典顕常。安永3年(1774)に出版。・熬...「炒」と同じ。・文公家禮...『朱子家礼』。文公、朱子の諡号。・五雜俎曰...『五雜俎』、明人謝肇淛(1567-1642)の筆記。この引用は『五雜俎』卷十一・物部三にある。・展轉...反復変化。・江州...近江国。・五雜俎載...『五雜俎』卷十一・物部三にある。・松蘿...中国安徽省歙県松蘿山。

【現代語訳】

西夏(中国)での製茶の方法について、いままで変化してきた方法は全部で四つある。古い時代には、茶葉を蒸し、それから出してこれを搗き崩し(まず茶葉を搗いて、それから蒸すという説もある)。固形茶に作って乾置し、最後に沸湯に投入してこれを煮る。『茶経』に記載された方法はこのようなものである(私の『茶経詳説』ではこれを詳細に説明した)。その後の時代に、茶葉を磨いて粉末とし、匙を使って粉末を掬いて碗に入れて、そして湯を注ぎ込む。茶筥を使って茶粉を混ぜて飲む。その後の時代に入って、茶葉を蒸してから散らしてならべ、乾かしてから焙る。これは「煎茶」と言われる。さらに後の時代に入って、蒸すという方法は使わなくなった。直接茶葉を炒めて数過にして、これをねじって縮ませ、使用するときには茶瓶もしくは茶碗のような器に入れ、沸湯を中に注ぎ込む。これは「泡茶」、「沖茶」と呼ばれる。文公の『家礼』の注は茶筥の使い方を諳識しない。『五雜俎』では、「今の茶はただ沸湯の中に投入し、少し火をつけると、茶の色は黄色くなって味は渋くなり、飲めなくなる。ゆえに、茶の製法は輾転して古法でなくなったことがわかる」とある。私たち日本には抹茶と煎茶が共に存在し、両方とも使っている。抹茶は宇治のみで産出する。その茶葉を捨てないので、その精細さを極めることができる。製造の方法は、抹茶にふさわしく、煎茶にはふさわしくない。煎茶の製造は、あちこちで見える。だが、近江産の煎茶は近頃の好事者によって家で作られている。おおむねみな炒茶の製法を使用する。芳烈の香気を重視するからである。故に製茶の精妙な方法をうまく把握で

できれば、必ずしもいいお茶の産地でなくても構わない。しかし産地は山に近いところでなければふさわしくない。その製法について、ここではいちいち詳しく説明しない。ただ、『五雑俎』には松蘿山の僧の説を載せて、「茶にある香気は、もともと互いに大きな差がない。ただ茶葉を焙る際に、火加減の調節が極めて難しいだけである。茶葉の尖端は非常に柔らかくて、蒂は老いことが多いので、均等に火を通す時に、尖端はすでに焦げていても、蒂はまだ十分に熟れていない。尖端と蒂二者を混ぜ込めば、どうしてよい茶を作り出せようか。松蘿茶の作り方は茶葉の尖と蒂を全部切り捨て、ただ真ん中の部分だけを留める。だから茶はすべて同じ大きさである。だが煩雑で手間がかかる。それで価格が高くなる。」とある。私は「この説は本当に製茶の要訣である。もし誰かが茶葉の尖端を取り除いて、それ以外の部分を用いて焙製すれば、恐らく最も上質の茶となるかもしれないだろう。」と考える

【本文】4

藏茶

初得茶、要極乾脆。若不乾脆、須一焙之、然後用壺佳者貯之。小有疎漏、致損氣味、當慎保護。其焙法用捲張昏散布茶葉、遠火焙之、令熅熅漸乾。其壺如嘗爲冷濕所侵者、用煎茶至濃者洗滌之、曝日待乾、封固則可用也。

【校異】

関西大学図書館蔵本は「気味」に作る。国立国会図書館蔵本は「気叟」に作る。字形類似による誤りであろう。

「遠火焙之」、朱自振『中国歴代茶書匯編校注本』に明治戊寅本（国立国会図書館蔵本）の「之」が脱されたと校注したが、確認できない。手元の資料では脱字がない。

「其壺如嘗爲冷濕所侵」、関西大学図書館蔵本は「侵」に作る。国立国会図書館蔵本は「漫」に作る。「侵」に従う。

【訓読】

茶を蔵す

初めて茶を得るに、極めて乾脆なるを要す。若し乾脆ならざれば、須く一たびこれを焙し、然る後に壺の佳なる者を用いてこれを貯ふべし、小しも疎漏有れば、気味を損するに致る。当に慎しみて保護すべし。其の焙法は椀を用いて紙を張りて茶葉を散布し、遠火にこれを焙し、熅熅たらしめて漸く乾かす。其の壺如し嘗て冷湿の侵す所とならば、煎茶の至濃なる者を用いてこれを洗滌し、日に曝して乾くを待ち、封固せられれば則ち用ゆべし。

【語釈】

・疎漏...手落ちがあること。・椀...木製容器。杯椀。・帀...「紙」と同字。・熅熅...熱気を帯びるさま。・冷湿...冷たい水気を帯びてうるおう。・曝日...日光にさらす。・封固...封、とじこめる。固、かたくする。

【現代語訳】

初めて茶を得るとき、極めて乾燥させることが必要である。もし乾脆でなければ、必ず一度茶を焙乾し、その後により壺を用いて貯えるべきである。少しでも疎漏があれば、気味を損なうことになる。まさに慎しんで保護すべきである。その焙法について、椀杯を取ってそこに紙を張って、茶葉を上にはらしてならべ、遠くから火を使って茶を焙る。茶葉が暖まってきて乾いてくる。その壺はもし以前に冷湿なものに浸したことがあるならば、煎茶の中で一番濃いものを用いて洗い、太陽に曝して乾燥するまで待ち、しっかりと保存すれば、使ってもよい。

【本文】 5

擇水

煎茶水功居半。陸氏所謂、山水上、江水中、井水下、揀乳泉石池涓涓流出者、江水取去人遠者、井取汲多者是也、然互有上下品可辨也。有一種水、至澄而性惡、不可不擇。若取水于遠、欲宿之、須以白石櫛而澤者四五沈着或以同煮之、能利清

潔。黄山谷詩、錫谷寒泉楢石俱、是之。（石之在湖上爲波濤摩圓者爲佳。海石不可用。）或曰、汲流水爲湯、上裝蒸露罐、取其露煮以用茶、尤妙。余未嘗試、但恐軟弱不適。有用瀑泉者、頗激烈不應、然則激烈軟弱俱不可不擇。

【校異】

関西大学図書館蔵本は「陸氏……是也」とする。国立国会図書館蔵本は「陸氏……佳也」とする。

また、関西大学図書館蔵本には「或曰……不可不擇」という文句があるが、国立国会図書館蔵本には無い。この部分に「余未嘗試、但恐軟弱不適」とあるような「擇水」に対する経験談は、前文の「藏茶」の節にある「余以此説、真製茶之要也」と似て、一節の最後に個人的感想や評論を加える構成である。これは大典が後に補った内容である可能性がある。

「摩圓」について、関西大学図書館蔵本も国立国会図書館蔵本も「擇水」の注に「摩園」一語を使用したか、おそらく「磨圓」の誤り。

【訓読】

水を扱ぶ

茶を煎ずるは、水の功半に居る。陸氏の所謂「山水は上、江水は中、井水は下。乳泉、石池の涓涓として流れ出づる者を揀び、江水は人を去ること遠き者を取り、井は汲むこと多き者を取る」とは是れなり。然れども互に上下品有りて辨すべし。一種の水有りて至澄にして性悪ければ、扱ばざるべからず。若し水を遠きより取りてこれを宿せんと欲せば、須く白石の楢にして沢なる者四五を以て沈着し、或は以て同にこれを煮るべし。能く清潔に利す。黄山谷の詩に「錫谷は寒泉楢石俱にす」と、これなり。（石の湖上に在りて波濤の摩圓するところとなる者を佳と爲す。海石は用ゆべからず。）或は曰く「流水を汲みて湯と爲し、上に蒸露缶を装し、其の露を取りて煮て以て茶に用ゆれば、尤も妙なり。」と。余は未だ嘗て試みず。但だ軟弱にして適せざるを恐るのみ。瀑泉を用ゆ者もあり、頗る激烈に応せず。然れば則ち激烈、軟弱は俱に扱ばざるべからず。

【語釈】

・陸氏所謂...陸氏、陸羽。この引用は『茶経』・五之煮にある。・宿...一夜放置する。・白石...潔白の石。明田芸蘅『煮泉小品』・緒談に「取石子置瓶中、雖養其味亦可澄水、令之不滯。」とある。・黄山谷詩...黄山谷、黄庭堅。この句は『謝黄従善司業寄恵山泉』にある。・錫谷寒泉...恵山泉。唐張又新『煎茶水記』に「無錫恵山寺石水第二」とある。・蒸露罐...水を蒸発させ、水蒸気を集める容器。

【現代語訳】

よい茶を煎じる場合、水の功績が半分ほどある。陸羽のいわゆる「山水を用いるのが上等で、江水を用いるのが中等で、井水を用いるのが下等である。乳泉、石池のようなゆっくりと流れ出す水を選び、江水は人里から遠く離れたものを取り、井水は多く汲むものを取る」とは、この通りである。さらに、同じ種類の水の中でも互いに上級品と下級品がある。これを辨別することはできる。たとえば、ある水は非常に澄清としても、水質が悪ければ、これを使用してはいけない。もし水源は家から遠く離れて水を取って一夜放置して使用しようとしたら、必ず楕円で光沢のある白い石を四、五つ取って水の中に沈め、あるいは石をもって水と一緒に煮るべきである。これは水を清潔にするのに役立つ。黄庭堅の詩に「錫谷で寒泉と楕石を共にする」と述べたのはこれである（石ならば、湖の上にあつて波濤に磨かれて丸くなったものがよい。海の石を使用してはいけない）。ある人はこう言った、「流水を汲んで湯にして、その上に蒸露缶を装置し、その露を取って煮て以て茶に用いる。これは素晴らしい。」と。私はまだ一度も試みたことが無い。ただ体が軟弱でこのような水に合わない心配するだけである。瀑泉を用いるひともいる。あまり激烈なので適当ではない。それで激烈、軟弱の水は共に使用してはいけない。

【本文】 6

潔瓶

瓶不論好醜、唯要潔淨。一煎之後、便當輒去殘葉、用櫻札刷滌一過、以當後用。不爾、舊染浸淫、使芳鮮不發。若值舊染者、須煮水一過去之、然後更用。

【訓読】

瓶を潔す

瓶は好醜を論せず、唯だ潔淨を要す。一煎の後、便ち當に輒ち殘葉を去り、櫻札を用いて刷滌一過し、以て後用に當つべし。爾らざれば、旧染浸淫し、芳鮮をして発せしめず。若し旧染の者に値たれば、須く水を煮ること一過してこれを去り、然る後に更めて用ゆべし。

【語釈】

・櫻札...櫻は「棕」の正字。棕毛で作ったブラシ。・舊染...染、色や香りが染み込むこと。・浸淫...次第に染み込む。

【現代語訳】

瓶は好醜にかかわらず、ただ潔淨なものが大事である。一度煎じたら、すぐに殘葉を捨て、棕札を用いて一回洗い流し、次回の使用のために準備するのがよい。そうしなければ、古い染みが瓶に深く入り込み、茶の芳鮮を発し難くさせてしまう。もし古い染みが入り込んだ瓶があったら、必ず水を煮て一回洗い、汚水を捨て、それからあらためて使用するのがよい。

【本文】7

候湯

凡每煎茶、用新水活火、莫用熟湯及釜銚之湯。熟湯軟弱不應茶氣、釜銚之湯自然有氣、妨乎茶味。陸氏論三沸、當須騰波鼓浪、而後投茶。不爾、芳香不發。

【訓読】

湯を候ふ

凡そ茶を煎ずる毎に、新水活火を用ゆべし。熟湯及び釜銚の湯を用ゆること莫

れ。熟湯は軟弱にして茶氣に応ぜず。釜銚の湯は自然に氣有りて茶味を妨ぐ。陸氏は「三沸」を論じ、須く当に騰波鼓浪の後に茶を投ずべしとす。爾らざれば、芳香は発せず。

【語釈】

・新水活火...新水、きれいな水。活火、炭火の焰。北宋蘇軾『汲江煎茶』に「活水還須活火烹」とある。・陸氏論三沸...『茶經』五之煮に「沸如魚目微有声爲一沸。緣辺如湧泉連味爲二沸。騰波鼓浪爲三沸。」とある。・騰波鼓浪...沸騰して浪立つ状態。

【現代語訳】

毎回茶を煎じる度に、きれいな水と炭火を使用するのがよい。熟湯と釜銚の湯を使用してはいけない。熟湯は水質が弱すぎて茶氣に適しない。釜銚の湯は自然と気味があるので茶の味を妨げる。陸羽は「三沸」を論じたとき、まさに沸騰して浪立つのを待ってその後に茶を投入すべきだと述べた。そうしなければ、茶の芳香が立たない。

【本文】 8

煎茶

世人多貯茶不密、臨煎焙之、或至欲焦。此婆子村所供、大非雅賞。江州茶尤不宜焙。其它或焙亦遠火熅熅然耳。大抵水一合、用茶可重三四分、投之滾湯、尋即離火置須臾而供之。不爾、煮熟之味生、芳香之氣亡、須別用湯瓶架火候茶過濃加之。若洗茶者、以小籠盛茶葉、承以碗、澆沸湯、以箸攪之。漉出則塵垢皆漏脫去、然後投入瓶中、色味極佳、要在速疾、少緩慢則氣脫不佳。如唐製茶、尤宜洗用。

【校異】

関西大学図書館蔵本に「用茶可重三四分、投之滾湯、尋即離火置須臾而供之。不爾、煮熟之味生、芳香之氣亡、須別用湯瓶架火候茶過濃加之。若洗茶者...」と

あるが、国立国会図書館蔵本は内容を縮め、「用茶可重三分。若洗茶者…」となっている。

また、大典は「製茶」の節に「煎茶之製、所在有之。然江州所産、為最近好事者家製之」と記した。「江州」は日本の近江（滋賀県）を指す。「煎茶」の節に「江州茶尤不宜焙」とある内容は大典の補説だと考えるが、削除しなかった理由は不明。

関西大学図書館蔵本は「唐製茶」とするが、国立国会図書館蔵本は「華製茶」とする。次節の「淹茶」でも「唐製茶」と「華製茶」との異字は見られる。当時、日本人は中国人を「唐人」、中国の舶来品を「唐物」と呼んでいた。関西大学図書館蔵本で中国製のお茶を「唐製茶」と呼ぶのは、おそらく葉雋の原作ではなく、大典の補説であったからであろう。また、国立国会図書館蔵本では「唐製茶」を「華製茶」と直した。「華製茶」についてだが、「古製」、「宋製」、「元製」、「明製」とは言われるものの、「華製」については少し違和感がある。おそらく国立国会図書館蔵本については、小田誠一郎が王治本に意見を伺ったのち、「和製茶」を意識しながら「華製茶」と直したのだろう。

【訓読】

煎茶

世人多くは茶を貯へること密ならず。煎に臨みてこれを焙す。或は焦げんと欲するに至る。此れ婆子村の供する所にして、大ひに雅賞に非ず。江州の茶は尤け焙するに宜しからず。其の它或は焙するも亦た遠火に熅熅然たるのみ。大抵水一合に茶用ゆるに重さ三四分ばかりにして、これを滾湯に投じて尋ぎて即ち火より離して置き須臾にしてこれを供す。爾らざれば、煮熟の味生じ、芳香の氣亡ふ。須く別に湯瓶を用いて火に架し、茶の過濃なるを候ちてこれを加ふべし。若し茶を洗はば、小籠を以て茶葉を盛り承るに碗を以てし、沸湯を澆ぎ、箸を以てこれを攪し、漉出すれば則ち塵垢皆漏脱し去る。然して後に瓶中に投入すれば、色味極めて佳なり。要は速疾に在り。少し緩慢するときは則ち氣脱して佳ならず。唐製の茶の如き、尤け洗ひ用いるに宜し。

【語釈】

・婆子村...婆子、老婦人、田舎もの。軽蔑の意。南宋羅大経『鶴林玉露』に「檜咎其失言、与其館客謀、进青魚百尾。顯仁拊掌笑曰：「我道这婆子村、果然。」蓋青魚似子魚而非、特差大耳。」とある。・雅賞...雅、清雅、高雅。賞、玩賞。・塵垢...ちりとあか。

【現代語訳】

多くの世人は茶を貯えるときにきちんと保存しない。煎じようとするときに、このような茶葉を使って焙る。あるいは茶を焦げるまで焙ろうとする。これは田舎者の飲み方であり、決して雅趣ではない。近江の茶はとりわけ焙ることにふさわしくない。ほかの茶も、焙ろうとするときもなるべく火に近づけずに暖めるだけである。大体水一合に重さ三四分程度の茶葉を使って、沸湯に入れてからすぐに火から離してしばらく置き、これを飲む。そうしなければ、煮詰めたような味が生まれ、芳香の気を失う。また、必ずそばに湯瓶を置いて火に掛け、茶があまりに濃いときはこの湯を加えるべきである。もし茶を洗いたいときは、小籠を使って茶葉を盛って、碗に茶葉を入れ、沸湯を注ぎ込み、箸をもってかきまわして漉出すれば、塵垢を全て取り除くことができる。その後に瓶中に投入すれば、色と味は極めてよくなる。要は操作の速さである。少しでも遅くなれば、茶気が抜けて味がよくなる。中国製の茶のたぐいは、とりわけ洗い用いることにふさわしい。

【本文】 9

淹茶

唐茶舶來上者、亦爲精細、但經時之久、失其鮮芳。肥筑間亦有稱唐製者、然氣味頗薄、地產固然。大抵唐製茶不容煎。瓶中置茶、以熱湯沃焉、謂之泡茶。或以鐘、謂之中茶。（中鐘音通。泡名通瓶鐘者。茶經謂之淹茶。）皆當先燻之令熱、或入湯之後蓋之、再以湯外漑之、則茶氣盡發矣。

【校異】

関西大学図書館蔵本には「唐茶舶來上者、亦為精細、但經時之久、失其鮮芳。肥筑間亦有稱唐製者、然氣味頗薄、地產固然。」とあるが、国立国会図書館蔵本には無い。この部分は「肥筑」のお茶を論じたため、大典の補説だと考える。

関西大学図書館蔵本の「大抵唐製茶不容煎」を、国立国会図書館蔵本は「華製茶不可煎」に作る。

朱自振『中国歴代茶書匯編校注本』は宝暦本（つまり関西大学図書館蔵本）の「燂之令熟」にある「熟」を「熟」と校注している。

【訓読】

淹茶

唐茶、舶來上者も亦た精細なり。但だ時を経ること久しく、其の鮮芳を失ふ。肥筑の間にも亦た唐製と称する者有り、然れども氣味頗る薄し。地産固より然り。大抵唐製の茶は煎ずるを容れず。瓶中に茶を置き、熱湯を以て焉に沃ぐ。これを泡茶と謂ふ。或は鐘を以てし、これを中茶と謂ふ。（中と鐘、音通ず。泡の名は瓶鐘なる者に通ず。『茶経』にこれを淹茶と謂ふ。）皆当に先にこれを燂して熱からしむべし。或は湯を入れる後にこれを蓋し、再び湯を以て外よりこれを漑すれば、則ち茶氣尽く発す。

【語釈】

・唐茶...唐、中国。中国から船で運んできた良質のお茶。・肥筑...肥前、肥後、筑前、筑後の四か国。・泡茶...熱湯に茶葉を入れて浸し、茶葉の味を引き出す。・鐘...盅。取手のない小茶碗。・中茶...沖茶。茶を入れる。・茶経謂之淹茶...『茶経』六之飲にある。淹、湯を注いで浸す。

【現代語訳】

唐茶については、舶來品の本当の唐茶もまた精細であるが、長い時間を経てお

り、その鮮芳を失っている。肥・筑の辺りにもまた国産の唐茶と名乗るものがあるが、気味がかなり薄いし、その土地で産出したものは、そもそもそのようなものである。大体、中国の茶は煎じるにはふさわしくない。瓶中に茶を置き、熱湯を中に注ぐもの、これは「泡茶」という。あるいは鐘を使うが、これは「中茶」という（中と鐘は発音が同じである。泡の名前は瓶鐘につながる。『茶経』では「淹茶」という）。すべて先に火を通して暖めるべきである。あるいは湯を入れる後に蓋をし、再び湯を外より瓶鐘に注ぎかければ、茶の気がことごとく放たれる。

【本文】 10

花香茶

有蓮花茶者、就花半開者、實茶其内、絲匝擁之一宿、乘曉含露摘出、直投熱湯、香味俱發。如蘭茶、摘花雜茶、亦經宿而揀去其花片用之、竝皆不用焙乾。或以蒸露罐取梅露、菊露類、投一滴碗中、並佳。

【校異】

関西大学図書館蔵本の「花香茶」一節、国立国会図書館蔵本には無い。

【訓読】

花香茶

蓮花茶なる者有り、花半ば開く者に就きて、茶を其の内に実れ、絲をもつてこれを匝擁すること一宿、曉に露を含むに乗じて摘み出し、直ちに熱湯に投ずれば、香味俱に発す。蘭茶の如きは、花を摘みて茶に雑え、亦た経宿して其の花片を揀び去りてこれを用ゆ。並びに皆焙乾することを用いず。或は蒸露罐を以て梅露、菊露の類を取り、一滴を碗中に投ずるも、並びに佳なり。

【語釈】

・花香茶…明王錡『寓圃雜記』・雲林遺事の「蓮花茶」による。・匝擁…匝、め

ぐる、めぐらす。擁、だく、だきかかえる。・乗曉含露...乗曉、夜明けに乗じる。
花びらに含む露水。・蘭茶...蘭花、香草。・花片...花びら。・竝...「並」の旧字。・
蒸露罐...水蒸気を集める容器。

【現代語訳】

蓮花茶というものがある。半分開いた花を選んで、茶をその中に塞ぎ入れ、糸で花に茶を包んで一夜置く。夜明けに花が露を含んだときに乗じてそれを摘み出し、直接沸湯に投入すると、香りと味が同時に発する。蘭茶のような種類は、花を摘んで茶に入れ、また一夜を過ごして、中の花びらを選出して捨て、その茶を使う。蓮花茶と蘭茶は同じく乾燥する必要がない。あるいは蒸露罐をもって梅の露、菊の露などを取って、一滴を碗の中に投入するのもよい。

【本文】 11

山林絶區、清淑之氣、鍾乎露芽、發乎雲液、使人恬淡是味、此非事甘脆肥醜者所得識也。夫其參四供、利中腸、破昏除睡、以入禪悅之味。乃所謂四悉檀之益、固可與道流者共已。葉氏之訣、得其精哉。殆纘竟陵氏之緒矣。

不生道人跋

【校異】

「鍾乎露芽」の「乎」、国立国会図書館蔵本は「香」に作る。

【訓読】

山林絶区は、清淑の気、露芽に鐘まり、雲液に発す。人をしてこの味に恬淡たらしむ。此れ甘脆肥醜を事する者の得て識るところに非ざるなり。夫れ其の四供に参り、中腸を利し、昏を破りて睡を除き、以て禅悦の味に入るは、乃ち所謂四悉檀の益なり。固に道流の者と共にすべきのみ。葉氏の訣は其の精を得たるかな。殆ど竟陵氏の緒を纘ぎたり。

【語釈】

・絶區...絶地。非常に遠くへだたった土地。・清淑...清、清和。淑、美好。・露芽...草木の嫩芽。・雲液...雨水、露水。・恬淡...清静淡泊。・甘脆肥醲...甘、あまい。脆、柔らかい、もろい。肥、美食。醲、美酒。『淮南子』・主術訓に「肥醲甘脆、非不美也。」とある。・四供...菩薩のこと。金剛界三十七尊の外四供養と内四供養、合わせて八供養菩薩という。・中腸...消化管のこと、腹内、内心。・禅悦之味...仏法のおもむき。北宋惠洪『冷齋夜話』に「東坡曰：「此老師善説法、要能令人得禅悦之味。」」とある。・四悉檀...悉檀、悉曇、成就・吉祥の意。四悉檀、「第一義悉檀」、「世界悉檀」、「各各為人悉檀」と「対治悉檀」。・道流...道教徒の意味もあるが、ここでは仏教の修行者の意。・纘竟陵氏之緒...竟陵氏、陸羽。纘、受け継ぐ。緒、前人の未完成の功業、功績。・不生道人...大典顕常。

【現代語訳】

山林の絶地には清淑の気があり、草木の嫩芽に集まり、雨と露から発する。人を無欲無求にし、その味を楽しませる。その味は、佳肴と美酒しか嗜まない俗人には理解できない。そもそもそれは四供に参詣し、中腸を調整し、昏睡を破り、眠気を除くことに禅悦の味に入る。これはすなはち四悉檀の効果と言われる。ゆえに仏教の修行者とも楽しむことができる。葉氏の訣はその精妙を会得し、陸羽の功績を継承している。

【本文】 12

茶訣一篇、語不多而要眇盡矣。命之剗劂以施四方君子云。時寶曆甲申二月。

浪花兼葭堂木孔恭識

【訓読】

茶訣一篇、語は多からず、要眇は尽きたり。これに命じて剗劂し、以て四方の君子に施す。時は宝曆甲申二月。

【語釈】

・要眇…要妙、要訣。・剗刷…版木を彫ること。剗、曲刀。刷、曲鑿。・寶曆甲申…宝曆14年（1764）。

【現代語訳】

茶訣一篇は、言葉は多くないが、要点がすべてまとまっている。人に命じてこれの版木を彫刻したことによって、四方の君子に広く伝わった。時は宝曆甲申の二月である。

二. 資料2 国立国会図書館蔵本『煎茶訣』

【本文】一

清国 葉雋永之撰

煎茶訣
東京 鹿鳴舎梓

紗帽籠頭、風花遶鬢。

戊寅觀蓮節□□

【訓読】

紗帽は頭を籠み、風花は鬢を遶す。

【校異】

「戊寅觀蓮節」の次の二字は判別できない。

【現代語訳】

紗帽は頭をこめている。風の中に花は鬢髪をめぐっている。

【本文】二

煎茶訣序

夫一草一木、罔不得山川之氣而生也。唯茶之得氣最精、故能兼色香味之美焉。是茶有色香味之美、而茶之生氣全矣。然所以保其氣而勿失者、豈茶所能自主哉。蓋采之。采之而後有以藏之、如獲稻然。有秋收者必有冬藏。藏之、先期其乾脆也、利用焙。藏之、須有以貯蓄也、利用器。藏之而不善、濕氣鬱而色枯、冷氣侵而香敗、原氣洩而味變、氣之失也。豈得咎茶之不美乎。然藏之於平時、以需用之於一時、而用之法在於煎。張志和所謂竹裏煎茶、亦雅人之深致也。磁盃以盛之、竹籠以漉之、明水以調之、文火以沸之。其色清且碧、其香幽且烈、其味醇且和。可以清詩思、可以滌煩渴。斯得茶之美者矣。是在煎之善。至若水、則別山泉江泉。火、則詳九沸九變。器、則取其潔而不取其貴。湯、則用其新而不用其陳。是以水之氣助茶之氣、以火之氣發茶之氣、以器之潔不至汚其氣、以湯之新不至敗其氣。氣得而色香味之美全矣。故曰、人之氣配義與道、水之氣配水與火、水火濟而茶之能事盡矣。茶之妙訣得矣。友人以煎茶訣索序、予爲詳敘之如斯。光緒戊寅六月穀旦。

浙東茶園王治本撰並書

【訓読】

煎茶訣序

それ一草一木、山川の氣を得ず生ずることなし。唯だ茶の氣を得ること最も精なり。故に能く色・香・味の美を兼ね。是れ茶は色・香・味の美あれば、茶の生氣全し。然れども其の氣を保って失ふことなきことは、豈に茶の能く自ら主とするところならんや。蓋しこれを採る。これを採れば後に有りて以てこれを蔵することは、稻を獲るの如く然り。秋に収むる者有れば、必ず冬に蔵するもの有り。これを蔵するに、先に其の乾脆を期待すれば、焙を利用す。これを蔵するに、須く以て貯蓄すべきことあらば、器を利用す。これを蔵するに善からざれば、湿気に鬱されて色は枯れる。冷氣に侵されて香は敗る。原氣洩れて味は変わる。氣の失わるるなり。豈に茶の美ならざることを咎むるを得んや。然らばこれを平時に蔵し、需を以てこれを一時に用ひ、而して用ゆるの法は煎

に有り。張志和の所謂：「竹の裏に茶を煎ず」なり。亦た雅人の深致なり。磁盃を以てこれを盛り、竹箆を以てこれを漉ひ、明水を以てこれを調し、文火を以てこれを沸す。其の色は清らかにして且つ碧し。其の香は幽かにして且つ烈し。其の味は醇にして且つ和なり。以て詩思を清むべし。以て煩渴を滌うべし。斯れ茶の美なる者を得たり。是れ煎之の善に在り。水の如きに至りては、則ち山泉と江泉を別つ。火は、則ち九沸九変を詳かにす。器は、則ち其の潔を取りて其の貴きを取らず。湯は、則ち其の新しきを用ひて其の陳きを用わず。是れは水の気を以て茶の気を助け、火の気を以て茶の気を発し、器の潔を以て其の気を汚すに至らず、湯の新しきを以て其の気を敗るるに至らず。氣を得て色・香・味の美全し。故に曰く、人の氣は義と道に配し、水の氣は水と火に配し、水と火は濟なれば茶の能事尽き、茶の妙訣を得たり。友人は煎茶訣を以て序を求め、予は為にこれを詳叙して斯のごとし。光緒戊寅六月穀旦。

浙東茶園王治本撰して書す

【語釈】

・張志和… (730-810?)。字は子同。唐代道士、詩人。『全唐文』卷三百四十・顔真卿の「張志和碑銘」に「肅宗嘗賜奴婢各一、元真配為夫婦。名夫曰漁僮、妻曰樵青。人問其故、曰：「漁僮使捧釣收綸、蘆中鼓枻、樵青使蘇蘭薪桂、竹裏煎茶。」とある。

・詩思…詩興、詩情。・煩渴…煩惱を伴う強い渴き。・九沸九變…『呂氏春秋』・本味に「凡味之本、水最為始。五味三材、九沸九變、火為之紀。」とある。九は最大の数として用いられる。・光緒戊寅…光緒 4 年 (1878)。・王治本… (1836-1908) 字は維能、号は茶園。浙江慈溪黃山村人。旅日文人。・琴仙…王藩生 (1847-1898)、号は琴仙、王治本の族弟。旅日文人、画家。

【現代語訳】

そもそも一草一木は、山川の氣を得なければ成長することができない。特に茶

の中に含まれる気はもつとも精純である。ゆえに色、香、味の美しさをよく兼備している。茶の中に色、香、味の美しさがあれば、茶の生氣は完全である。しかし茶の気を保ち、失わないようにしようとしても、茶を意のままにはできない。ゆえに茶を採る。茶を採って貯蔵するのは、稲を収穫するのと同じである。秋に収穫を行えば、冬は必ず貯蔵を行う。茶を貯蔵するには、先ず茶を乾燥させる必要があるが、そのときは焙る方法を利用する。茶を貯蔵するには、必ず何かで貯蓄すべきであるが、そのときは器を利用する。茶を貯蔵する際に大事にしなければ、湿気がこもって茶の色は枯れ、冷気が侵入して茶の香はなくなり、原気が洩れて茶の味は変わってしまう。つまり、茶の精気が失われるということである。茶自体が美しくないものであったのだと捉えて咎めるべきではない。そうして、普段はしまっておいて、必要なときに一時的に使うが、その際は煎るという方法を用いる。張志和のいわゆる「竹裏煎茶」であり、また風雅の人の深遠な意趣である。磁盃をもって茶を盛り、竹籠をもって茶を濾し、明水をもって水温を調節し、文火を以て湯を沸す。茶の色は清くて碧い。茶の香は幽かで烈しい。茶の味は醇厚で和らかだ。これをもって詩情を清めることができる。これをもって煩惱とそれに伴う渴きを満たすことができる。これはつまり、茶の美しさを手に入れたのである。これは煎茶の善さである。そして、水は山泉と江泉を分けて使う。火は「九沸九変」を明らかにして使う。器は清潔なものを選んで、あえて高価なものは選ばない。湯は新しいものを用いて古いものを使わない。そうしたら、水の気は茶の気を助ける。火の気は茶の気を発する。器の清潔さは茶の気を汚すことにならない。湯の新鮮さは茶の気を損なうことにならない。気を得れば色、香、味の美しさを兼備することになる。ゆえにこう言う、「人の気は義と道に相配し、水の気は水と火に相配し、水と火とを成し遂げれば、茶に影響を与えられることはすべてやり遂げたことになる。茶の妙訣を会得した。」と。友人は『煎茶訣』に序文を求めたが、私は彼の為に、上記のような内容を詳細に述べた。光緒戊寅年の六月の穀旦に書いたものである。

浙東茶園の王治本が編して書く。

【本文】三

煎茶訣

「藏茶」、「扱水」、「潔瓶」、「候湯」、「煎茶」、「淹茶」

同前。関西大学図書館蔵本の翻刻と校異参照。

煎茶訣終

【本文】四

補

茶具

苦節君（湘竹風爐）

建城（藏茶箬籠）

湘筠焙（焙茶箱。蓋其上以收火氣也。隔其中以有容也。納火其下去茶尺許。所以養茶色香味也。）

雲屯（泉罐）

烏府（盛炭籃）

水曹（滌器桶）

鳴泉（煮茶罐）

品司（編竹爲籠、收貯各品茶葉。）

沈垢（古茶洗）

分盈（木杓卽茶經水則、每兩升用茶一兩。）

執權（準茶秤。每一兩用水二升。）

合香（藏日支茶瓶、以貯司品者。）

歸潔（竹筥箒。用以滌壺。）

瀘塵（洗茶籃）

商象（古石鼎）

遞火（銅火斗）

降紅（銅火筴。不用聯索。）

團風（湘竹扇）
注春（茶壺）
靜沸（竹架。即茶經支腹）
運鋒（鑷果刀）
啜香（茶甌）
撩雲（竹茶匙）
甘鈍（木礎墩）
納敬（湘竹茶橐）
易持（納茶漆雕秘閣。）
受汚（拭抹布）。

【訓読】

補

茶具

苦節君（湘竹風炉なり）

建城（茶を蔵する箬籠なり）

湘筠焙（焙茶箱なり。其の上に蓋をして以て火氣を収む。其の中を隔して以て容を有せしむ。火を其の下に納めて茶を去りて尺許なり。茶の色・香・味を養ふゆえんなり。）

雲屯（泉罐なり）

烏府（炭を盛る籃なり）

水曹（器を滌ふ桶）

鳴泉（茶を煮る罐なり）

品司（竹を編して籠と為す。各品の茶葉を収めて貯ふ。）

沈垢（古き茶洗なり）

分盈（木杓は即ち『茶經』の水則なり。兩升ごとに茶一兩を用ゆ。）

執權（茶を準ずる杓なり。一兩ごとに水二升を用ゆ。）

合香（日支を蔵する茶瓶なり、以て司品なる者を貯ふ。）

掃潔（竹筥箒なり。用ひて以て壺を滌ふ。）
瀘塵（茶を洗ふ籃なり）
商象（古き石鼎なり）
遁火（銅の火斗なり）
降紅（銅の火筋なり。聯索を用ひず。）
団風（湘竹の扇なり）
注春（茶壺なり）
静沸（竹架なり。即ち『茶経』の支腹なり）
運鋒（果を鑿す刀なり）
啜香（茶甌なり）
撩雲（竹の茶匙なり）
甘鈍（木の礎橐なり）
納敬（湘竹の茶橐なり）
易持（易漆茶彫秘閣。）
受汚（拭抹布なり）。

【校異】

「編竹為籠」について、国立国会図書館蔵本は「編竹為撞」に作る。「撞」は名詞として意味がわかりにくい。朱自振『中国歴代茶書匯編校注本』の校注に従って「籠」と改めた。

「銅火筋」について、国立国会図書館蔵本は「銅火筋」に作る。一橋蔵『考槃餘事』は「筋」に作る。字形の誤りである。

「納茶漆雕秘閣」について、国立国会図書館蔵本は「易漆茶雕秘閣」に作る。一橋蔵『考槃餘事』は「納茶漆雕秘閣」に作る。『考槃餘事』に従う。

【語釈】

・茶具…この項は『考槃餘事』茶箋にある。

【現代語訳】

茶具

苦節君（湘竹製の風炉である。）

建城（茶を納める竹籠である。）

湘筠焙（茶を焙る箱である。その上に蓋をして火力を収める。その中を隔てて空間を作る。その下に火を通して、茶からすこし距離をとる。すべて茶の色、香、味を養うためである。）

雲屯（泉水を入れる缶である。）

烏府（炭を盛る籃である。）

水曹（器を洗う桶である。）

鳴泉（茶を煮る罐である。）

品司（竹で編んだ籠である。各種の茶葉を貯える。）

沈垢（古い茶洗である）

分盈（木杓である。つまり『茶経』のいう水則である。水二升ごとに茶一両を用いる。）

執権（茶を量る秤である。茶一両ごとに水二升を用いる。）

合香（普段使う茶瓶を収め、司品などの器具を納める。）

帰潔（竹製の筥箒である。これを使って壺を洗う。）

瀘塵（茶を過濾する籃である。）

商象（古い石鼎である。）

逡火（銅火斗である。）

降紅（銅火筋である。聯索を用いない。）

団風（湘竹製の扇である。）

注春（茶壺である。）

静沸（竹架である。つまり『茶経』にいう支腹である。）

運鋒（鑷果刀である。）

啜香（茶甌である。）

撩雲（竹製の茶匙である。）

甘鈍（木製の砧墩である。）

納敬（湘竹製の茶橐である。）

易持（茶を納めるための漆雕秘閣である。）

受汚（拭巾である。）

【本文】五

書齋

書齋宜明靜、不可太敞。明靜可爽心神、宏敞則傷目力。中庭列盆景建蘭之嘉者一二本、近窓處蓄金鱗五七頭於盆池内、傍置洗硯池一。餘地沃以飯瀋、雨漬苔生、綠縹可愛。遶砌種以翠芸草令遍茂、則青葱欲浮。取薜荔根瘞墻下、洒魚腥草於墻上、腥之所至、蘿必蔓焉。月色盈臨、渾如水府。齋中几榻琴棋劍書畫鼎之屬、須製作不俗、鋪設得體、方稱清賞。永日據席、長夜篝燈、無事擾心、儘可終老。僮非訓習、客非佳流不得入。

【訓読】

書齋

書齋は明靜に宜しく、太だ敞（ひろ）かるべからず。明靜ならば心神を爽やかにすべし。宏敞ならば則ち目力を傷つく。中庭に盆景の建蘭の嘉き者一二本を列す。窓に近き処に金鱗五七頭を盆池の内に蓄ふ。傍に洗硯池一つを置く。余る地に飯沈を以て沃ぎ、雨漬（ひた）せば苔生じ、綠縹として愛すべし。遶砌して翠芸草を種へ、遍く茂しめば、則ち青葱は浮かんと欲す。薜荔の根を取りて墻の下に瘞（う）め、魚腥草を墻上に洒（か）け、腥の至る所、蘿は必ず蔓（のび）る。月色は盈臨として、渾て水府の如し。齋中の几・榻・琴・棋・劍・書・画・鼎の属（やから）は、須く製作俗ならず、鋪設体を得、方じめて清賞に称（かな）うべし。永日に席に拠り、長夜に灯を篝し、事の心を擾（みだ）すこと無し。儘（そのまま）に老を終ふるべし。僮は訓習にあらず、客は佳流にあらざれば入るを得ず。

【校異】

「明静」について、一橋蔵『考槃餘事』には「静、一作浄」とある。

「几榻琴棋劍書畫鼎」について、『考槃餘事』には「棋」が無い。

【語釈】

・書齋…この項は『考槃餘事』山齋箋にある。・明静…明るくて静かなさま。・心神…心思、精神。・建蘭…常緑園芸植物。中国福建省を産地とするので「建蘭」と呼ばれる。・金鱗…観賞魚。金魚。・盆池…庭などに設けた小さな池。・洗硯池…すずりを洗う盆池。・飯瀋…米汁。瀋、汁液。・緑縹…緑の溢れるさま。縹、茂盛、しげる。・薜荔根…薜荔、木蓮、木蘭。・魚腥草…蕺菜。・蘿…松蘿、女蘿。・水府…水中の宮殿。・清賞…清雅の玩賞。・篝燈…篝、かがり。燈を籠の中に入れる。・僮僕…召使いの少年。・訓習…訓練、教習。・佳流…品行、才覚が優れた人。

【現代語訳】

書齋

書齋は明るくて静かなところがふさわしい。あまり広くするべきではない。明るくて静かであれば心神を清清しくすることができる。大きくて広すぎると視力を損なう。中庭に建蘭などよい盆栽一、二本をならべ、窓の付近に金鱗を五、七尾盆池の中に飼育する。傍に洗硯池を一つ置く。空地に残飯の汁を注ぎかける。雨水が土地にしみこめば苔が生まれ、生い茂って可愛らしい。階段に沿って翠芸草を育ててさかんに茂らせば、青葱が階段の上に浮かんでいるように見える。木蓮の根を取って墻下に埋め、魚腥草を墻上にそそいで、生臭さの残ったところには、蘿草が必ずそこに蔓延する。月光が満ちて庭園に注がれるとき、まるで水中の庭園にいるようである。書齋の中に置かれている几、榻、琴、棋、劍、書、畫、鼎などの器物は、凡俗のものを使ってはいけない。書齋の配置は適切にするべきである。そうしてはじめて清賞だといえる。長い昼間には席に座って、長い夜には灯に篝をおおいかけ、俗事に心を乱すこともなく、そのまま余生を送ることができる。僮僕はよく教えられたものでなければ、また客人は上品佳流でなけ

れば、書齋の中に入るのを許さないことである。

【本文】 六

単条書

高齋精舎、宜掛單條。若對軸即少雅致、況四五軸乎。且高人之畫、適興偶作數筆、人即寶傳、何能有對乎。今人以孤軸爲嫌、不足與言畫也。

【訓読】

単条書

高齋精舎は、単条を掛くるに宜し。若し對軸ならば、即ち雅致少し。況や四五軸をや。且つ高人の画は、興に適（かな）へば偶に數筆を作り、人は即ち宝にして伝ふ。何ぞ能く對あらんや。今の人は孤軸を以て嫌と爲し、与に画を言ふに足らず。

【語釈】

・**單條書**…この項は『考槃餘事』書箋にある。・**高齋精舎**…高齋、高雅な書齋。精舎、精緻な学舎。・**適興**…興にのつて即座に書画を創作すること。

【現代語訳】

単条書

高雅な書齋と精緻な屋舎は、単条の掛け軸を掛けるのがふさわしい。對軸ならば、雅趣が足りない。まして四五軸ならば尚更である。そもそも名家の画は、即興かつ偶然に數筆程度で書き上げたものであり、人々はすぐにそれを珍藏して伝えた。對軸などであるわけない。今の人は孤軸を好ましく思わないが、そういう人とは一緒に画の話をする必要もないのである。

【本文】 七

袖爐

書齋中薰衣炙手、對客常談之具。如倭人所製鏤空單蓋漆鼓、可稱清賞。今新製有單蓋方圓爐亦佳。

【訓読】

袖炉

書齋の中に衣を薰して手を炙りて客に対して常談するの具なり。倭人の製する鏤空の單蓋の漆鼓の所の如きは、清賞に称ふべし。今の新しき製に單蓋の方圓たる炉有り、亦た佳し。

【語釈】

・袖爐…この項は『考槃餘事』香箋にある。・薰衣…香をたて、よい匂いを衣に焚きこめること。・鏤空單蓋漆鼓…鏤空、透かし彫りにする。單はかご。蓋はふた。漆鼓、漆塗り鼓の形の香炉。・單蓋方圓爐…明高濂『遵生八箋』・起居安樂箋に「今有新鑄紫銅有單蓋方圓炉式、甚佳。」とある。

【現代語訳】

袖炉

書齋の中で服に香を焚きこめて手を暖め、客と対面して日常談話をするための用具である。日本人製の鏤空の單蓋の漆鼓のようなものは、清賞だといえる。最近の新製品の中に、單蓋があつて方圓の炉があるが、これもまたよい。

【本文】 八

筆牀

筆牀之製、行世甚少。有古鑿金者、長六七寸、高寸二分、濶二寸餘、如一架然。上可臥筆四矢、以此爲式。用紫檀烏木爲俗。

【訓読】

筆牀

筆牀の製は、世に行わるる甚だ少し。古き塗金なる者有り、長さは六七寸、高さは寸二分、濶（ひろ）さは二寸余、一架然の如し。上に筆四矢を臥せるべし。此を以て式と為す。紫檀烏木を用ゆるを俗と為す。

【校異】

「用紫檀烏木為俗」、一橋藏『考槃餘事』は「用紫檀烏木為之亦佳」に作る。

【語釈】

・筆牀…この項は『考槃餘事』文房器具箋にある。・行世…流行。・塗金…金などの金属粉を銅器の表面に定着させること。塗、美しい金、純金。・紫檀…紫檀木。質が硬く、木目が美しいので、よく美術品や家具に用いる。・烏木…烏文木、黒檀木。質が硬く、色が黒くて、美しい光沢があるので、よく建築材や家具に用いられる。

【現代語訳】

筆牀

筆牀の製式については、世間に流行しているものは非常に少ない。昔は塗金のもものが有って、長さは六、七寸で、高さは一寸二分で、寛さは二寸あまりで、一つの掛け台のようであった。上に毛筆四本を置くことができる。これを様式とする。紫檀木、烏木を用いるものは俗とする。

【本文】九

詩筒葵箋

採帶露蜀葵研汁、用布揩抹竹紙上、伺少乾、以石壓之、可爲吟箋、以貯竹筒、與騷人往來賡唱。昔白樂天與微之亦嘗爲之。故和靖詩有「帶斑猶恐俗、和節不妨山」之句。

【訓読】

詩筒葵箋

露を帯ぶる蜀葵を採り、汁を研（みが）ぎて布を用ひて竹紙の上に揩抹す。少（しばら）く乾きを伺ひ、石を以てこれを押し、吟箋と為し、以て竹筒を貯へ、騷人と往来して賡唱すべし。昔白樂天と微之も亦た嘗てこれを為す。故に和靖の詩に「斑を帯ぶるは猶ほ俗を恐れ、節を和するは山を妨げず」の句有り。

【語釈】

・詩筒葵箋…この項は『考槃餘事』文房器具箋にある。・蜀葵…花葵、立葵。・騷人…騷客。詩人、文人。・白樂天…白居易（772-846）。中唐の詩人。字は樂天、号は香山居士。・微之…元稹（779-831）。中唐の詩人。字は微之。白居易の親友。・和靖詩…林逋（967-1028）諡号は和靖。北宋の詩人。この句は「贈張繪秘教九題・其八・詩筒」にある。・和節…節がある意。「和」と、前句の「帯」はともに動詞であり、同義語である。対に用いられることが多い。竹製の詩筒に節があるので、手に持ちやすいという意味である。・山…山を登る。

【現代語訳】

詩筒葵箋

露をつけている蜀葵を採って、汁を研ぎだし、布を用いて竹紙の上に汁をなすりつける。しばらく乾くまで待ち、石で蜀葵を押さえつければ、詩箋が完成する。葵箋を竹筒に貯え、風流な詩人と往来吟唱する。昔、白居易と元稹もまたこのようなことしたことがある。ゆえに林逋の詩に「詩筒には風流な斑模様があつてすら、俗にみられるのを恐れる。節があるため手に持ちやすく、山行にふさわしい」の句がある。

【本文】十

印色池

官哥窯方者、尚有八角委角者最難得。定窯、方池外有印花紋、佳甚、此亦少者。諸玩器、玉當較勝於磁、惟印色池以磁爲佳、而玉亦未能勝也。

【訓読】

印色池

官の哥窯、方なる者は、尚ほ八角・委角なる者有り、最も得難し。定窯、方池の外に印花紋有り、佳にして甚し。此も亦た少き者なり。諸玩器、玉当に較た磁に勝つべし。惟だ印色池は磁を以て佳と為し、而して玉も亦た未だ能く勝たざる。

【語釈】

・印色池…この項は『考槃餘事』文房器具箋にある。印色、印泥、朱肉。・官哥窯…官窯、中国の宮廷専用の窯。宋代五大名窯の一つ。哥窯、南宋の青磁窯。宋代五大名窯の一つ。・委角…委、まげる、かがめる。角、かど。・定窯…宋代五大名窯の一つ。白磁で有名。

【現代語訳】

印色池

官哥窯は方型のもがある。さらに八角、委角のものもあって、手に入れるのは非常に難しい。定窯は方池の外側に印花紋が有って非常によい。これもまた珍しいものである。さまざまな玩器についてだが、一般的に玉器はやや磁器より優れるだろう。ただし、印色池の場合のみは磁器がよいとされ、玉器であっても磁器には及ばない。

【本文】 十一

右七項載屠隆考槃餘事中。聊採録以示諸君子。

補終

【訓読】

右の七項は、屠隆の『考槃余事』の中に載す。聊か採録して以て諸君子に示

す。

補終り

【語釈】

・屠隆… (1543-1605)、字は長卿、号は赤水。明代浙江鄞県の文人、戯曲家。
考槃餘事…明代文人の趣味生活に関する作品。屠隆の作品と言われるが、高濂の『遵生八箋』から多くの内容を採取したので、屠隆の名前を仮託して出版されたものだと思われる。

【現代語訳】

右の七項目は屠隆の『考槃餘事』の中に載っている。すこしこれらを採録して諸君に見せよう。

補説終り

おわりに

以上の訳注と校異を踏まえ、以下のようにまとめることができる。

まず、『煎茶訣』は蔵茶、扱水から煎茶まで、喫茶の各要点を簡潔にまとめた。その内容は、明清の茶書と同じ茶文化体系に属することがわかった。そして、論理性を持ち、清代の喫茶法を紹介しようという目的が見えた。これは江戸文人にとって、清代の喫茶文化を認識することができる書物であった。

いままでの中国の研究者は、国立国会図書館蔵本を重視していた。そもそも関西大学図書館蔵本には大典の加筆があり、江戸文人がどのように清代の茶文化を受容したのか、それを研究するために必要な資料であった。一方、国立国会図書館蔵本は、関西大学図書館蔵本にある大典の加筆を削除するという意図が窺えた。国立国会図書館蔵本は、たしかに葉雋の『煎茶訣』の原貌を復元しようとする意図が見えるが、それはつまり日本における中国清代の茶書を受容の痕跡

を消してしまうことになったため、その価値を損なったといえる。煎茶書研究の視点から考えれば、関西大学図書館蔵本はかえって重要な資料であり、より重視すべきだと考える。

終章

一. 本研究によって得られた成果

本章は、本研究によって得られた成果についてまとめたい。

まず、本論の検討により、先行研究では不十分であった煎茶書史料の基礎研究を深め、新たな論点を提示することができた。具体的には、煎茶書の調査と分析によって、一次資料の研究を充実させた。基礎研究の充実は、新たな知見の蓄積と創出に繋がるため、後継の研究者にとって有益な資料である。また、本研究は従来の研究では欠けていた中国の茶書史料を重視した。中国の茶文化研究の成果を積極的に煎茶書研究に取り入れることによって、日本の研究者に新しい視点と刺激を与えることができた。さらに、従来の研究では詳細に検討されなかった作品に対して専門的な研究を行った。その結果、茶書の受容、茶書の伝来経過、茶人の嗜癖、茶人の交遊、漢詩集の茶詩など、多角的な見解を得ることができた。今後の研究に価値のある新視点を提示することができた。

第一章「日本における煎茶書研究の現状」では、高橋忠彦と大槻幹郎の先行研究によって、煎茶の語義を確認した上で、本研究の研究対象となる煎茶書の範囲を定めた。また、檜林忠男の先行研究をふまえ、煎茶書研究における史料不足という問題を捉え、新資料の検討が急務であることを指摘した。さらに、長谷川瀟々居、森本信光、筒井紘一、麓和善、守屋雅史など過去の研究者によって行われた煎茶書研究の成果と不足点を検討した。最後に、新発見の煎茶書の提示と紹介をした。

第二章「江戸時代における煎茶書の全体像」では、煎茶書とその書誌情報に対して分類と分析を行い、刊行時期、作者など、多角的な観点から江戸時代の煎茶書の特徴を総合的に把握し、煎茶書の発展と変遷の過程を詳細に整理した。まず、煎茶書が江戸中期から集中的に現れ、江戸後期になると繁栄期を迎えたことを指摘した。次に、煎茶書の作者や編集者は、江戸、京都、大坂、尾張の出身者が多く、経済と文化の繁盛した大都市を中心に現れ、漢文素養の高い庶民出身の人がほとんどであり、煎茶書は武士階級向けではなく、庶民向けの読物であったこ

とを指摘した。また、煎茶書の文体と刊写と書型からみれば、漢籍から受けた影響が大きいことが明らかであり、時代が下るとともに、読みやすさと運びやすさを重視した作品が増えたことがわかった。さらに、煎茶文化の流行拡大とともに、茶器と茶席の仕様図を載せた作品が増加したが、これは煎茶書の趣味性と実用性がますます重視されたことによることを指摘した。そのほか、煎茶書の刊記を整理して版元を調査した結果、煎茶書刊行の盛況は出版業の盛況に関係していたことが分かった。最後に、いままでの研究では注目されなかった散逸煎茶書について新しい情報を提示した。

第三章「煎茶書の源流をたどる」は、いままで日本の煎茶書研究に欠けていた中国の喫茶文化史の視点から、煎茶書の源流をさかのぼって明代の茶書と茶文化について論じた。明代後期に大量の煎茶書が集中的に刊行されたことを明らかにした。また、製茶法と喫茶法の発展と変遷により、葉茶の製造技術が発達となり、泡茶法が中国の主流の飲み方となったことを指摘した。そして、唐代の陸羽と盧仝を代表とした茶人の著した詩文によって、喫茶に高雅な精神性が寄託され、明代の隠逸生活を好んだ文人は、この唐代の喫茶の精神性を積極的に受け継いで、明代の喫茶法に浸透させて文人茶を成し遂げたことを指摘した。最後に、文人茶は明代の文人集団によって流行が拡大し、文人趣味として日常生活と融合されたことを明らかにした。

第四章「煎茶書にみる中国茶書と喫茶文化の受容」では、第三章の研究を踏まえて日本の煎茶書について検討した。まず、煎茶書の序跋を検討し、煎茶書の大量刊行の背景と日本の茶人の執筆動機について考察することができた。その結果、江戸中期の茶の湯において拝金主義的傾向が強まったため、喫茶の趣味が低俗化したことが明らかになった。そして、日本の茶人は積極的に中国から伝来した茶書を学び、喫茶精神の一新を図ったことが明らかになった。また、煎茶書の内容を考察することで、それが明代の茶書から影響を受けていたことが明らかになり、明代の茶人の製茶法と泡茶法を積極的に学んだこともわかった。

第五章「大枝流芳の茶書に関する研究」では、過去の研究でまだ検討されていない大枝流芳の『青湾茶話』を事例に、中国茶書の受容状況を検討した。まず、

『青湾茶話』が、『説郛』の中に収録されている茶書を始めとして、大量の中国茶書を参考したことが明らかになった。また、作者の人物と経歴を調べた結果、中国の隠棲好きの文人との共通点が多いことがわかった。また、大枝流芳の『青湾茶話』によって青湾の美水が名声を高めたことを明らかにした。最後に、『雅遊漫録』との関係性を考察した上で、『青湾茶話』の刊行は大坂の出版業者の助力を受けていたことがわかった。

第六章「大典禅師の煎茶書に関する研究」では、大典禅師を事例として論じた。大典禅師は江戸中期の煎茶書の編著に積極的参与したことを明らかにした。『茶経詳説』と『煎茶訣』は、それぞれ唐代と清代の代表的な喫茶法を記載して内容を互いに補い合っている。この両書によって中国の喫茶法の変遷過程が日本に伝わった。『茶経詳説』は、中国茶書の経典である『茶経』の最初の和訳本である。本書の刊行によって『茶経』の普及がおおいに促進された。また、『煎茶訣』の刊行によって、中国清代の喫茶法が紹介された。これらが日本の茶人に多大な刺激を与え、その視野を広げたことは明らかである。最後に、大典禅師の交遊関係について考察し、後世の茶人が如何に大典禅師を評価したのかを論じ、大典禅師による煎茶普及への努力と貢献を高く評価すべきだと指摘した。

第七章「上田秋成の煎茶書に関する研究」は、上田秋成の煎茶書を事例に論じた。『清風瑣言』と『茶痕醉言』を通して中国茶書の理論を積極的に取り入れたことがわかった。また、上田秋成が提唱した喫茶法から、水の選び方、着香茶への賛否、書斎への関心を例として取り上げたが、彼は中国茶書から中国文人の考え方を積極的に吸収していた。そして、明代の嗜癖文化の発生と原因について検討し、明代の文人が如何に嗜癖を通して「清」という高潔な人柄を求めたのかを明らかにした。そのうえで、上田秋成の性格がそのような明代の文人と共通点が多く、中国の文人と近い価値観を持った人物であったことを指摘した。以上より、彼は煎茶を褒めたり、点茶を批判したりすることを通して「清」を求めていた、と結論づけた。

第八章「陳元輔の煎茶書に関する研究」は、『枕山楼茶略』の発見と伝来の経過および作者陳元輔の身分考察について論じた。まず、清代の茶書『枕山楼茶略』

の日本で発見された経過について検討をした。そして、本書の内容を考察した上で、日本の茶人に如何に影響を与えたかを明らかにした。また、従来の研究では、陳元輔の人物と経歴については不明であったが、『枕山楼詩集』、『枕山楼課児詩話』、『中山詩文集』などを通して、陳元輔の出身地、年齢、職業と交遊関係を明らかにした。とくに、琉球王国の程順則との交遊関係に注目し、程順則が生涯に五回の清国への渡航を行い、福建省に滞在した際に陳元輔の弟子となり、彼と親密な関係を持っていたことを明らかにした。それらを踏まえ、『枕山楼茶略』は程順則の手を経て日本に伝来した可能性が高い、という結論を導いた。

第九章「大典禪師の漢詩集に関する研究」では、大典禪師の漢詩集を通して、煎茶書研究における不足していた情報を補足することを試みた。まず、大典禪師の漢詩集『昨非集』、『小雲棲稿』、『小雲棲詠物詩』、『北禅詩草』、『北禅遺草』を考察した上で、詩集から詠茶詩を洗い出し、これらの詠茶詩の解説を通して煎茶席の姿を明らかにした。また、茶席の同席者の身分確認を通して大典禪師の交遊関係を解明した。さらに、宇野明霞、片山北海、聞中浄復を代表的な交遊対象として取り上げて大典の各時期の詠茶詩について詳細に考察し、それによって、大典禪師の喫茶交遊の日常を明らかにした。最後に、詠茶詩の整理と分析によって新しい資料を発見することができた。このように、煎茶書研究における史料不足の問題について、漢詩集の補足資料としての研究価値を示した。

いえる資料編「葉雋の煎茶書に関する研究」では、寛政8年版と明治12年版の『煎茶訣』に対して翻訳と注釈を行った上で、従来の研究では検討されていなかった大典禪師の補説を、両版本の照合によって確認した。

以上のように、本研究は近世における煎茶書の書誌情報を通して煎茶書の発展と変遷の過程を究明し、その全体像を把握した。そして、日本の煎茶文化と中国の喫茶文化の間に共通点が多く存在したことを明らかにした。また、日本の煎茶書は、中国茶書に多大な影響を受けただけでなく、日本における独自の変容も成し遂げたことを解明した。さらに、日本の茶人は中国風の文人茶を積極的に受け容れることによって、喫茶交遊が活発化したことが明らかになった。

二. 今後の課題

最後に、本研究の不足点を整理した上で、今後の課題を提示したい。

まず、本論文では、煎茶書の調査を重視したが、今回のコロナ禍による緊急事態宣言で、公的な美術館や図書館などの施設が臨時休館や入館制限の対策を採ったため、煎茶書の版本調査が非常に困難となり、特に同じ作品の異本比較がほとんどできなかつた。事前調査において不十分な点があったことは否定できない。

また、煎茶書の情報の整理においてもさらに改善できるところが多く、研究をさらに深める必要を感じている。そのため、煎茶書の調査を継続的に行う必要があり、そして煎茶書の翻刻と解説を一刻も早く開始しなければならないと考える。

それに加え、第三章と第四章は中国と日本の茶書刊行、喫茶法、製茶法などについて適宜言及しており、代表的な共通点を取り上げて重点的に提示したが、今回の研究ではまだ検討できていない史料も多く残っている。その比較と分析についてはまだ不十分であり、さらに研究を進める余地がある。したがって、これからは煎茶書の翻刻と解説の進み具合に合わせてこの部分の研究をさらに深める必要がある。

上記以外にも、第九章では、煎茶書研究における史料不足という問題を解決するために、日本の漢詩集を補足資料として活用する方法があると提示し、詠茶詩の史料価値を示した。今後は引き続き煎茶の流行と京都・大坂を中心とした文壇の勃興の関係性について研究を深める必要がある。そのため、日本の漢詩集を調査し、その中からより多くの詠茶詩を見つけ、江戸時代の漢詩を通して近世の煎茶交遊の実態を復元することを試したい。これからより多くの江戸文人の茶詩を考察すれば、江戸時代の煎茶交遊の実態をさらに明らかにすることができる。いかに数多くの漢詩集に散在する情報を引き出し、京都・大坂を中心とした文壇の複雑な交遊関係を復元するのか、今後考察し続けたい課題である。

参考文献

ここで提示されている参考文献は主に二次資料である。なお、日本語資料は作者の名前の五十音順で提示する。また、中国語資料は刊行年順で提示する。

一. 日本語資料

あ

青木正児、『中華茶書』、春秋社、1962。

青木正児、『青木正児全集』第七巻、春秋社、1971。

浅野三平、『近世文学続攷』、株式会社おうふう、2005。

尼崎博正・麓和善・矢ヶ崎善太郎編著、『庭と建築の煎茶文化：近代数奇空間をよみとく』、思文閣、2018。

荒井健、『中華文人の生活』、平凡社、1994。

い

石川忠久、『茶をうたう詩』、研文出版、2016。

石川洋、鈴木端枝、南啓治編、『江戸文人辞典』、東京堂出版、1996。

井上隆明、『日本書誌学大系 14 近世書林版元総覧』、青裳堂書店、1971。

猪口篤志、『日本漢文学史』、角川書店、1974。

う

上里賢一編、『中山詩文集校訂本』、九州大学出版会、1998。

上田秋成、『上田秋成全集』、国書刊行会、

上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門編、『日本人名大辞典』、講談社、2001年。

お

大分県教育庁管理部文化課編、『大分県先哲叢書 田能村竹田』資料編著述編

1992。

大木康、『明末江南の出版文化』、研文出版、2004

大阪市立美術館編、『煎茶・美とのかたち：文人のあこがれ、清風のころろ：特別展』、大阪市立美術館、1997。

大槻幹郎、『王維から鉄斎まで 文人画家の譜』、ペリかん社。

大槻幹郎、『煎茶文化考 文人茶の系譜』、思文閣出版、2004。

大槻幹郎、『売茶翁偈語訳注』、全日本煎茶道連盟、2013。

大森痴雪、「茶人秋成」、『郷土研究 上方』上田秋成号、1931、pp. 729～731。

大森正司、阿南豊正、伊勢村護、加藤みゆき、滝口明子、中村羊一郎、『茶の事典』、朝倉書店、2017。

小川後楽、『煎茶入門』、保育社、1966。

小川後楽、『煎茶器の基礎知識』、光村推古書院、1976。

小川後楽、『茶の文化史 喫茶趣味の流れ』、文一総合出版、1980。

小川後楽、「近世煎茶交遊録 3-上田秋成- 世を拗ねて、日本美術工芸(510)、日本美術工芸社、1981、pp.44～48。

小川後楽、「近世煎茶交遊録 4-芦庵と秋成- 水の扱ひ」、日本美術工芸(511)、日本美術工芸社、1981、pp.28～32。

小川後楽、「近世煎茶交遊録 5-寂窓と秋成- 風雅のパトロン」、日本美術工芸(512)、日本美術工芸社、1981、pp. 89～93。

小川後楽、「近世煎茶交遊録 6-村瀬栲亭- 煎茶の論客」日本美術工芸(510)、日本美術工芸社、1981、pp. 86～90。

小川後楽、「秋成と煎茶」、『京都市歴史資料博物館紀要 開館 10 周年記念論集』10号、1992、pp. 459～478。

小川後楽、『煎茶への招待』、日本放送出版協会、1998。

小川後楽、『茶の精神をたずねて』、平凡社、2013。

奥田昌子、「大枝流芳と青湾茶話～上田秋成著「清風瑣言」の再検討」、『藝能史研究』15号、藝能史研究会、1966、pp. 35～41。

か

川崎庸之、原田伴彦、奈良本辰也、小西四郎監修、『読める年表 日本史』、自由国民社、2012。

川頭芳雄、『佐賀県郷土史物語 第一編 背振山と栄西 第二編 大潮と売茶翁』、福博印刷株式会社、1964。

河野元昭、『文人画 往還する美』、思文閣出版、2018。

く

熊倉功夫、『近代茶道史の研究』、日本放送出版協会、1978。

熊倉功夫、松下智、高橋忠彦、守屋雅史、『中国茶文化大全 解題』、農山漁村文化協会、2001。

熊倉功夫、程啓坤編、『徽宗『大観茶論』の研究』、宮帯出版社、2017。

窪川雄介、福島敬一、『茶の大事典』、「お茶の大事典」刊行会、1991。

桑田忠親、『茶道の歴史』、講談社、1969。

桑田忠親、『茶道人名辞典』。東京堂、1972。

桑田忠親、『日本茶道史』、河原書店、1988。

け

藝能史研究会編、『藝能史研究 特集煎茶』31号、藝能史研究会、1970。

藝能史研究会編、『日本庶民文化史料集成』第十巻数寄、三一書房、1976。

こ

小泉和子、『茶と室内デザイン』、思文閣出版、2015。

小高根太郎、『富岡鉄斎の研究』、藝文書院、1944、pp.265～273。

近藤春雄、『日本漢文学大事典』、明治書院、1975。

さ

佐伯太、『茶道・特集研究編』全集巻の十三、創元社、1936。

堺光一、「茶神の物語考」、『秋成 語りと幻夢』、『日本文学研究資料新集』八、有精堂、1987、pp. 225～242。

佐賀県立図書館郷土資料課編、『佐賀県近世文料』、第九編第二巻、佐賀県立図書館、2019。

佐々木剛三監修、宗像健一著、『大分県先哲叢書 田能村竹田』、大分県教育委員会、1993。

し

嶋田静坡、『煎茶百楽』、里文出版、2015。

主婦の友社編、『煎茶全書』、主婦の友社、1973。

主婦の友社編、『売茶翁集成—遺品・遺墨・偈語・伝記』、主婦の友社、1975。

主婦の友社編、『煎茶の用語集』、主婦の友社、1978。

主婦の友社編、『現代煎茶道事典』、主婦の友社、1981。

主婦の友社編、『続煎茶全書』、主婦の友社、1976。

す

末木文美士、堀川貴司、『江戸漢詩選』第五巻「僧門」、岩波書店、1996。

鈴木端枝、『日本漢詩人選集 13 館柳湾』、研文出版、1999。

妹尾和夫、『村瀬栲亭』、潮流社、1977。

せ

千宗室等編、『茶道古典全集』、淡交社、1956。

全日本煎茶連盟編、『煎茶道のすすめ』、全日本煎茶連盟、1965。

た

田能村竹田、『田能村竹田全集』、国文名著刊行会、1916。

筒井紘一、『茶書の系譜』、文一総合出版、1978。

筒井紘一編、『新版茶道大辞典』、淡交社、2010。

-
- 高田衛編、『秋成とその時代：共同研究』、勉誠社、1994。
- 高橋忠彦、「中国茶文化における「煎茶」の語と伝統の形成」、『東京学芸大学紀要 人文社会科学系 I』第 65 集、2008、pp. 67～81。
- 高橋忠彦、『茶経・喫茶養生記・茶録・茶具図賛』、淡交社、2013。
- 高橋忠彦、「中国茶文化における「煎茶」の語と伝統の形成」、『東京学芸大学紀要』第 65 号、2014。
- 高橋忠彦、「中国喫茶文化と茶書の系譜」、『東京学芸大学紀要』、人文科学、2016、pp. 209～221。
- 高橋忠彦、神津朝夫編集、『茶書古典集成 1 初期の和漢茶書』、淡交社、2019。
- 竹谷長二郎、『頼山陽書画題跋評釈』、明治書院、1973
- 田中秀隆、『近代茶道の歴史社会学』、思文閣出版、2007。
- 谷晃、『茶人たちの日本文化史』、講談社、2007。
- 谷端昭夫、『よくわかる 茶道の歴史』、淡交社、2007。
- つ
- 佃一輝、『煎茶の旅 文人の足跡を訪ねて』、大阪書籍、1985。
- 佃一祐、『煎茶入門』、浪速社、1962。
- と
- 東君、『茶から茶道へ』、市井社、1998。
- な
- 名古屋市蓬左文庫編、『名古屋叢書』第 16 巻風俗芸能編、愛知県郷土資料刊行会、1982。
- 中野三敏、『和本の海へ 豊饒の江戸文化』、角川選書、2009。
- 中野三敏、『書誌学談義 江戸の版本』、岩波書店、2015。
- 中村利則編、『茶室・露地』茶道学大系六、淡交社、2000。
- 中村幸彦、「茶痕醉言と胆大小心録」、『国語国文』第二十三卷二三五号、京都

帝国大学国文学会、1954、pp. 166～183。

中村幸彦、『近世作家研究』、三一書房、1961。

中村幸彦編、『上田秋成全集』第9巻随筆篇、中央公論社、1992。

中村真一郎、『木村蒹葭堂のサロン』、新潮社、2000。

長坂慶子、『煎茶の世界 しつらいと文化』、雄山閣、1997。

長沢規矩也監修、長沢孝三編集、『漢文学者総覧』、汲古書院、1969。

長沢規矩也編、『和刻本漢籍随筆集』第20輯、汲古書院、1978。

長沢規矩也編、『和刻本漢詩集成』18、汲古書院、1987。

檜林忠男、『煎茶の世界』、徳間書店、1971。

檜林忠男、『碧山への夢 煎茶に魅せられた人々』、講談社、1985。

に

西山松之助・芳賀幸四郎『茶の文化史図説茶道大系 2』、角川書店、1974。

日本随筆大成編集部、『日本随筆大成 第二期第23巻 卯花園漫録 雅遊漫録』、吉川弘文館、1974。

ぬ

布目潮颯・中村喬、『中国の茶書』、平凡社、1976。

布目潮颯、『中国茶書全集』、汲古書院、1987。

布目潮颯、「喫茶の発展と起源 23 明代の喫茶（二）わが国煎茶の起源」、『日本美術工芸』614号、日本美術工芸社、1989、pp. 36～42。

布目潮颯、『緑芽十片 歴史にみる中国の喫茶文化』、岩波書店、1989。

布目潮颯、『中国喫茶文化史』、岩波書店、2001。

布目潮颯、『布目潮颯中国史論集』下巻、汲古書院、2003。

布目潮颯、『中国名茶紀行』、新潮社、2004。

の

野村美術館編、『野村美術館研究紀要』特集煎茶、2007、pp.27～29。

野間光辰監修、水田紀久編集、『兼葭堂日記』、1962。

ノーマン・ワデル著、樋口章信訳、『売茶翁の生涯』、思文閣出版、2016。

は

長谷川瀟々居、『煎茶志』、平凡社、1965。

馬叢慧、『売茶翁の逍遙遊』、駿河台出版社、2020。

早川正夫、『数寄屋ノート二十章』、建築材料研究社、1998

林左馬衛・安居香山、『茶経・喫茶養生記』、明德出版社、1975。

林屋辰三郎、横井清・檜林忠男編、『日本の茶書 1』、平凡社、1971。

林屋辰三郎・横井清・檜林忠男編、『日本の茶書 2』、平凡社、1972。

原田伴彦、『茶道人物辞典』、柏書店、1981。

伴蒿蹊、『近世畸人伝・続近世畸人伝』、平凡社、1972、pp.78～89。

ひ

日野龍夫、『江戸の儒学 日野龍夫著作集第一巻』、ぺりかん社、2005。

日野龍夫、『宣長・秋成・蕪村 日野龍夫著作集第二巻』、ぺりかん社、2005。

広田吉崇、『近現代における茶の湯家元の研究』、慧文社、2012。

櫃本聡子・濱田晋一・麓和善、「煎茶会図録にみる煎茶会の会場—煎茶会図録による煎茶席の空間特性に関する研究 その 2—」、『日本建築学会計画系論文集』、84 巻 763 号、日本建築学会編、pp.1987～1992、2019。

美和町史編さん委員会、『美和町史』、愛知県海部郡美和町発行、1982。

ふ

藤井乙男、「上田秋成と煎茶」、『史話俳談』、晃文社、1943、pp. 53～65。

富士川英郎、『江戸後期の詩人たち』、東洋文庫、2012。

福山朝丸、『売茶翁年譜』、其中堂、1928。

麓和善、「煎茶空間：その文献史的特質」、『茶室・露地』茶道学大系六、淡交社、2000、pp.205～254。

麓和善・櫃本聡子・濱田晋一、「煎茶会図録の書誌的考察－煎茶会図録による煎茶席の空間特性に関する研究 その1－」、『日本建築学会計画系論文集』、84巻 755号、日本建築学会編、pp.209～219、2019。

ほ

星華丈、有井梅翁、『煎茶道』、大日本印刷株式会社、1950。

堀川貴司、『書誌学入門 古典籍を見る・知る・読む』、勉誠出版、2019。

ま

松浦友久編、植木久之、宇野直人、松原郎、『漢詩の事典』、大修館書店、1999。

松崎芳郎、『年表 茶の世界史』、八坂書房、1992。

み

水田紀久、『水の中央に在り 木村兼葭堂研究』、岩波書店、2002。

緑川明憲、『豫楽院：近衛家熙公年譜稿（四）』、『京都大学国文学論叢』、2011。
pp. 39～56。

翠川文子、「大枝流芳（岩田信安）小考」、『川村学園女子大学研究紀要』第15巻第2号、2004、pp. 132～152。

む

村井康彦編、『茶道聚錦5 茶の湯の展開』、小学館、1985。

宗政五十緒、柳瀬万里、土井順一「近世出版文化研究：「茶経」・「茶経詳説」の出版」、『龍谷大学 仏教文化研究所紀要』第22集、1983、pp.32～51。

も

森繁夫、「秋成の茶匠」、原田伴彦編、『浪花のにぎわい』町人文化百科論集第五巻、柏書房、1981、pp. 158～161。

森山重雄、「茶人としての秋成」、『日本文学』64号、日本文学協会、1993、pp.

49～64。

守屋雅史、「青湾碑と青湾茶会」、『大阪の歴史と文化財』第6号、大阪市教育委員会、2000年、pp13～20。

守屋雅史・船阪富美子、「煎茶関係参考文献目録」、『野村美術館研究紀要』18号、野村美術館学芸部編、pp.99～145、2009。

守屋雅史、「大阪市立美術館所蔵『谷村為海煎茶関連資料』の煎茶書について」、『大阪市立美術館紀要』、大阪市立美術館編、pp.3～42、2015。

や

安居香山、『煎茶道 文化とその歴史』、高文堂出版、1970。

安居香山、『正座の文化 煎茶道の文化とその思想』、五月書房、1975。

矢部誠一郎、『日本茶の湯文化史の新研究』、雄山閣、2005。野村美術館学芸文編、『野村美術館研究紀要 特集煎茶』第16号、野村美術館、2007。

山木徳平、『近世漢文学史』、汲古書院、1975。

山本博文、『見る・読む・調べる 江戸時代年表』、小学館、2007。

山脇悌二郎、『長崎の唐人貿易』、吉川弘文館、1954。

ゆ

湯川玄洋、『近世雅人伝』、芸艸堂、1977。

二. 中国語資料

- 陳祖槻・朱自振、《中国茶葉歷史資料編選》、農業出版社、1981。
- 陳植校注、《長物志校注》、江蘇科學技術出版社、1984。
- 周道振校、《文徵明集下》、上海古籍出版社、1987。
- 許賢瑤編、《博遠茶學叢書① 中国茶書提要》、博遠出版有限公司、1990。
- 吳智和、《博遠茶學叢書① 明清時代飲茶生活》、博遠出版有限公司、1990。
- 滕軍、《日本茶道文化概論》、東方出版社、1992。
- 吳智和、「明代茶人集團的社會組織——以茶會類型為例」、《明史研究》、1993、pp.110~122。
- 朱自振、《茶史初探》、中國農業出版社、1996。
- 吳智和、《明人飲茶生活》、明史研究小組、1996。
- 廖寶秀、《宋代喫茶與茶器之研究》、國立故宮博物館、1996。
- 陳彬藩・余悅、《中国茶文化經典》、光明日報出版社、1999。
- 滕軍、《中日茶文化交流史》、文學出版社、2004。
- 吳覺農、《茶經述評 第二版》、中國農業出版社、2005。
- 章伝政、朱世桂、「茶書《煎茶訣》の初步研究」、《茶葉通報》2006年第8期、p.39。
- 沈冬梅、《茶書校注》、中國農業出版社、2006。
- 沈冬梅、《茶与宋代社会生活》、中國社會科學出版社、2007。
- 劉卿秋、「茶書《煎茶訣》の考訂」、《茶葉科學》28期、2008年、pp.72~76。
- 陳椽、《茶業通史》、中國農業出版社、2008。
- 邱德亮、「癖嗜文化：論晚明文人詭態的美學形象」、《文化研究》第8期、2009、pp. 63~100。
- 朱自振・沈冬梅・增勤、《中国古代茶書集成》、上海文化出版社、2010。
- 楊東甫等、《茶文觀止：中国古代茶學導讀》、廣西師範大學出版社、2011。
- 方寶川、謝必震編、《琉球文獻史料彙編》、海洋出版社、2014。
- 鄭培凱、朱自振編、《中国歷代茶書匯編校注本》、商務印書館、2014。

-
- 王河·虞文霞、《中国散佚茶書輯考》、世界圖書有限公司、2015。
- 方健、《中国茶書全集校証》、中州古籍出版社、2015。
- 中国国家圖書館、《中国古代茶道秘本五十種》、全國圖書館文獻縮微複製中心、2013。
- 胡長春、《文人与茶》、中国社会科学出版社、2014。
- 施由明、《明清中国茶文化》、中国社会科学出版社、2015。
- 許嘉璐、《中国茶文献集成》、文物出版社、2016。
- 蔡定益、《明代茶書研究》、中国社会科学出版社、2017。
- 関劍平、「唐代飲茶生活的文化身分——隱逸」、茶葉科学、第 34 卷、2014、pp.105~110。
- 曹建南、「《煎茶訣》在日本煎茶文化史上的地位」、《中国茶葉》2018 年 12 期、pp.62~65、2018。
- 曹建南、「青湾茶会 :江戸末期煎茶文化博覽会」、《農業考古》2018 年第 2 期、pp.241~246、2018。
- 黄奇編、《茶室・茶事 青湾茶会図録注釈》、浙江人民美術出版社、2019。
- 茶烏龍編、《知日 日本茶道完全入門》、中信出版集團、2020。

初出一覧

第三章：梁旭璋、「明清茶文化の発展と東伝」、pp. 10～64、東京学芸大学大学院修士論文（非公開論文）、加筆・修正あり、2017年3月。

第五章：梁旭璋、「文人雅遊と煎茶書—『青湾茶話』を中心に」、『嗜好品文化研究』第5号、嗜好品文化研究会編、pp. 122～132、加筆・修正あり、2020年3月。

第六章：梁旭璋、「大典禅師の茶書に関する研究」、『学芸国語国文学』、東京学芸大学国語国文学会、50号、pp. 185～197、加筆・修正あり、2018年3月。

第七章：梁旭璋、「上田秋成晩年の煎茶と中国明代文人の茶癖」、『2017～2018年度嗜好品文化研究会研究奨励事業研究助成報告書』、嗜好品文化研究会編、pp. 1～26頁、加筆・修正あり、2019年4月。

第八章：梁旭璋、(中国語論文)「日本回流古籍所見中日間茶文化伝播：以陳元輔《枕山楼茶略》為例」、『茶恵天下：第十五届国際茶文化研討会論文集萃』、浙江人民出版社、pp. 283～298、加筆・修正あり、2018年11月。

資料編二：梁旭璋、「江戸時代の煎茶書研究：葉雋の『煎茶訣』」、『言語社会：Gensha』12号、一橋大学大学院言語社会研究科、pp. 182～206、加筆・修正、2018年3月。

その他は書下ろしである。

謝辞

本論文は、2017年以降一橋大学大学院の院生としての四年間に学会と学術誌に発表した原稿を主としました。博士後期課程に進学以降、筆者が中国国家留学基金委員会の公費留学生に採用されました。その後、日本学術振興会の特別研究員に採用されて助成金を受けました。研究助成金を受けたことは、経済的な意味ばかりではなく、研究の方向が明確になり、論文の完成に大きな力添えとなりましたので、ご協力をいただきました機構に感謝の意を表します。

これも一橋大学大学院と東京学芸大学大学院の恩師たちの日頃のご指導や、貴重な時間を割いていただいた論文の添削により、少しずつ業績を積むことができた結果です。本論文の作成にあたり、日頃から研究の進み具合を気にかけていただき、終始熱心にご指導をいただきました黒石陽子教授に深く感謝いたします。また、高橋忠彦教授には、修士課程から終始暖かく見守っていただきました。中国と日本の喫茶文化の研究方法においてご指導・ご指摘いただき、心より感謝いたします。さらに、一橋大学経済学研究科の笹倉一広教授と国文学研究資料館の山本嘉孝准教授は、くずし字文献の解読方法を丁寧にご指導いただきました。たくさんの意見と助言を得ることができたので、深く感謝いたします。

そして、資料編の煎茶書の文献調査と先行研究の論文調査にご協力をいただきました守屋雅史教授と船阪富美子様には感謝の意を表します。また、翻刻と解読について、岩間真知子様、奥田粹ノ介様、井草吉識様、山川剛人様、阿部由美様、李瑞濤様から多くの助言と協力をいただきました。ここに感謝いたします。

さらに、博士後期課程に入学してから長い間チューターを担当してくださった郡司祐弥様には、論文添削にご協力をいただきました。大変お世話になりました。本当にありがとうございます。

最後になりましたが、常に優しい言葉で私を励まし、精神的に支えてくださいました両親と羅宇様に心より感謝申し上げます。